ISSN 1342-6834

考古学財団

研究紀要 8

かながわの考古学

2003.3

財団法人 かながわ考古学財団

研究紀要 8

かながわの考古学

2003.3

財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

今年度は、各時代の研究プロジェクト（ＰＪ）から出された共同研究の成果７本と、個人論文１本、事例紹介１本の計９本を掲載することができました。

旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代の各ＰＪは、引き続き前年からの継続テーマについて研究成果がそれぞれ発表されています。

新たなテーマでこころみられたのは、奈良・平安時代、中世、近世の３プロジェクトで、奈良・平安時代ＰＪは今年度から宮ヶ瀬遺跡群という山間部集落を研究テーマとし、中世ＰＪは県内の「やぐら」を、近世ＰＪは近世遺跡出土の土製品を集成することをテーマとしました。

各時代のプロジェクトとも、継続または新たなテーマを掲げつつ、意欲的に研究してまいりました。各論考ともに盛りだくさんの成果が込められており、これからの研究に一石を投ずることができるものと考えております。

また、今回は個人論文として、東日本における帯状円環型銅釧の形態分類と地域色についてというテーマで論考され、事例紹介は古代相模国府周辺の景観を復元した図について普及啓発事業における活用の報告がされております。

今後とも、共同研究というアプローチによってその成果が最大限発揮されるテーマに取り組まれ、より充実した内容が発表されることを期待しております。

最後に、本書が埋蔵文化財調査や考古学研究に広く活用されることを願うとともに、皆様方の一層のご指導とご教示を賜りますようお願い申し上げます。

2003年３月

財団法人 かながわ考古学財団
理事長 熊田節郎

目　　次

神奈川県における旧石器時代の遺構（その２）－Ｂ１層上部－
……旧石器時代研究プロジェクトチーム　1
神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅵ
中期後葉期　加曽利Ｅ式土器文化期の様相　その３　－文化的様相－
……縄文時代研究プロジェクトチーム　17
宮ノ台式土器の研究（２）……弥生時代研究プロジェクトチーム　33
神奈川県横穴墓文献一覧……古墳時代研究プロジェクトチーム　45
奈良・平安時代の宮ヶ瀬遺跡群の研究……奈良・平安時代研究プロジェクトチーム　61
神奈川県内の「やぐら」集成（１）……中世研究プロジェクトチーム　81
神奈川県出土の土製品……近世研究プロジェクトチーム　97

－個人論文－
帯状円環型銅釧の形態分類と地域色について……池田　治　111

－事例紹介－
普及啓発事業における遺跡復原図活用の一例
－古代相模国府景観想像図の制作方法を中心に－……市毛秀人・依田亮一　127

凡　　例

1．本書は、財団法人かながわ考古学財団および神奈川県教育庁教育部生涯学習文化財課の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに計画的に共同研究を行った結果と個人論文及び事例紹介からなる。

2．各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである（五十音順）。

・旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム

井関文明・大塚健一・加藤勝仁・栗原伸好・鈴木次郎・砂田佳弘・畠中俊明・三瓶裕司・御堂島正
吉田政行

・縄文時代研究プロジェクトチーム

天野賢一・井澤純・井辺一徳・小川岳人・恩田勇・長岡文紀・松田光太郎

・弥生時代研究プロジェクトチーム

阿部友寿・飯塚美保・池田治・伊丹徹・櫻井真貴・新開基史・村上吉正・渡辺外

・古墳時代研究プロジェクトチーム

上田薫・植山英史・柏木善治・近野正幸

・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

岩田直樹・大上周三・加藤久美・河野喜映・木村尚二・冨永樹之・中澤正人・中田英・葉山俊章・
依田亮一

・中世研究プロジェクトチーム

宍戸信悟・鈴木庸一郎・服部実喜・宮坂淳一

・近世研究プロジェクトチーム

市川正史・木村吉行・久保田俊夫・桝渕規彰・柳川清彦

神奈川県における旧石器時代の遺構（その２）

－Ｂ１層上部－

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

本プロジェクトでは、昨年度より近年増加している神奈川県内の遺構の集成を実施している。今年度は、漸移層～Ｌ１Ｈ層出土の石器群に伴って検出された遺構を対象とした昨年度に続き、第１暗色帯（Ｂ１層）上部出土の石器群に伴って検出された遺構を対象とした。今回も前回同様、礫群・炭化物集中・炉址・配石・住居状遺構・土坑・ピット・デポ等の各遺構を集成の主な対象としたが、確認できたものは礫群・配石・炭化物集中・住居状遺構（炉址・ピットを含む）・デポの５種類のみであった。

以下、各遺構ごとにその内容を検討する。

Ｂ１層上部検出の遺構について

ａ）礫　　群（第１～３図）

今回確認された礫群は26遺跡155基を数え、漸移層～Ｌ１Ｈ層段階と同様、この段階で最も多く検出された遺構である。本段階では、遺跡内に礫群が検出された場合、その基数が１基しか検出されない遺跡は僅か５遺跡であり、他の18遺跡については複数基の礫群が検出されている。構成礫の数量については、月見野遺跡群上野第一地点第Ⅴ文化層第12礫群の667点が最も多く、逆に大和市№210遺跡第Ⅰ文化層第５号礫群の２点が最も少ない。数量ごとのデータの集計が可能な遺跡をさらに観察すると、40点未満のものが114基を数え、全体の７割以上を占める。特に20点未満のものはこの内の72基を数え、これらの主体を占める。石材組成は、在地系と考えられるものを使用している。礫の被熱の痕跡はその多少はあるものの一般的に顕著に観察される。また、礫の分布範囲については、長・短軸のいずれもが1.00m未満というものは27例しか確認されず、基本的に長軸は1.00m以上の広がりを持っている。

ｂ）配　　石（第４図１・２）

本段階で確認された配石は、藤沢市今田遺跡第Ⅱ文化層中より検出された２例のみであった。これらはいずれも調査区の東端の崖線部から検出されており、石器集中地点や礫群との間には明確な無遺物空間の存在が確認される。両者は約４ｍ程の距離しか隔てていないものの、その出土状況にはやや差異が認められる。１号配石は、８点の礫が重なり合うような状態で検出されており、このため平面分布は0.30ｍ×0.20ｍと極めて狭い範囲内から出土している。これに対し、２号配石の平面分布は、1.00ｍ×0.30ｍと１号配石に比べやや広く、礫６点がほぼ同一面上で確認されている。つまり、１号配石は縦方向、２号配石は横方向へのまとまりがそれぞれ確認される配石と考えられる（註１）。また、いずれの配石からもピット等の下部施設の存在は確認されていない。使用石材については、同一文化層中より検出された礫群とほぼ同様の石材が用いられており、各遺構間における石材選択の差異は観察されない。礫の赤化は大部分の資料で認められるものの、礫の残存状況は比較的良好である。石器との共伴関係は、１号配石からは剥片類、２号配石からはエンドスクレイパー・剥片類が各１点ずつ出土している。

ｃ）炭化物集中（第４図３）

本段階で確認された炭化物集中は、８遺跡９基である。二ノ丸遺跡では0.30ｍ×0.30ｍ程の狭小な範囲内から多量の炭化物が出土しているが、この様な出土例は本遺跡の事例のみである。他の遺跡は長軸3.00ｍ、短軸1.50ｍ以上を測り、その分布範囲は二ノ丸遺跡に比べかなり広範となる。また、南葛野遺跡の様に比較的多量の炭化物がまとまって出土していても明確な掘り込み等、これに伴う施設は確認されていない。

ｄ）住居状遺構（第５図）

本段階で確認された住居状遺構は、田名塩田遺跡群Ａ地区（向原遺跡）№４地点より検出された１基のみである（註２）。本遺構は、直径約10ｍ程の環状を呈し、円周外縁部には多孔質安山岩（玄武岩）の円礫や凝灰岩系の原石・石核・大型剥片類等の大型の資料が人為的に配置された様な状態で出土している。この様な円周外縁部出土の大型の資料の内側からは、これらに沿うような状態で直径0.30～0.60㎝程の柱穴が10本、さらに内側で２本確認されている。一部ピットの断面観察により、ピットの明瞭な掘り込みの存在が確認されると共に、遺構の中央部に向かってやや内傾していることが確認されている。本遺構の中央部付近からは、長径0.90㎝の楕円形を呈するものと直径0.65㎝の円形を呈する２基の炉址も検出されている。炉址の内部からは炭化物片や焼土塊及び粒子等の存在も確認されている。また、石器及び炭化物の分布範囲は、本遺構のほぼ内側に限定される。

この様なことから本遺構をこれまで指摘されてきたとおり「最古の住居状遺構」であると位置付けることは十分理解できる。今後の報告に期待したい。

ｅ）デ　　ポ（第６図）

本段階で確認されたデポは、田名塩田遺跡群Ａ地区（向原遺跡）№２地点より検出された１基のみである。本遺構は、426点の遺物が出土した１号ブロックから南西に約35ｍ程の無遺物空間を挟んで検出されている。黒曜石の原石（９点）および剥片（１点）から構成されており、原石は全て星ヶ塔産、剥片は和田峠産という原産地分析結果が報告されている。遺物の分布状況は、1.10ｍ×0.25ｍ程の範囲にまとまって確認されているが、さらに原石のみに限って観察すると、直径約0.30㎝程の範囲内に極めてまとまった状態で出土している点が理解できる。

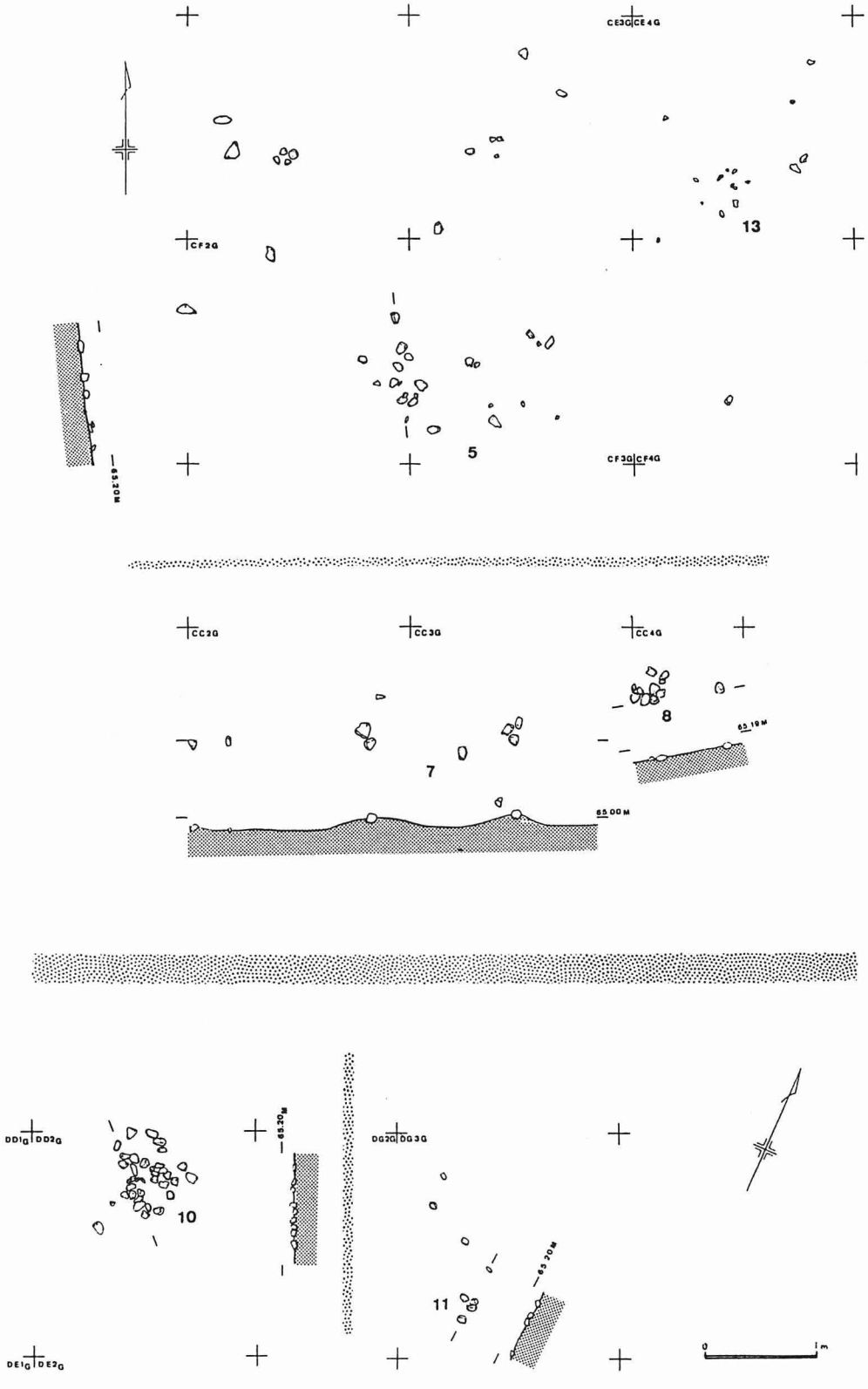
また、本遺構の諸特徴を前回の漸移層～Ｌ１Ｈ層から検出された同遺構と比較すると、両者間には内容的な差異が一部確認される。まず、器種組成であるが、今回の田名塩田遺跡群Ａ地区（向原遺跡）№２地点では、未加工品である原石そのものが主体を占めている。これに対し、前回本誌面上で確認された南葛野遺跡では全て石核、吉岡遺跡群Ｄ区では礫斧と礫器が扁平な河原石の直下から、その周辺部からは礫器と打製石斧が出土しており、田名塩田遺跡群とは異なり、そのほとんどが既に加工された資料で構成されている。また、下部施設の存在であるが、吉岡遺跡群の例では下部に土坑を伴っているのに対し、田名塩田遺跡群の例では下部施設の存在は一切確認されていない。確認された遺構数は少ないものの、両者間にはこの様な２つの差異が確認される。また、本遺構は、縄文時代草創期およびＢ１層上部段階の石器群に伴って検出されてはいるものの、いわゆる細石刃石器群に伴った出土事例は確認されていない。　　（栗原伸好）

註

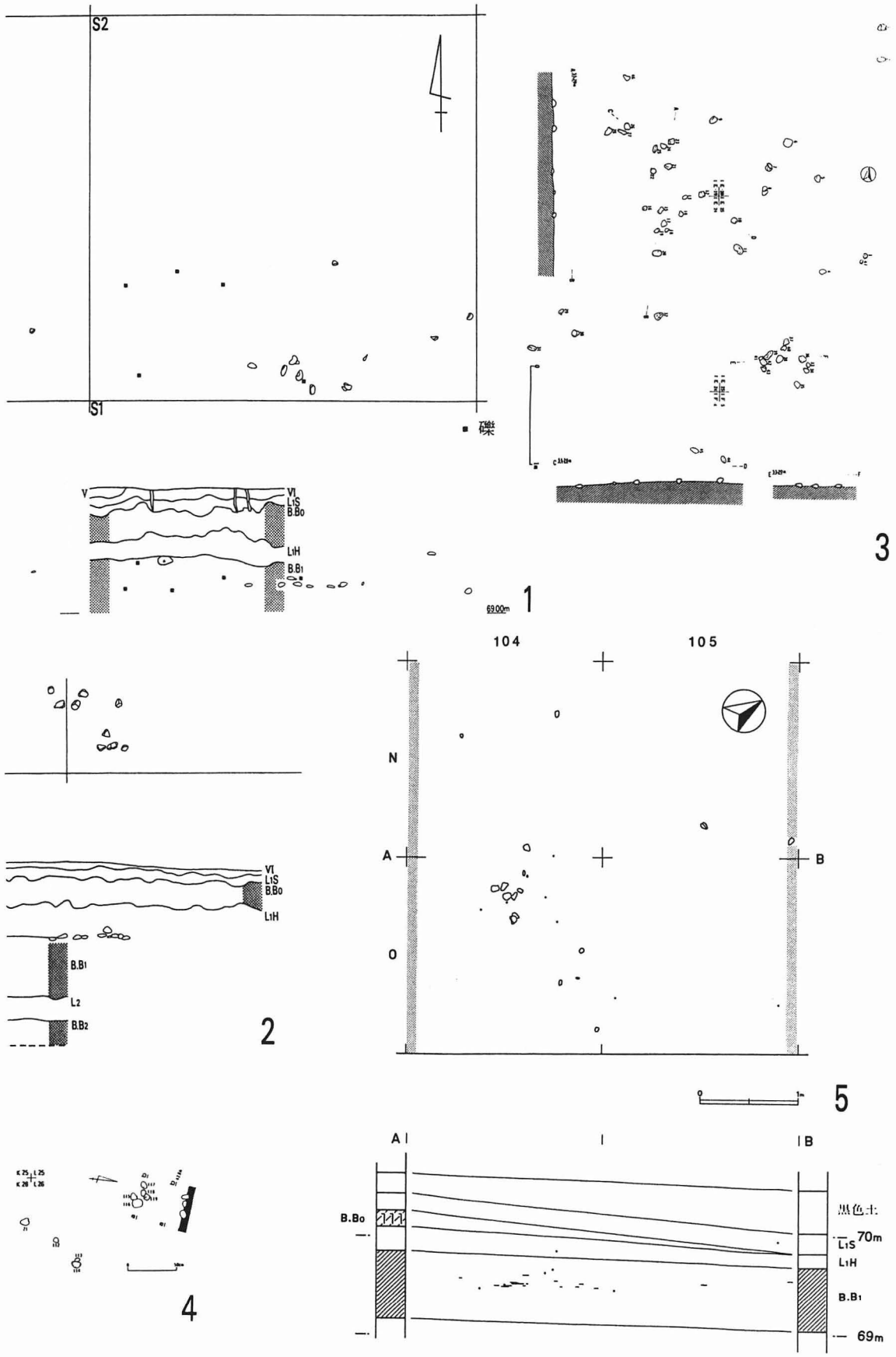
1　但し、調査担当者の麻生順司氏より、調査地が斜面であったことやＢ１層の認定が困難であったこと、また、５号礫群で観察された様に本調査区からはローム層の二次的な移動が確認されていることから、特に１号配石の出土状況については、慎重な判断が必要であるとご教示頂いた。

2　各集成は報告書の記載をもとに実施しているが、本遺構についてはその重要性から鑑み、参考文献中の資料の記載をもとに実施した。

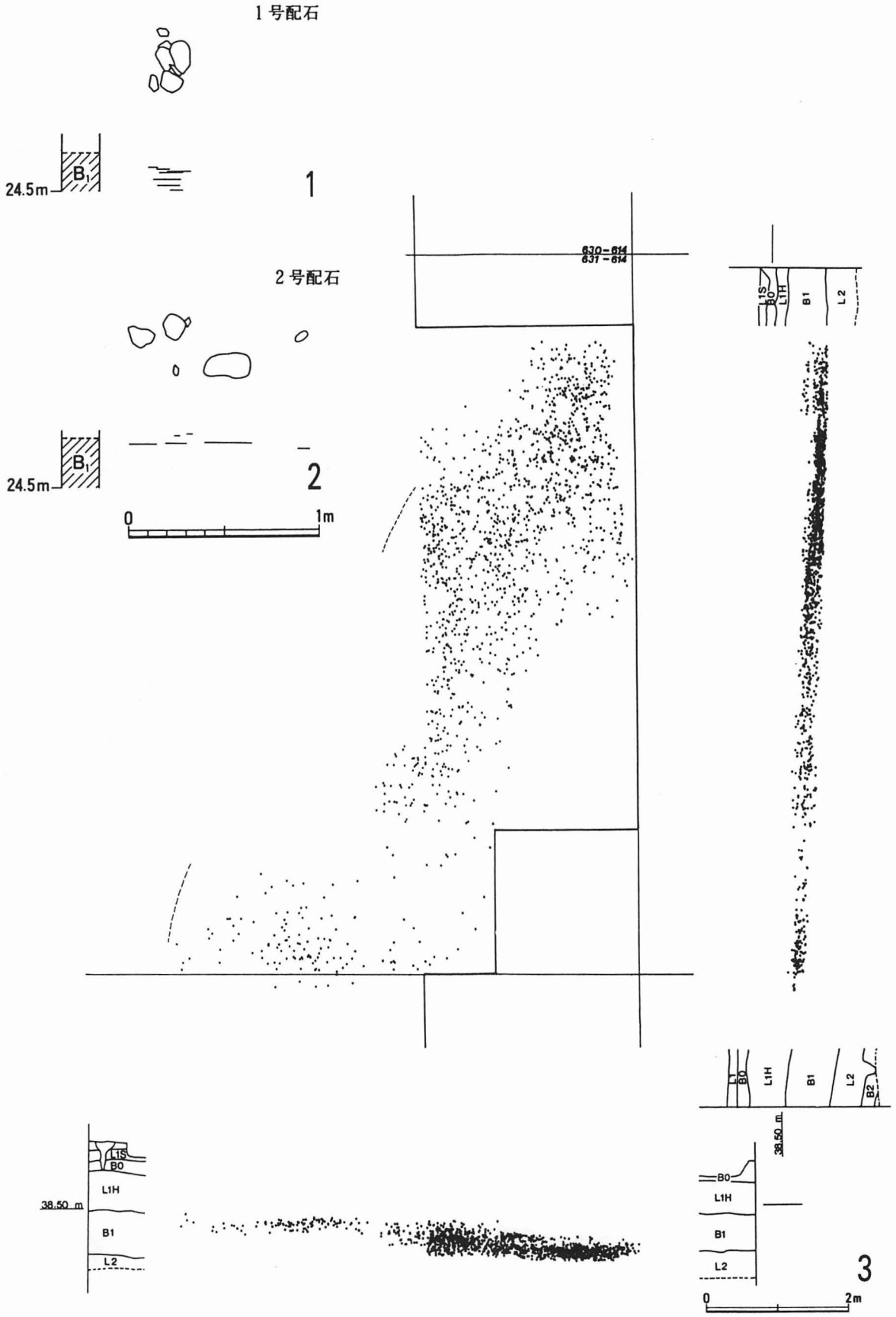
第１図　礫群（１.下森鹿島Ⅱ　１・２・３号礫群、２．今田Ⅱ　５・６号礫群、３．今田Ⅱ　７号礫群）



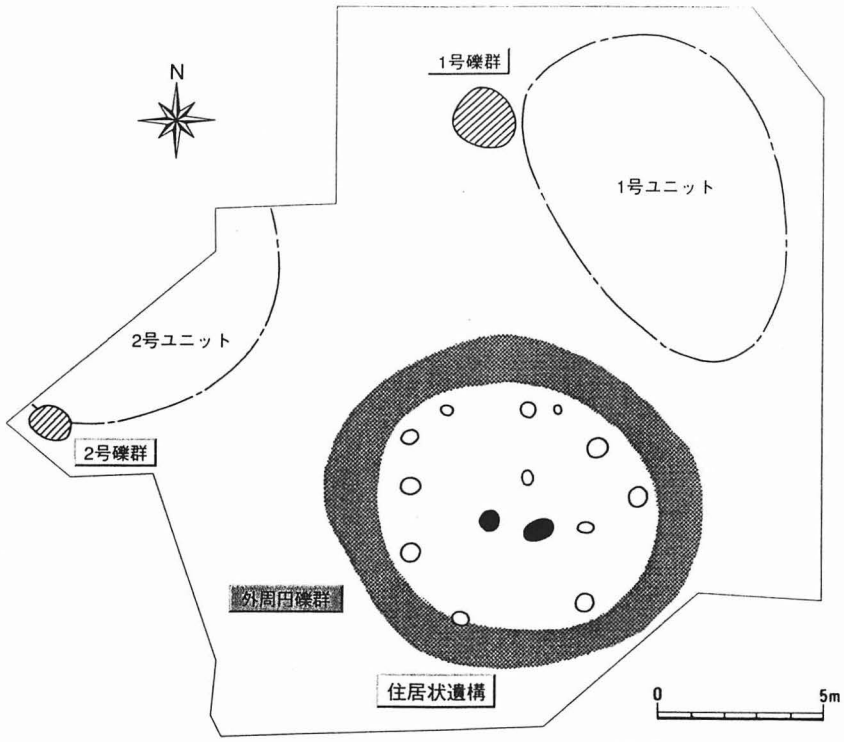
第２図　礫群（深見諏訪山Ⅲ　第５・７・８・10・11・13礫群）



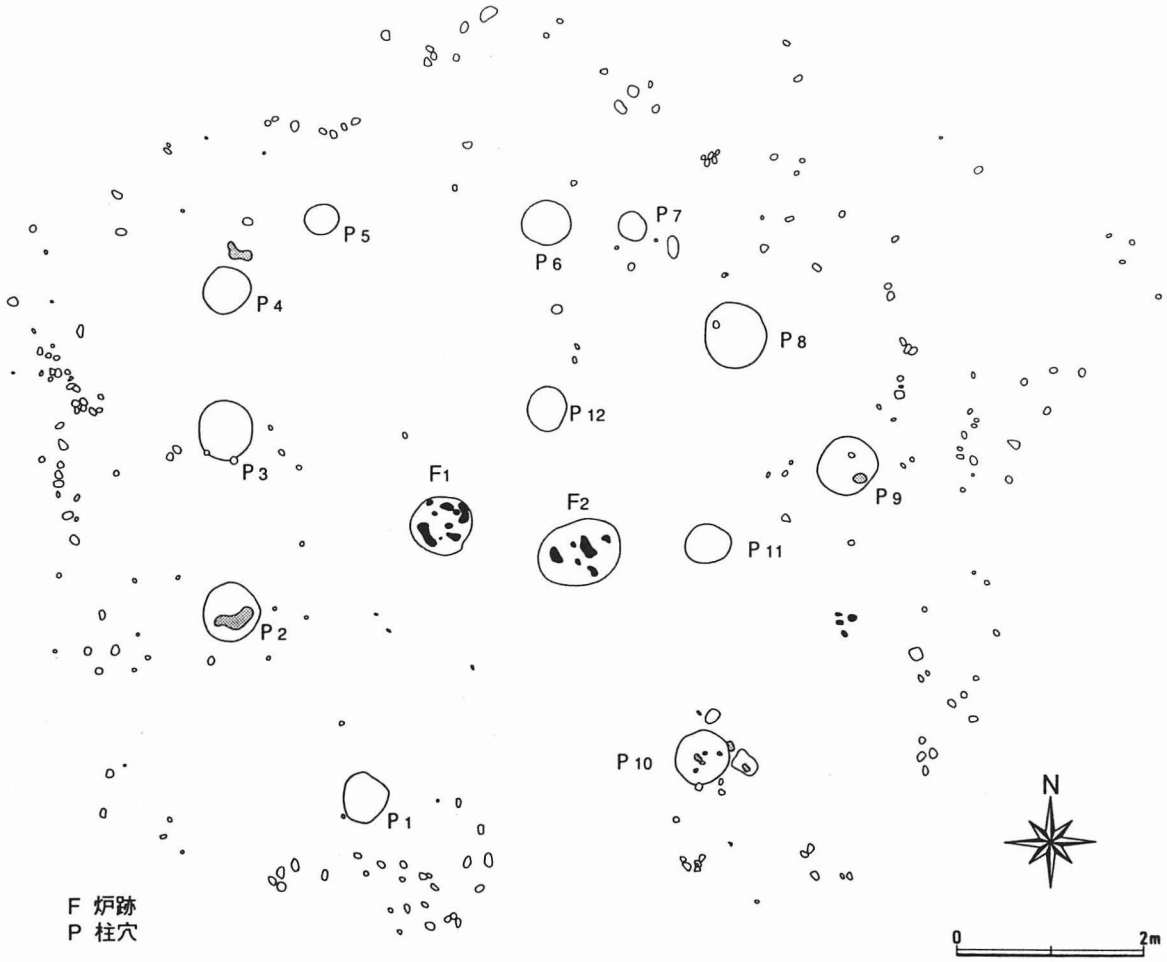
第３図　礫群（１．長堀北Ⅴ　第３号礫群、２．長堀北Ⅴ　第２号礫群、３．寺尾Ⅲ　第５号礫群、４．早川天神森Ⅲ礫群、５．下鶴間長堀



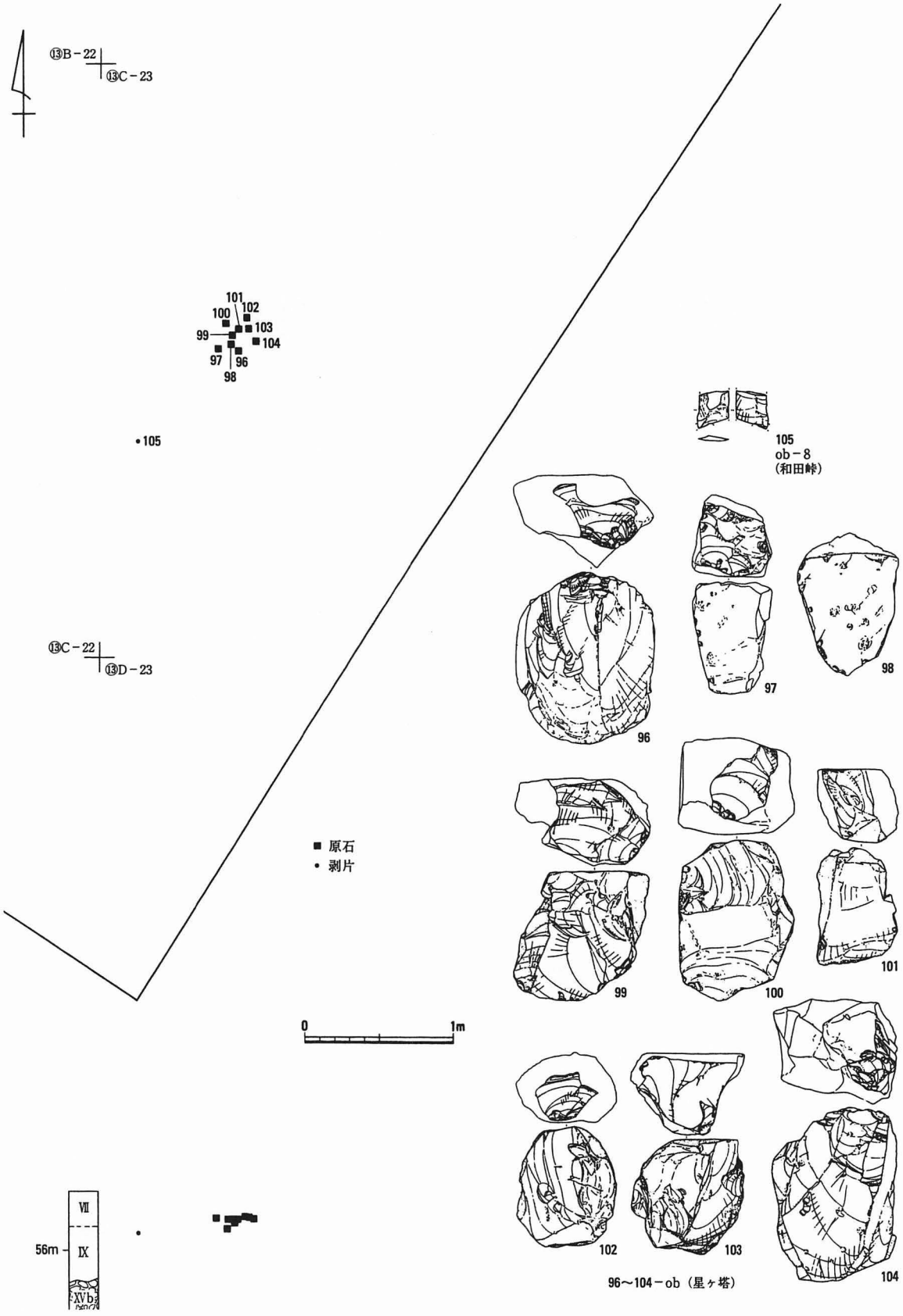
第４図　配石（１・２．今田Ⅱ）・炭化物集中（３．南葛野Ⅰ）



遺構配置図



第５図　住居状遺構（田名向原遺跡）



第６図　デポ（田名向原遺跡）

礫群

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	礫数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考（共伴遺物等）
27	受地だいやま	BB0L-L1HU		礫群	1.80	1.10	13	散漫	被熱・赤化：全点、一部タール付着		石器16（ナイフ形石器１、台石１、石核１、剥片７、砕片
31	花見山	L1HL	Ⅲ	礫群	1.80	1.20	132(85)	集中（密集部有）	全点被熱あり	砂岩64・珪質頁岩4・変質安山岩4・チャート4・ひん岩2・閃緑岩2・輝緑岩1・角礫岩1・石英斑岩1・安山岩1・輝石安山岩1・ホルンフェルス1	木炭点在 石器8点(剥片)
55	橋本	L1H-BB1U	Ⅱ	礫群Na１			46		赤化：６、破損：11	砂岩42・硅岩２	礫総重量2302ｇ 2001年度掲載済み、再掲載
55	橋本	L1H-BB1U	Ⅱ	礫群Na２			88		赤化：53、破損：67	砂岩85・硅岩３	礫総重量5221ｇ 2001年度掲載済み、再掲載
55	橋本	BB1-L2	Ⅲ	礫群Na３	2.00	1.50	77	集中	赤化：76、スス：10、タール：１、完形32・破損45		
55	橋本	BB1-L2	Ⅲ	礫群Na４	4.00	3.00	105	集中	赤化：103、スス：21、タール：3、完形20・破損85		
55	橋本	BB1-L2	Ⅲ	礫群Na５	1.00	1.00	25	集中	赤化：25、スス：18、完形13・破損12		
55	橋本	BB1-L2	Ⅲ	礫群Na６	2.50	2.00	138	集中	赤化：134、スス：52、タール：1、完形60・破損78		
55	橋本	BB1-L2	Ⅲ	礫群Na７	4.00	2.50	70	集中	赤化：64、スス：13、完形24・破損46		
55	橋本	BB1-L2	Ⅲ	礫群Na８	2.00	1.50	79	集中	赤化：79、スス：32、完形21・破損58		
55	橋本	BB1-L2	Ⅲ	礫群Na９	0.80	0.50	28	集中	赤化：28、スス：9、タール：1、完形6・破損22		
55	橋本	BB1-L2	Ⅲ	礫群Na10	2.00	1.50	80	集中	赤化：77、スス：23、タール：6、完形55・破損25		
55	橋本	BB1-L2	Ⅲ	礫群Na11	4.00	3.00	67	散漫	赤化：65、スス：9、完形13・破損54		
55	橋本	BB1-L2	Ⅲ	礫群Na12	1.50	1.00	35	集中	赤化：35、スス：14、完形8・破損27		
68	中村	L1SL-BB1L	Ⅲ	１号礫群	4.50	4.50	13	散漫	赤化：13、スス：一部、タール：一部、剥落・ヒビあり	硬砂岩・玄武岩・閃緑岩	７～10ブロックと重複 2001年度掲載済み、再掲載
68	中村	L1SL-BB1L	Ⅲ	２号礫群	5.00	5.00	8(5)	散漫	赤化、ススは一部	硬砂岩・玄武岩・火山礫凝灰岩・閃緑岩	12～14ブロックと重複 2001年度掲載済み、再掲載
68	中村	BB1U	Ⅳ	礫群							詳細不明
81	月見野上野第一地点	BB1U	Ⅴ	第１礫群	2.00	0.60	8	集中	赤化：6	砂岩・凝灰岩・火山礫凝灰岩	
81	月見野上野第一地点	BB1U	Ⅴ	第２礫群	1.20	0.50	16	集中	赤化：16、スス：多い、破砕14	凝灰岩・玄武岩・砂岩・粗粒凝灰岩・閃緑岩	
81	月見野上野第一地点	BB1M	Ⅴ	第３礫群	3.00	2.40	35	集中	赤化：35、破損27	砂岩・凝灰岩・粗粒凝灰岩	北端部第１ブロックと一部重複
81	月見野上野第一地点	BB1M	Ⅴ	第４礫群	1.30	1.30	18(15)	集中	赤化：18、スス：多い、タール：多い、破砕：多い	凝灰岩・火山礫凝灰岩	東側に第17ブロックが近在
81	月見野上野第一地点	L1H-BB1M	Ⅴ	第５礫群	3.00	2.50	40	集中	赤化：見られる、スス：ある、破砕：大多数	凝灰岩・砂岩	第15ブロックと重複

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	礫数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考（共伴遺物等）
81	月見野上野第一地点	L1H-BB1U	Ⅴ	第６礫群	2.40	1.00	17	集中	赤化：17、破砕：17	砂岩・凝灰岩・珪質凝灰岩・粗粒凝灰岩	
81	月見野上野第一地点	BB1M	Ⅴ	第７礫群	1.60	0.80	8	集中	赤化：7、ス ス：1、破砕：4	砂岩・珪質凝灰岩・粗粒凝灰岩	第17ブロックと重複
81	月見野上野第一地点	BB1U-BB1L	Ⅴ	第８礫群	2.70	2.00	32(12)	集中	赤化：32、破砕：32	砂岩・凝灰岩・火山礫凝灰岩	
81	月見野上野第一地点	BB1UL	Ⅴ	第９礫群	1.40	1.00	27	集中	赤化：少ない、破砕：少ない	砂岩・凝灰岩・火山礫凝灰岩・粗粒凝灰岩	第23ブロックと重複
81	月見野上野第一地点	L1HM-BB1UL	Ⅴ	第10礫群	4.00	4.00	33	集中	赤化：多い、破砕：半数近	砂岩・ホルンフェルス・CT・凝灰岩	第24ブロックと重複
81	月見野上野第一地点	L1HL-BB1UL	Ⅴ	第11礫群	3.00	2.80	13(11)	集中	赤化：13、破砕：少ない	ホルンフェルス・火山礫凝灰岩・砂岩	第36ブロックと重複
81	月見野上野第一地点	L1S-L2	Ⅴ	第12礫群	6.00	4.20	667(14+653)	集中		砂岩・凝灰岩・チャート・粗粒凝灰岩・火山礫凝灰岩	第32ブロックと重複
81	月見野上野第一地点	BBO-BB1M	Ⅴ	第13礫群	3.20	1.40	18(8)	集中	赤化：大部分	砂岩・凝灰岩・粗粒凝灰岩	
81	月見野上野第一地点	L1HU-BB1L	Ⅴ	第14礫群	3.00	2.50	144(119)	集中	赤化：少ない	砂岩・凝灰岩・粗粒凝灰岩	
84	台山	BB1U	Ⅲ	１号礫群	1.80	1.70	29(17)	集中	赤化：28、ス ス：7、ター ル：2、完形5・破砕24	礫岩1・砂岩4・泥岩1・安山岩7・火砕岩4	
85	長堀北	BB1U	Ⅴ	第１号礫群	6.00	2.90	11	散漫			規模、礫数は図から計測
85	長堀北	BB1U	Ⅴ	第２号礫群	1.00	0.60	9	集中			規模、礫数は図から計測
85	長堀北	BB1U	Ⅴ	第３号礫群	4.60	1.40	18	散漫			規模、礫数は図から計測
85	長堀北	BB1U	Ⅴ	第４号礫群	1.30	0.50	5	散漫			規模、礫数は図から計測
85	長堀北	BB1U	Ⅴ	第５号礫群	2.00	1.80	6	散漫			規模、礫数は図から計測
86	下鶴間長堀	BB1U	Ⅱ	第１礫群	4.80	6.00	33	散漫	被熱：全点		10cm程度の礫が２点、周囲に火はね礫
86	下鶴間長堀	BB1U	Ⅱ	第２礫群	4.30	3.60	21	散漫			第４礫群と接合関係
86	下鶴間長堀	BB1U	Ⅱ	第３礫群	6.00	4.00	35	散漫			
86	下鶴間長堀	BB1U	Ⅱ	第４礫群	3.30	2.50	24	散漫			第２礫群と接合関係
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	１号礫群	0.50	0.40	16		赤化：16、ス ス：10、ター ル：3、完形9・破砕7	礫岩1・砂岩3・チャート2・安山岩8・火山礫凝灰岩1・ホルンフェルス1	
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	２号礫群	1.20	1.00	27(20)		赤化：27、ス ス7、ター ル3、完形7・破砕20	礫岩1・砂岩8・チャート1・安山岩8・火山礫凝灰岩1・他1	２号ユニット
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	３号礫群	1.30	0.90	13(12)		赤化：13、ス ス：2、完形10・破砕3	礫岩1・砂岩5・安山岩5・閃緑岩1・火山礫凝灰岩1	２号ユニット
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	４号礫群	0.80	0.50	17(14)		赤化：17、ス ス：3、ター ル：1、完形7・破砕10	礫岩2・砂岩3・チャート１・安山岩5・閃緑岩3・火山礫凝灰岩1	２号ユニット
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	５号礫群	1.00	0.40	24(16)		赤化：24、ス ス：4、ター ル：1、完形5・破砕19	砂岩5・チャート1・安山岩10	２号ユニット
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	６号礫群	0.60	0.40	12(11)		赤化：12、ス ス：10、ター ル：2、完形7・破砕5	礫岩1・砂岩2・安山岩6・火山礫凝灰岩1・ホルンフェルス1	
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	７号礫群	2.50	2.20	24(20)		赤化：24、ス ス：7、ター ル：1、完形15・破砕9	礫岩2・砂岩8・安山岩7・ホルンフェルス2・他1	３号ユニット
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	８号礫群	2.40	1.00	15(14)		赤化：15、ス ス：5、ター ル：2、完形8・破砕7	礫岩1・砂岩8・泥岩1・チャート1・安山岩4	
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	９号礫群	0.80	0.50	17		赤化：17、ス ス：4、完形11・破砕6	礫岩3・砂岩8・安山岩3・ホルンフェルス3	

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	礫数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考（共伴遺物等）
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	10号礫群	1.50	1.30	35(29)		赤化：35、スス：10、ター ル：2、完形 12・破砕23	礫岩2・砂岩10・チャート1・安山岩14・閃緑岩1・火山礫凝灰岩1	3号ユニット
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	11号礫群	1.90	1.60	60(48)		赤化：60、スス：11、ター ル：2、完形 25・破砕35	礫岩3・砂岩21・チャート3・安山岩18・閃緑岩2・火山礫凝灰岩1	3号ユニット
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	12号礫群	2.30	1.80	21		赤化：21、スス：12、ター ル：3、完形 17・破砕4	礫岩2・砂岩11・安山岩9	7号ユニット
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	13号礫群	1.60	1.20	14(13)		赤化：14、スス：5、ター ル：1、完形 10・破砕4	礫岩1・砂岩9・泥岩1・安山岩2	7号ユニット
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	14号礫群	0.90	0.70	8(7)		赤化：8、スス：3、ター ル：2、完形 3・破砕5	礫岩1・砂岩2・安山岩4	7号ユニット
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	15号礫群	2.10	1.20	31(26)		赤化：31、スス：5、ター ル：1、完形 14・破砕17	礫岩4・砂岩10・泥岩1・チャート1・安山岩7・火山礫凝灰岩2・他1	7号ユニット
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	16号礫群	1.10	1.00	21		赤化：21、スス：3、ター ル：3、完形 16・破砕5	礫岩4・砂岩7・泥岩1・チャート1・安山岩8・他1	7号ユニット
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	17号礫群	1.40	0.80	24(18)		赤化：24、スス：11、ター ル：2、完形 12・破砕12	礫岩1・砂岩11・泥岩1・安山岩4・他1	
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	18号礫群	0.60	0.30	8(5)		赤化：8、スス：2、完形 2・破砕6	砂岩3・安山岩2	
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	19号礫群	3.80	2.50	72(54)		赤化：72、スス：27、ター ル：6、完形 27・破砕45	礫岩8・砂岩23・泥岩1・チャート1・安山岩18・閃緑岩1・火山礫凝灰岩3・他1	
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	20号礫群	1.90	1.20	23		赤化：23、スス：8、ター ル：2、完形 14・破砕9	礫岩2・砂岩13・泥岩1・チャート1・安山岩5・ホルンフェルス1	9号ユニット
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	21号礫群	1.50	1.20	13(12)		赤化：13、スス：5、完形 10・破砕3	礫岩1・砂岩3・安山岩7・火山礫凝灰岩1	
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	22号礫群	1.10	0.70	13(4)		赤化：13、スス：6、完形 1・破砕12	礫岩1・砂岩2・安山岩1	
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	23号礫群	1.10	0.80	16(6)		赤化：16、スス：3、ター ル：1、完形 2・破砕14	礫岩3・安山岩1・閃緑岩2	
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	24号礫群	0.90	0.40	10(6)		赤化：10、スス：4、完形 3・破砕7	砂岩2・安山岩4	
87	長堀南	BB1U	Ⅲ	25号礫群	2.00	0.30	12(8)		赤化：12、スス：4、ター ル：1、完形 2・破砕10	砂岩3・泥岩1・安山岩4	12号ユニット
88	深見諏訪山	BB1U	Ⅲ	第２号礫群	0.70	0.50	15	集中			規模、礫数は図から計測 第９ブロックと重複
88	深見諏訪山	BB1U	Ⅲ	第３号礫群	1.30	0.60	9	集中			規模、礫数は図から計測
88	深見諏訪山	BB1U	Ⅲ	第４号礫群	1.10	0.80	18	集中			規模、礫数は図から計測 第７ブロックと重複
88	深見諏訪山	BB1U	Ⅲ	第５号礫群	1.80	1.10	24	集中			規模、礫数は図から計測
88	深見諏訪山	BB1U	Ⅲ	第６号礫群	0.80	0.60	9	集中			規模、礫数は図から計測
88	深見諏訪山	BB1U	Ⅲ	第７号礫群	3.00	0.60	10	散漫			規模、礫数は図から計測 第２ブロックと重複

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	礫数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考（共伴遺物等）
88	深見諏訪山	BB1U	Ⅲ	第８号礫群	0.80	0.40	12	集中			規模、礫数は図から計測 第２ブロックと重複
88	深見諏訪山	BB1U	Ⅲ	第10号礫群	1.00	0.80	36	密集	被熱：全点、一部タール付着		周辺に炭化物あり 規模、礫数は図から計測
88	深見諏訪山	BB1U	Ⅲ	第11号礫群	1.30	0.50	8	散漫			規模、礫数は図から計測 第５ブロックと重複
88	深見諏訪山	BB1U	Ⅲ	第12号礫群	2.60	2.20	71	集中			規模、礫数は図から計測
88	深見諏訪山	BB1U	Ⅲ	第13号礫群	0.50	0.45	10	散漫			規模、礫数は図から計測
88	深見諏訪山	BB1U	Ⅲ	第14号礫群	2.60	1.20	24	集中			規模、礫数は図から計測 第８ブロックと重複
95	福田札ノ辻	BB1U	Ⅱ	第１礫群	4.00	2.50	30	散漫 一部集中	被熱：全点、ほぼ全点タール付着		総重量2.78kg、16個体に接合、大型礫の集中箇所は0.8×0.5m
96	寺尾	BB1U	Ⅱ	第５礫群	3.50	3.50	47	集中	赤化：40、スス：13、タール：1、破砕：18	粗粒凝灰岩9・硬質砂岩14・火山礫凝灰岩5・凝灰角礫岩5・安山岩5・粘版岩1・珪岩1・火山角礫岩1・礫岩1・砂岩1・流紋岩1・粗粒砂岩１・不明1	１ブロックと重なる
107	今田	BB1U	Ⅱ	１号礫群	1.30	1.00	22	密集	完形・破損が混在	砂岩5・チャート5・火砕岩5・ホルンフェルス1・他1	中心部に破損度の高い礫、その周りを完形に近い礫が囲む様に分布
107	今田	BB1U	Ⅱ	２号礫群	0.90	0.50	10	密集	破損度の高い礫を多く含む	砂岩1・火砕岩1・凝灰岩1・礫岩1	3号礫群との間に接合関係あり
107	今田	BB1U	Ⅱ	３号礫群	0.50	0.30	6	密集	破損度の高い礫を多く含む	砂岩2	2号礫群との間に接合関係あり
107	今田	BB1U	Ⅱ	４号礫群	1.30	0.80	12	やや密集	完形・破損が混在	砂岩2・チャート2・火砕岩1・凝灰岩3・閃緑岩1・安山岩1・礫岩1	1号礫群に同じ
107	今田	BB1U	Ⅱ	５号礫群	3.60	2.50	153	密集	完形・破損が混在	砂岩64・チャート11・火砕岩13・凝灰岩7・閃緑岩13・安山岩9・ホルンフェルス4・礫岩3	
107	今田	BB1U	Ⅱ	６号礫群	1.60	1.00	22	散漫	完形に近い礫を多く含む	砂岩8・チャート2・火砕岩4・閃緑岩4・ホルンフェルス2	
107	今田	BB1U	Ⅱ	７号礫群	3.60	2.20	24	散漫	破損度の高い礫を多く含む	砂岩4・チャート2・火砕岩6・凝灰岩2・閃緑岩2・砂岩1	
107	今田	BB1U	Ⅱ	８号礫群	2.50	1.30	17	一部密集	完形に近い礫を多く含む	砂岩7・チャート3・火砕岩6・閃緑岩4・安山岩2	
107	今田	BB1U	Ⅱ	９号礫群	0.80	0.30	9	密集	完形に近い礫を多く含む	砂岩2・チャート1・凝灰岩3・閃緑岩3	
109	代官山	L1HL-BB1相当層U	Ⅳ	礫集中							詳細不明 礫集中11基 各集中の構成礫数は20個未満 礫総数は94個、約11kg
157	古淵Ｂ	BB1-L2	Ⅱb	05号礫群	0.60	0.40	4	密	赤化：2、スス：1、完形1・破損3		18号ユニット重複
157	古淵Ｂ	BB1-L2	Ⅱb	06号礫群	0.90	0.80	36	密	赤化：36、スス：22、タール：5、完形16・破損20		16号ユニット重複 ７号礫群と接合
157	古淵Ｂ	BB1-L2	Ⅱb	07号礫群	1.70	0.70	31	密	赤化：31、スス：21、完形17・破損14		23号ユニット重複 ６号礫群と接合
157	古淵Ｂ	BB1-L2	Ⅱb	08号礫群	5.00	3.40	73	集中	赤化：64、スス：31、タール：1、完形15・破損58		19号ユニット重複

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	礫数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考（共伴遺物等）
157	古淵Ｂ	BB1-L2	Ⅱb	09号礫群	4.20	2.90	214	集中	赤化：205、スス：144、ター ル：18、完形 55・破損159		30号ユニット重複
157	古淵Ｂ	BB1-L2	Ⅱb	10号礫群	0.60	0.40	13	密	赤化：12、スス：7、ター ル：1、完形 7・破損11		
157	古淵Ｂ	BB1-L2	Ⅱb	13号礫群	3.40	0.70	90	密	赤化：72、スス：50、ター ル：3、完形 24・破損66		29号ユニット重複
157	古淵Ｂ	BB1-L2	Ⅱb	14号礫群	3.80	1.80		密集			39号ユニット重複 型取り保存のため、礫の詳細は不明
157	古淵Ｂ	BB1-L2	Ⅱb	16号ｂ礫群	4.10	3.10	20	散漫	赤化：18、スス：17、完形 4・破損16		25号ユニット重複
157	古淵Ｂ	BB1-L2	Ⅱb	17号礫群	2.50	2.40	53	集中	赤化：48、スス：26、ター ル：7、完形 12・破損41		28号ユニット重複
157	古淵Ｂ	BB1-L2	Ⅱb	19号礫群	1.50	1.20	31	集中	赤化：26、スス：16、ター ル：4、完形 18・破損13		
188	月見野第Ⅱ	BB1		礫群							礫群７基 詳細不明
193	Ｙ10	BB1		礫群							詳細不明
194	Ｙ25	BB1		礫群							詳細不明
207	北川表の上	L1HL-BB1U		礫群							詳細不明
216	下森鹿島	BB1U	Ⅱ	１号礫群	2.50	0.50	16		赤化：16、スス：7、ター ル：1、完形 11・破損5		２号ユニット重複 １号ユニットと接合
216	下森鹿島	BB1U	Ⅱ	２号礫群	1.40	0.50	14		赤化：11、スス：2、ター ル：1、完形 5・破損9		２号ユニット重複
216	下森鹿島	BB1U	Ⅱ	３号礫群	0.50	0.40	24	密集	赤化：21、スス：4、完形 19・破損5		２号ユニット重複
216	下森鹿島	BB1U	Ⅱ	４号礫群	1.20	0.80	35	集中	赤化：35、スス：13、ター ル：6、完形 21・破損14		５号ユニット重複
216	下森鹿島	BB1U	Ⅱ	５号礫群	2.50	1.50	27	やや散漫	赤化：26、スス：5、ター ル：2、完形 1・破損26		７号ユニット重複
216	下森鹿島	BB1U	Ⅱ	６号礫群	2.50	1.00	20		赤化：20、スス：4、完形 3・破損17		10号ユニット重複
216	下森鹿島	BB1U	Ⅱ	７号礫群	0.60	0.50	26	密集	赤化：26、スス：11、ター ル：2、完形 11・破損15		
216	下森鹿島	BB1U	Ⅱ	８号礫群	0.50	0.20	15	密集	赤化：15、スス：11、ター ル：3、完形 7・破損8		
216	下森鹿島	BB1U	Ⅱ	９号礫群	0.90	0.20	19		赤化：18、スス：7、完形 7・破損8		
220	稲荷台地Ⅰ地点	BB1		１号礫群	0.50	0.45	27	密集	破損礫が多い	砂岩20	
220	稲荷台地Ⅰ地点	BB1		２号礫群	0.75	0.43	12	やや散漫	全て破損礫	砂岩3・閃緑岩4	
243	本入こざっ原	L1HL-BB1U	Ⅲ	礫集中	3.00	3.00					詳細不明
243	本入こざっ原	L1HL-BB1U	Ⅲ	礫集中	3.00	2.00					詳細不明
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	１号礫群	1.80	1.40	8	散漫	破損度高い		第１ブロック重複
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	２号礫群	6.50	4.20	13	散漫	破損度高い		第３ブロック重複
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	３号礫群	2.80	0.60	3	散漫			第８ブロック一部重複

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	礫数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考（共伴遺物等）
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	４号礫群	2.20	1.20	51	集中	赤化：○、破砕礫多い		第９ブロック重複
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	５号礫群	6.60	2.20	29	散漫	赤化：○、ス ス：○、完形礫多い		第10ブロック重複
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	６号礫群	4.20	2.10	16	集中	破砕礫少ない		
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	７号礫群	4.00	2.20	9	散漫	破損度高い		第11ブロックと一部重複
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	８号礫群	6.10	3.60	18	散漫	赤化：○、ス ス：○、破礫大半		第12ブロックと重複
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	９号礫群	2.80	1.70	66	密集	赤化：○、完形度低い		第13ブロックと重複
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	10・11・12号礫群	5.40	5.40	106	集中	赤化：○、完形度低い		第14ブロックと重複
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	13号礫群	4.20	1.60	6	散漫	ス ス：○、完形度低い		第15ブロックと重複
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	14号礫群	7.30	2.90	25	散漫	ス ス：○、完形度低い		第16ブロックと重複
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	15号礫群	4.20	2.80	63	集中	完形度低い		第17ブロックと重複
331	横山５丁目	BB1	Ⅱ	16号礫群	4.10	1.20	40	集中	赤化：○、完形度低い		
333	大和市No210	BB1U	Ⅰ	第１号礫群	0.40	0.40	6	集中	完形：2、被熱：6	凝灰岩主体	２号礫群と１点接合 １点は450.5g、他は100～200g
333	大和市No210	BB1U	Ⅰ	第２号礫群	2.00	2.00	5	散漫	完形：2、被熱：5	凝灰岩主体	第２号ブロックと重複 １号礫群と１点接合 １点は544.4g、他は150g以下
333	大和市No210	BB1U	Ⅰ	第３号礫群	0.30	0.30	4	集中	完形：2、被熱：4	凝灰岩主体	調査区外まで伸びる いずれも100g以下
333	大和市No210	BB1U	Ⅰ	第４号礫群	1.00	0.40	3	散漫	完形：2、被熱：全点	凝灰岩主体	第１号ブロックと重複
333	大和市No210	BB1U	Ⅰ	第５号礫群	0.60		2	散漫	破砕礫		いずれも20g以下
333	藤沢市No48	L1H-BB1		１号礫群				比較的密			詳細不明 文献資料は概報
334	福田丙二ノ区	BB1U	Ⅰ	１号礫群	3.00	2.00	25		赤化：25、ス ス：22、完形14・破砕11	中粒凝灰岩15・硬質細粒凝灰岩3・ホルンフェルス3・砂岩3・安山岩1	炭化物伴う
334	福田丙二ノ区	BB1U	Ⅰ	２号礫群	7.00	3.00	20		赤化：19、完形9・破砕11	中粒凝灰岩11・硬質細粒凝灰岩3・ホルンフェルス1・砂岩2・中粒斑レイ岩1・安山岩1・流紋岩質凝灰岩1	炭化物伴う

炭化物集中

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	備考（共伴遺物等）
27	受地だいやま	BB0L-L1HU		炭化物集中	5.90	2.90	石器16（ナイフ形石器１、台石１、石核１、剥片７、砕片６）・礫群１
55	橋本	L1H-BB1U	Ⅱ	炭化物片集中ヶ所１	4.00	3.00	詳細不明・2001年度掲載、再掲載
55	橋本	L1H-BB1U	Ⅱ	炭化物片集中ヶ所２	3.00	2.00	詳細不明・2001年度掲載、再掲載
81	月見野上野第一地点	BB1UU-BB1L	Ⅴ	第１炭化物集中区	4.00	3.00	厚さ60cm 第12礫群の上位に位置、第32ブロックと重複
89	深見神社南	BB1U	Ⅱ	炭化物集中			詳細不明
109	代官山	L1HL-BB1相当層U	Ⅳ	炭化物集中			ナイフ形石器48・ポイント15・ポイント状石器１・錐２・掻器５・削器３・礫器２・ハンマー６・調整石器１・ＲＦ24・ＵＦ30・整剥片29・剥片157・砕片323・残核９
116	南葛野	L1HL-BB1U	Ⅰ	炭化物の分布	5.00	1.50	分布範囲は、さらに西側に広がっていた可能性有
193	Ｙ10	BB1	－	炭化物			詳細不明・2001年度掲載済み再掲載
206	二ノ丸	BB1UU	－	炭化物集中	0.30	0.30	多量の炭化物あり ナイフ形石器・剥片・砕片が共伴

配石

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	礫数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考（共伴遺物等）
107	今田	BB1U	Ⅱ	1号配石	0.30	0.20	8	密集	完形または完形に近いものを主体に破損度の高いものも含まれる	砂岩2・チャート1・礫岩1・他3	
107	今田	BB1U	Ⅱ	2号配石	1.00	0.30	6	やや散漫	完形または完形に近いものを主体に破損度の高いものも含まれる	砂岩3・チャート1・凝灰岩1	

住居状遺構等

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	深さ	炉址	柱穴	柱穴数	柱穴規模	備考
332	田名塩田遺跡群　A地区（向原遺跡）No４地点	BB1？	－	住居址	10.00	10.00	－					未報告のため詳細不明 文献資料は、リーフレット

デポ

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	遺物数	分布状態	遺物の様相	石材組成	備考
332	田名塩田遺跡群 A地区（向原遺跡） No２地点	Ⅵ-XI	－	２号ブロック	1.10	0.25	10	密集	原石は径30cmにまとまる	全点黒曜石（原石は全て星ヶ塔産、剥片は和田峠産）	原石9・剥片1 剥片と原石の関連性は薄い

2001年度補遺

礫群

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	礫数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考（共伴遺物等）
111	南鍛冶山	BB0-L1H		礫集中（0201遺物集中内）	5.00	3.90	42	一部密集	赤化：34、タール：3	安山岩4・火山礫凝灰岩9・凝灰岩13・玄武岩1・砂岩10・閃緑岩4・頁岩1	分布は南北２ヶ所に分かれる。
111	南鍛冶山	L1H		礫集中（0203遺物集中内）	7.40	4.40	55	散漫	赤化：22、タール：3	シルト岩1・安山岩3・火山礫凝灰岩2・凝灰岩9・珪質頁岩4・砂岩23・閃緑岩1・斑レイ岩4・浮石質凝灰岩3・頁岩5	分布は北・中央西側・南・東の4ヶ所に分かれる。0202遺物集中部の礫と接合関係あり。
111	南鍛冶山	BB0～L1H		礫集中（0401遺物集中内）	6.90	5.50	47	散漫	赤化：40、ス ス：3、タール：6	ホルンフェルス1・安山岩11・火山礫凝灰岩4・凝灰岩17・凝灰質砂岩1・凝灰質頁岩1・玄武岩1・砂岩8・閃緑岩1・斑レイ岩1・頁岩1	
111	南鍛冶山	BB0～L1H		礫集中（0402遺物集中内）	4.00	3.90	63	やや密集	赤化：58、ス ス：1、タール：4	チャート2・安山岩8・火山礫凝灰岩2・凝灰岩35・珪質頁岩7・玄武岩1、砂岩4・石英閃緑岩4	分布は北西と南東の2ヶ所に分かれる。南東のものを取り囲むように炭化物・石器類が分布。
111	南鍛冶山	L1H		礫集中（0505遺物集中内）	17.90	12.30	24	散漫	赤化：（6）	シルト岩1・安山岩2・凝灰岩9・凝灰質頁岩7・珪質頁岩1・砂岩4	
111	南鍛冶山	L1H下面		礫集中（0506遺物集中内）	7.30	6.00	147	比較的密集	赤化：119、ス ス：25、タール：24	シルト岩8・チャート4・ホルンフェルス2・安山岩13・凝灰岩43・珪質頁岩17・玄武岩1、砂岩36・閃緑岩7・粘板岩3・斑レイ岩2・頁岩11	凝灰岩・砂岩・珪質頁岩・安山岩は、各石材による分布のまとまりが見られる。約71mほどの距離の接合関係が見られる。

2001年度補遺
炭化物集中

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	備考（共伴遺物等）
111	南鍛冶山	BB0-L1H	－	炭化物集中（0201遺物集中内）	2.60	3.30	出土層位の中心はBB0層
111	南鍛冶山	L1H	－	炭化物集中（0203遺物集中内）	1.70	1.00	礫より若干低い位置に分布する
111	南鍛冶山	BB0～L1H	－	炭化物集中（0402遺物集中内）	4.60	4.10	礫などより若干高い位置に分布する。全体に分布、特に南側の礫集中を取り囲むように分布
111	南鍛冶山	L1H	－	炭化物集中（0505遺物集中内）	1.10	0.80	遺物分布南東側にごくまとまった形で分布
219	藤沢市No419 第２地点	L1H	Ⅱ	１号炭化物集中部	2.20	1.60	

引用・参考文献

白石浩之　1980.3　「第Ⅴ章第４節　第Ⅲ文化層」『寺尾遺跡』』　pp.123－134
神奈川県埋蔵文化財センター調査報告18
曽根博明他　1980.9　「Y10遺跡」『大和市先土器時代遺跡分布調査報告書』　p.29
大和市文化財調査報告書　第６集　大和市教育委員会
曽根博明他　1980.9　「Y25遺跡」『大和市先土器時代遺跡分布調査報告書』　p.33
大和市文化財調査報告書　第６集　大和市教育委員会
曽根博明・堤　隆・諏訪間順他　1983.3　「第３章　先土器時代　第Ⅲ文化層」『深見諏訪山遺跡』　pp.32－98
大和市文化財調査報告書　第14集　大和市教育委員会
金山喜昭・土井永好・武藤康弘　1984.8　「第Ⅱ文化層」『橋本遺跡　先土器時代編』　p.16　相模原市橋本遺跡調査会
見崎　巌　1984.9　「第Ⅴ章第３節　第Ⅱ文化層」『下鶴間長堀遺跡』　pp.107－164　大和市文化財調査報告書　第17集
一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅲ　大和市教育委員会
砂田佳弘　1986.1　「第Ⅳ文化層」『代官山遺跡』　pp.165－209　神奈川県埋蔵文化財調査報告11　神奈川県教育委員会
小池　聡・相田　薫　1986.5　「第６章第５節第Ⅴ文化層」『月見野遺跡群　上野遺跡第一地点』　pp.501－664
大和市文化財調査報告書　第21集　大和市教育委員会
岡本　勇他　1986.7　「概報　月見野遺跡群」『大和市史　７　考古資料編』　pp.481－521　大和市
長沢邦夫・中三川昇他　1987.3　「Ⅱ 各文化層の遺構と遺物　第Ⅳ文化層」『中村遺跡』　pp.36－97
都市計画道路町田南大野線埋蔵文化財発掘調査報告書　中村遺跡発掘調査団
麻生順司　1987.12　「第Ⅲ章第３節第Ⅲ文化層」『長堀南遺跡』　pp.16－88　大和市文化財調査報告書　第28集　大和市教育委員会
相田　薫　1988.3　「第４章第２節第Ⅱ文化層」『福田札ノ辻遺跡』　pp.12－29　大和市文化財調査報告書　第31集　大和市教育委員会
戸田哲也　1988.9　「第Ⅲ章第３節　第Ⅲ文化層」『台山遺跡』　pp.31－50　大和市台山遺跡発掘調査報告書　玉川文化財研究所
松井　泉　1990.3　「第３節　第２文化層ｂの遺構と遺物」『古淵Ｂ遺跡』　pp.159－254　相模原市古淵Ｂ遺跡発掘調査団
小宮恒雄　1990.3　「二ノ丸遺跡」『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ｘ　全遺跡調査概要』　pp.200－202
横浜市埋蔵文化財センター
鈴木重信　1990.3　「北川表の上遺跡」『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ｘ　全遺跡調査概要』　pp.290－293
横浜市埋蔵文化財センター
相田　薫　1991.3　「第Ⅲ章第３節　第Ⅱ文化層」『深見神社南遺跡』　pp.12－13　大和市文化財調査報告書　第42集　大和市教育委員会
小池　聡　1991.3　「第５章第５節第Ⅴ文化層」『長堀北遺跡』　p.27　大和市文化財調査報告書第39集　大和市教育委員会
麻生順司　1992.3　「第Ⅲ章第２節　第２文化層（Ｂ１上部）」『今田遺跡』　pp.17－60
藤沢市今田遺跡発掘調査報告書　藤沢市教育委員会
麻生順司　1993.9　「第２節　第Ⅱ文化層（Ｂ１上）」『下森鹿島』　pp.75－126　下森鹿島遺跡発掘調査報告書　玉川文化財研究所
麻生順司　1994.12　「第Ⅱ章　先土器時代」『稲荷台地遺跡群Ⅰ地点』　pp.8－17
藤沢市稲荷台地遺跡群Ⅰ地点発掘調査報告書　藤沢市No７１遺跡発掘調査団
坂本　彰　1995.3　「第２章　先土器時代」『花見山遺跡』　pp.20－28　港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告16　横浜市埋蔵文化財センター
岡沢祥子・関根唯充・榊　剛史・五月女亮子　1995.3
「第Ⅳ章第６節　第Ⅰ文化層」『南葛野遺跡』　pp.101－139　南葛野発掘調査団
望月　芳　1996.3　「第Ⅴ章　先土器時代の調査」『南鍛冶山遺跡』　pp.15－203
南鍛冶山遺跡発掘調査報告書第３巻　先土器時代　藤沢市教育委員会
旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム　1996.3　「旧石器時代後半における石器群の諸問題－Ｌ２～Ｂ１層石器群の様相」
研究紀要２『かながわの考古学』　pp.1－36　財団法人　かながわ考古学財団
井関文明　1996.7　「第Ⅳ章第３節　第Ⅲ文化層」『本入こざっ原遺跡』　pp.36－68
かながわ考古学財団調査報告13　財団法人　かながわ考古学財団
大坪宣雄・長澤邦夫・小口利恵子　1997.3　「第Ⅳ章Ⅰ　先土器時代の調査」『横山５丁目遺跡』　pp.14－101
相模原市立屋内水泳場建設事業地内遺跡調査団
麻生順司　1997　「２．相模原市田名向原No４遺跡」『第21回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』　pp.9－15　神奈川県考古学会
麻生順司　1998　「田名向原No４遺跡」『第５回石器文化研究交流会発表要旨』　pp.46－52　第５回石器文化研究交流会とちぎ実行委員会
戸田哲也・麻生順司　1998　「２．相模原市田名向原No４遺跡の住居状遺構」
『公開セミナー記録集「用田バイパス関連遺跡群ローム層中出土の炭化材」「旧石器時代の住居状遺構を探る」』
pp66－72
（財）かながわ考古学財団・神奈川県立埋蔵文化財センター
田名塩田遺跡発掘調査団　1998.7　『相模原市「田名向原」旧石器時代遺跡の調査」』　pp.1－10　相模原市教育委員会
桜井純也　1999.3　「第Ⅲ章第２節　第Ⅱ文化層」『藤沢市No419遺跡第２地点』　pp.15－36
東国歴史考古学研究所調査研究報告第19集 藤沢市No419遺跡発掘調査団・東国歴史考古学研究所
麻生順司　1999.3　「第Ⅲ章　Ａ地区（向原遺跡）の調査」『田名塩田遺跡群Ａ地区（向原遺跡）』　pp.108－109
田名塩田遺跡群Ⅰ　発掘調査報告書　田名塩田遺跡群発掘調査団
小池　聡　1999.3　「第Ⅲ章第２節　第Ⅰ文化層」『大和市No210遺跡』　pp.13－28　大和市文化財調査報告書第71集　大和市教育委員会
畠中俊明　1999.12　「第Ⅴ章第１節　第Ⅰ文化層（Ｂ１上部）の調査」『福田丙二ノ区遺跡』　pp.19－85
かながわ考古学財団調査報告68　財団法人　かながわ考古学財団

神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅵ

－中期後葉期　加曽利Ｅ式土器文化期の様相　その３　文化的様相（１）－

縄文時代研究プロジェクトチーム

Ⅰ．はじめに

平成12年度から開始した中期後葉期・加曽利Ｅ式土器文化期の様相をめぐる研究の３年次目にあたる平成14年度は、前年度に行った加曽利Ｅ式土器編年案の成果に基づいて、その文化的様相のうち、極めて多くの資料が得られている竪穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址の分析に焦点を絞った研究活動を実施した。

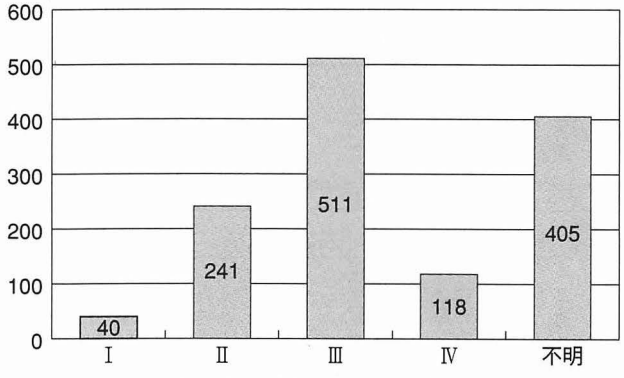
該期は、前時期の最盛期から安定期を迎え、引き続き各地に大規模な拠点的集落である環状集落を盛んに形成した時期と捉えられるが、しかしその終末には柄鏡形（敷石）住居址の出現と軌を一にするかのようにこれまでの集落形態・構造が変質・崩壊し始める時期でもある。このような変革を含む該期の様相について、竪穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址の分析視点からどのような動向が把握できるのかが本年度の研究主眼である。以下、これら住居址について各属性毎に検討を加えていくこととする。　（恩田）

Ⅱ．竪穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址

１．段階別の軒数（第１図）

本プロジェクトで集成し得た加曽利Ｅ式期の竪穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址は187遺跡3035軒（2001『研究紀要』６）を数える。なお集成の対象が神奈川という行政区画に限られるため、加曽利Ｅ式土器の分布圏に留まらず、これに隣接する曽利式土器の分布圏に属す住居址が含まれていること、また詳細不明な遺跡のそれも計上している。これらは本来分別されるべきものであるが、容易ではなく、今回の検討では上記の総軒数を対象として検討に着手した。以下の分析では、これらのうち報告書等の事実記載・挿図等から概要が比較的明瞭な129遺跡1315軒の竪穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址をもとに、分析に有効となる対象を各属性毎に選別し、平面形態、平面規模、柱穴配置、壁下構造（壁溝・壁柱穴）、建替・拡張、炉址、埋甕、敷石住居址の諸属性について検討を加え、各段階毎の特徴や傾向を抽出することを試みた。なお、各住居址の段階比定は、報告書等の記載によるものを参考に、前年度提示した編年案（Ⅰ～Ⅳ段階）の大別に従っている。

段階別の軒数は、Ⅰ段階が16遺跡40軒、Ⅱ段階が57遺跡241軒、Ⅲ段階が74遺跡511軒、Ⅳ段階が47遺跡118軒となっており、Ⅱ段階以降の増大が著しく、Ⅲ段階に遺跡数・住居址軒数ともピークに達することが判る。Ⅰ段階に属する遺跡・遺構数は僅少で、勝坂式土器文化期から急激な落ち込みを示すが、このことが直接的に勝坂式期からの衰退を意味するかどうかは検討が必要であろう。　（小川）



第１図　住居址軒数の推移

２．平面形態（第２図、第１表）

129遺跡1100軒を対象に検討を行った。これらのうち平面形態が把握できたものは98遺跡647軒で、ここからさらに段階不明のものを除くと88遺跡486軒となる。分析にあたっては、炉址・柱穴・埋甕の配置等を参考に、奥壁部－炉址－出入口部を結ぶ軸線付近の最大長部分を主軸とし、またこれに直交する最大長部分の軸線を副軸と捉え、平面形態の分類とその集計を試みた。この結果、円形・縦長楕円形・横長楕円形・方形・縦長長方形・横長長方形・五角形・逆五角形・六角形・半円形・柄鏡形・不整形というおおよそ12種類の形態が抽出し得た（第２図）。なお、楕円形・長方形の縦長・横長の区別に際しては、主軸が副軸の1.05倍以上となるものを縦長、主軸が副軸の0.94倍以下となるものを横長と、便宜的に区分し分類を行った。

上記の98遺跡647軒のデータをもとに段階別に各形態の軒数とその比率をみたものが第１表である。Ⅰ段階では資料数が希少なため今後の資料増加によっては大幅な修正が必要となる公算が高いが、現時点では縦長楕円形が最も多い。Ⅱ段階でもやはり縦長楕円形が最多であるが、円形・方形・縦長長方形が安定した存在を示すようになる。また、五角形は本段階に多い傾向にある。Ⅲ段階では柄鏡形以外の形態が出揃う。主体的形態は前段階と同様であるが、前段階に比べ横長の楕円形・長方形が増加する傾向にある。さらに本段階の特徴としては、逆五角形・半円形・不整形・柄鏡形を除く各形態の出入口部と目される壁面に瘤状の小張出が付帯する形態が多く見受けられるようになることが挙げられる（Ⅱ段階162軒中9軒：5.6％→Ⅲ段階234軒中50軒：21.4％）。ここに埋甕の埋設される事例が大半を占めることから（9＋50軒中8＋43軒：86.4％）、埋甕の存在しないものも、やはりこれに関連した痕跡と判断するのが妥当であろう。Ⅳ段階では、一変して柄鏡形が主体となり、円形・縦長楕円形・横長楕円形・縦長楕円形が僅かに残存する状況となる。

３．平面規模（第３・４図）

129遺跡1100軒を対象に検討を行った。これらのうち平面規模が計測し得たものは78遺跡395軒で、これらを対象に平面形態で用いた定義による主軸長・副軸長を計測した（柄鏡形は、主軸長を主体部奥壁から張出部先端までを計測）。これら計測値をもとに、勝坂式文化期での分析に倣い、主軸・副軸いずれかの長軸規模を３段階（２ｍ以上４ｍ未満/４ｍ以上６ｍ未満/６ｍ以上）に区分し、各領域に属する軒数を集計したものが第４図である。各段階とも中規模と見なされる４ｍ以上６ｍ未満のものが主体を占める状況は前時期とほぼ同様であるが、Ⅱ段階以降、小規模とみられる２ｍ以上４ｍ未満のものが微増、大規模とみられる６ｍ以上のものが微減する傾向にあることは前時期の大形化への推移と異なる特徴で、Ⅳ段階における柄鏡形の盛行が長軸規模の大形化として顕著に現れない点は留意される。なお、Ⅲ段階には長軸約10ｍを測る大形住居址（第３図左）が認められるが、本時期では孤高的存在といえる。（恩田）

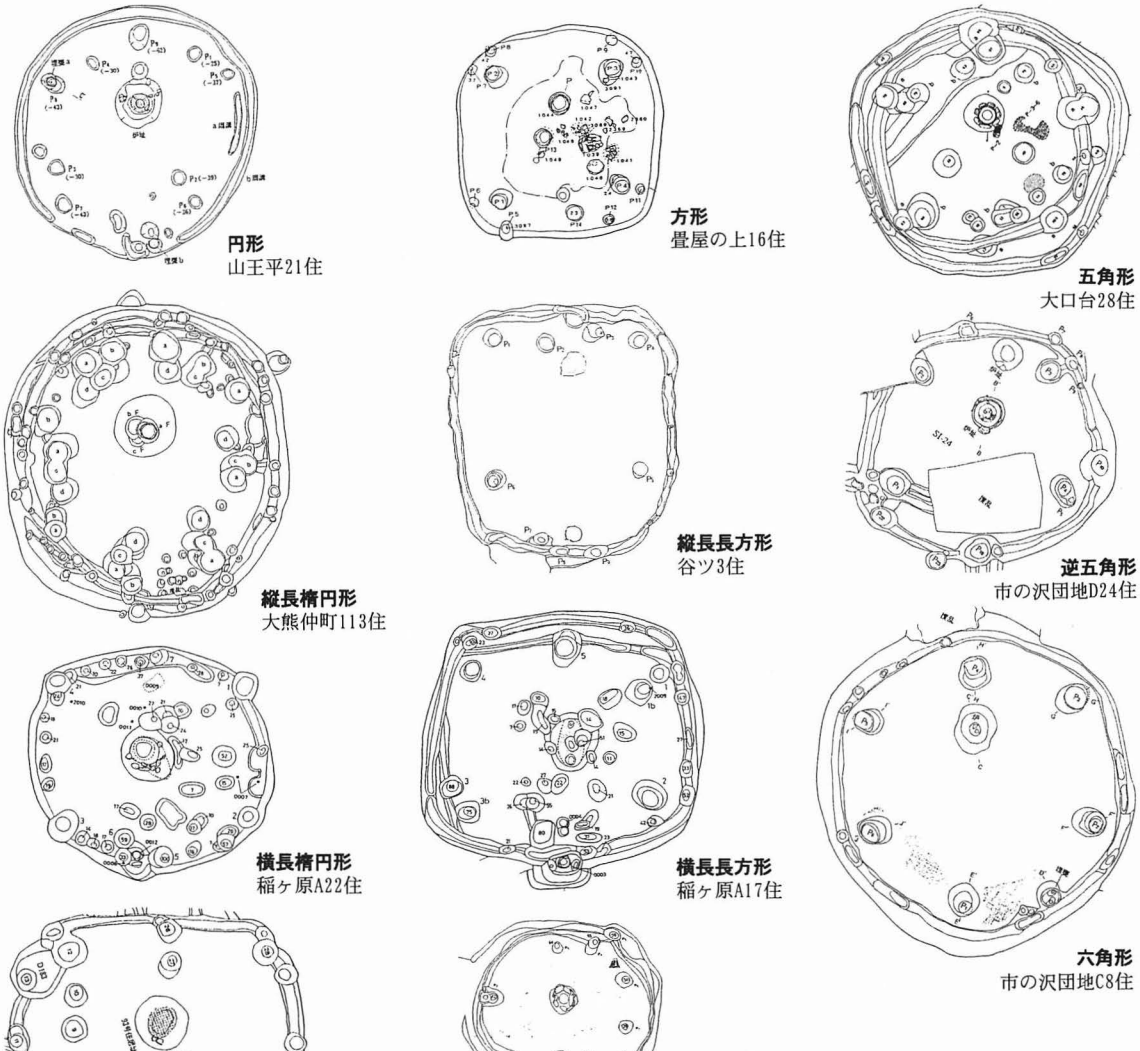
第１表　住居址各形態の軒数と比率（形態不明除く）

〈軒数〉

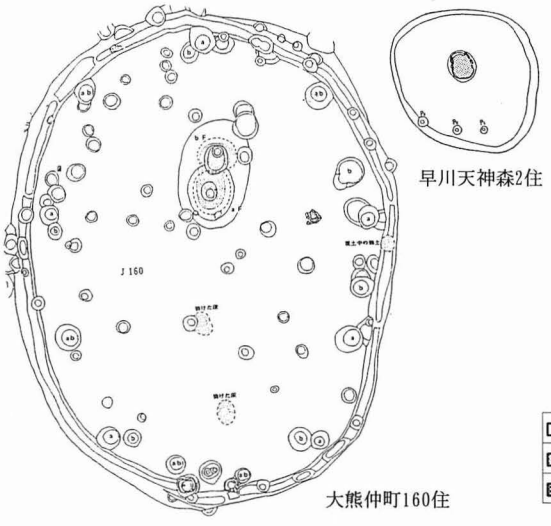
段階/形態	円形	縦長楕円形	横長楕円形	方形	縦長長方形	横長長方形	五角形	逆五角形	六角形	半円形	柄鏡形	不整形	総計
Ⅰ		7			1		1		2			1	12
Ⅱ	26	40	3	27	22	6	18	6	4			10	162
Ⅲ	40	56	18	29	24	14	9	10	6	3		25	234
Ⅳ	3	2	1		2						70		78
不明	29	30	10	20	15	10	7	5	7		9	19	161
総計	98	135	32	76	64	30	35	21	19	3	79	55	647

〈比率〉

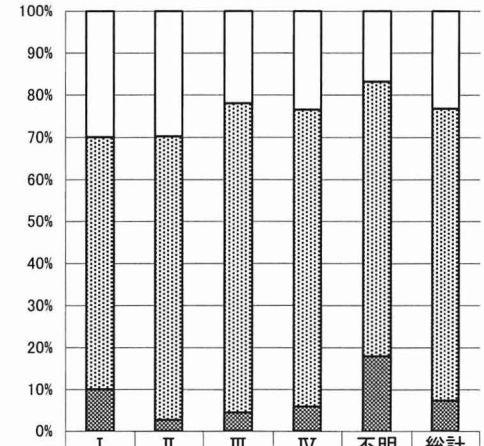
段階/形態	円形	縦長楕円形	横長楕円形	方形	縦長長方形	横長長方形	五角形	逆五角形	六角形	半円形	柄鏡形	不整形	総計
Ⅰ		58.3%			8.3%		8.3%		16.7%			8.3%	100.0%
Ⅱ	16.0%	24.7%	1.9%	16.7%	13.6%	3.7%	11.1%	3.7%	2.5%			6.2%	100.0%
Ⅲ	17.1%	23.9%	7.7%	12.4%	10.3%	6.0%	3.8%	4.3%	2.6%	1.3%		10.7%	100.0%
Ⅳ	3.8%	2.6%	1.3%		2.6%						89.7%		100.0%
不明	18.0%	18.6%	6.2%	12.4%	9.3%	6.2%	4.3%	3.1%	4.3%		5.6%	11.8%	100.0%
総計	15.1%	20.9%	4.9%	11.7%	9.9%	4.6%	5.4%	3.2%	2.9%	0.5%	12.2%	8.5%	100.0%



第2図　住居址の各形態（S＝1/150）



第3図　大形住居址と小形住居址（S＝1/150）



	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	不明	総計
□6m以上	3	34	35	4	16	92
▨4m以上6m未満	6	77	117	12	62	274
▩2m以上4m未満	1	3	7	1	17	29

第4図　住居址の長軸規模

４．主柱穴配置（第５図、第２表）

本項は、該期竪穴住居址の主柱穴数及び住居址主軸に対する主柱穴配置の差異による形態分類を行い、形態毎の特徴・時期（段階）別の傾向の抽出を試みるものである。本来は、他の属性との相関も考慮すべきであるが、紙幅の制約もあり、ここでは、上記分類に従って抽出された形態に絞って検討を加えることとする。

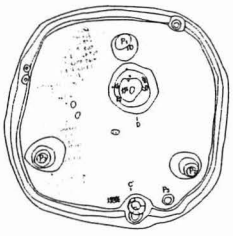
分類に先立ち、報告書に実測図・観察表の掲載されている145遺跡1,178軒の竪穴住居址を対象に、各住居址の主柱穴数をカウントし基礎データを作成した。主柱穴配置の特定が可能なものは787軒存在し、うち段階を比定し得るものは573軒に絞られる。基礎データを集計した結果、該期竪穴住居址の主柱穴数は３本から９本の間に遍在することが判明し、定型化したものについて７つの大別形態を抽出し得た。これに、壁際に概ね等間隔で主柱を巡らせる壁柱穴の形態を採るものを加え、都合８つの大別形態を設定した。また、主軸に対する柱穴配置の差異に着目することによって、５本主柱穴のものを２細分、６本主柱穴のものを４細分、８本主柱穴のものを２細分することが可能であった。以下、各形態の代表的事例を掲載した第５図を参照しながら、形態毎に若干の検討を加え、時期（段階）別の傾向をみていくことにする。

３本主柱穴のものは8軒を数える。全て入口側２穴・奥壁側１穴という配置を採り、奥壁側の１穴は概ね入口と炉址を結んだ中軸線上に配されている。時期比定の可能なものは、県東部の３例がⅡ段階、県西部の２例がⅢ段階に属し、Ⅰ・Ⅳ段階に属する確実な事例は抽出できなかった。４本主柱穴のものは300軒を数える。Ⅰ～Ⅲ段階を通して高い占有率をほこり、加曽利Ｅ式期の最もポピュラーな柱穴形態といえよう。方形配置をなすものと台形に近い配置をなすものの別を認め得るが、細分形態として捉える程際だった差異ではない。５本主柱穴のものは263軒を数える。基本的な配置は五角形をなす。大半は第５図-３のごとく五角形の頂点を奥壁側に配するが、希に第５図-４のごとく入口側に頂点を配して逆五角形状をなすものが認められ、この２形態を細分形態として捉えた。Ⅲ段階で最も高い占有率を占める形態である。６本主柱穴のものは131軒を数える。柱穴配置はバリエーションに富み、縦位亀甲形（第５図５）、横位亀甲形（同５）、二列横帯形（同７）、二列縦帯形（同８）の４細分が可能であるが、この他、縦位亀甲形と横位亀甲形の中間的な様相を示す斜位亀甲形のものも少なくない。縦位亀甲形のものは、入口側の主柱を主軸上からずらして配する傾向があり、幾分歪んだ形状をなすものが多い。Ⅳ段階において４本主柱穴のものを凌駕することに留意したい。７本主柱穴のものは28軒を数える。大半は、奥壁側に１穴、側壁側に各２穴、入口側に２穴を配する形態を採る。各段階を通して占有率は低く、Ⅰ段階のものは抽出できなかった。８本主柱穴のものは10軒を数える。主軸上に２穴を配するもの（同10）と配さないもの（同11）の別があり、この２形態を細分形態として捉えた。占有率は各段階を通し極端に低い。９本主柱穴のものとして２軒を抽出した。Ⅱ・Ⅲ段階に各１例存在するのみである。第５図-12は大形住居に採用されている事例で、特殊な事例といえるかもしれない。壁柱穴のものは45軒を数える。Ⅲ段階に１軒、Ⅳ段階に36軒存在し、大半が柄鏡形（敷石）住居に伴うものである。

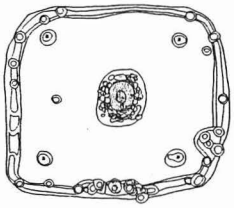
各大別形態の時期別の軒数を示したものが第２表である。Ⅰ・Ⅱ段階では４本主柱穴のものが最も多く、５・６本主柱穴のものがこれにつづく。Ⅲ段階では４本主柱穴のものと５本主柱穴のものとの順位が逆転し、壁柱穴の形態を採るものが出現する。Ⅳ段階では柄鏡形住居の増加に伴い、壁柱穴形態のものが飛躍的に増え、最も高い比率を占める形態となる。（井辺）

第２表　形態別の軒数・比率

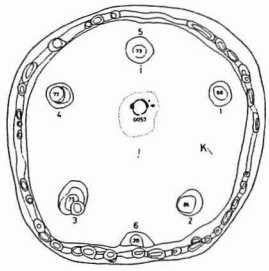
	3本柱	4本柱	5本柱	6本柱	7本柱	8本柱	9本柱	壁柱	計	比率
Ⅰ	0	13	6	6	0	1	0	0	26	3.3%
Ⅱ	3	90	75	37	8	2	1	0	216	27.4%
Ⅲ	2	98	109	41	11	4	1	1	267	33.9%
Ⅳ	0	6	9	8	4	1	0	36	64	8.1%
不明	3	93	64	39	5	2	0	8	214	27.2%
計	8	300	263	131	28	10	2	45	787	100.0%
比率	1.0%	38.1%	33.4%	16.6%	3.6%	1.3%	0.3%	5.7%	100.0%	



1．市ノ沢団地C９住

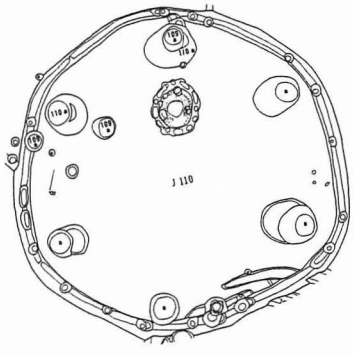


2．大熊仲町 J79 住

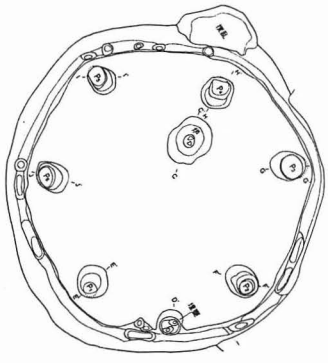


3．上白根おもて 11a 住

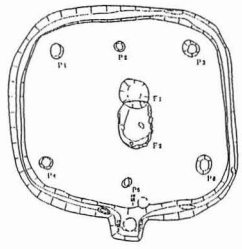
4．当麻２住



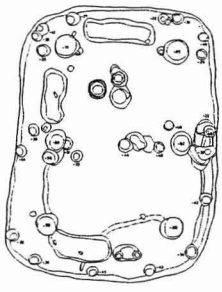
5．大熊仲町 J110 住



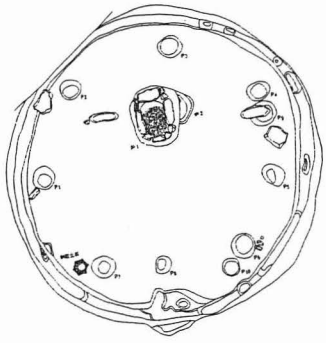
6．市ノ沢団地C８住



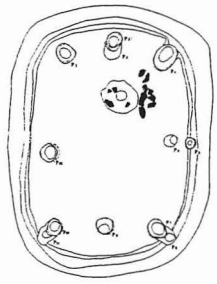
7．潮見台 11 住



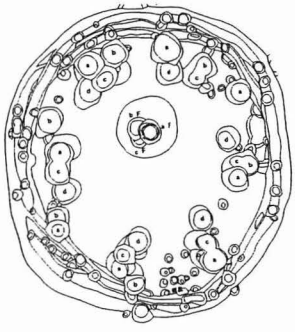
8．山田大塚３住



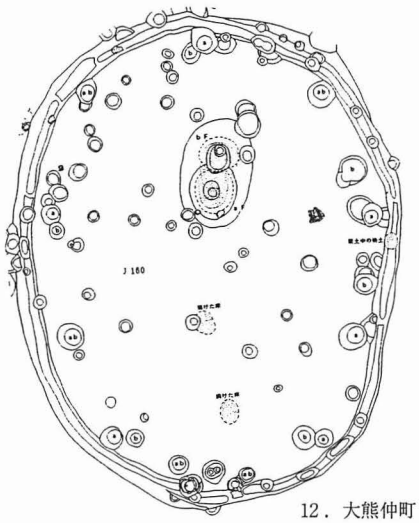
9．大地開戸Ｊ４住



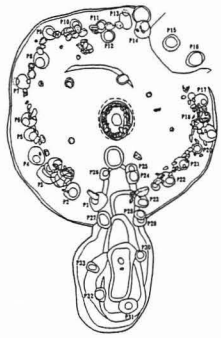
10．半原向原１住



5．大熊仲町 J113 住



12．大熊仲町 J160 住



13．桜並 10 住

第５図　住居址の主柱穴配置（S＝1/150）

５．壁下構造（壁溝・壁柱穴）（第６図）

ここでは壁柱穴・壁溝の分析を行う。こうした施設は竪穴の壁直下に設けられ、しがらみや矢板のような壁を保護しその崩落を防止する壁体の支え、あるいは壁体そのものの痕跡と見なされる。特に深く掘りこまれた壁柱穴や壁溝、あるいは後述する主柱と一体化した壁柱穴は、単なる壁面の保護に留まらず、竪穴から地上部に立ち上がった壁体を支えたり、主柱から葺きおろされた垂木を受ける側柱や壁体であった可能性も考えられる。

以下、これらの施設を、壁柱を廻らせるもの、壁溝を廻らせるもの、主柱が壁柱と一体化したもの、こうした施設を有さないものに分け、神奈川県域における変遷を概観したい。対象としたのは今回集成した加曽利Ｅ式期の住居址1315軒の内こうした施設が観察可能で所属時期もある程度特定できる910軒である。住居址のごく一部の検出でもこうした施設が観察されかつ時期が特定できる事例は可能な限り取り上げた。ただし柱穴のみが検出されている事例の多くは不明とし、また住居址の極く一部分の調査で施設が認められないものはここから除外している。

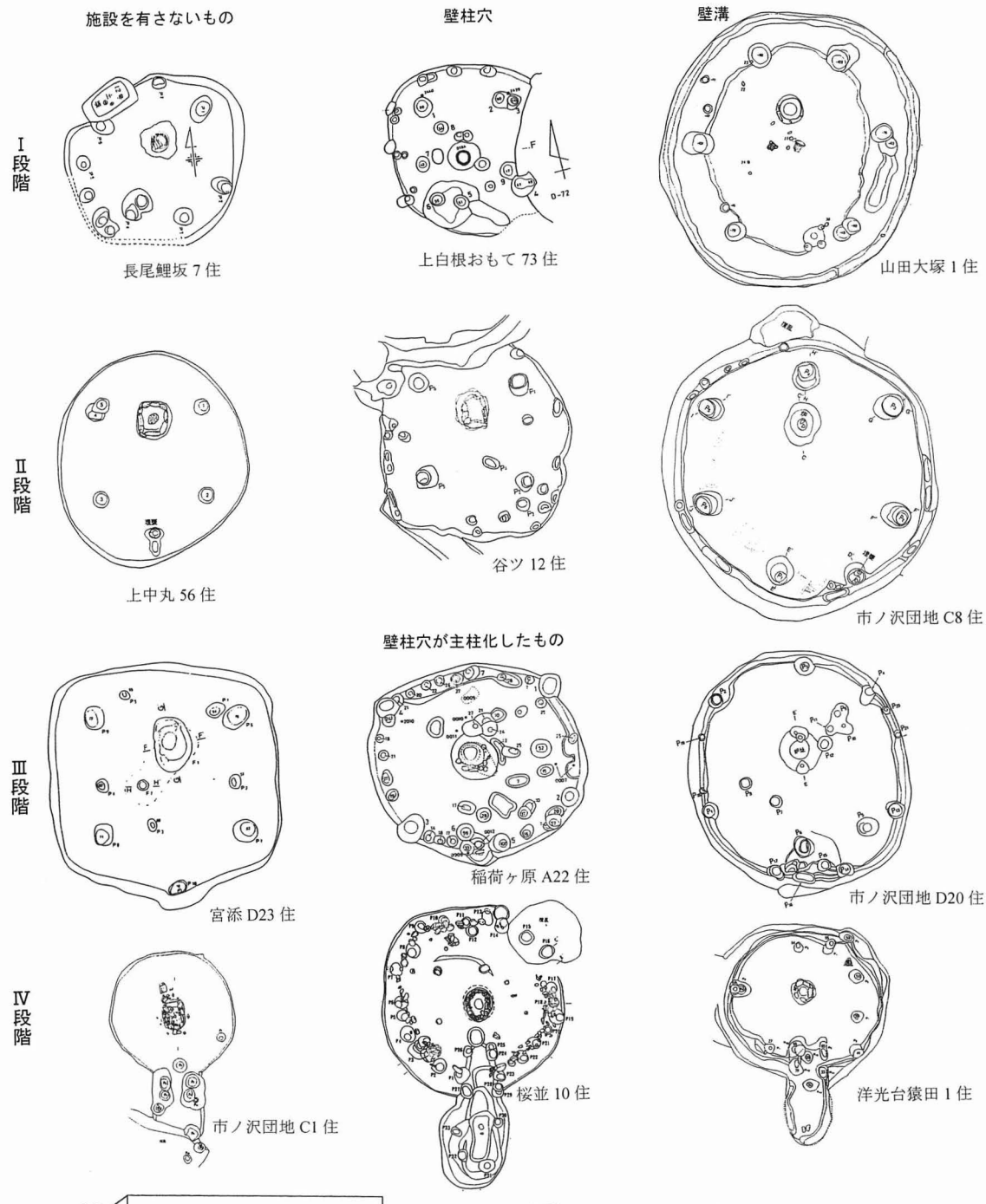
無施設－Ⅰ段階６軒・Ⅱ段階17軒・Ⅲ段階51軒・Ⅳ段階６軒で、各段階を通じて存在する。

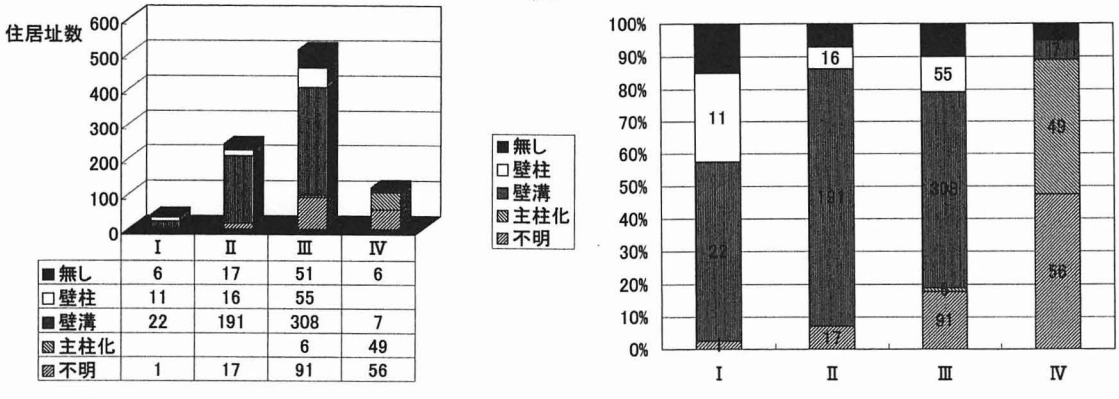
壁　柱－Ⅰ段階11軒・Ⅱ段階16軒・Ⅲ段階55軒・Ⅳ段階０軒。Ⅰ段階においては全体の半分近くを占める。Ⅱ段階以降検出数は微増するが、全体に占める比率は著しく小さくなり急激に減少する。

壁　溝－Ⅰ段階22軒・Ⅱ段階191軒・Ⅲ段階308軒・Ⅳ段階７軒。壁溝を廻らせるものはⅠ段階に約半数を占め、Ⅱ段階で全体の８割を占めるまでに激増する。Ⅲ段階にはさらに増大を見せるが全体に占める比率はやや小さくなっている。Ⅳ段階に入ると上述した壁柱とともに急激に減少している。

主柱化－Ⅰ段階０軒・Ⅱ段階０軒・Ⅲ段階６軒・Ⅳ段階49軒。主柱と壁柱が一体化するものはⅠ・Ⅱ段階には見られない。Ⅳ段階で前二者に替わって急増し約半数を占めるようになる。

壁溝は先行する勝坂式期の後半に出現するが、Ⅰ段階における住居址の約半数は無施設・壁柱であり、安定的な存在になってはいない。壁溝を有するものが大半を占めるⅡ段階は壁溝が壁下構造の範型として確立した時期と評価できるだろう。壁溝は続くⅢ段階でも検出住居址の壁下構造の大半を占める。Ⅱ～Ⅲ段階を通じ、なお少数ではあるが無施設・壁柱も共存する。壁溝を設けるものを範としながら、住居の建設材料・労力・建設期間または居住期間・土質・竪穴の深度等様々な理由から、臨機に併用されたものであろうか。またⅢ段階には少数であるが、それまでの壁柱とは異なる主柱と壁柱が一体化したものが見られる。加えてこの時期、壁溝が見られるものでも、主柱穴の壁への接近が顕著なものとなってくるのは注意される。極端な事例では主柱穴が壁溝に接したり、市ノ沢団地Ｄ20住・葉積台遺跡８住・山王平遺跡15住等のように主柱穴が壁溝に重なるものも散見される。Ⅳ段階、それまでの壁柱・壁溝に替わり壁柱と主柱が一体化した形態が一般化する。一方であざみ野遺跡11住・洋光台猿田遺跡１住は、壁溝を廻らし主柱を別個に有する本段階での数少ない事例である。壁溝はⅡ～Ⅲ段階以来の名残りを見せるものであろう。Ⅳ段階に顕著に見られる壁柱の主柱との一体化は、壁面を被覆して保護する矢板のような壁体を、支え固定化していたそれまでの壁溝に替わって、主柱が壁体を支持する構造物となってより強固な壁体を提供したものであろう。Ⅲ段階に少数出現する主柱化したものとⅣ段階に残存する壁溝の他は、一見したところ不連続に見える壁溝から主柱化したものへの移行は、案外とスムーズなものであったことを予感させる。壁柱・壁溝の変遷は、勝坂式～Ⅰ段階における壁溝の出現から、Ⅱ～Ⅲ段階での壁下構造の範型としての確立、Ⅲ段階以来顕著となる主柱の壁への接近と壁柱・壁溝への一体化による壁溝の消失（Ⅳ段階）の過程とまとめられる。　（小川）





第 6 図　壁下構造の形態（S＝1/150）と時間的推移

６．建て替え・拡張（第７図・第３表）

ここでは、集成資料187遺跡のうち、住居の構造を一定程度以上把握できる130遺跡・1093軒の住居を抽出し、その情報から住居の周溝に着目して、建て替え・拡張などの様相を捉えていきたい。本来は炉・柱穴・周溝・床面など住居各施設の具体的な要素が複合して変化していることを想定したうえで、住居の変遷を検討しなければならない。周溝の構築されない住居は、壁のみが位置を移動している可能性を含み、併せて炉や柱穴などの施設により建て替えが想定できる事例が認められる。また周溝が多数巡るものについては、その他の施設が複合して変化する事例も多い。また、複数住居の「重複」と「建て替え」の区別は、覆土・遺存状態や遺物などに基づいて判断する部分も大きく、平面形からの把握は困難である場合が認められる。したがって今回は集成された資料のうち周溝のみに限定し、壁面変化の事例についてその傾向を概観したい。

建て替えの回数は、原則として周溝の複数巡る条数に基づき分類した。総数270軒のうち、２条巡る１回は186軒（69％）で最も多く、次いで２回は65軒（24％）となる。３回は15軒（６％）４回・５回は合計４軒（約１％）と激減する傾向が把握できる。大地開戸19住（１回）は、東壁を基軸とし、その他３辺を移動するもので、炉・埋甕などもほぼ同程度の移動が認められる好例である。市ノ沢団地Ｃ区２住（２回）は、南東コーナー付近を起点とし、円形→方形→六角形と規模と形態の変化も認められる。一般に内側の周溝は、埋め戻しや掘削など床面の再構築によって分断または断続的に認められる場合が多い。上中丸22住（３回）は、炉の位置に顕著な変化は認められず、あくまで炉を起点としてほぼ同心的に変化するものである。柱穴配置の変遷も比較的良好に把握できるが、出入口付近の埋甕は認められない。３回以上の変化が認められる住居については、部分的・全体的問わず多数の建て替えにより結果的に同心円状を呈し、各施設の変化や柱穴配置などの把握が困難となっている。４回の建て替えは、当麻４住・中荻野稲荷木３住・尾崎31住があり、炉周辺の僅かな空間以外は周溝や柱穴が多数分布する。併せて各施設の具体的な変化や形態的な特徴などを把握することが困難になるが、形態・主軸方向・床面面積などの大きな変化を有し、画期が見いだせる。最大数は新戸８住の５回で、調査区外に展開する住居であるが周溝の具体的な変遷が報告されている。

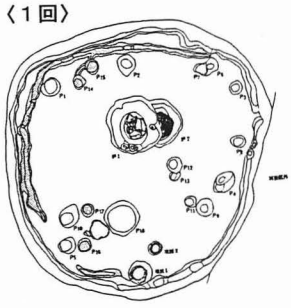
周溝の配置に基づく壁面の変化については、炉と出入口を結ぶ主軸線に基づき、Ａ「奥壁のみ」、Ｂ「出入口のみ」、Ｃ「側壁のみ」、Ｄ「奥壁と出入口」、Ｅ「奥壁と側壁」、Ｆ「出入口と側壁」、Ｇ「一部のみ」、Ｈ「壁全体」の８種に類型化した。各類型に分類した総数222軒についてその傾向をみると、Ｈ「壁全体」の変化が115軒（52％）と半数を占め他を圧倒する。次いでＦ「出入口と側壁」35軒・Ｂ「出入口のみ」20軒で、Ｆ・Ｂの合計55軒（25％）となり、出入口及びその付近に関する建て替えが顕著であると把握できる。Ａ「奥壁のみ」市ノ沢団地７住は、五角形を呈するが、頂点の柱穴を中心に壁が移動している。Ｂ「出入口のみ」市ノ沢団地13住は、短い周溝とピットが密集する事例を挙げた。その他に、埋甕などの要因も想定できるが、事例が少なく、数量的な傾向は見いだせない。Ｃ「側壁のみ」蟹ヶ沢１住は、両側壁が狭小に拡幅されるもので、床面の面積拡大が目的でないことも想定できる。その他市ノ沢団地19住など片側周溝のみの変化が確認できる事例も認められる。Ｅ「奥壁と側壁」、Ｆ「出入口と側壁」などは主軸線の僅かな変更による場合のものも含まれる。Ｇ「一部のみ」原東５住は、主軸の変化・入口施設の小規模移動・縮小などが想定できる。時期は、Ⅰ段階６軒・Ⅱ段階94軒・Ⅲ段階98軒で、Ⅳ段階４軒の事例は極めて少ない。

第３表　壁面変化の数　（天野）

Ａ奥壁のみ	Ｂ出入口のみ	Ｃ側壁のみ	Ｄ奥壁と出入口	Ｅ奥壁と側壁	Ｆ出入口と側壁	Ｇ一部のみ	Ｈ壁全体	合計
9(4％)	20(9％)	9(4％)	4(2％)	16(7％)	35(16％)	14(6％)	115(52％)	222(100％)

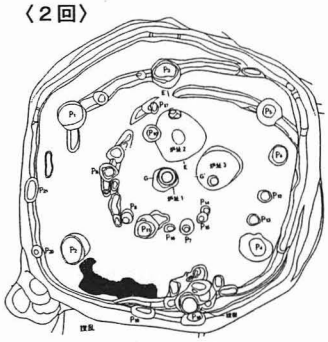
〔建て替え・拡張回数〕

〈１回〉



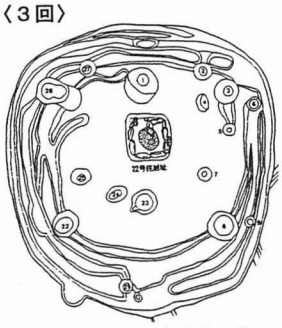
大地開戸19住

〈２回〉



市ノ沢団地Ｃ区２住

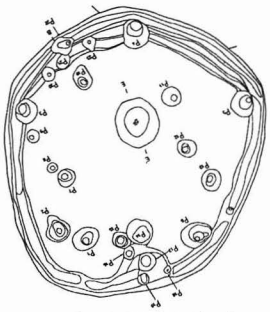
〈３回〉



上中丸22住

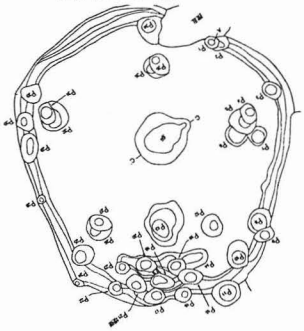
〔建て替え・拡張の類型〕

Ａ「奥壁のみ」



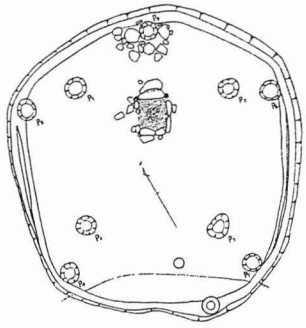
市ノ沢団地Ｄ区７住

Ｂ「出入口のみ」



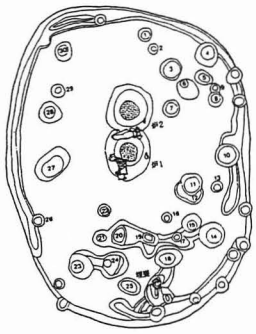
市ノ沢団地Ｂ区13住

Ｃ「側壁のみ」



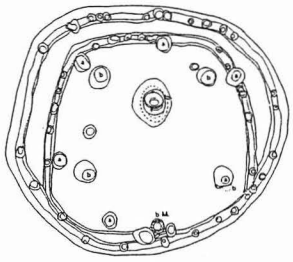
蟹ヶ沢１住

Ｄ「奥壁と出入口」



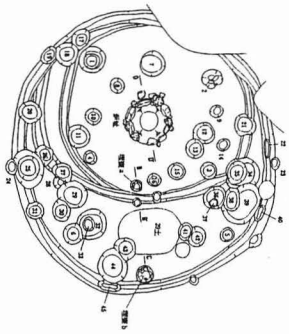
上中丸39住

Ｅ「奥壁と側壁」



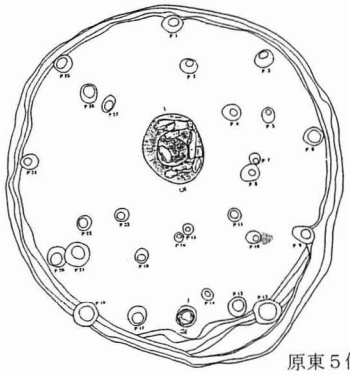
大熊仲町15住

Ｆ「出入口と側壁」



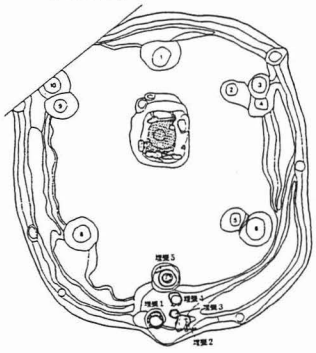
沼目・板戸第Ⅱ地点２住

Ｇ「一部のみ」



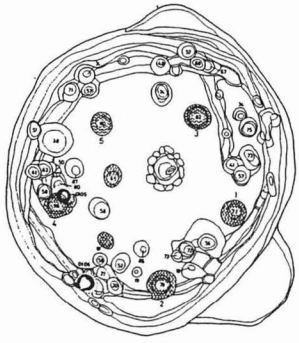
原東５住

Ｈ「壁全体」



上中丸50住

Ｈ「壁全体」



上白根おもて34住

第７図　住居址の建て替え・拡張の回数及び類型

７．炉址（第８図、第４表）

本項では、118遺跡1031基の炉址を対象にその形態を埋甕炉、石囲埋甕炉、石囲炉、地床炉に大別し、前年度提示した編年案（Ⅰ～Ⅳ段階）に基づいて所属する住居址の時期がある程度特定された658基について集計を行い、その比率・傾向等を求めた（第４表）。石囲炉は、炉石が抜去され構築時の状況が判然としないものが多く認められたため、それ以上の細分は避け、文中でおおよその傾向を示すにとどめた。また、炉床の外周にテラス状の掘り込みや小ピットが巡るなど炉石設置の痕跡を留めるものは石囲炉と推定し集計した。

Ⅰ段階　本段階は勝坂式の終末段階の土器と共伴する事例が多いが、今回、勝坂式のみが確認されている住居は集計から除外したため、該当する炉址は８遺跡17基と極めて少ない。形態は17基中15基とそのほとんどが埋甕炉（第８図１、２）であり、石囲埋甕炉、石囲炉（同３）はそれぞれ１基認められるに過ぎない。勝坂式期の後半段階（Ⅴ・Ⅵ段階）では石囲炉や石囲埋甕炉の比率が伸びる時期として捉えられており（2000『研究紀要』５）、今回の傾向が加曾利Ｅ式初現段階の特徴と言えるのか、集計数の少ない現状では判断し難い。

Ⅱ段階　本段階の炉址は55遺跡204基である。埋甕炉の比率は大きく下がり、他の形態が増加する。特に石囲炉の比率の伸びが著しい。ただし、この傾向は横浜・川崎市域と同市域外では異なり、前者では埋甕炉の比が未だ最大であるのに対し、後者ではその比は最も少なく、石囲炉の比率が他を圧倒する（第４表Ⅱ-１，２）。炉石の設置形態は円形、楕円形、長方形、方形等が認められるが、長方形を呈するもの（同６）が相対的に多い。炉石の設置方法も様々で、扁平な礫を寝かせるもの、斜めにするもの、立てるもの等が認められる。特に扁平の礫を寝かせて設置したものが後続段階と比べて多く、本段階の特徴のひとつに挙げられる（同７）。他に小～中形礫を円形配するもの（同８）が目に付く。石囲埋甕炉は炉石が炉体土器の外縁に沿って設置されているもの（同５）が多い。埋甕炉は前段階を踏襲し、円形や楕円形の掘り込みに胴部下半を欠いた土器を埋設されている（同４）。地床炉は炉石が抜去されたものと判別し難いものあるが認められる（同９）。

Ⅲ段階　本段階は69遺跡341基を抽出した。埋甕炉は姿を消し、石囲炉はその比率を更に伸ばし、その数は本段階炉址の2/3に及ぶ。前段階で捉えられた地域的な傾向差は認められない。形態は前段階と大きな変化は看取できないが平石を寝かすものは減少し、各辺に炉石を１個に立てるように設置した方形の石組みが増加する（同13）。また、検出例は少ないが、県北西部で石柱・石壇を伴う石囲炉（同12）が見つかっている。石囲埋甕炉は少ないが、その形状は基本的に前段階と同様である（同10）。便宜上同形態の範疇に含めたが、方形の石囲いに小形の土器を埋設されるものも認められた（同11）。地床炉（同14）は増加傾向にある。

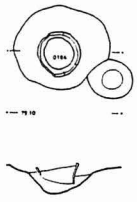
Ⅳ段階　資料数は42遺跡96基である。本段階から登場する柄鏡形（敷石）住居も含めて、石囲炉の比率は減少し、地床炉（同17）の比率がその分増加する傾向にある。埋甕炉、石囲埋甕炉も少ないが認められる。石囲炉は方形で小型のもの（同15）が多く見られ、炉内に礫が充満しているものも認められる（同16）。石囲埋甕炉は、Ⅱ段階に多く認められたタイプに加えて、長方形に組まれた石囲炉の炉床に底を有する小型土器が埋設されたものが見られる。前者とは土器の機能が異になると思われるが便宜上一括して集計した。（井澤）

第４表　炉址形態別一覧表

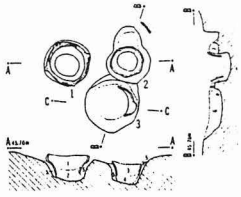
	埋甕炉	%	石囲埋甕炉	%	石囲炉	%	地床炉	%	不明等	%	計	%
Ⅰ	15	88%	1	6%	1	6%	0	0%	0	0%	17	1.6%
Ⅱ	38	19%	39	19%	88	43%	38	19%	1	0%	204	19.8%
Ⅱ－１	33	31%	28	26%	23	21%	23	21%	1	1%	108	10.5%
Ⅱ－２	5	5%	11	11%	65	68%	15	16%	0	0%	96	9.3%
Ⅲ	8	2%	5	1%	230	67%	92	27%	6	2%	341	33.1%
Ⅳ	3	3%	5	5%	42	44%	41	43%	5	5%	96	9.3%
不明	31	8%	11	3%	183	49%	136	36%	12	3%	373	36.2%
計	95	9%	61	6%	544	53%	307	30%	24	2%	1031	100.0%

※Ⅱ－１は横浜・川崎市域は、Ⅱ－２はそれ以外の地域の値を示している。

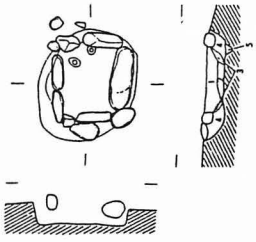
Ⅰ段階



1. 上白根おもて73住

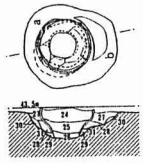


2. 山田大塚3住

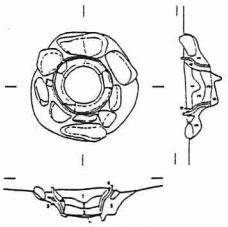


3. 上中丸40住

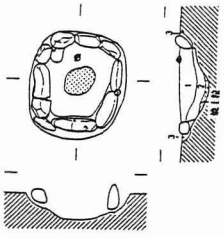
Ⅱ段階



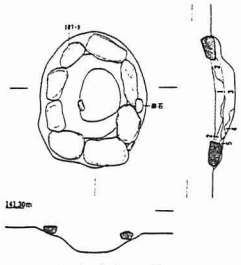
4. 大熊仲町 J118住



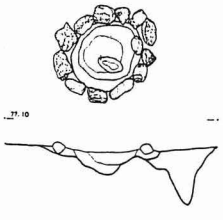
5. 下原25住



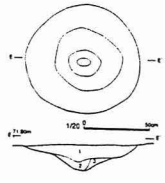
6. 川尻 J18住



7. 上中丸36住

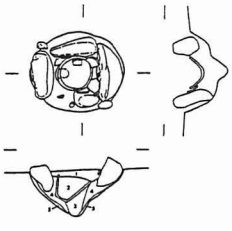


8. 上白根おもて34住

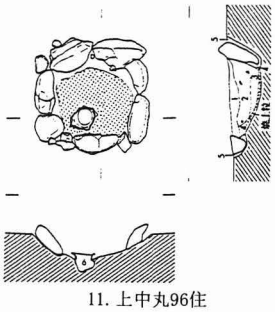


9. 市ノ沢団地 D17住

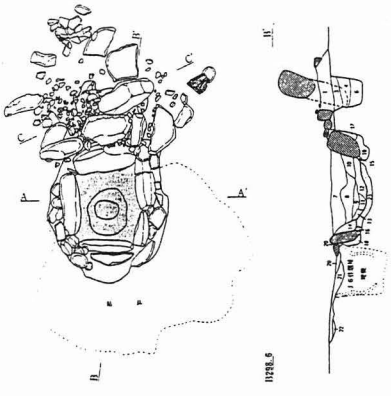
Ⅲ段階



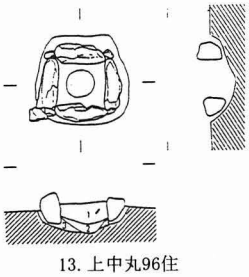
10. 下原1住



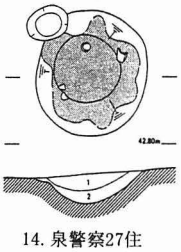
11. 上中丸96住



12. 大地開戸 J7住

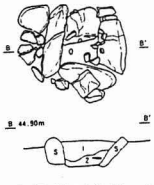


13. 上中丸96住

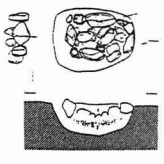


14. 泉警察27住

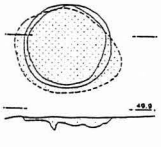
Ⅳ段階



15. 及川天台敷石住



16. あざみ野11住



17. 岡上丸山 J5住

第8図　段階毎の主な炉址形態（S＝1/60）

８．埋甕（第９図、第５表）

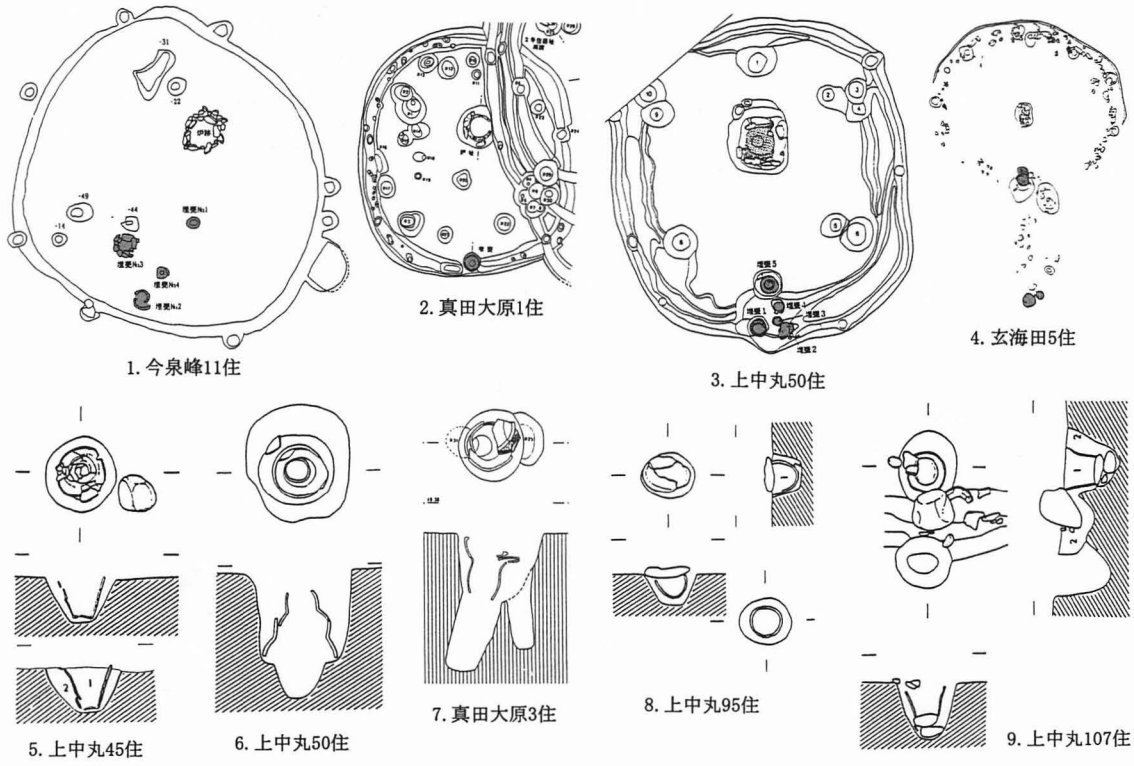
埋甕の数：埋甕をもつ住居址は報告書で確認できたもので539軒存在する。また埋甕数は748個ある。時期別に見るとⅠ段階にはなく、Ⅱ段階に出現し、Ⅲ段階に急増するようである。１軒の住居址内に埋設された埋甕の数を見ると、第５表のように埋設数は１ないし２個が普通であったと考えられる。

埋甕の位置：全段階通じて壁際（単なる壁際）・壁際の主軸線上、小張出、張出部というように壁際に埋設されることが多く、単なる床面上（第９図１）は少ない。Ⅱ・Ⅲ段階では壁際のうち約半数が壁際主軸線上（同２）または小張出（同３）に埋設され、Ⅳ段階では柄鏡形（敷石）住居址の出現と共に張出部（同４）に埋甕が埋設されるのが一般的となる。

埋甕の埋設状態：埋甕の埋設状態は正位（第９図５）が圧倒的に多く、逆位（同６）・斜位（同７）は少ない。埋設される土器は底部が抜けた深鉢形土器が一般的で、埋甕の上位に石蓋をしたもの（同８）、埋甕の下に石を敷いたもの（同９）、埋甕の脇に石を添えたもの（同９）も数例発見されている。（松田）

第５表　埋甕の出土住居址軒数・位置別出土数・出土状況別出土数

	埋甕出土点数別の住居址軒数								位置別の埋甕出土点数							出土状況別の埋甕点数			
	1個	2個	3個	4個	5個	6個	不明	合計	床面	壁際	壁際軸線	小張出	張出部	不明	合計	正位	逆位	斜位	不明
Ⅰ																			
Ⅱ	64	20	6	1				91	24	58	18	23		3	126	73	6	1	46
Ⅲ	182	66	15	3	1	1		268	80	140	52	67	2	41	382	234	23	20	105
Ⅳ	46	19	1	1			3	70	11	6	1	3	56	14	91	51	2	12	26
不明	72	29	5	1			3	110	25	47	17	40	5	15	149	87	3	8	51
合計	364	134	27	6	1	1	6	539	140	251	88	133	63	73	748	445	34	41	228



第９図　埋甕出土住居址（Ｓ＝1/150）・埋甕出土状況（Ｓ＝1/50）

9．敷石住居址（第10図、第６・７表）

時期　現在圧倒的多数はⅣ段階のものである。しかしⅢ段階に属する可能性があるものも数例ある。

分布　県東部は少なく、横浜市・川崎市で20軒程。多いのは県央・県西部で、相模原市の28軒を筆頭に、厚木市、平塚市、藤沢市、伊勢原市、座間市、秦野市、南足柄市、山北町、清川村、津久井町、城山町などであわせて50軒以上検出されている。

構造　現在までに報告書が刊行されて、図が提示されているものは72軒ある。ここではこれらを対象にして、その構造を概観してみる。なおこれ以外にも柄鏡形の無敷石竪穴住居址がある。

平面形態：72軒中、敷石あるいは掘り込みやピットによって柄鏡形をなすものは57軒ある。それ以外は遺存状態が悪かったり、全体が調査できていないものなどで、本来の平面形態は大かた柄鏡形をなすと言える。柄鏡形をなす57軒中、柄部のみのもの11軒を除いた46軒の主体部形態を見ると、円形のもの（第10図14）が25軒、楕円形のもの（同17）が10軒、半円形のものが３軒、方形・長方形のもの（同13）が８軒ある。円形を基調としつつも、方形化が進みつつある状況が見てとれる。

平面規模：主体部の規模を見ると長軸長２ｍ台が４例、３ｍ台が22例、４ｍ台が17例、５ｍ台は４例で、６ｍ以上のものは存在しない（第６表）。５ｍ以上は僅少で、主体が３～４ｍにあることは他の竪穴住居址に比べ小形と言える。また張出部の長さは2.0～2.4ｍが最も多く、1.5～1.9ｍがそれに次ぐ。張出部の幅は1.0～1.4ｍが最も多く、１ｍ未満のものも存在する。一方２ｍ以上のものは１例しかなく。幅狭と言える。

柱穴：主柱をもつものもあるが、壁際やや内側に壁柱穴を巡らしたもの、連結部に対ピットをもつものが多くなる。

炉址：石囲炉が大半である。埋甕炉、石囲埋甕炉、地床炉はわずかにあるだけである。

埋甕：埋甕があるものは41軒、ないものは31軒。しかし柄鏡形のプランをなす57軒中では37軒に埋甕が存在した。１軒の埋甕の個数は１個が24例と最も多く、２個が11例でそれに次ぐ。３個、４個のものも少しある。２個のものでは張出部先端と（張出部と主体部の）連結部に設置されることがほとんどで、１個のものは張出部先端のみまたは連結部のみに１個設置されることが普通である。

敷石：県内の敷石の石の配置を見ると、礫を壁柱穴や壁の内側に沿って中小の礫を配するもの（周礫タイプ）（第10図９～13）と板石を床に面状に敷いたもの（面状敷石タイプ）（同14～21）がある。このうち周礫タイプには石が連結部に限定されるもの（同13）もある。また石が少ないものは柄鏡形住居址に分類することもある。一方面状敷石タイプでは壁柱穴や壁の内側に沿って板石や棒状礫による縁石を配したもの（同14）や縁石に中小礫を伴うもの（同17･18）がある。また張出部や連結部に敷石が限定されるもの（同21）がある。地域的には、周礫タイプは横浜市・川崎市といった県東部に多く、面状敷石タイプは県央・県西部に多いと言える（第７表）。これは川の流れの緩やかな県東部では板石の入手が困難である事情も反映していると思われる。また周礫については住居使用時に住居の構造物として存在していたと見る説と住居廃絶後の祭祀時に配されたとする説がある。今回の集成によれば周礫は面状敷石タイプの縁石と配置位置が共通する上、面状敷石タイプの縁石にも周礫に使われるような中小礫を伴うもの（第10図17･18）があることから、住居の構造物としての可能性が高いと思われた。周礫はしばしば壁柱穴の上を覆ったり、床面よりわずかに浮いて存在するが、これは柱列間の何らかの構造物（土壇ないしは壁体）に伴っていたためとも考えられよう。

掘り込み：近年の発掘では掘り込みを伴うものが多く発見されてきている。それらの掘り込みを見ると、床面より上からの掘り込み（床上掘り込み）のみをもつもの、床上掘り込みと共に床下の掘り込み（掘り方）

をもつもの、掘り方のみもつものがある。床上掘り込みは深さ10～30cmが主で、一般的に浅いものが多い。一般に周礫タイプはたいてい床上掘り込みがあり（第10図10～12）、掘り方をもつもの（同9）は少ない一方、面状敷石タイプは床上掘り込みをもつもの（同15）もあるが、掘り方をもつもの（同16～20）が多い傾向がある。面状敷石タイプに伴う掘り方は縁石や板石を安定させるため、敷石敷設に先立ち、浅い掘り込みが必要であったためと考えられる。また掘り込みの中には敷石範囲よりも広く掘り込まれた例がある（同20）。敷石の範囲外に柱穴がある例（同15･16）も存在することから、敷石住居址の空間は敷石部よりもずっと広いものが存在した可能性が考えられる。

敷石と張出の出現：敷石住居址盛行以前のⅢ段階には住居址に石を配した例が存在する。奥壁の立石（石柱）（同1）や円形石囲（同３）、石囲炉と奥壁の立石の間の敷石（同２）は複数例存在し、Ⅲ段階における定型的かつ規則的配石と考えてよいだろう。また床面に不規則ながら石を置いた例が当麻遺跡（同８）や上中丸遺跡などで数多く見つかっている。これらはこの時期盛行する石囲炉とともに主体部における敷石行為の発展への関与が考えられる。一方小張出の埋甕に添うように立石が配された例（同４）は敷石住居址の張出部の配石と関係があろう。Ⅲ段階の竪穴住居址の小張出については、敷石住居址の張出部と同様、しばしば埋甕をもつことから、敷石住居址の張出部へ発展したことが指摘されている（山本1995）。短い張出と部分的な配石をもつ上中丸遺跡95号住居址例（同５）（Ⅲ段階終末）は小張出に埋甕や立石をもつ住居址の発展例と考えられ、壁際に石を配した宮ヶ瀬№２遺跡の例（同７）や炉から入口部にかけて敷石をもつ東開戸遺跡の例（同６）同様、敷石住居址の初源と評価できよう。このようにⅢ段階の小張出をもつ竪穴住居址が張出を伸長させ、敷石行為を拡大して敷石住居址へ発展したと考えられるが、その間の変遷には未だヒアタスがある。今後の資料の増加が待たれるところである。（松田）

引用・参考文献

秋田かな子　1991「柄鏡形住居研究の視点」『東海大学校地内遺跡調査団報告』２
石井　寛　1998「柄鏡形居住址・敷石住居址の成立と展開に関する一考案」『縄文時代』９　縄文時代文化研究会
長岡　文紀　1996『謎の敷石住居』　神奈川県立埋蔵文化財センター
山本　暉久　1995「柄鏡形（敷石）住居成立期の再検討」『古代探叢』Ⅳ　早稲田大学出版部

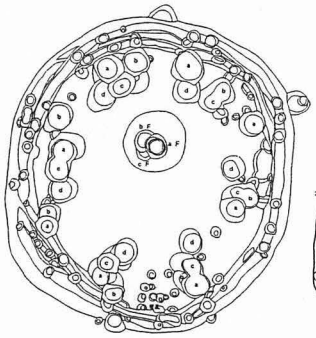
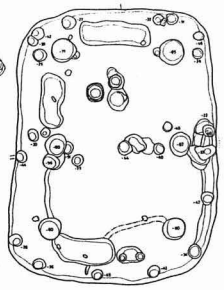
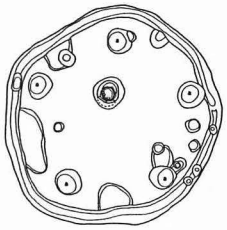
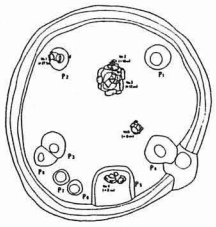
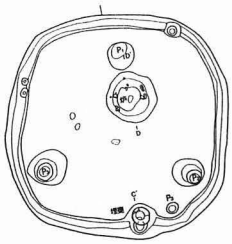
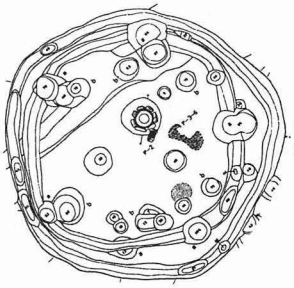
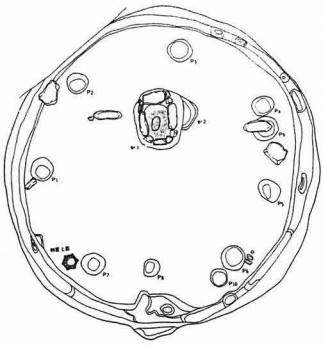
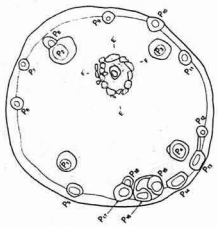
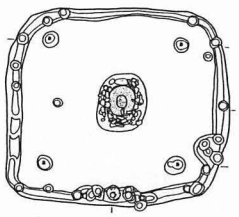
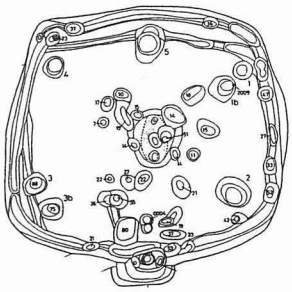
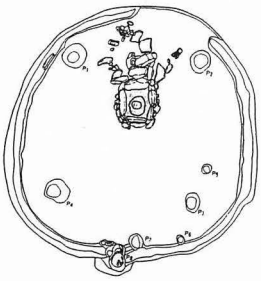
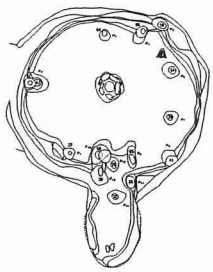
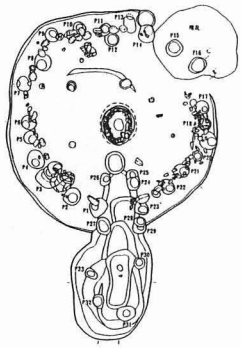
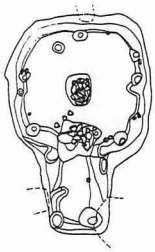
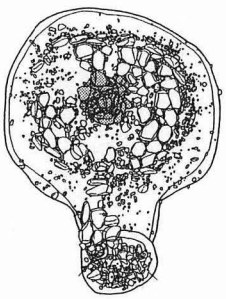
第６表　敷石住居址の長軸長・張出部長・張出部幅

	0.5m～	1.0m～	1.5m～	2.0m～	2.5m～	3.0m～	3.5m～	4.0m～	4.5m～	5.0m～	5.5m～	計測不能
主体部長軸長					4	10	12	10	7	4		24
張出部長		7	12	20	4							29
張出部幅	9	25	7		1							30

第７表　代表的な敷石住居址の分類

	床上掘り込みのみあり	床上掘り込みと掘り方あり	掘り方のみあり
周礫タイプ	横浜市赤田№1遺跡JT2 横浜市桜並遺跡J10号住居址 横浜市華厳台南遺跡16号住居址 横浜市玄海田遺跡5号住居址	横浜市市ノ沢団地遺跡C区1号敷石住居址	
面状敷石タイプ	相模原市新戸遺跡J2号敷石住居址	相模原市田名花ヶ谷遺跡13号敷石住居址 相模原市田名花ヶ谷遺跡40号敷石住居址 清川村北原遺跡J1敷石住居址	相模原市田名花ヶ谷遺跡34号敷石住居址 相模原市新戸遺跡J1号敷石住居址 相模原市新戸遺跡J4号敷石住居址 座間市平和坂遺跡5号住居址

第10図　敷石住居址および関連資料（S＝1/150）

	県東部	県央部・県西部
Ⅰ段階	 1. 大熊仲町J113住  2. 山田大塚3住  3. 大熊仲町J41住	
Ⅱ段階	 4. 常磐台1住  5. 市ノ沢団地C9住  6. 大口台28住  7. 大地開戸J4住	
Ⅲ段階	 8. 市ノ沢団地D16住  9. 大熊仲町J79住  10. 稲ヶ原A17住  11. 大地開戸J7住	
Ⅳ段階	 12. 猿田住  13. 桜並J10住  14. あざみ野J11住  15. 田名花ヶ谷戸34敷住	

第11図　加曽利Ｅ式期住居址集成図（Ｓ＝1/150）

宮ノ台式土器の研究（2）

弥生時代研究プロジェクトチーム

はじめに

昨年度は、これまでの宮ノ台式土器研究の概要をまとめ、不十分ながらも現状と課題の整理を行った。今年度は前年度の課題整理に基づいて検討を進めるべきところであるが、紙幅の都合もあり、神奈川県内の宮ノ台式土器出土遺跡分布図および遺跡文献一覧表の掲載に留まることとなった。

遺跡文献一覧表は、村上が作成したものをベースとして当プロジェクトメンバーで分担して追加・削除を行い、遺跡分布図は、この一覧表を元に櫻井が原図を作成した。一覧表、分布図ともに最終的な確認と仕上げを飯塚と渡辺が行った。また、遺跡分布図に対応して、神奈川県内の「宮ノ台式」期（弥生中期後半）遺跡分布の傾向について渡辺が概要をまとめた。（池田）

宮ノ台式土器出土遺跡の分布と傾向

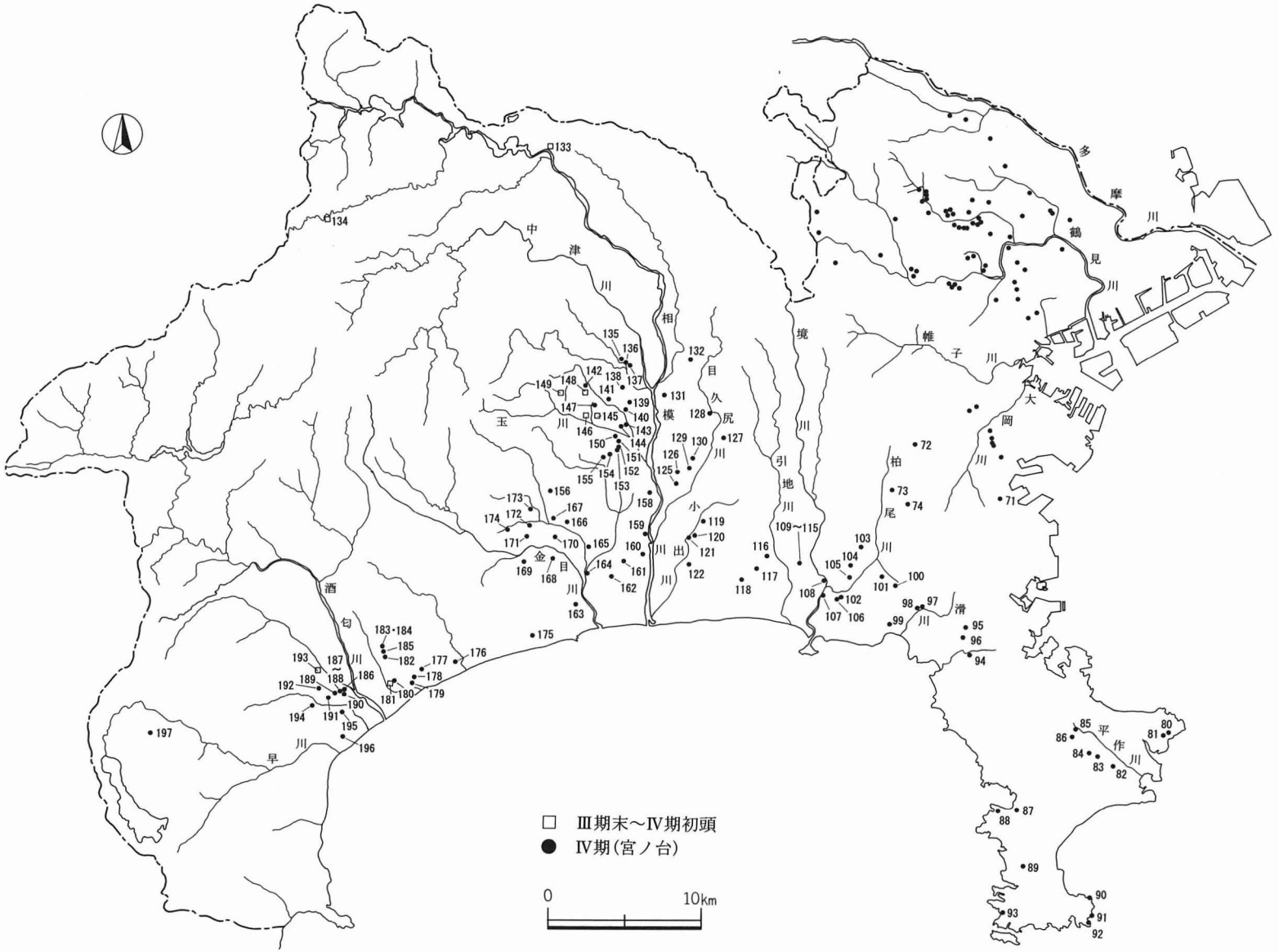
神奈川県域の宮ノ台式土器出土遺跡の分布　昭和4年、赤星直忠は三浦半島における弥生時代遺跡の踏査を行い、三浦市初声の道路脇土手断面に弥生時代の竪穴住居址8軒を確認した。これらの竪穴からは宮ノ台式土器の壺・甕の破片が出土している（赤星1930）。この三浦市赤坂遺跡の発見に前後して、本県における宮ノ台式土器の発見例が相次いで報告され（註1）、現在では約200例程度の出土が確認されている（第1表）。

第１図には県内における宮ノ台式土器出土例の位置と分布を示した。ここで取り扱う「各地点」には、発掘調査によって出土した資料だけではなく、試掘調査や表採による分布調査のデータの他、採集品として報告されたものを含んでいる（註２）。図中の各ドット一点は一遺跡又は一地点を示すが、土器の出土量は反映していない。また、隣接地点で複数の出土例があり、なおかつ明らかに同一遺跡のものと考えられる場合はこれを一括し、遺跡分布の実態と極力かけ離れないよう努めた。出土地点分布の濃淡は遺跡の集中を示すが、同規模のドットの集中が同規模の遺物の濃密度を反映している訳ではない点をお断りしておく。

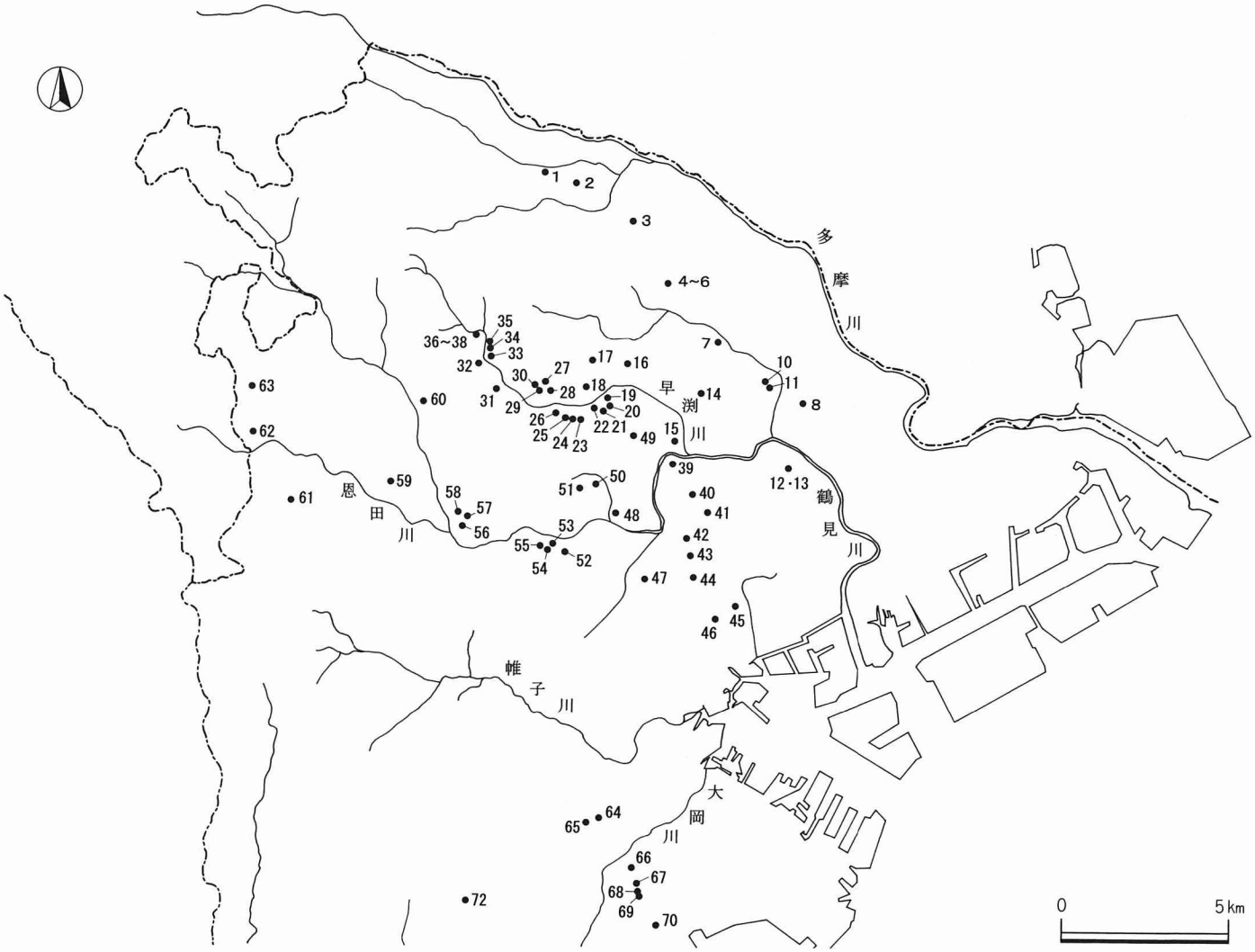
第２図は、横浜市域北部を中心とした該期の遺跡分布である。鶴見川・早渕川流域に全体の４割以上が集中し、その中には大塚・歳勝土（27・28）、折本西原（51）などの大規模集落が含まれる。このいわゆる下末吉台地での極端な集落遺跡の集中は、関東地方全域を通じても類例のない特異な状況である。

県内ではこの他、鎌倉市内の大倉幕府周辺遺跡群や藤沢市域の引地川・柏尾川流域の稲荷台地遺跡群周辺、三浦半島の平作川周辺、県央地域の厚木市内では相模川の支流である恩曽川・玉川中流域、平塚市域の花水川（金目川）流域、そして県西部小田原市域では酒匂川下流域とその東側から国府津近辺まで広がる低地帯などに分布の集中が認められる。これらの地域には、一部で大規模集落の存在が予想されている地点も存在するものの、ほとんどの場合は断片的な調査例や採集資料等を通じて遺跡の全体像を予想せざるを得ないのが実状である。

遺跡分布の傾向と特徴　当研究プロジェクトチームでは、以前に弥生時代の竪穴住居址の検出数と分布状況の分析から、県内弥生時代集落の動態について言及してきた。宮ノ台期の集落数は前段階（いわゆる須和田式土器の時期）よりも爆発的に増加し、主として台地・丘陵上に展開する傾向がみられることは集成デー



第１図　神奈川県における宮ノ台式土器出土地点の分布［四十万分の一］



第2図　鶴見川・早渕川流域における宮ノ台式土器出土地点の分布［二十万分の一］

タからも明白であった。こうした急激な人口増加の要因として外来集団の関与を想定した上で、宮ノ台期の社会が形成される過程において、海岸線や河川を介して集団の動きが認められることを指摘した（弥生時代研究プロジェクトチーム1994）。その点は今回の検討においても、集落遺跡以外の遺物出土地点もまた河川流域を中心に分布することから追認できる。また低湿地・砂丘上の集落遺跡の希薄さは従前より指摘されてきたことではあるが、近年の発掘調査の成果の一つとして、こうした低地遺跡における宮ノ台式土器の出土例の増加が挙げられる。同様に山間部でも前段階から宮ノ台期への移行期の資料が僅かに出土しており、遺跡分布と立地の時間的な変遷については新たに検討しなおす段階にきているのかもしれない。

出土した土器の様相を県域全体で見た場合、前回「宮ノ台式土器の研究（１）」で提示した変遷段階のうち最も古い様相のもの（Ⅰ段階）は相模川流域でしか確認されず、県域全体に分布するようになるのはⅡ段階以降のことである。Ⅲ段階以降は分布の比率が東京湾沿岸域に偏るようになる点は従来の見解通りだが、そうした認識で今回の出土分布一覧のデータ作成のための資料調査をしていたところ、Ⅱ段階に含まれる資料が予想以上に県内各所に散見されることがわかった。今後は各遺跡における実際の出土状況を検証した上で、土器様相の時間的な変遷についての再検討へと移行するべきであろう。（渡辺）

註

1．こうした宮ノ台式土器設定以前の宮ノ台式土器をめぐる経緯については、伊丹徹が型式設定前後の型式概念の推移を整理した際にまとめている（伊丹1994）。

2．宮ノ台式土器の県内出土データの集成にあたっては、発掘調査報告書及び概報、図録類の他、県史・市町史、資料集成図録等に掲載されている実測図・写真・記述に基づいて集計した。なお、表に掲載したデータのうち、遺跡の所在地が明確でないものについては第１図・第２図に含め得なかった。

参考文献

赤星直忠　1930　「三浦半島における弥生式遺跡の分布」『考古学』第１巻第５・６合併号
1977　「Ⅱ－１　弥生時代集落址としての赤坂遺跡の発見」『三浦市赤坂遺跡』三浦市教育委員会
安藤広道　1991　「弥生時代集落群の動態－横浜市鶴見川・早渕川流域の弥生時代集落群を中心に－」『調査研究集録』第８冊　横浜市埋蔵文化財センター
1998　「相模川流域における宮ノ台期の集落－その時空間的展開の素描－」『考古論叢神奈河』第７集　神奈川県考古学会
伊丹　徹　1994　「宮ノ台式土器研究前史」『西相模考古』第３号　西相模考古学研究会
弥生時代研究プロジェクトチーム　1994　「弥生時代竪穴住居の基礎的研究（１）」『神奈川の考古学の諸問題』かながわの考古学第４集　神奈川県立埋蔵文化財センター

第1表　宮ノ台式土器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	編集・発行組織（報文執筆者）	発行年	報文名・書名
川崎市				
1	長尾台北	長尾台北遺跡発掘調査団	1997	『川崎市多摩区長尾台北遺跡発掘調査報告書』
2	緑ヶ丘霊園	川崎市緑ケ丘霊園遺跡発掘調査団	1995	『川崎市緑ケ丘霊園遺跡第２地点・第３地点』
3	梶ヶ谷神明社上	高津図書館友の会郷土史研究部	1970	『川崎市梶ヶ谷神明社上遺跡発掘調査報告』高津郷土史料集第七集
4	千年伊勢山台	川崎市教育委員会	1983	「川崎市高津区千年伊勢山台遺跡発掘調査報告書」『川崎市文化財調査集録第十九集』
5	千年伊勢山台北	千年伊勢山台北遺跡発掘調査団	2000	『千年伊勢山台北遺跡発掘調査報告書』
6	伊勢山台東	川崎市教育委員会	1996	「川崎市高津区伊勢山台東遺跡発掘調査報告書」『川崎市文化財調査集録第32集』
7	井田伊勢台	日本大学文理学部史学研究室	1978	「川崎市中原区井田伊勢台遺跡遺跡発掘調査報告書」『川崎市高津区平風久保遺跡発掘調査報告書　川崎市中原区井田伊勢台遺跡遺跡発掘調査報告書』日本大学文理学部史学研究室文化財発掘調査報告第２・３集
8	加瀬台古墳群	川崎市市民ミュージアム	1997	『加瀬台古墳群の研究Ⅱ－加瀬台９号墳の発掘調査報告書－』川崎市市民ミュージアム考古学叢書３
9	南加瀬貝塚	（杉原荘介）	1968	「南関東地方」『弥生式土器集成　本編２』
横浜市				
10	日吉台	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』
11	日吉町	神奈川県立博物館	1969	『神奈川県考古資料集成　1　弥生式土器』
12	梶山	神奈川県立博物館	1968	「梶山遺跡（１）」『神奈川県立博物館発掘調査報告書１』
	〃	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1972	「横浜市鶴見区駒岡遺跡群調査報告」『昭和46年度　横浜市埋蔵文化財調査報告書』
13	梶山北	梶山北遺跡発掘調査団	1985	『横浜市梶山北遺跡発掘調査報告書』
14	森戸原	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1972	「港北区森戸原遺跡調査概報」『昭和46年度　横浜市埋蔵文化財調査報告書』
15	諏訪下北	諏訪下北遺跡発掘調査団	1990	『横浜市港北区諏訪下北遺跡発掘調査報告書』
16	道中坂上	横浜市埋蔵文化財センター	1990	「道中坂上遺跡」『全遺跡調査概要』
17	Ｂ８	横浜市埋蔵文化財センター	1990	「Ｂ８遺跡」『全遺跡調査概要』
18	鵜之目原	（伊藤　郭）	1984	「港北の弥生式土器（Ⅱ）」『調査研究集録　第５冊』
19	権田原	（鈴木重信）	1987	「権田原遺跡（ル８・９）の調査《１》」『港北のむかし』84
20	北川貝塚南	（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター	1997	「第四編　北川貝塚南遺跡」『畳屋の上遺跡・西谷戸の上遺跡・北川貝塚南遺跡』
21	新吉田十三塚	横浜市埋蔵文化財センター	1990	「新吉田十三塚遺跡」『全遺跡調査概要』
22	矢東	横浜市埋蔵文化財センター	1990	「矢東遺跡」『全遺跡調査概要』
23	勝田町	（安藤広道）	1990	「横浜市港北区勝田町出土の弥生土器」『利根川』11
24	狭間根	横浜市埋蔵文化財センター	1990	「狭間根遺跡」『全遺跡調査概要』
25	勝田原	横浜市埋蔵文化財センター	1990	「勝田原遺跡」『全遺跡調査概要』
26	綱崎山	横浜市埋蔵文化財センター	1990	「綱崎山遺跡」『全遺跡調査概要』
27	大塚	横浜市埋蔵文化財センター	1991	『大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ＸⅡ
	〃	（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター	1994	『大塚遺跡Ⅱ』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ＸⅤ
28	歳勝土	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1975	「Ⅰ．歳勝土（Ｃ７・６）遺跡」『歳勝土遺跡』港北ニュータウン地域埋蔵文化財調査報告Ⅴ
29	歳勝土南（C15）	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1975	「Ⅲ．C15遺跡」『歳勝土遺跡』港北ニュータウン地域埋蔵文化財調査報告Ⅴ
	〃	横浜市埋蔵文化財センター	1990	「歳勝土南遺跡」『全遺跡調査概要』
30	大棚杉山神社	横浜市埋蔵文化財センター	1990	「大棚杉山神社遺跡」『全遺跡調査概要』
31	境田	（伊藤　郭・坂本　彰）	1979	「境田遺跡の調査」『調査研究集録』第４冊

番号	遺跡名	編集・発行組織（報文執筆者）	発行年	報文名・書名
32	矢崎山	横浜市埋蔵文化財センター	1990	「矢崎山遺跡」『全遺跡調査概要』
33	八幡山	横浜市埋蔵文化財センター	2002	「八幡山遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告31
34	鍛冶山	（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター	1998	『鍛冶山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告24
35	老馬	（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター	1996	『老馬遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告21
36	観福寺裏	日本窯業史研究所	1986	『観福寺裏遺跡』日本窯業史研究所報告第18冊
37	観福寺北	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1989	「観福寺北遺跡」『観福寺北遺跡・新羽貝塚発掘調査報告』
38	関耕地	観福寺北遺跡調査団	1997	『横浜市観福寺北遺跡群　関耕地遺跡発掘調査報告書』
39	牢尻台	（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター	1999	『牢尻台遺跡発掘調査報告』
40	太尾	（八幡一郎）	1930	「武蔵国太尾発見の遺物」『考古学』１－５・６
41	磯部山	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』
42	菊名・羽黒	菊名・羽黒遺跡調査団	1985	『菊名・羽黒遺跡』
43	表谷戸	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』
44	西富士塚	（杉原荘介）	1968	「南関東地方」『弥生式土器集成　本編２』
45	大口台	横浜市埋蔵文化財センター	1992	『大口台遺跡発掘調査報告書』
46	大口坂	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』
47	山王山	神奈川県立埋蔵文化財センター	1985	『山王山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告８
48	新羽大竹	神奈川県教育委員会	1980	『新羽大竹遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告17
49	宮ノ原	横浜市教育委員会	1984	『昭和５８年度文化財年報』
50	東原	神奈川県立博物館	1969	『神奈川県考古資料集成　１　弥生式土器』
51	折本西原	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1980	『折本西原遺跡』
	〃	折本西原遺跡調査団	1988	『折本西原遺跡－Ⅰ』
52	小机町・住吉神社	相武考古学研究所	1987	『横浜市港北区小机町・住吉神社遺跡』
53	宿根東	横浜市教育委員会	1994	『平成６年度文化財年報』
54	宿根北	宿根北遺跡発掘調査団	1997	『宿根北遺跡発掘調査報告書』
55	宿根西	宿根西遺跡発掘調査団	1999	『横浜市緑区宿根西遺跡発掘調査報告書』
56	宮原	佐江戸遺跡調査会	1976	『宮原　横浜市緑区佐江戸町における彌生・土師集落址の調査（下）』
57	清水場	佐江戸遺跡調査会	1971	『清水場　横浜市緑区佐江戸町における彌生・土師集落址の調査（上）』
58	能見堂	（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター	1997	『能見堂遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告22
59	藤林	日本窯業史研究所	1999	『藤林遺跡』
60	朝光寺原	横浜市域北部埋蔵文化財調査委員会	1968	「朝光寺原Ａ地区遺跡第１次発掘調査略報」『昭和42年度　横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書(経過概報)』
	〃	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1968	「朝光寺原遺跡Ｃ地区調査概報」『昭和四43年度　横浜市埋蔵文化財調査報告書』
61	住撰	（財）かながわ考古学財団	1996	『長津田遺跡群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告12
62	堀之内ｂ	横浜市教育委員会	1985	『昭和59年度文化財年報』
63	受地だいやま	奈良地区遺跡調査団	1986	『奈良地区遺跡群Ⅰ』
64	高速２号線	横浜市道高速２号線埋蔵文化財発掘調査団	1983	「No.６遺跡－Ⅲ」『横浜市道高速２号線埋蔵文化財発掘調査報告書　No.６遺跡－Ⅲ　No.９遺跡－Ⅱ』

番号	遺跡名	編集・発行組織（報文執筆者）	発行年	報文名・書名
65	東台	（杉原荘介）	1968	「南関東地方」『弥生式土器集成　本編２』
66	成美学園	（小宮まゆみ）	1990	『私たちの成美学園遺跡』
67	竹の橋貝塚	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』
68	三殿台	横浜市教育委員会	1965	『三殿台』
69	三殿台南東斜面	横浜市教育委員会	1992	「三殿台南東斜面遺跡」『平成３年度　文化財年報（埋蔵文化財その10）』
70	峯	峯遺跡発掘調査団	1986	『横浜市磯子区峯遺跡群発掘調査報告書』
71	東漸寺	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』
72	そとごう	そとごう遺跡調査会	1971	『そとごう遺跡調査概報』
73	上倉田原	横浜市上倉田原遺跡調査団	1983	『上倉田原遺跡』
74	上倉田	明治学院大学上倉田遺跡調査団	1982	『横浜市上倉田遺跡』
75	上台	（杉原荘介）	1968	「南関東地方」『弥生式土器集成　本編２』
76	表谷	神奈川県立博物館	1969	『神奈川県考古資料集成　１　弥生式土器』
77	日吉本町	神奈川県立博物館	1969	『神奈川県考古資料集成　１　弥生式土器』
78	池部町	（杉原荘介）	1968	「南関東地方」『弥生式土器集成　本編２』
79	谷津田原	（杉原荘介）	1968	「南関東地方」『弥生式土器集成　本編２』
横須賀市				
80	小荷谷	横須賀市教育委員会	1994	『小荷谷遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書第３集
81	鴨居上の台	横須賀市教育委員会	1981	『鴨居上の台遺跡』横須賀市文化財調査報告書第８集
82	茅山貝塚	横須賀市教育委員会	1991	『茅山貝塚』横須賀市文化財調査報告書第23集
83	佐原城跡	（財）かながわ考古学財団	2002	『佐原城跡遺跡』かながわ考古学財団調査報告130
84	佐原泉	泉遺跡調査団	1989	『佐原泉遺跡』
85	ひる畑	（杉原荘介）	1968	「南関東地方」『弥生式土器集成　本編２』
	〃	（浅川利一・河合英夫）	1987	「横須賀市・ひる畑遺跡の調査」『第11回　神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』
86	米の台	米の台遺跡発掘調査団	1998	『米の台遺跡』
87	大木根東	大木根東遺跡調査団	1992	『大木根東遺跡』
88	小舞原	横須賀市教育委員会	1982	『長井町内原遺跡』横須賀市文化財調査報告書第９集
三浦市				
89	赤坂	赤坂遺跡調査団	1977	『三浦市赤坂遺跡』
	〃	赤坂遺跡調査団	1992	『赤坂遺跡－第３次調査－』
	〃	三浦市教育委員会	1994	『赤坂遺跡』三浦市埋蔵文化財調査報告書第３集
	〃	（岡本　勇）	1967	「三浦市赤坂遺跡の調査」『ムゼイオン』13
	〃	赤坂遺跡調査団	2000	『赤坂遺跡－第19次調査地点の調査報告書－』
	〃	（中村　勉）	1993	「三浦市赤坂遺跡第８・９次調査概要」『第１回三浦半島地区遺跡調査発表会　発表要旨』
	〃	（中村　勉・諸橋千鶴子）	1994	「赤坂遺跡第10次調査概報、赤坂遺跡第１１次調査概報」『第２回三浦半島地区遺跡調査発表会　発表要旨』
	〃	三浦市教育委員会	2001	『赤坂遺跡－個人専用住宅新築工事に伴う第18次調査地点の発掘調査－』三浦市埋蔵文化財調査報告書第６集
	〃	赤坂遺跡調査団・三浦市教育委員会	2002	『赤坂遺跡－第９次調査地点の調査報告－』三浦市埋蔵文化財調査報告書第７集
90	雨崎洞穴	（赤星直忠）	1967	「雨崎洞穴調査概報」『日本考古学年報』20
91	大浦山洞穴	三浦市教育委員会	1997	『大浦山洞穴』三浦市埋蔵文化財調査報告書第４集
92	間口洞穴	神奈川県立博物館	1973	『間口洞窟遺跡』神奈川県立博物館発掘調査報告書第７号

番号	遺跡名	編集・発行組織（報文執筆者）	発行年	報文名・書名
92	間口洞穴	神奈川県立博物館	1974	『間口洞窟遺跡（２）』神奈川県立博物館発掘調査報告書第８号
	〃	神奈川県立博物館	1975	『間口洞窟遺跡（３）』神奈川県立博物館発掘調査報告書第９号
93	海外洞穴	海外洞穴遺跡調査団	1984	「三浦市海外海蝕洞穴遺跡の調査」『第８回　神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』
逗子市				
94	持田	（赤星直忠）	1974	「３　持田弥生・土師遺跡」『逗子市文化財調査報告書第五集』
	〃	持田遺跡調査団	1975	「持田遺跡発掘調査報告（本文篇）」『逗子市文化財調査報告書第六集』
95	池子	（財）かながわ考古学財団	1996	『池子遺跡群Ⅲ　№１－Ｃ点』かながわ考古学財団調査報告11
	〃	（財）かながわ考古学財団	1997	「第３編　№.７地点西地区」『池子遺跡群Ⅳ』かながわ考古学財団調査報告26
	〃	（財）かながわ考古学財団	1997	「№８地点」『池子遺跡群Ⅴ』かながわ考古学財団調査報告27
	〃	（財）かながわ考古学財団	1999	「第１編　№１－Ｅ地点」『池子遺跡群Ⅶ』かながわ考古学財団調査報告43
	〃	（財）かながわ考古学財団	1999	『池子遺跡群Ⅹ　№１－Ａ地点』かながわ考古学財団調査報告46
	〃	神奈川県立埋蔵文化財センター	1994	「第３編　池子遺跡群№１－Ｂ地点」『池子遺跡群Ⅰ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告27
96	池子桟敷戸	東国歴史考古学研究所	2000	『池子桟敷戸遺跡（逗子市№100）』東国歴史考古学研究所調査研究報告第26集
鎌倉市				
97	横小路周辺	鎌倉市教育委員会	1998	「横小路周辺遺跡（№259）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14（第２分冊）』
98	大倉南御門	鎌倉市教育委員会	1998	「大倉幕府周辺遺跡群（№49）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14（第２分冊）』
	〃	大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団	1999	『大倉幕府周辺遺跡群』
	〃	（及川良彦）大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団	1990	「参考資料　大倉南御門遺跡（Ｃ地点）出土の弥生土器」『大倉幕府周辺遺跡群』
	〃	（河野眞知郎）	1981	「鎌倉市雪ノ下・南御門遺跡」『第５回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』
99	伝安達泰盛邸跡	（菊川英政）鎌倉考古学研究所	1992	「諸戸邸内遺跡出土の土器概要」『鎌倉考古』22
100	台山藤源治	台山藤源治遺跡発掘調査団	1985	『台山藤源治遺跡』
101	水道山戸ヶ崎	（及川良彦）青山考古学会	1987	「弥生土器の移動と地域性」『青山考古』５
102	手広八反目	手広八反目遺跡発掘調査団	1984	『手広八反目遺跡発掘調査報告書』
103	大船山居	鎌倉市教育委員会	1967	『鎌倉市大船山居遺跡発掘調査報告』
藤沢市				
104	二伝寺砦	東国歴史考古学研究所	1999	『二伝寺砦（藤沢市№215）遺跡』東国歴史考古学研究所調査研究報告第21集
105	柄沢十二天	藤沢市教育委員会	1969	「藤沢市柄沢十二天遺跡調査略報」『藤沢市文化財調査報告書第五集』
106	川名清水	東レ基礎研究所・清水遺跡発掘調査団	2000	『藤沢市川名清水遺跡発掘調査報告書（東レ基礎研究所内）』
107	大源太	大源太遺跡発掘調査団	1997	『片瀬大源太遺跡発掘調査報告書（ミネベア藤沢製作所内）』
108	若尾山	藤沢市立大道小学校内遺跡埋蔵文化財発掘調査団	1998	『若尾山（藤沢市№36）遺跡－藤沢市立大道小学校内地点－発掘調査報告書』東国歴史考古学研究所調査研究報告第16集
109	稲荷台地Ｕ地点	藤沢市教育委員会	1978	「稲荷台地Ｕ地点遺跡調査略報」『藤沢市文化財調査報告書第十三集』
110	稲荷台地Ｍ地点	藤沢市教育委員会	1965	「稲荷台地遺跡調査報告」『藤沢市文化財調査報告書第二集』
111	石名坂	石名坂遺跡発掘調査団	1979	『石名坂遺跡』
112	№61	藤沢市教育委員会	1997	「№61遺跡」『藤沢市文化財調査報告書第32集』
113	伊勢山	藤沢市史編さん委員会	1970	「18　伊勢山遺跡」『藤沢市史　第一巻』
114	稲荷引地脇	藤沢市史編さん委員会	1970	「20　稲荷引地脇遺跡」『藤沢市史　第一巻』
115	善行唐池	（馬目順一・原　信之）	1963	「神奈川県藤沢市発見の弥生式土器」『考古学雑誌』48－４
116	大庭築山	藤沢市教育委員会	1981	「大庭築山遺跡調査概報」『藤沢市文化財調査報告書第十六集』
	〃	藤沢市史編さん委員会	1970	「21　大庭築山遺跡」『藤沢市史』第一巻

番号	遺跡名	編集・発行組織（報文執筆者）	発行年	報文名・書名
茅ヶ崎市				
117	折戸	新湘南国道埋蔵文化財調査会	1985	「折戸遺跡－新湘南国道№１地点－」『新湘南国道埋蔵文化財調査報告』
118	小和田・宿	（冨永富士雄）	1997	「小和田・宿遺跡の調査」『第７回茅ヶ崎市遺跡調査発表会』
119	臼久保Ａ	（財）かながわ考古学財団	1999	『臼久保遺跡』かながわ考古学財団調査報告60
120	西方Ａ	茅ケ崎市埋蔵文化財調査会	1988	『下寺尾西方Ａ遺跡』茅ケ崎市埋蔵文化財調査報告１
	〃	茅ヶ崎市教育委員会	1994	『下寺尾西方Ａ遺跡』茅ケ崎市埋蔵文化財調査報告７
121	西方Ｃ	茅ケ崎市埋蔵文化財調査会	1988	『西方Ｃ遺跡』茅ケ崎市埋蔵文化財調査報告２
122	上ノ町	新湘南国道埋蔵文化財調査会	1985	「上ノ町遺跡－新湘南国道№７地点－」『新湘南国道埋蔵文化財調査報告』
123	向原（火葬場付近）	神奈川県立博物館	1969	『神奈川県考古資料集成　１　弥生式土器』
124	八図（中赤羽根）	神奈川県立博物館	1969	『神奈川県考古資料集成　１　弥生式土器』
寒川町				
125	倉見才戸	（木村　勇・田村良照）	1992	「寒川町倉見日本鉱業（株）新ひかり社宅内遺跡」『第16回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』
	〃	倉見才戸遺跡発掘調査団	1999	『倉見才戸遺跡発掘調査報告書－第３次調査－』
126	行安寺	（杉原荘介）	1968	「南関東地方」『弥生式土器集成　本編２』
	〃　（行安寺裏）	神奈川県立博物館	1969	『神奈川県考古資料集成　１　弥生式土器』
綾瀬市				
127	吉岡	（財）かながわ考古学財団	1999	『吉岡遺跡群Ⅶ』かながわ考古学財団調査報告47
128	宮久保	神奈川県立埋蔵文化財センター	1987	『宮久保遺跡Ⅰ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15
海老名市				
129	本郷	本郷遺跡調査団	1995	『海老名本郷（Ｘ）』
130	本郷中谷津	本郷中谷遺跡調査団	1994	『本郷中谷津遺跡埋蔵文化財調査報告書－第９次調査－』
131	四大縄	海老名市№４７遺跡発掘調査団	1997	『四大縄遺跡』
132	尼寺北方	国分尼寺北方遺跡調査団	1996	『国分尼寺北方遺跡－第７次・第８次調査－』
城山町				
133	川尻	（財）かながわ考古学財団	2000	『川尻遺跡Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告69
津久井町				
134	青根馬渡	（財）かながわ考古学財団	1999	『道志導水路関連遺跡』かながわ考古学財団調査報告59
厚木市				
135	山ノ上	神奈川県教育委員会	1988	「厚木市山ノ上遺跡Ⅰ」『神奈川県文化財調査報告書第47集』
136	妻田西・白根	（中村貴代重ほか）	1996	「厚木市妻田西・白根遺跡出土の弥生土器について」『西相模考古』第５号
137	妻田中村第５地点	（林原利明・宮井　香）	1997	『厚木市妻田中村遺跡第５地点発掘調査概要報告書』
138	子ノ神	厚木市教育委員会	1978	『子ノ神』
	〃	厚木市教育委員会	1983	『子ノ神（Ⅱ）』
	〃	厚木市教育委員会	1990	『子ノ神（Ⅲ）』
	〃	厚木市教育委員会	1998	『子ノ神（Ⅳ）』
139	恩名大井	厚木市史編さん室	1985	『厚木市史　地形地質編・原始編』
140	恩名仲町	厚木市史編さん室	1985	『厚木市史　地形地質編・原始編』
141	恩名沖原	恩名沖原遺跡発掘調査団	2000	『恩名沖原遺跡発掘調査報告書』
142	下古沢駒飼	下古沢駒飼遺跡発掘調査団	1998	『下古沢駒飼遺跡発掘調査報告書』
143	船子・宮の前	（中村喜代重）	1997	「厚木市船子・宮の前遺跡」『第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』

番号	遺跡名	編集・発行組織（報文執筆者）	発行年	報文名・書名
144	宮の里	（浅川利一・河合英夫・田村良照・迫　和幸）	1988	「厚木市宮の里遺跡の調査」『第12回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』
145	長谷曽野	長谷曽野遺跡発掘調査団	2000	『長谷曽野遺跡発掘調査報告書』
146	小野川野	厚木パークシティ開発地域内埋蔵文化財発掘予備調査団	1975	『厚木パークシティ開発地域内埋蔵文化財分布調査報告書』
	〃	歴史と文化を知る会遺跡分布調査班	1975	『厚木市遺跡分布調査報告書』（１）
147	愛名鳥山	愛名鳥山遺跡調査会	1974	『愛名鳥山』
148	愛名宮地	愛名宮地遺跡調査団	1999	『愛名宮地遺跡』
149	小野若宮	厚木市小野若宮遺跡調査団	1976	『小野若宮遺跡』
150	愛甲宮添	厚木市史編さん室	1985	『厚木市史　地形地質編・原始編』
151	愛甲宮前	愛甲宮前遺跡第２地区発掘調査団	1994	『愛甲宮前遺跡第２地区』
152	愛甲宿	厚木市愛甲宿遺跡発掘調査団	1989	『愛甲宿遺跡』
	〃	愛甲宿遺跡第２地区発掘調査団	1998	『愛甲宿遺跡第２地区』
伊勢原市				
153	石田・峯	（立花　実）	1995	「石田・峯遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告37』
154	石田・細谷	伊勢原市教育委員会	1994	「２　石田・細谷遺跡」『文化財ノート　第３集』
155	高森・宮ノ越	伊勢原市教育委員会・玉川文化財研究所	2001	『高森・宮ノ越遺跡』いせはらの遺跡Ⅱ
156	三ノ宮三枚田	神奈川県教育委員会	1975	「伊勢原工業団地内発見の遺跡」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告８』
157	白根	（石井克己）	1974	「伊勢原市白根遺跡出土の弥生式土器と石器」『愛名鳥山』
平塚市				
158	墨染	平塚市遺跡調査会・平塚市教育委員会	1992	「第10章　墨染遺跡第３地点」『天神前・桜畑遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ21
159	四ノ宮鹿見堂	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』
	〃	（菅沼圭介）	1998	「第８章第２節　市内出土の弥生時代中期後半の土器」『山王久保遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ31
160	坪ノ内	平塚市遺跡調査会	1989	「Ⅸ　坪ノ内遺跡（第３地区）」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書』２
161	山王Ｂ	平塚市遺跡調査会	2002	「第５章　山王Ｂ遺跡第12地点」『御殿Ｂ／山下長者屋敷跡／御領宮／山王Ｂ』平塚市埋蔵文化財緊急報告書10
162	大原	平塚市遺跡調査会・平塚市	1988	『大原遺跡Ⅱ』平塚市埋蔵文化財シリーズ７
	〃	平塚市遺跡調査会・平塚市教育委員会	1989	『大原遺跡Ⅲ』平塚市埋蔵文化財シリーズ10
163	笹本	平塚市博物館	1979	「第６章　笹本遺跡」『久保田遺跡他遺跡詳細分布調査報告』平塚市博物館資料№18
164	南原Ｂ	平塚市遺跡調査会	1998	「第５章　南原Ｂ遺跡第４地点」『山王久保遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ31
	〃	平塚市博物館	1980	「第５章　南原Ｂ遺跡」『砂丘上の遺跡確認調査報告－一丁地Ｂ遺跡他遺跡詳細分布調査－』平塚市博物館資料№22
	〃	平塚市遺跡調査会	1992	「南原Ｂ遺跡隣接地」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書５』
	〃	平塚市遺跡調査会	1993	「南原Ｂ遺跡第５地点」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書６』
	〃	平塚市遺跡調査会	1993	「南原Ｂ遺跡第２地点」『山王Ｂ・稲荷前Ａ遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ23
	〃	平塚市遺跡調査会	1996	『南原Ｂ遺跡他』
165	豊田本郷	豊田本郷遺跡発掘調査団	1985	『豊田本郷』
166	山王久保	平塚市遺跡調査会	1998	「第４章　山王久保遺跡第10地点」『山王久保遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ31
167	赤坂	平塚市博物館	1989	『赤坂遺跡発掘調査報告書』平塚市博物館資料№36
168	五領ヶ台	（小島弘義）	1985	「寄贈された弥生式土器」『平塚市文化財調査報告書第20集』

番号	遺跡名	編集・発行組織（報文執筆者）	発行年	報文名・書名
169	原口	（財）かながわ考古学財団	1997	『原口遺跡Ⅰ』かながわ考古学財団調査報告22
	〃	（財）かながわ考古学財団	2001	『原口遺跡Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告104
170	沢狭	金目郵便局建設用地内遺跡発掘調査団	1998	『沢狭遺跡発掘調査報告書』
171	真田・北金目	平塚市	1983	『真田・北金目遺跡詳細分布確認調査報告』
	〃	平塚市真田・北金目遺跡調査会	2001	『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書２　４・５・６(Ａ～Ｃ)・７・９・10区』
172	真田城跡東堀	東海大学校地内遺跡調査団	1995	「真田城跡東堀の調査」『東海大学校地内遺跡調査団報告５』
秦野市				
173	根丸島	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』
	〃	根丸島遺跡調査団	1976	『根丸島遺跡　第一次・第二次発掘調査概報』
	〃	（伊東秀吉・杉山博久）	1985	『秦野市史　別巻考古編』
174	砂田台	神奈川県立埋蔵文化財センター	1989	『砂田台遺跡Ⅰ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20
	〃	神奈川県立埋蔵文化財センター	1991	『砂田台遺跡Ⅱ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20
大磯町				
175	馬場台	馬場台遺跡発掘調査団	1983	「大磯町馬場台遺跡発掘調査報告」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告25』
	〃	（鈴木一男・矢野慎一）	1985	「大磯町馬場台遺跡出土の弥生土器について」『神奈川考古』20
	〃	大磯町教育委員会	2000	『馬場台遺跡　第28地点』大磯町文化財調査報告書第43集
小田原市				
176	羽根尾堰ノ上	小田原市教育委員会	1986	『羽根尾堰ノ上遺跡』小田原市文化財調査報告書第19集
177	宝金剛寺裏山	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』
178	三ツ俣	国府津三ツ俣遺跡調査団	1991	『国府津三ツ俣遺跡』
	〃	（財）かながわ考古学財団	2000	『三ツ俣遺跡Ⅱ（Ｆ地区)』かながわ考古学財団調査報告80
	〃	（財）かながわ考古学財団	2000	『三ツ俣遺跡Ⅲ（Ｇ地区)』かながわ考古学財団調査報告81
	〃	神奈川県立埋蔵文化財センター	1986	『三ツ俣遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告13
179	町畑	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』
180	矢代	（財）かながわ考古学財団	2000	『矢代遺跡』かながわ考古学財団調査報告101
181	中里	小田原市教育委員会	1997	『中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第61集
	〃	（戸田哲也）	1999	「№３ 小田原市中里遺跡第Ⅰ地点」『第23回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』
182	千代南原	小田原市教育委員会	1987	『千代南原遺跡第Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第22集
183	永塚一町畑	小田原市教育委員会	1986	「永塚一町畑遺跡の調査」『埋蔵文化財発掘調査報告』小田原市文化財調査報告書第21集
184	下曽我	小田原市教育委員会	1986	「下曽我遺跡の調査」『埋蔵文化財調査報告書』小田原市文化財調査報告書第21集
185	千代北町	小田原市教育委員会	2000	『千代北町遺跡第Ⅷ地点』小田原市文化財調査報告第87集
186	上山神	（河合英夫）	1988	「上山神」『第９回　三県シンポジウム　東日本の弥生墓制』
187	山ノ神	小田原市教育委員会	1970	『小田原市山ノ神遺跡発掘調査報告』小田原市文化財調査報告書第３集
188	久野大畑	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』
189	山神下	山神下遺跡発掘調査団	1989	『山神下遺跡』
190	多古（白山神社境内）	神奈川県立博物館	1969	『神奈川県考古資料集成　１　弥生式土器』
	〃（白山）	（杉山博久）	1970	「付編　山ノ神遺跡周辺の弥生中期の遺跡とその出土資料」『小田原市山ノ神遺跡発掘調査報告』小田原市文化財調査報告書第３集
	〃	神奈川県立博物館	1973	『神奈川県考古資料集成　５　弥生式土器（２)』
	〃（久野白山）	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』

番号	遺跡名	編集・発行組織（報文執筆者）	発行年	報文名・書名
191	久野北側下	玉川文化財研究所	1996	『久野北側下遺跡第Ⅲ地点　発掘調査報告書』
192	久野中宿	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』
	〃	神奈川県立博物館	1973	『神奈川県考古資料集成　5　弥生式土器（2）』
193	諏訪の前	小田原考古学研究会	1971	『小田原市諏訪の前遺跡』小田原考古学研究会調査報告書2
194	久野多古境	小田原市教育委員会	2000	『久野多古境遺跡第Ⅲ地点』小田原市文化財調査報告第79集
195	谷津（小田原）	（杉原荘介）	1968	「南関東地方」『弥生式土器集成　本編2』
196	小田原城三の丸	（財）かながわ考古学財団	2002	『小田原城三の丸　杉浦平太夫邸跡第Ⅲ地点』かながわ考古学財団調査報告141
箱根町				
197	仙石原	（赤星直忠・岡本　勇）	1979	『神奈川県史　資料編　20　考古資料』

神奈川県横穴墓文献一覧

古墳時代プロジェクトチーム

例　言

1．本一覧は、神奈川県内の横穴墓に関する文献を市町村別（横浜市・川崎市は区別）・発行年順にまとめたものである。

2．神奈川県全般及び複数の市町村にまたがる文献については、総論として一括した。また、神奈川県を含めた広範な地域を対象とした文献についても、総論にまとめた。

3．県史・市史・区史・町史に一括して掲載されている横穴墓（群）については、独立して個別に取り扱った。

4．文献は、発行年（西暦）・著者名・論文名（書名）・掲載誌（号・巻）・出版社（研究団体）の順に記載した。

総　論

1894　阿部正功「武蔵二於ケル貝塚・横穴・其他遺跡地名表」『東京人類学会雑誌』第21号

1902　林　五策「相模の横穴」『人類学雑誌』第17巻188号

1922　小松眞一「武蔵國南部の横穴群に就いて」『人類学雑誌』第37巻６号

1924　石野　瑛「武蔵相模に於ける古墳横穴及び遺物」『武相の古代文化』

1926　石野　瑛「横浜及び付近の古墳と横穴」『考古学雑誌』第16巻12号

1930　赤星直忠「三浦半島の横穴」『考古学』第１巻２号

1953　石野　瑛『神奈川県大観２　横濱・川崎』武相出版社

1956　石野　瑛『神奈川県大観４　湘東・湘中』武相出版社

1958　石野　瑛『神奈川県大観３　鎌倉・三浦・湘南』武相学園

1961　石野　瑛『神奈川県大観５　湘西・湘北』武相学園

1961　後藤守一「多摩丘陵地域における古墳及び横穴の調査」『東京都文化財調査報告書』10号

1961　二戸芳雄「武相における横穴古墳研究小史」『立正考古』19号

1962　赤星直忠「横穴の伝播」『新国学』第一号

1965　佐藤興二「古墳時代後期における横穴墓の様相」『駿台史学』16号

1966　阿部黎子「横穴被葬者における一考察」『考古学雑誌』第52巻２号

1970　赤星直忠『穴の考古学』学生社

1970　赤星直忠「神奈川県における横穴古墳の線刻壁画」『考古学ジャーナル』第48号　ニューサイエンス社

1975　吉田章一郎編「横穴墓総覧」『歴史読本』20巻８号

1976　赤星直忠「横穴の話（横穴の編年）」『南関東の考古学諸問題』

1978　杉山博久「大磯丘陵の横穴墓群」『小田原地方史研究』八　小田原地方史研究会

1980　池上　悟『横穴墓』ニューサイエンス社

1980　金井塚良一「関東地方横穴墓地名表」『台地研究』No.20

1980　武蔵大学人類・考古学研究会「神奈川県における横穴墓の分布」『えとのす』第13号

1980　杉山博久「神奈川の横穴墓群」『古代探叢』早稲田大学出版部

1980　杉山博久「相模国における古墳文化の展開」『かながわ風土記』第33号

1982　池上　悟「東国横穴墓の一様相」『立正史学』第52号

1982　松本　健「南武蔵の横穴墓」『史學』第52巻６号

1983　斎藤　忠・杉山博久編『日本横穴地名表』吉川弘文館

1985　明石　新『相模川流域の横穴墓』平塚市博物館

1986　田村良照　「鶴見川及び多摩川下流域における横穴墓の様相」『川崎市内における横穴墓群の調査』玉川文化財研究所
1987　藤本健二　「相模川流域における横穴墓について」『湘南考古学同好会々報』28
1988　吉田章一郎　「神奈川県酒匂川流域の横穴墓と古墳」『考古学論考　下』斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会
1988　杉山博久　「相模国金目川流域の横穴墓群」『考古学論考　下』斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会
1988　上田　薫　「神奈川県の横穴墓研究の歴史」『國學院大学考古学資料館紀要』第５輯
1989　上田　薫　「高棺座について」『神奈川考古』第５号
1989　梶ヶ山真理　「出土人骨から見た武蔵・相模の横穴墓の様相」『立正考古』第29号
1990　白州信哉　「境川及びその支流における横穴墓について（上・下）」『湘南考古学同好会々報』39・40
1991　神奈川県立埋蔵文化財センター　『横穴墓の謎』　かながわの遺跡展パンフレット
1991　上田　薫・長谷川厚・近野正幸　「神奈川県の横穴墓」『関東横穴墓遺跡検討会資料』　茨城県考古学会
1991　上田　薫　「神奈川県の装飾横穴墓」『湘南考古学同好会々報』42
1991　池上　悟　「東国横穴墓の形式と伝播」『おおいた考古』第４集
1992　水野敏典　「群集墳の一形態としての横穴墓」『古代』第93号
1992　池上　悟　「南武蔵における古墳終末期の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集
1993　上田　薫　「横穴墓」『かながわの考古学』第３集　神奈川県立埋蔵文化財センター
1993　米川仁一　「多摩川流域における横穴の構造と社会背景」『東京考古』11　東京考古談話会
1994　神奈川県考古学会　『横穴墓とは何か』
1994　池上　悟　「東国横穴墓の形式と交流」『日本古代史叢考－高嶌正人先生古希祝賀論文集－』
1994　松崎元樹・大西雅也　「境川流域の横穴墓について」『研究論集Ⅷ』　東京都埋蔵文化財センター
1994　桜土手古墳展示館　『西湘の横穴墓』
1995～2002　古墳時代研究プロジェクト　「横穴墓の研究（1）～（8）」『かながわの考古学』第５集　『研究紀要』1～7
　　神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人かながわ考古学財団
1999　明石　新　「大住郡域の横穴墓の様相」『湘南考古学同好会々報』77
2000～2002　田村良照　「相模の横穴墓（１）～（４）」『湘南考古学同好会々報』80・83・84・88
2001　平塚市博物館　『相武国の古墳―相模川流域の古墳時代―』
2002　田村良照　「南武蔵南部の横穴墓」『考古論叢神奈河』第十集
2002　植山英史・柏木善治　「関東南部の装飾された古墳（横穴墓）」『装飾古墳の展開』　埋蔵文化財研究会

横浜市（鶴見区）

1908　大野延太郎　「武蔵駒岡新発見の横穴」『考古界』第７巻８号
1909　和田千吉　「武蔵国駒岡の古墳発掘」『考古界』第８巻６号
1926　大野延太郎　「武蔵駒岡の横穴に就て」『武蔵野』８巻１号
1926　八幡一郎　「鶴見花月園内に発見された横穴」『武蔵野』８巻３号
1972　井上義弘　「横浜市鶴見区駒岡遺跡群調査報告」『昭和46年度横浜市埋蔵文化財調査報告書』
1979　赤星直忠　「岩瀬山横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1997　青木健二他　「馬場３丁目横穴墓群」『日本窯業史研究所報告』第49冊

横浜市（神奈川区）　該当なし

横浜市（西区）

1962　石野　瑛　「神奈川県横浜市浅間神社境内横穴群」『日本考古学年報』11
1982　佐藤安平　『横浜市西区浅間下横穴群調査概報』　同調査団

横浜市（中区）　該当なし

横浜市（南区）

1932　白井光太郎　「武蔵国久良郡石川中村穴居記」『ドルメン』９号

1977　榊原末治・米沢容一　「殿ヶ谷横穴古墳」『日本考古学年報』28

1994　田村良照　『横浜市南区中里横穴墓発掘調査報告書』　同調査団

横浜市（保土ヶ谷区）該当なし

横浜市（磯子区）

1958　石野　瑛　「横浜市磯子区森町（離山）蛇山横穴群」『日本考古学年報』7

1979　赤星直忠　「屏風浦小学校内横穴」『神奈川県史』資料編20　考古資料

横浜市（金沢区）

1971　井上義弘　「横浜市金沢区富岡町長昌寺前横穴群発掘調査報告書」『昭和46年度横浜市埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）』

1979　赤星直忠　「長昌寺前横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料

1999　長谷川厚他　「釜利谷東６丁目西地区やぐら群・谷津町北地区やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』63

2000　長谷川厚他　「瀬戸町やぐら群・横穴墓」『かながわ考古学財団調査報告』86

横浜市（港北区）

1887　山崎直方　「武蔵国橘樹郡大曾根太尾二村の横穴」『東京人類学界雑誌』21号

1966　清水潤三　「神奈川県横浜市日吉横穴」『日本考古学年報』16

1971　佐藤安平他　「横浜市港北区高田町遺跡調査報告」『昭和45年度横浜市埋蔵文化財調査報告書（２）』

1984　鈴木重信　『横浜市港北区矢上ノ町遺跡・矢上上ノ町横穴墓Ｂ支群発掘調査概報』　横浜市教育委員会

1988　長谷川厚　『新吉田町四ッ家横穴墓群』　神奈川県立埋蔵文化財センター

1989　滝澤　亮他　『新吉田町四ッ家横穴墓Ｂ群』　同調査団

1990　滝澤　亮他　『新吉田町四ッ家横穴墓群』　同調査団

1990　田村良照　『諏訪下北遺跡』　同調査団

1992　林原利明　『新吉田町俵地区横穴墓』　同調査団

1999　鈴木重信他　『箕輪洞谷横穴墓群発掘調査報告書』　財団法人横浜市ふるさと歴史財団

横浜市（戸塚区）

1975　池上　悟　「横浜市矢倉地横穴墓群の調査」『考古学ジャーナル』第103号　ニューサイエンス社

1976　佐藤安平　「矢倉地横穴墓群」『日本考古学年報』27

横浜市（港南区）

1975　川上久夫他　「港南台」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』9

1979　港南の歴史発刊実行委員会「⑪区内の古墳」『港南の歴史』

横浜市（旭区）該当なし　　**横浜市（緑区）**該当なし

横浜市（瀬谷区）

1981　岡本孝之　「中屋敷横穴墓調査報告」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』21

横浜市（栄区）

1959　赤星直忠　「殿谷横穴群」『鎌倉市史』考古編

1959　赤星直忠　「滝ヶ久保横穴群」『鎌倉市史』考古編

1959　赤星直忠　「関山横穴群」『鎌倉市史』考古編

1959　赤星直忠　「大橋谷横穴群」『鎌倉市史』考古編

1959　赤星直忠　「あぶな谷横穴群」『鎌倉市史』考古編

1959　赤星直忠　「中居横穴群」『鎌倉市史』考古編

1959　赤星直忠　「東谷横穴群」『鎌倉市史』考古編

1964　岩本義雄　『横浜市戸塚区独川流域の横穴群について』鵠沼女子高等学校地歴研究部

1969　佐野大和　『七石山遺跡調査報告書（１）』　横浜市埋蔵文化財調査委員会

1970　佐野大和・鈴木重信　『七石山遺跡調査報告書（２）』

1976　大津一男　「七石山北部横穴古墳にみられる漆喰と線刻画」『調査研究集録』第1冊　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
1979　小出義治他　『横浜市戸塚区桂町遺跡群発掘調査報告書』　同調査団
1979　赤星直忠　「宮の前横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1980　明星大学考古学研究部　「長谷久保遺跡・七石山横穴群」『明星大学考古学研究部研究報告』第１集

横浜市（泉区）該当なし

横浜市（青葉区）

1927　谷川磐雄　「家形彫刻を有する横穴」『考古学雑誌』第17巻１号
1928　高橋光蔵　「神奈川県都筑郡山内村石川の家形彫刻を有する横穴」『史跡名勝天然記念物』三－七
1933　石野　瑛　「武蔵国都筑郡中里村市ヶ尾横穴群調査報告」『考古学雑誌』第23巻７号
1935　石野　瑛　「武蔵国都筑郡中里村市ヶ尾横穴群調査記」『神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告書』三
1942　江坂輝彌　「旧神奈川県山内村荏田・小黒谷横穴古墳群調査概報」『民族文化』第４巻２号
1961　石野　瑛　「横浜市港北区市ヶ尾横穴Ｃ群」『日本考古学年報』９
1961　石野　瑛　「港北区元石川町荏子田かんかん穴横穴」『日本考古学年報』９
1961　二戸芳雄　「横浜市港北区元石川の横穴」『立正考古』17号
1962　村田文夫　「横浜市港北区元石川の横穴古墳群」『立正考古』21号
1971　合田芳正他　『上谷本第二遺跡Ａ地区・Ｂ地区発掘調査報告書』　同調査団
1971　佐藤安平　『上谷本第２地区（横穴古墳群）調査報告書』
1973　上野佳也　「小黒谷横穴群」『日本考古学年報』24
1973　池上　悟　「小黒谷横穴群の調査」『小黒谷遺跡発掘調査報告書』　同調査団
1978　青木健二他　「下根横穴群」『市ヶ尾・川和地区内遺跡群』
1978　青木健二他　「天ヶ谷横穴群」『市ヶ尾・川和地区内遺跡群』
1979　赤星直忠　「市ヶ尾横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1981　稲生典太郎・合田芳正　「上谷本横穴群」『日本考古学年報』21・22・23
1982　甘粕　健　「市カ尾古墳群の発掘」『横浜市史』資料編二十一
1984　池上　悟他　「熊ヶ谷横穴墓群」『奈良地区遺跡群発掘調査報告』Ⅱ
1986　池上　悟他　「熊ヶ谷東遺跡」『奈良地区遺跡群発掘調査報告』Ⅳ
1986　土井永好　「寺家町所在の横穴」『緑区史』資料編第二巻
1986　土井永好　「荏子田横穴」『緑区史』資料編第二巻
1986　根田信隆　「市ヶ尾横穴群」『緑区史』資料編第二巻
1986　土井永好　「熊ヶ谷横穴墓群」『緑区史』資料編第二巻
1986　今井康博　「下根・天ヶ谷横穴群」『緑区史』資料編第二巻
1991　鹿島保宏他　『市ヶ尾横穴古墳群（Ｂ群）前庭部試掘調査報告』（財）横浜市ふるさと歴史財団
1994　大川　清・吉田好孝・渡辺　務　「横浜市大場横穴墓群Ｆ・Ｇ・Ｈ横穴墓群の調査」『第18回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
1998　鹿島保宏他　『市ヶ尾18街区（大場第二地区21街区）横穴墓群発掘調査報告書』（財）横浜市ふるさと歴史財団

横浜市（都筑区）

1957　石野　瑛　「神奈川県横浜市折本横穴群」『日本考古学年報』５
1957　坂詰秀一　「横浜市港北区東方の横穴」『立正考古』11・12号
1977　坂本　彰　「横浜市矢崎山遺跡の調査」『第１回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
1985　呉地英夫他　『東方横穴墓群発掘調査報告書』　同調査団
1986　呉地英夫他　『東方横穴墓群第２次調査発掘報告書』　同調査団
1987　村上　徹　「東方横穴群」『緑区史』資料編第二巻

1992　坂上克弘他　「上の山遺跡」『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告　ⅩⅢ』　横浜市埋蔵文化財センター
1993　鹿島保宏・鈴木重信　「横浜市綱崎山横穴墓群の調査」『第17回神奈川県遺跡調査研究発表会発表要旨』
1996　武井則道　「C18横穴・矢崎山古墳」『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告　ⅩⅩ』（財）横浜市ふるさと歴史財団
1999　長谷川厚他　「新宮台横穴墓」『かながわ考古学財団調査報告』82

川崎市（川崎区）該当なし

川崎市（幸区）

1982　東原信行　「川崎市夢見ヶ丘横穴墓発掘調査報告」『川崎市文化財調査集録』17

川崎市（中原区）

1953　近森　正　「金堀山横穴古墳発掘報告」『アーケオロジー』18号
1955　古江亮仁他　『井田伊勢宮前横穴古墳群調査記』　川崎市教育委員会・私立橘高等学校・私立川崎高等学校
1956　古江亮仁・渡辺久喜　『川崎市井田伊勢宮金堀横穴群第七号穴調査書』　川崎市教育委員会・私立橘高等学校
1979　赤星直忠　「井田伊勢宮前横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「伊勢宮金堀横穴」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1988　伊東秀吉　「井田金堀横穴墓群」『川崎市史』資料編１　考古・文献・美術工芸

川崎市（高津区）

1960　二戸芳雄　「川崎市新作の横穴古墳」『立正考古』15号
1962　二戸芳雄　「川崎市新作に於ける横穴」『立正考古』20号
1963　新井　清　「川崎市下作延津田山付近に於ける石棺を伴う横穴墓の発見について」『たちばな』第27号
1966　伊東秀吉　「川崎市下作延日向横穴古墳群調査報告」『川崎市文化財集録』２
1966　新井　清・持田春吉　「川崎市津田山横穴墓群概要」『考古たちばな』第５・６合併号
1977　東原信行　「川崎市下作延福ノ円横穴古墳の調査」『第１回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
1978　竹石健二他　『川崎市久地西前田横穴墓発掘調査報告書』　同調査団
1979　伊東秀吉・大坪宣雄　「川崎市下作延日向横穴墓群の調査」『第３回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
1979　赤星直忠　「中野橋横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「平瀬隧道際横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「日向横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1980　東原信行　「川崎市高津区下作延福ノ円横穴古墳発掘調査報告」『川崎市文化財調査集録』15
1981　野中和夫・竹石健二　「川崎市久地西前田横穴墓群の調査」『第５回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
1982　竹石健二　「津田山丘陵の横穴墓について」『研究紀要』第二十六号　日本大学人文科学研究所
1986　伊東秀吉　「川崎市高津区楸谷横穴古墳調査報告」『川崎市文化財調査集録』22
1986　田村良照　「間際根横穴墓群発掘調査報告書」『川崎市内における横穴墓群の調査』　玉川文化財研究所
1986　田村良照　「上作延横穴墓群発掘調査報告書」『川崎市内における横穴墓群の調査』　玉川文化財研究所
1986　田村良照　「蟹ヶ谷横穴墓群発掘調査報告書」『川崎市内における横穴墓群の調査』　玉川文化財研究所
1988　滝澤　亮他　『神奈川県川崎市高津区千年Ｂ区域横穴墓群』　同調査団
1988　新井　清　「平瀬川隧道際横穴墓」『川崎市史』資料編１　考古・文献・美術工芸
1988　新井　清　「浄元寺裏横穴墓群」『川崎市史』資料編１　考古・文献・美術工芸
1988　新井　清　「津田山久地横穴墓」『川崎市史』資料編１　考古・文献・美術工芸
1990　持田春吉他　『緑ヶ丘霊園南横穴墓群発掘調査報告書』　同調査団
1995　後藤喜八郎　「川崎市久本横穴墓群」『第19回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
1996　後藤喜八郎　『久本横穴墓群発掘調査報告書』　同調査団
1997　小池　聡他　『久本桃之園横穴墓群』　同調査団

1997　竹石健二・野中和夫他「川崎市久地西前田横穴墓群（第２次）」『第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
1998　竹石健二他　『久地西前田横穴墓群』　同調査団
2000　橋本真起夫・辻本裕也・野中和夫「久地西前田第２号横穴墓にみる葬送儀礼に関する一考察」『川崎市文化財調査集録』35

川崎市（宮前区） 該当なし

川崎市（多摩区）

1887　岡本高介他　「登戸在生田村横穴」『東京人類学会報告』16号
1970　伊東秀吉　「川崎市生田長者穴横穴古墳群調査報告」『川崎市文化財調査集録』５
1979　赤星直忠　「長者穴横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1981　伊東秀吉　「長者穴横穴群」『日本考古学年報』21・22・23

川崎市（麻生区）

1974　樋口清之・金子皓彦　「神奈川県早野横穴の調査」『考古学ジャーナル』第91号　ニューサイエンス社
1974　樋口清之・金子皓彦　「川崎市多摩区早野横穴古墳発掘調査報告」『川崎市文化財調査集録』９
1975　三輪修三・村田文夫　「川崎市多摩区早野横穴古墳線刻の一考察」『三浦古文化』第18号
1978　東原信行　『川崎市多摩区麻生台横穴古墳発掘調査概報』　同調査団
1979　赤星直忠　「早野横穴」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1982　村田文夫　「「永仁六年」在銘の再利用された横穴古墳」『三浦古文化』第31号
1984　東原信行　「川崎市最北西部谷本川流域の横穴古墳群」『川崎市文化財調査集録』20
1984　大竹憲治　「東国の横穴墓発見・幡に関する資料」『考古学ジャーナル』第240号
1988　稲村晃嗣　「川井田下横穴墓」『川崎市史』資料編１　考古・文献・美術工芸
1988　村田文夫　「上麻生仲村横穴墓」『川崎市史』資料編１　考古・文献・美術工芸
1993　村田文夫他　「王禅寺白山横穴墓群の調査」『川崎市市民ミュージアム考古学叢書』１

横須賀市

1886　浅井郁太郎　「浦賀近傍ノ横穴」『東京人類学会報告』10号
1924　赤星直忠　「馬らしき？陰刻ある横穴」『考古学雑誌』第14巻11号
1925　赤星直忠　「相州鴨居の横穴（一～三）」『考古学雑誌』第15巻８・９・11号
1927　赤星直忠　「三浦記（一・三）」『考古学雑誌』第17巻４・10号
1928　赤星直忠　「相模馬堀横穴」『考古学雑誌』第18巻９号
1929　赤星直忠　「相模佐島横穴」『考古学雑誌』第19巻２号
1934　石野　瑛　「三浦郡佐島の横穴と五輪塔」『考古集録』１
1935　赤星直忠　「浦賀町吉井横穴」『考古学雑誌』第24巻５号
1942　赤星直忠　「神奈川県浦賀町沼田城山横穴について」『考古学雑誌』第32巻４号
1954　赤星直忠　「神奈川県横須賀市鴨居横穴」『日本考古学年報』２
1958　赤星直忠　「横須賀市久里浜こんぴら山古墳並横穴群調査概報」『横須賀考古学会年報』№３
1960　赤星直忠　「横須賀市なはま横穴群」『横須賀市博物館研究報告（人文）』４
1961　赤星直忠　「なはま横穴群第二次」『横須賀市博物館研究報告（人文）』５
1962　赤星直忠　「神奈川県横須賀市長浜横穴群」『日本考古学年報』11
1963　赤星直忠　「神奈川県横須賀市こんぴら山古墳並横穴群」『日本考古学年報』10
1964　赤星直忠　「神奈川県横須賀市長浜遺跡」『日本考古学年報』12
1966　赤星直忠　「たたら浜横穴群概要」『三浦古文化』第１号
1979　赤星直忠　「田戸台横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「鳥が崎横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料

1979　赤星直忠　「吉井城山横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「佐島横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「なはま横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1981　赤星直忠他　『横須賀市坂本横穴の調査』　同調査団
1985　大塚眞弘他　「昭和58年度博物館教室「三浦半島の考古学」野外学習調査概報」『横須賀市博物館報』No.32
1993　塚田明治　『横須賀市「井田横穴群」の調査』　急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1994　玉口時雄他　『東谷横穴墓群』　同調査団
1995　川上久夫他　『井田横穴群Ｂ地点の調査』　急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1998　川上久夫他　『大津町信楽寺横穴群の調査』　同調査団
1998　野内秀明　「吉井横穴群」『横須賀市文化財発掘調査概報集Ⅵ』　横須賀市文化財発掘調査報告書第32集
1999　桝渕規彰・井関文明　「高山横穴群」『かながわ考古学財団調査報告』62
2000　上田　薫・依田亮一　「高山横穴墓群（２次）」『かながわ考古学財団調査報告』87
2000　青木　司他　「田戸台横穴墓群発掘調査報告」『埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅷ』　横須賀市文化財調査報告書第35集

平塚市

1898　八木奘三郎　「相模國大磯在山背村字萬田八重窪の横穴」『東京人類学会雑誌』152号
1933　石野　瑛　「相模國中郡旭村根坂間横穴群調査報告」『史跡名勝天然記念物』８巻７号
1935　石野　瑛　「中郡旭村根坂間横穴群調査報告」『考古集録』第二　武相考古学會
1976　杉山博久他　「平塚市内の横穴墓群（Ⅰ）」『平塚市文化財調査報告書』第12集
1977　杉山博久　「平塚市内の横穴墓群（Ⅱ）」『平塚市文化財調査報告書』第13集
1979　赤星直忠　「下高根横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1879　赤星直忠　「根坂間横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1983　明石　新　「平塚市岡崎より発見された横穴墓について」『自然と文化』第６号　平塚市博物館
1987　杉山博久　『万田八重窪・宮ノ入横穴墓群』同調査団
1990　明石　新　「根坂間横穴墓Ｂ支群」『平塚市埋蔵文化財シリーズ』14
1994　明石　新　「岡崎城跡Ａ・城山横穴墓群」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書』７
1994　明石　新　「岡崎城跡Ａ・城山横穴群」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書』８
1995　上原正人　『根坂間横穴群第３地点』　平塚市遺跡調査会
1996　上原正人　「万田八重窪横穴群」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書』９
1998　岡本孝之　「1898（明治31）年10月、平塚市萬田八重窪横穴墓の調査について」『湘南考古学同好会々報』71
1998　岡本孝之　「その後の万田八重窪横穴墓群」『湘南考古学同好会々報』72
1999　長谷川厚　「根坂間横穴群」『平塚市史』11上　別編考古（１）
1999　長谷川厚　「高根横穴群」『平塚市史』11上　別編考古（１）
1999　長谷川厚　「城山横穴群」『平塚市史』11上　別編考古（１）
1999　長谷川厚　「万田八重窪横穴群」『平塚市史』11上　別編考古（１）
1999　長谷川厚　「万田熊之台横穴群」『平塚市史』11上　別編考古（１）
1999　長谷川厚　「万田宮ノ入横穴群」『平塚市史』11上　別編考古（１）

鎌倉市

1936　赤星直忠　「長楽寺横穴」『鎌倉』第２巻３号
1938　赤星直忠　「千葉ヶ谷横穴」『鎌倉』第４巻３号
1948　赤星直忠　「相模洗馬谷横穴群について」『考古学雑誌』第35巻１・２合併号
1948　三上次男　「鎌倉市稲村ヶ崎横穴古墳群について」『科学世界』第23巻１号
1950　吉田　格　「鎌倉市山崎の横穴」『武蔵野』第31巻３・４合併号

1951　原　輝彦　「一ノ谷横穴古墳群発掘報告」『考古学雑誌』第37巻４号
1959　赤星直忠　「陣鐘山横穴」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「笛田横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「狐坂横穴」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「大工谷戸横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「本町上横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「上町屋横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「山崎横穴群Ａ区」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「山崎横穴群Ｂ区」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「垣根谷奥横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「清水塚横穴」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「東谷戸横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「倉久保横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「岡本横穴」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「洗馬谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「善応寺谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「大蔵山東横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「大蔵山南横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「千葉谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「笹目谷榎並邸内横穴」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「笹目谷斎藤邸内横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「長楽寺横穴」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「長楽寺谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「光則寺谷横穴」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「姥ヶ谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「一ノ谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「腰越横穴」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「室谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「峯横穴群」『鎌倉市史』考古編
1962　赤星直忠　「神奈川県鎌倉市笛田横穴群」『日本考古学年報』11
1969　赤星直忠　「神奈川県鎌倉市田辺谷横穴」『日本考古学年報』17
1979　赤星直忠　「山崎横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「柿の木谷横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「洗馬谷横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「千葉が谷横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「稲村が崎横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「峯横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1996　田代郁夫他　「極楽寺旧境内遺跡内横穴墓」『中世石窟遺構の調査』東国歴史考古学研究所調査研究報告第７集
1998　田村良照他　『岩瀬上耕地遺跡』同調査団
2002　継　実他　「二ノ谷横穴群」『鎌倉の横穴墓』東国歴史考古学研究所調査研究報告第30集
2002　土屋浩美　「寺分藤塚遺跡」『鎌倉の横穴墓』東国歴史考古学研究所調査研究報告第30集
2002　継　実　「岩瀬上耕地遺跡」『鎌倉の横穴墓』東国歴史考古学研究所調査研究報告第30集

藤沢市

1902　井上欣一他　『長後小誌』
1925　石野　瑛　「相模國高座郡澁谷村の横穴と綾瀬村の石棺」『考古学雑誌』第15巻３号
1934　矢島栄一　「神奈川県鎌倉郡片瀬川左岸の遺跡及び遺物に就て」『考古学雑誌』第24巻８号
1959　寺田兼方・江原昭善　『代官山横穴古墳』　藤沢市教育委員会
1959　赤星直忠　「竜口寺内横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「不動谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「新林谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「森久谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「向川名横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「神光寺南横穴群」『鎌倉市史』考古編
1966　寺田兼方　「大庭折戸の古墳」『藤沢市文化財調査報告書』第三集
1970　寺田兼方　「代官山横穴群」『藤沢市史』第一巻
1970　寺田兼方　「折戸横穴群」『藤沢市史』第一巻
1970　寺田兼方　「川名横穴群」『藤沢市史』第一巻
1977　寺田兼方・中嶋　登　「藤沢市川名新林左遺跡・川名新林右遺跡の調査」『第1回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
1979　寺田兼方　「藤沢市川名神光寺付近横穴古墳群調査概報」『藤沢市文化財調査報告書』第十四集
1979　赤星直忠　「折戸横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「代官山横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「新林外山腹横穴」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1980　寺田兼方他　「藤沢市川名新林横穴群調査概報」『藤沢市文化財調査報告書』第十五集
1984　寺田兼方　「藤沢市川名新林右西斜面の第二号横穴墓出土の環頭大刀について」『藤沢市文化財調査報告書』第十九集
1984　上田　薫・砂田佳弘　「藤沢市代官山遺跡の調査『第８回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
1985・86・87・89　上田　薫　「藤沢の横穴墓（一～七）」『湘南考古学同好会々報』21・25・26・28・29・30・36
1986　上田　薫他　「代官山遺跡」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』11
1987　寺田兼方他　『藤沢市川名849番地横穴墓群発掘調査報告書』　同調査団
1989　藤原直人　「川名森久地区遺跡群の調査」『湘南考古学同好会々報』35
1996　渡辺清史他　『藤沢市川名森久地区埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ　同調査団
2002　津田憲司・西野吉論　「新林右横穴群群（藤沢市№14）遺跡」『湘南考古学同好会々報』86

小田原市

1935　石野　瑛　「足柄下郡辨天山横穴群調査記」『考古集録』二　武相考古會
1959　赤星直忠　『足柄下郡橘町の横穴古墳』
1962　赤星直忠　「神奈川県足柄下郡橘町横穴群」『日本考古学年報』11
1979　赤星直忠　「弁天山横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「羽根尾横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「小竹横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1986　赤星直忠　「旧橘地区に於ける横穴墓群」『小田原市郷土文化館研究報告』№23
1995　杉山幾一　「弁天山横穴墓群」『小田原市史』資料編　原始・古代・中世Ⅰ
1995　杉山幾一　「橘地区横穴墓群」『小田原市史』資料編　原始・古代・中世Ⅰ
1996　田村良照　「小田原市羽根尾横穴墓群」『第19回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

茅ヶ崎市

1923　山田蔵太郎　「茅ヶ崎赤羽根在の横穴」『武相研究』６　武相考古学会
1939　赤星直忠　「組合式石棺を出した相模甘沼横穴群について」『考古学雑誌』第29巻８号
1964　赤星直忠　「茅ヶ崎市の古墳と横穴」『茅ヶ崎市文化財資料集』第三集
1969　赤星直忠　「神奈川県茅ヶ崎市八口横穴群」『日本考古学年報』17
1975　赤星直忠　「茅ヶ崎市篠谷横穴群調査報告」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』８
1976　1983　冨永富士夫・大村浩司　「香川篠山横穴調査報告」『茅ヶ崎市文化財資料集』第９集
1979　赤星直忠　「篠谷横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1997　高村公之他　「芹沢配水池関連遺跡群」『かながわ考古学財団調査報告』28
1999　井辺一徳　「臼久保遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』60

逗子市

1925　赤星直忠　「逗子町の横穴」『考古学雑誌』第16巻４号
1954　赤星直忠　「逗子市山野根横穴群」『神奈川県文化財調査報告』第21集
1959　赤星直忠　「新宿横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「小坪横穴群」『鎌倉市史』考古編
1959　赤星直忠　「山野根横穴群」『鎌倉市史』考古編
1963　赤星直忠　「神奈川県逗子市山野根横穴群」『日本考古学年報』６
1970　赤星直忠　「逗子市沼間横穴調査概報」『横須賀考古学会年報』第15号
1971　赤星直忠　「沼間桐ヶ谷氏先祖やぐら横穴調査概報」『逗子市文化財調査報告書』第二集
1971　赤星直忠　「沼間堀の内横穴群」『逗子市文化財調査報告書』第二集
1972　赤星直忠　「逗子駅裏山横穴群」『逗子市文化財調査報告書』第三集
1972　赤星直忠　「山野根切崩山腹発見横穴群」『逗子市文化財調査報告書』第三集
1972　赤星直忠　「山野根本田光氏裏山横穴群」『逗子市文化財調査報告書』第三集
1972　赤星直忠　「山野根本田庄作氏裏山横穴群」『逗子市文化財調査報告書』第三集
1972　赤星直忠　「山野根谷奥横穴群」『逗子市文化財調査報告書』第三集
1972　赤星直忠　「山野根熊野神社境内横穴群」『逗子市文化財調査報告書』第三集
1972　赤星直忠　「山野根居合口横穴群」『逗子市文化財調査報告書』第三集
1972　赤星直忠　「山野根仲の谷横穴」『逗子市文化財調査報告書』第三集
1972　赤星直忠　「久木小山氏裏山横穴群」『逗子市文化財調査報告書』第三集
1972　赤星直忠　「久木岩殿寺横穴」『逗子市文化財調査報告書』第三集
1972　赤星直忠　「久木岩殿寺蛇やぐら横穴」『逗子市文化財調査報告書』第三集
1973　赤星直忠　「新宿横穴群」『逗子市文化財調査報告書』第四集
1973　赤星直忠　「うちで横穴群」『逗子市文化財調査報告書』第四集
1973　赤星直忠　「新宿海岸横穴群」『逗子市文化財調査報告書』第四集
1991　塚田明治他　『逗子市久木１丁目横穴群・沼間やぐら群の調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1995　赤星直忠　「新宿横穴群」『逗子市史』別編Ⅱ　考古・建築・美術・漁業編
1997　斎木秀雄他　『久木横穴群の調査』同調査団
1998　斎木秀雄他　『久木５丁目横穴群の調査』同調査団
1998　軽部一一・降矢順子　『久木４丁目横穴・やぐら群の調査』同調査団
1999　桝渕規彰・井関文明　「げんじが谷横穴墓群及びやぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』62

相模原市

1978　青木　豊　『御所之入横穴』同調査団
1980　青木　豊　「御所之入横穴」『日本考古学年報』31

1983　江藤　昭他　『古淵横穴古墳』同調査団

三浦市

1950　赤星直忠　「三浦郡菊名切妻造妻入家形横穴」『神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告書』第十七輯
1954　浜田勘太　「三崎の古墳」『三崎郷土史』第九輯
1954　赤星直忠　「神奈川県三浦郡三戸横穴群」『日本考古学年報』2
1954　赤星直忠　「神奈川県三浦郡菊名横穴群」『日本考古学年報』2
1954　赤星直忠　「神奈川県三浦郡菊名白山社境内横穴群」『日本考古学年報』2
1955　赤星直忠　「神奈川県三浦市窪がり横穴群」『日本考古学年報』4
1964　浜田勘太　『三浦市南下浦町菊名南下浦小学校前横穴古墳調査書』
1969　浜田勘太　「剣崎横穴古墳について」『横須賀考古学会年報』13・14
1975　浜田勘太　「三浦市高抜横穴古墳群について」『横須賀考古学会年報』18
1976　赤星直忠　「江奈横穴群」『日本考古学年報』27
1976　赤星直忠　「三浦市江奈横穴群」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』10
1979　赤星直忠　「窪がり横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「中里横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1985　飯島重一他　『三浦市晴海町横穴群の調査』　三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1987　岡本　勇他　『三浦市晴海町第２横穴群の調査』晴海横穴群文化財調査団
1987　赤星直忠他　『三浦市松輪大畑やぐら群の２次調査』三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1987　赤星直忠他　『三浦市海外やぐら群の調査』三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1987　赤星直忠他　『三浦市三崎町宮城やぐら群の調査』三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1988　赤星直忠他　『三浦市和田やぐら群の第２次調査』三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1988　岡本　勇他　『高抜横穴群の調査』三浦市教育委員会
1989　赤星直忠他　『三浦市和田やぐら群の第３次調査』三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1990　赤星直忠他　『三浦市矢作第２やぐら群の調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1990　赤星直忠他　『三浦市二町谷横穴群・西野やぐら群・松輪坪井横穴群の調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1991　塚田明治他　『三浦市矢作第３やぐら群の調査・西野やぐら群の第２次調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1994　川上久夫他　『和田やぐら群の第５次調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1995　川上久夫他　『二町谷神明社下海蝕洞窟遺跡・二町谷横穴群』急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1996　川上久夫他　『和田やぐら群の第７次調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団
1997　川上久夫他　『矢作第４やぐら群の調査』矢作やぐら群調査団
1999　上田　薫・依田亮一　「松輪坪井横穴墓群」『かながわ考古学財団調査報告』83

秦野市

1974　曽根博明他　「岩井戸横穴群」『秦野下大槻』秦野市教育委員会
1974　曽根博明他　「欠ノ上横穴群」『秦野下大槻』秦野市教育委員会
1975　柳川定春他　「天神脇横穴群緊急発掘調査報告書」『秦野の文化財』第11集　秦野市教育委員会
1975　杉山博久他　『岩井戸横穴墓群の調査概報』金目川流域横穴墓緊急調査団
1976　杉山博久　「尾尻沢の山横穴墓群」『尾尻八幡山』尾尻八幡山遺跡調査団
1978　杉山博久　『岩井戸横穴墓群の調査記録（Ⅱ）』岩井戸横穴墓群調査団
1979　赤星直忠　「尾尻沢ノ上横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「国立神奈川診療所内横穴」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「岩井戸横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「不弓引横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料

1980　杉山博久　「秦野市内の横穴墓群」『秦野の文化財』16集
1985　杉山博久　「不弓引横穴墓群」『秦野市史』別巻考古編
1985　杉山博久　「天神脇横穴墓群」『秦野市史』別巻考古編
1985　杉山博久　「岩井戸横穴墓群」『秦野市史』別巻考古編
1985　杉山博久　「欠の上横穴墓群」『秦野市史』別巻考古編
1985　杉山博久　「落合背戸横穴墓群」『秦野市史』別巻考古編
1985　杉山博久　「国立診療所内横穴墓群」『秦野市史』別巻考古編
1985　杉山博久　「下丹波原横穴墓群」『秦野市史』別巻考古編
1985　杉山博久　「尾尻沢の山横穴墓群」『秦野市史』別巻考古編
1997　村上吉正他　「小南遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』23
1997　下出俊浩　「鶴巻大椿横穴墓群」『秦野の文化財』第33集　秦野市教育委員会
1998　後藤喜八郎　『岩井戸横穴墓群発掘調査報告書』　同調査団
1998　柏木善治他　「鶴巻大椿遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』32

厚木市

1962　高瀬慎吾　「林、川瀬昇氏裏の横穴墳について」『厚木市文化財調査報告書』第三集
1966　鈴村　茂　「厚木市林横穴古墳調査報告」『厚木星文化財調査報告書』第四集
1969　西川　勝他　『厚木市温水大畑横穴古墳発掘調査報告書』　全国共済農業協同組合連合会
1979　赤星直忠　「榎田横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「竜鳳寺南横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「大厳寺横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「林横穴群」『神奈川県史』20　考古資料
1985　江藤　昭他　『山際横穴古墳』　同調査団
1987　藤井秀男他　『飯山横穴古墳』　同調査団
1987　藤井秀男　『下依知仲道遺跡』　同調査団
1993　中村義市　「長坂上横穴墓」『厚木市史』古代資料編（１）
1993　北川吉明　「山際横穴墓群」『厚木市史』古代資料編（１）
1993　飯田　孝　「林南横穴墓群」『厚木市史』古代資料編（１）
1993　飯田　孝　「天神谷戸横穴墓群」『厚木市史』古代資料編（１）
1993　望月幹夫　「上荻野丸山横穴墓群」『厚木市史』古代資料編（１）
1993　高瀬慎吾　「荻野追越横穴古墳」『厚木市史』古代資料編（１）
1993　望月幹夫　「中荻野向山横穴墓群」『厚木市史』古代資料編（１）
1993　中村義市　「公所横穴群」『厚木市史』古代資料編（１）
1998　藤井秀男　「白山坂横穴墓群」『厚木市史』古代資料編（２）
1998　山田雄二　「岩田山横穴墓」『厚木市史』古代資料編（２）
1998　古庄浩明・望月幹夫　「榎田横穴墓群」『厚木市史』古代資料編（２）
1998　渡辺　勲　「大畑横穴墓群」『厚木市史』古代資料編（２）
1998　井上隆之　「大厳寺横穴墓」『厚木市史』古代資料編（２）

大和市

1972　木村賛・高橋昌子　「神奈川県大和市『浅間神社西側横穴』出土人骨」『人類学雑誌』80-２
1975　江藤　昭　「下草柳横穴古墳群について」『大和市史研究』創刊号
1978　渡辺清助他　「浅間神社西側横穴古墳群発掘調査報告書」『大和市文化財調査報告書』第１集
1979　赤星直忠　「浅間神社西横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料

1978　曽根博明他　『浅間神社西側横穴古墳群第９号墳調査報告書』　大和市教育委員会
1980　曽根博明他　「下ノ原横穴墓」『大和市文化財調査報告書』第４集
1980　曽根博明他　「公所横穴群」『大和市文化財調査報告書』第４集
1982　相田　薫他　「南善ヶ谷戸横穴墓群」『大和市文化財調査報告書』第10集
1985　森本岩太郎　「大和市南善ヶ谷戸横穴出土人骨について」『大和市文化財調査報告書』第20集
1986　曽根博明　「浅間神社西側横穴墓群」『大和市史』７　資料編考古
1986　曽根博明　「下草柳横穴墓群」『大和市史』７　資料編考古
1986　曽根博明　「南善ヶ谷戸横穴墓群」『大和市史』７　資料編考古
1992　相田　薫　「下草柳九番耕地横穴墓群遺跡他」『大和市文化財調査報告書』第49集

伊勢原市

1936　石野　瑛　「中郡成瀬村の古墳と横穴」『考古集録』第三　武相考古會
1979　赤星直忠　「川上横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1990　伊勢原市教育委員会　「上粕屋・一ノ郷北遺跡発掘調査報告」『文化財ノート』第１集
1992　立花　実　「三ノ宮・下尾崎遺跡」『文化財ノート』第２集　伊勢原市教育委員会
1994　立花　実他　「三ノ宮・上栗原遺跡」『文化財ノート』第３集　伊勢原市教育委員会
1995　立花　実他　「三ノ宮・下尾崎遺跡　三ノ宮・上栗原遺跡発掘調査報告」『伊勢原市文化財調査報告書』第17集
1996　小寺春人・立花　実　「三ノ宮・下尾崎遺跡　三ノ宮・上栗原遺跡の横穴墓出土の人骨について」『文化財ノート』第４集　伊勢原市教育委員会

海老名市

1958　赤星直忠他　『杉久保土合横穴古墳群調査報告』　海老名町教育委員会
1962　石野　瑛　「神奈川県高座郡杉久保横穴群」『日本考古学年報』11
1963　石野　瑛　「神奈川県高座郡杉窪横穴群」『日本考古学年報』10
1979　赤星直忠　「衛生センターわき横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「杉久保土合横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1983　河野一也他　「杉久保遺跡」『日本窯業史研究所年報』Ⅱ
1998　福田　良　『上今泉横穴墓群発掘調査報告書』　同調査団
1998　國平健三　「上今泉横穴墓群」『海老名市史』１　資料編　原始・古代
1998　國平健三　「杉久保内藤原横穴墓群」『海老名市史』１　資料編　原始・古代
1998　國平健三　「杉久保中土合横穴墓群」『海老名市史』１　資料編　原始・古代
1998　國平健三　「杉久保富谷横穴墓群」『海老名市史』１　資料編　原始・古代
1998　國平健三　「本郷池端横穴墓群」『海老名市史』１　資料編　原始・古代
1998　國平健三　「衛生センター脇横穴墓群」『海老名市史』１　資料編　原始・古代

座間市

1956　下津谷達男　「神奈川県座間町鈴鹿横穴古墳」『考古学雑誌』第41巻４号
1964　大場磐雄他　「神奈川県座間町の横穴」『座間町文化財調査報告』１
1966　大場磐雄他　「蟹ヶ沢・鈴鹿遺跡」『座間町文化財調査報告』２
1967　大場磐雄・寺村光晴　「神奈川県高座郡根下横穴群」『日本考古学年報』15
1977　金子皓彦　「鷹番塚横穴」『座間市文化財調査報告』第３
1979　赤星直忠　「梨の木坂横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「根下横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1983　浅野　寛他　『大下横穴墓』　座間市教育委員会
2001　金子皓彦　「鈴鹿横穴墓群」『座間市史』１　原始・古代・中世資料編

2001　金子皓彦「根下横穴墓群」『座間市史』１　原始・古代・中世資料編
2001　金子皓彦「梨の木坂横穴墓群」『座間市史』１　原始・古代・中世資料編
2001　金子皓彦「石名坂横穴墓群」『座間市史』１　原始・古代・中世資料編
2001　金子皓彦「大下横穴墓群」『座間市史』１　原始・古代・中世資料編
2001　金子皓彦「鷹番塚横穴墓群」『座間市史』１　原始・古代・中世資料編
2001　金子皓彦「中羽根沢横穴墓群」『座間市史』１　原始・古代・中世資料編

南足柄市

1989　杉山博久「沼田城山横穴墓群」『南足柄市史』１　資料編　自然　原始　古代中世

綾瀬市

1925　石野　瑛「相模國高座郡澁谷村の横穴と綾瀬村の石棺」『考古学雑誌』第15巻３号
1993　加藤久美他「吉岡堀ノ内横穴墓群」『綾瀬市埋蔵文化財調査報告』３
1996　宮瀧交二「吉岡堀ノ内横穴群」『綾瀬市史』９　別編考古
1996　宮瀧交二「玄正橋横穴」『綾瀬市史』９　別編考古

葉山町　該当なし

寒川町

1956　赤星直忠『岡田越の山横穴古墳群―附大塚横穴古墳―』　寒川町郷土会
1957　石野　瑛「神奈川県高座郡岡田横穴群」『日本考古学年報』５
1963　赤星直忠「神奈川県高座郡越の山横穴群」『日本考古学年報』６
1975　赤星直忠「岡田横穴」『日本考古学年報』26　日本考古学協会
1979　赤星直忠「越の山横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1991　小林義典他『岡田越の山横穴墓群・岡田おこり塚（十三塚）』寒川町
1993　木村　勇「越の山横穴群を歩く」『寒川町史研究』第６号
1996　鈴木保彦「寒川町内の横穴墓」『寒川町史』８　別編考古
1996　鈴木保彦「越の山横穴墓群（№42遺跡）」『寒川町史』８　別編考古
1996　鈴木　尚「越の山横穴墓群第５号墓出土の人骨を読む」『寒川町史』８　別編考古
1996　鈴木保彦「（仮称）湘風園下横穴墓」『寒川町史』８　別編考古
1996　鈴木保彦「大塚横穴墓群（№57遺跡）」『寒川町史』８　別編考古
1996　鈴木保彦「法蓮寺坂横穴墓群（№65遺跡）」『寒川町史』８　別編考古
1996　鈴木保彦「（仮称）行安寺境内横穴墓群（№２遺跡）」『寒川町史』８　別編考古

大磯町

1887　山崎直方「大磯町近傍にある横穴塚穴の話」『東京人類学会雑誌』20号
1887　若林勝邦「相模國淘綾郡大磯及ビ山西村横穴実見記」『東京人類学会雑誌』22号
1935　石野　瑛「大磯町北三井家別邸内横穴群調査記」『考古集録』二　武相考古学會
1936　石野　瑛「國府村三井家城山荘と邸内横穴群調査後期」『考古集録』三　武相考古学會
1955　中川成夫「相模大磯町愛宕山横穴調査報告」『史苑』第16巻１号
1964　赤星直忠「揚谷寺谷横穴群」『神奈川県大磯町の横穴』大磯町文化財調査報告　第１冊
1964　赤星直忠「南井戸窪横穴群」『神奈川県大磯町の横穴』大磯町文化財調査報告　第１冊
1964　赤星直忠「清水北横穴群」『神奈川県大磯町の横穴』大磯町文化財調査報告　第１冊
1964　赤星直忠「庄ヶ久保横穴群」『神奈川県大磯町の横穴』大磯町文化財調査報告　第１冊
1964　赤星直忠「下田横穴群」『神奈川県大磯町の横穴』大磯町文化財調査報告　第１冊
1964　赤星直忠「権現田第７号穴」『神奈川県大磯町の横穴』大磯町文化財調査報告　第１冊
1965　赤星直忠「神奈川県中郡楊谷寺谷及び南井戸窪横穴」『日本考古学年報』13

1967　赤星直忠　「神奈川県中郡下田横穴」『日本考古学年報』15
1969　神澤勇一　「後谷原北横穴群」『神奈川県立博物館発掘調査報告書』第３号
1970　寺村光晴　「神奈川県中郡西おんざわ横穴群」『日本考古学年報』18
1979　赤星直忠　「たれこやと横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「東おんざわ横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「下田横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「堂後下横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「庄が久保横穴群」『神奈川県』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「城山横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「東小磯横穴集団」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「清水北横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「前谷原横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「南井戸窪横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「楊谷寺横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「愛宕山横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「滝の沢横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「後谷原北横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「釜口下横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「善福寺横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1985　大磯町教育委員会　「城山遺跡Ⅱ」『大磯町文化財調査報告書』第26集
1987　杉山博久他　「愛宕山下横穴墓群」『大磯町文化財調査報告書』第28集
1989　神澤勇一　「大磯丘陵横穴墳墓群（１）」『神奈川県立博物館発掘調査報告書』第18号
1990　鈴木一男・國見　徹　「中郡大磯町北中尾横穴墓群の調査」『第14回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
1992　川口徳治郎　「大磯丘陵横穴墳墓群（２）」『神奈川県立博物館発掘調査報告書』第19号
1993　鈴木一男他　「北中尾横穴墓」『大磯町文化財調査報告書』第39集
1994　國見　徹　「金久保北横穴墓群」『大磯町における発掘調査の記録』Ⅲ
1996　鈴木一男・國見　徹　「大磯町の横穴墓群」『考古論叢神奈河』第５集
2000　池上　悟　「南井戸窪横穴墓群実測調査報告」『大磯町史研究』第七号

二宮町

1887　若林勝邦　「相模國淘綾郡大磯及ビ山西村横穴実見記」『東京人類学会雑誌』22号
1970　砂生佳人　「神奈川県八重久保横穴群」『鶏声考古学研究会会報』一
1972　三上次男・大井晴男　「諏訪脇横穴群（東部分）」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』３
1973　赤星直忠　「諏訪脇横穴群（西部分）」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』４
1979　赤星直忠　「諏訪脇横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「柏木台横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「中里横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「釜野中谷戸入横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1988　栗原一也他　「中郡二宮倉上横穴墓群」『第12回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
1988　杉山博久他　『大日ヶ窪横穴墓群』　小田原考古学研究会
1990　杉山博久　『二宮倉上横穴墓群』　同調査団
1990　杉山博久　「大日ヶ窪横穴墓群」『二宮町史』資料編１
1990　杉山博久　「中里横穴墓群」『二宮町史』資料編１

1990　杉山博久　「諏訪脇横穴墓群」『二宮町史』資料編１
1990　杉山博久　「柏木台横穴墓群」『二宮町史』資料編１
1990　杉山博久　「中谷戸入横穴墓群」『二宮町史』資料編１
1990　杉山博久　「釜野八重久保横穴墓群」『二宮町史』資料編１
1990　杉山博久　「倉上横穴墓群」『二宮町史』資料編１
1990　杉山博久　「古屋敷横穴墓群」『二宮町史』資料編１

中井町

1900　大野延太郎　「相模國足柄上郡中村字雑色横穴調査」『東京人類学会雑誌』172
1962　赤星直忠　「神奈川県足柄上郡中井町の横穴群」『日本考古学年報』11
1979　赤星直忠　「雑色横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1979　赤星直忠　「上岩井戸横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1983　杉山博久　『庚申塚古墳・うわなくち横穴墓群』　同調査団
1990　榎本俊三他　「雑色横穴群」『中井町誌』
1990　榎本俊三他　「上岩井戸横穴群」『中井町誌』
1990　榎本俊三他　「下藤沢横穴群」『中井町誌』
1990　榎本俊三他　「比奈窪横穴群」『中井町誌』
1990　榎本俊三他　「うわなくち横穴群」『中井町誌』
1990　榎本俊三他　「久所横穴」『中井町誌』
1990　榎本俊三他　「松本横穴」『中井町誌』
1990　榎本俊三他　「宮向横穴群」『中井町誌』
2002　上田　薫・三瓶裕司　「比奈窪中屋敷横穴墓群」『かながわ考古学財団調査報告』136

大井町　該当なし

松田町

1987　清水信行・村上　始　「松田町・からさわ横穴墓群の調査」『第11回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
1989　清水信行他　『唐沢・河南沢』　からさわ・かなんざわ遺跡調査団

山北町　該当なし　　**開成町**　該当なし　　**箱根町**　該当なし　　**真鶴町**　該当なし

湯河原町

1963　石野　瑛　「神奈川県足柄下郡船岡横穴」『日本考古学年報』６
1979　赤星直忠　「船岡横穴」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1984　湯川悦夫　「船岡横穴」『湯河原町史』第１巻　原始・古代・中世・近世資料編

愛川町

1879　赤星直忠　「梅沢横穴」『神奈川県史』資料編20　考古資料

清川村　該当なし

城山町

1967　井上隆之　「城山町久保沢横穴」『築木文化』５
1979　赤星直忠　「久保沢横穴群」『神奈川県史』資料編20　考古資料
1987　青木　豊他　『津久井郡城山町春林横穴墓群分布調査及び発掘調査概報』　春林横穴墓群発掘調査団
1992　大貫英明　「春林横穴群」『城山町史』１　資料編　考古・古代・中世

津久井町　該当なし　　**相模湖町**　該当なし　　**藤野町**　該当なし

奈良・平安時代の宮ヶ瀬遺跡群の研究

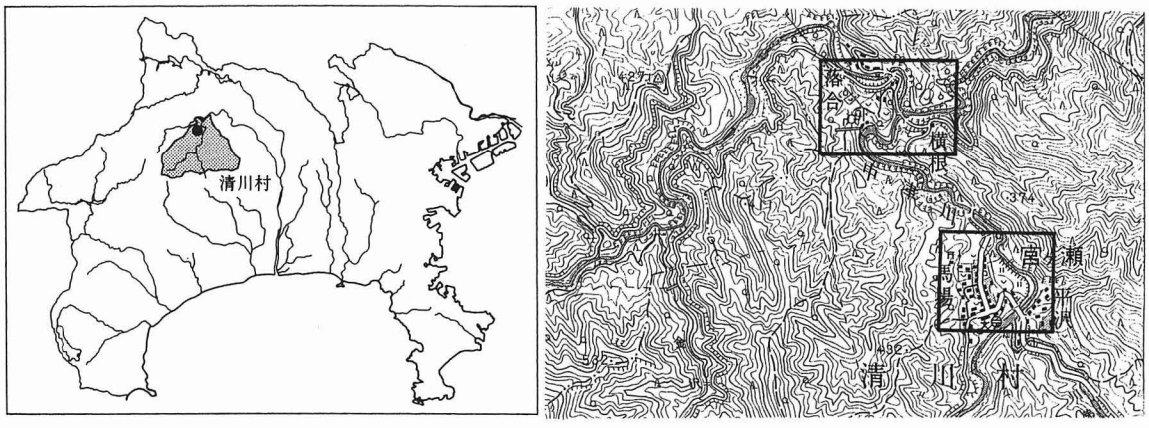
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

（1）はじめに

奈良・平安時代研究プロジェクトチームは今回から「奈良・平安時代の宮ヶ瀬遺跡群の研究」を共同研究の成果としてまとめていくこととする。これまでの共同研究は、墨書土器、刻書土器、カマド構造、研究史というテーマを設定して既に公表された資料を提示し、それに基づいて分析を加えたものである。この作業は県内の発掘調査報告書が集積される神奈川県立埋蔵文化財センターを拠点とするわれわれには比較的取り組みやすいものであった。

国・県等の公共事業に伴う発掘調査を主な業務とするかながわ考古学財団としては、発掘現場に出かけて初めてその市町村の歴史と接する機会が生まれる。一方、市町村では当該教育委員会やそれらが組織した調査機関、民間調査機関、大学等の研究者が発掘調査を行っていて、一過性の調査を行うわれわれが特定の地域研究を行うことはかなり難しい状況にあった。ところで、県の調査機関が調査した地域として愛甲郡清川村宮ヶ瀬に所在する宮ヶ瀬遺跡群がある。宮ヶ瀬遺跡群は1985（昭和60）年から1994（平成６）年にかけて建設省の宮ヶ瀬ダム建設に伴って神奈川県立埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われ、1999（平成11）年までに埋蔵文化財センターとかながわ考古学財団によって併せて18冊の報告書が刊行されている。一定期間に、特定の調査機関が調査した例は県内では横浜市港北ニュータウン内の遺跡群以外に皆無といってよく、地域研究の絶好の材料といえる。

宮ヶ瀬遺跡群の奈良・平安時代の遺跡は19地点、遺跡名としては13遺跡から成るが、遺跡群は大きく落合地区と宮ヶ瀬地区に所在している。落合地区が早戸川水系の７遺跡、宮ヶ瀬地区は川弟川水系の６遺跡である。前者が谷を挟み段丘上にそれぞれ独立して立地するのに対して、後者は既存の道路等で便宜的に区分されているに過ぎない。宮ヶ瀬地区の遺跡は東岸の上村遺跡、西岸の低位段丘上に立地する久保ノ坂遺跡にまず区分される。西岸の中・高位段丘上は谷を挟んで北側の北原遺跡と南側の南・馬場・表の屋敷の各遺跡とに分けられて、大きく四つの遺跡と考えていくことが適当であろう。そこで、今年度は遺跡の位置・地形と発見された遺構・遺物の概要を呈示し、来年度以降にそれらの問題点について論じることにする。



第１図　宮ヶ瀬遺跡群位置図（左図 縮尺 1/50,000）

（２）遺跡群の立地と環境

（ａ）　自然的立地

宮ヶ瀬遺跡群は神奈川県の北西部にある丹沢山地の北東部に位置し、相模川の支流である中津川の上流域の愛甲郡清川村宮ヶ瀬にある。中津川は丹沢山地を複雑に浸食し多くの支流があるが、海抜250ｍ付近で合流する主要な支流に川弟川と早戸川がある。川弟川との合流域より下流に小規模な段丘地形が両岸に形成され、宮ヶ瀬遺跡群はこれらの段丘上に立地している。

段丘は川弟川と中津川の合流点付近の「宮ヶ瀬地区」、早戸川と中津川の合流点付近の「落合地区」に主に分布し、高位段丘・中位段丘・低位段丘の三段に分けられる。それぞれ約22,000年前・約15,000年前・約10,000年前以降に形成されもので、調査時点での中津川の川原からの比高差は約50ｍ・約30ｍ・約20ｍ程であった。遺跡が立地する段丘面は最大でも幅200ｍ・長さ700ｍで、他は200ｍ四方以下と小規模である。

県内で人が常に住んでいる場所で最も寒いのは足柄下郡箱根町仙石原と宮ヶ瀬に隣接する津久井郡津久井町鳥屋であるとされているが、宮ヶ瀬も津久井町鳥屋に匹敵する気候であると考えられる。相模川低地の平野部に比べると山間地のゆえに年間降水量は多く、冬の寒さは厳しくなっている。年平均気温で平野部とは数度の温度差があり、降雪の回数や道路の凍結日数が多い。しかし、逆に夏はすごしやすく、幕末から明治初めにかけては外国人の避暑地となっていたこともある。

周辺の山地は杉・桧などの針葉樹からなる造成林と、伐採後に自然に育った落葉広葉樹を主体とした自然林に覆われている。そのため猿・鹿・猪などの動物や鷹・雉・山鳥などの鳥類が豊富に生息している。

（ｂ）　歴史的環境

宮ヶ瀬遺跡群からは旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、鎌倉、室町、戦国、江戸の各時代の遺跡が見つかっている。遺構が多いのは縄文時代・平安時代・江戸時代で、農業が生業の中心になる弥生時代から古墳時代にかけてと武士が政権をになった鎌倉時代の遺構・遺物は極めて少ない。古代では古墳～奈良時代は遺構・遺物が少なく、平安時代の前半のものが多く検出されている。

奈良・平安時代には宮ヶ瀬遺跡群のある丹沢山地の東～北東一帯は相模國愛甲郡に属してたと考えられている。愛甲郡には玉川・英那（アキナ）・印山（イヤマ）・船田（フナキタ）・六座（ムツクラ）・余部（アマルベ）の六郷があった。各郷の『和名類聚抄』への記載順は現存の地名から所在地を推定した場合、相模川の支流や本流添いに発達する水田可耕地である低地帯を中心にして南から北へ記述されていることがみてとれる。宮ヶ瀬は愛甲郡内でも北方に位置し、当時の郷名を比定すれば余部郷かその周辺地帯にあたると考えられる。

宮ヶ瀬の地名が文献資料に初めて登場するのは鎌倉時代後半の永仁二年（1294）の『足利氏所領奉行注文』であり、「相模國宮瀬村」は鎌倉幕府の有力御家人であった足利氏の所領となっていた。それは当時の宮ヶ瀬は幕府の有力者にとって相応の価値があると認められていたことを示している。また、宮ヶ瀬は江戸時代には大消費都市である江戸で使用する薪や炭、建築用の木材や漆などの林産物の供給地となっていた。

（河野喜映）

参考文献

池邊　彌　1981.2『和名類聚抄郡郷里驛名考證』
高橋純夫　1987.3「第１章　津久井町の自然　第２節　気象」『津久井町郷土誌』　津久井町教育委員会
木下　良ほか　1997.1『神奈川の古代道』　藤沢市教育委員会博物館準備担当
鈴木次郎ほか　1998.3「先人たちの軌跡－宮ヶ瀬遺跡群発掘調査の記録－」

第2図　落合地区（上図）、宮ヶ瀬地区（下図）遺跡位置図

（３）遺跡の概要

◎　落合地区

☆大野原（No.13Ｄ）遺跡

１．調査期間　1993.２.１～８.６

２．調査面積　約4,000㎡

３．遺跡立地　落合地区。中津川と早戸川の合流点付近、早戸川の南岸標高252～267ｍの高位段丘上に立地。

４．位置関係　谷を隔てて南東側に中原（No13Ｃ）遺跡がある。

５．遺 構 数　竪穴住居（2）　土坑（28）

６．遺構分布　竪穴住居と土坑とはそれぞれ占地が明確に分かれる。土坑は２～５基程度の群に分かれるものと単独のものがある。

７．遺構時期　竪穴住居H1号は９世紀後半～10世紀前半、H2号は不明。土坑は平安時代。

８．出土遺物　土師器（相模型坏・甕）　須恵器（坏・甕）　灰釉陶器（壺）

９．文 献 名　かながわ考古学財団1998.３「宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅣ」『かながわ考古学財団調査報告』40

☆中原（No.13Ｃ）遺跡

１．調査期間　1988.９.14～1989.１.18（第１次）　1992.４.２～1993.１.29（第２次）

２．調査面積　約8,900㎡

３．遺跡立地　落合地区。中津川と早戸川の合流点付近、早戸川の南岸標高242～262mの高位段丘上に立地。

４．位置関係　谷を隔てて南東側に上原（No13）遺跡、北西側に大野原（No13Ｃ）遺跡がある。

５．遺 構 数　竪穴住居（１）　土坑（９）　焼土址（１）

６．遺構分布　竪穴住居と土坑と焼土址とは占地が明確に分かれる。土坑の集中度は上原遺跡より散漫。

７．遺構時期　竪穴住居H1号は９世紀代。土坑はH2号が10世紀前半、他は平安時代。

８．出土遺物　土師器（相模型坏・甕，武蔵型甕）　須恵器（坏・甕）　灰釉陶器（碗・長頸瓶）

９．文 献 名　かながわ考古学財団1997.３「宮ヶ瀬遺跡群Ⅹ」『かながわ考古学財団調査報告』16

☆上原（No.13）遺跡

１．調査期間　1986.７.28～９.12（試掘）　1987.７.１～12.10（第１次）　1988.３.22～９.13（第２次）

２．調査面積　約6,300㎡

３．遺跡立地　落合地区。中津川と早戸川の合流点付近、早戸川の南岸標高236～249ｍの段丘上に立地。

４．位置関係　谷を隔てて南東側にサザランケ（No12）遺跡、北東側に中原（No13Ｃ）遺跡がある。

５．遺 構 数　竪穴住居（１）　土坑（６）

６．遺構分布　竪穴住居と土坑とは占地が明確に分かれる。土坑は下段面の中央より東に集中。

７．遺構時期　竪穴住居H1号は10世紀前半。土坑は平安時代。

８．出土遺物　土師器（相模型坏・甕）　須恵器（坏）

９．文 献 名　かながわ考古学財団1997.３「宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅡ」『かながわ考古学財団調査報告』18

☆サザランケ（No.12）遺跡

1．調査期間　1986.6.19～8.28（試掘）　1987.2.2～6.30　1987.12.11～1988.3.31

2．調査面積　約5,900㎡

3．遺跡立地　落合地区。中津川と早戸川の合流点付近、早戸川の南岸標高238～242mの高位段丘上に立地。

4．位置関係　浅い谷をはさみ、北西側の上原（No.13）遺跡へと続く。

5．遺構数

6．遺構分布

7．遺構時期

8．出土遺物

9．文献名　かながわ考古学財団1996.3「宮ヶ瀬遺跡群Ⅵ」『かながわ考古学財団調査報告』8

10．特記事項　古代の遺構・遺物は発見されていない

☆ナラサス（No.15）遺跡

1．調査期間　1985.7.1～8.7（試掘）　1985.8.7.～12.12　1986.10.1～1987.10.30

2．調査面積　約18,300㎡

3．遺跡立地　落合地区。中津川と早戸川との合流付近に位置し、中津川左岸段丘上にある。標高200～232mに立地し、北西から南東へ緩やかに傾斜する平坦面であり、中津川へは渓谷をなす。

4．位置関係　早戸川を隔てて西にサザランケ（No.12）遺跡、上原（No.13）遺跡、中原（No.13C）遺跡、大野原（No.13D）遺跡、前落合遺跡、小さな沢を隔てて北東にナラサス北（No.15北）遺跡がある。

5．遺構数　竪穴住居（6）　掘立柱建物（2）　竪穴状遺構（2）　土坑（95）　溝状遺構（1）

6．遺構分布　竪穴住居はほぼ中央部に、土坑は住居付近に30基ほどが集中し、さらに離れて南東地点に分布。溝状遺構は中央部で南東に張り出した弧状を描きながら一つの住居址を囲む。

7．遺構時期　竪穴住居H1号は10世紀前半、H2号は10世紀中頃、H3号は10世紀中頃、H4号は9世紀末～10世紀中頃、H5号は9世紀末～10世紀初頭、H6号は9世紀末～10世紀中頃、H1・2号掘立柱建物は9世紀末～10世紀中頃、竪穴状遺構は平安時代、溝状遺構は平安時代、土坑は平安時代。

8．出土遺物　土師器（相模型坏・甕，武蔵型甕,鬼高系坏）　須恵器（坏・長頸瓶・甕）　灰釉陶器（碗・壺・長頸瓶）　土製品（管状土錘）　鉄製品（鏃）

9．文献名　神奈川県立埋蔵文化財センター1991.11「宮ヶ瀬遺跡群Ⅱ」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書』21

☆ナラサス北（No.15北）遺跡

1．調査期間　1987.11.1～1988.5.9

2．調査面積　約6,500㎡

3．遺跡立地　落合地区。中津川と早戸川の合流付近から北東400mの中津川の左岸段丘上。標高226～232mに立地し、北西から南東へ緩やかに傾斜する平坦面で、中津川へは渓谷をなす。

4．位置関係　早戸川を隔てて西にサザランケ（No.12）遺跡、上原（No.13）遺跡、中原（No.13C）遺跡、大野原（No.13D）遺跡、前落合遺跡があり、沢を隔てて南西にナラサス（No.15）遺跡がある。

５．遺 構 数　竪穴住居（１）　土坑（17）

６．遺構分布　竪穴住居１棟は遺跡の東地点にあり、土坑はその住居址の周りに17基分布。

７．遺構時期　竪穴住居H1号は11世紀前半、土坑は平安時代。

８．出土遺物　ロクロ土師器（高台碗）

９．文 献 名　神奈川県立埋蔵文化財センター1991.11「宮ヶ瀬遺跡群Ⅱ」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』21

☆横根遺跡

１．調査期間　1979.４.４～４.12

２．調査面積　224㎡

３．遺跡立地　落合地区。中津川と早戸川との合流点付近、中津川南岸に形成された標高230～235ｍの段丘突端の平坦部に立地。

４．位置関係　中津川を隔てて西岸にサザランケ（№12）遺跡。

５．遺 構 数　竪穴住居（１）

６．遺構分布　竪穴住居１棟が検出されたのみ。

７．遺構時期　竪穴住居は９世紀。

８．出土遺物　土師器（相模型甕）　石製品（砥石）

９．文 献 名　神奈川県立埋蔵文化財センター1990.９「宮ヶ瀬遺跡群Ⅰ」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』21

◎　宮ヶ瀬地区

☆北原（№10・11北）遺跡

１．調査期間　1986.9.4～9.26（試掘）1993.8.9～9.6　1994.1.24～3.31　1994.4.4～1995.3.31

２．調査面積　約3,900㎡

３．遺跡立地　宮ヶ瀬地区。北原地区の北端、北東方向にのびる尾根の先端部で、東南側裾部の標高239～243ｍに立地。

４．位置関係　旧県道を挟んで東側に北原（№11）遺跡が、新県道を挟んで西側に北原（№10）遺跡がある。

５．遺 構 数　竪穴住居（２）　掘立柱建物（４）　土坑（108）　土壙墓（１）　焼土址（１）

６．遺構分布　標高241ｍの等高線よりも高い南西部に遺構は集中。それ以下の北東部は後世の削平により遺構の多くが消滅したと考えられる。

７．遺構時期　竪穴住居H1号は11世紀前半、H2号は９世紀前半。掘立柱建物はH1・3・4号が11世紀中期以降、H2号は11世紀前半。土坑は10世紀・11世紀代。土坑墓は平安時代末から中世初。

８．出土遺物　土師器（相模型甕・坏，武蔵型甕，ロクロ坏,甲斐型坏）　須恵器（坏・蓋）　鉄製品（短刀・鏃・刀子・紡錘車・鉄滓）　石製品（砥石）

９．文 献 名　かながわ考古学財団1998.３「宮ヶ瀬遺跡群ＸＶ」『かながわ考古学財団調査報告』41

☆北原（No.11）遺跡

1．調査期間　1985.12.3～1986.1.8（試掘）　1988.9.7～1989.2.17

2．調査面積　約2,300㎡

3．遺跡立地　宮ヶ瀬地区。中津川・川弟川合流地点下流の左岸に形成された段丘で,舌状に張り出した東端に立地。標高238～241m、段丘下の中津川氾濫原までの比高差は約30m、急崖をなす。

4．位置関係　西側には県道を挟んで北原（No.10，11北）遺跡が、南西側にはおよそ70m離れて北原（No.9）遺跡がある。

5．遺構数　竪穴住居（1）　土坑（7）　道状遺構（1）

6．遺構分布　竪穴住居は調査区のやや南寄りで検出、土坑は全体にまばらに分布。道状遺構は北半で検出したが、走向方向の一つは竪穴住居に向かい、その脇に土坑が点在。

7．遺構時期　竪穴住居H1号は8世紀後半～9世紀代。土坑・道状遺構は平安時代。

8．出土遺物　土師器（相模型甕・坏,甲斐型坏,鬼高系坏）　須恵器（碗・坏・蓋）

9．文献名　神奈川県立埋蔵文化財センター1994.2「宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』21

☆北原（No.10）遺跡

1．調査期間　1985.12.6～1986.1.20（試掘）　1986.9.18～9.30（試掘）　1988.5.7～9.14（第1次）　1993.7.1～1994.1.20（第2次）

2．調査面積　約15,500㎡

3．遺跡立地　宮ヶ瀬地区。清水沢の北側に広がる北原地区の北端、中津川西岸段丘面の標高243～263mに立地。西側で山に近接しているため地形の傾斜が強く、遺跡西端と東端の比高差は20mある。

4．位置関係　南側は熊野神社の参道を挟んで北原（No.9）遺跡、東側には県道を挟んで北原（No.11）遺跡、北東側に新設された県道を挟んで北原（No.10，11北）遺跡がある。

5．遺構数　竪穴住居（7）　掘立柱建物（1）　土坑（58）　集石（1）　遺物集中箇所（1）

6．遺構分布　竪穴住居・掘立柱建物・遺物集中箇所は西寄りに偏在。土坑は下段面東南部を除いて広範に分布するが、特に下段面北端北東寄り、上段面南端に集中し、残りは下段面西寄りに散在。

7．遺構時期　竪穴住居H1･2･3･5･7号は10世紀前半、H6号は9世紀前半、H4号は不明だが、10世紀前半か。掘立柱建物H1号は10世紀前半。土坑・集石・遺物集中箇所は平安時代。

8．出土遺物　土師器（相模型甕・坏，武蔵型甕，甲斐型坏・盤状坏）　須恵器（坏・碗・蓋・甕・壺・長頸瓶）　灰釉陶器（碗・壺・長頸瓶）　鉄製品（鏃・刀子・火打金・釘・棒状品・板状品・鉄滓）　石製品（砥石・火打石・敲石・磨石）　土製品（土錘）　その他（桃果核）

9．文献名　かながわ考古学財団1997.1「宮ヶ瀬遺跡群Ⅸ」『かながわ考古学財団調査報告』15

☆北原（No.９）遺跡

１．調査期間　1986.１.９～３.３（試掘）　1989.２.20～1991.11.15

２．調査面積　約17,000㎡

３．遺跡立地　宮ヶ瀬地区。清水沢の北側に広がる北原地区の南端、中津川西岸に広がる段丘上の北寄り、標高244～262ｍに立地。

４．位置関係　南側に清水沢を隔てて表の屋敷（№８）遺跡、北側に熊野神社参道を挟んで北原（№10）遺跡。

５．遺構数竪　竪穴住居（２）　土坑（26）　畝状遺構（１）

６．遺構分布　竪穴住居は下段面の北東と上段面南西に位置する。土坑各段にみられるが、２～５基が一定の範囲に集中して分布。溝状遺構は中断面の東北端にみられる。

７．遺構時期　竪穴住居H1号は平安時代、H2号は９世紀後半。土坑、溝状遺構は平安時代。

８．出土遺物　土師器（相模型坏・甕、武蔵型甕、鬼高系甕）　須恵器（坏・蓋・壺・長頸壺）　鉄製品（鉇状製品・円盤状製品）

９．文 献 名　神奈川県立埋蔵文化財センター1993.２「宮ヶ瀬遺跡群Ⅲ」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』21

☆表の屋敷（No.９）遺跡

１．調査期間　1991.７.１～1992.３.31　1992.４.２～1993.３.31　1993.４.２～６.30

２．調査面積　約8,600㎡

３．遺跡立地　宮ケ瀬地区。馬場・北原地区の台地上西半部のほぼ中央、清水沢の南、高位の段丘面の標高243～254ｍに立地。西から東へ緩やかに傾斜。

４．位置関係　清水沢を挟んで北側に北原（№９）遺跡、南側には馬場（№７）遺跡が隣接している。

５．遺 構 数　竪穴住居（14）　土坑（126）

６．遺構分布　東より（傾斜下部）に竪穴住居、土坑が密集して分布、竪穴住居は西寄りにも分布。

７．遺構時期　竪穴住居H1・H7・H10号は９世紀前半、H2号は不明、H3・H4号は９世紀中葉～後半、H5号は８世紀前半、H6号は８世紀末、H8・H9号は９世紀後半、H11号は10世紀中葉、H12・H13号は10世紀前半、H14号は７世紀末。土坑は古代。

８．出土遺物　土師器（相模型坏・碗・皿・甕,武蔵型甕,甲斐型坏・甕・蓋,鬼高系坏・甕,内黒坏）　須恵器（坏・蓋・壺・甕・平瓶）　灰釉陶器（碗・壺）　ロクロ土師器坏　鉄製品（鋤先・刀子・鏃・鉇）　土製品（土錘）　石製品（砥石・紡錘車・支脚）

９．文 献 名　かながわ考古学財団　1997.３「宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅢ」『かながわ考古学財団調査報告』19

☆馬場（No.６）遺跡

１．調査期間　1990.４.３～1991.６.28

２．調査面積　約12,700㎡

３．遺跡立地　宮ケ瀬地区。馬場・北原地区の中央東側、高位の段丘面の標高239～242ｍに立地。西から東へ緩やかに傾斜。

4．位置関係　県道を挟み西側に馬場（№7）遺跡、表の屋敷（№8）遺跡が、東側に馬場（№5）遺跡が隣接。

5．遺 構 数　竪穴住居（5）　土坑（195）

6．遺構分布　西よりに竪穴住居、全面に土坑が分布。

7．遺構時期　竪穴住居H1・H4・H5号は9世紀前半、H2・H3号は9世紀前半から中葉。土坑は平安時代。

8．出土遺物　土師器（相模型坏・甕，武蔵型甕，北武蔵型坏,南武蔵型坏,甲斐型坏，鬼高系坏・蓋，内黒坏・盤状坏）　須恵器（坏・壺・甕）　灰釉陶器（碗・壺）　鉄製品（刀子・鏃・鎌・鑿または鉇）　石製品（砥石・紡錘車）

9．文 献 名　かながわ考古学財団　1995.3「宮ヶ瀬遺跡群Ⅴ」『かながわ考古学財団調査報告』4

☆馬場（No.7）遺跡

1．調査期間　1986.3.3～3.31（試掘）　1992.7.1～1993.1.31、1995.4.4～1995.11.7

2．調査面積　約12,600㎡

3．遺跡立地　宮ヶ瀬地区。中津川と川弟川の合流地点付近左岸の河成段丘上。標高236～255mに立地。

4．位置関係　南（№2）遺跡の北側、№3遺跡の東に隣接。

5．遺 構 数　土坑（210）　道状遺構（2）

6．遺構分布　土坑は下段面や中断面の中央から北東部にかけてを除き調査区のほぼ全域に分布。道状遺構は上段面にみられる。

7．遺構時期　土坑は大半が、道状遺構は平安時代。

8．出土遺物　土師器（甕）　須恵器（甕）

9．文 献 名　かながわ考古学財団1997.3「宮ヶ瀬遺跡群ＸⅠ」『かながわ考古学財団調査報告』17

☆馬場（No.3）遺跡

1．調査期間　1986.4.25～5.13（試掘）　1991.12.9～1992.3.31

2．調査面積　約1,900㎡

3．遺跡立地　宮ヶ瀬地区。中津川と川弟川の合流地点付近左岸の河成段丘上。標高255～263mに立地。

4．位置関係　馬場遺跡の南西部に位置し、南東に南（№2）遺跡がある。

5．遺 構 数　礎石建物（1）　竪穴住居（7）　土坑（64）　溝状遺構（1）　焼土址（2）

6．遺構分布　仏堂跡と推定される礎石建物址は調査区東端、竪穴住居・土坑は調査区中央に位置。溝状遺構は礎石建物平坦面に堆積した覆土中。焼土址は礎石建物の北と南に分布。

7．遺構時期　礎石建物H1号は9世紀中頃。竪穴住居H1号は9世紀中葉～後半、H2号は9世紀代、H3号は9世紀前半～中葉、H4号は9世紀末～10世紀初頭、H5、7号は9世紀中葉、H6号は9世紀前半。土坑、溝状遺構は平安時代。

8．出土遺物　土師器（相模型坏・甕、武蔵型甕）　須恵器（坏・碗・瓶・甕・壺）　鉄製品（釘・紡錘車）　青磁（碗）

9．文 献 名　かながわ考古学財団1996.3「宮ヶ瀬遺跡群Ⅶ」『かながわ考古学財団調査報告』9

☆馬場（No.５）遺跡

１．調査期間　1989.１.19～３.３

２．調査面積　約700㎡

３．遺跡立地　宮ケ瀬地区。馬場・北原地区の中でも南東端の張り出し状となる中位段丘面の基部、標高235～238ｍに立地。南西から北東へ緩やかに傾斜。

４．位置関係　県道を挟んで西側に馬場（№6）遺跡が、東側崖面下には久保ノ坂（№4）遺跡がある。

５．遺 構 数　土坑（6）

６．遺構分布　土坑は全面に散漫な状態で分布。

７．遺構時期　土坑は平安時代。

８．出土遺物　なし

９．文 献 名　かながわ考古学財団1996.３「宮ヶ瀬遺跡群Ⅷ」『かながわ考古学財団調査報告』10

☆久保ノ坂（No.４）遺跡

１．調査期間　1986.４.８～４.25（試掘）　1989.10.23～1990.３.30（本格）

２．調査面積　約6,300㎡

３．遺跡立地　宮ケ瀬地区。馬場・北原地区の南東端、中津川西岸の低位の段丘面、標高226～232ｍに立地。南西から北東へ緩やかに傾斜。

４．位置関係　西側中位段丘の北側に馬場（№5）が、南側に南（№2）遺跡がある。

５．遺 構 数　竪穴住居（1）　土坑（41）

６．遺構分布　北端に竪穴住居、土坑は大半が北寄りに集中し、中央から南端にかけて20～30ｍ間隔で線上に分布。

７．遺構時期　竪穴住居は不詳、土坑は平安時代以降。

８．出土遺物　土師器（相模型甕）　須恵器（甕）　土製品（土錘）

９．文 献 名　かながわ考古学財団1998.３「宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅥ」『かながわ考古学財団調査報告』42

☆南（No.２）遺跡

１．調査期間　1986.４.９～５.９（試掘）　1989.２.９～1989.３.31　1989.４.３～1990.３.30

２．調査面積　約11,700㎡

３．遺跡立地　宮ヶ瀬地区。中津川と川弟川の合流地点付近の西岸に広がる段丘上にある。馬場・北原地区の立地する台地南端部。標高241～254ｍに立地し、上・下段、下段面東端部の３カ所。

４．位置関係　北側には馬場遺跡と段丘崖により区画された久保ノ坂遺跡と接している。

５．遺 構 数　竪穴住居（9）　土坑（58）

６．遺構分布　西側上段面に住居址、土坑は各段に分布。

７．遺構時期　竪穴住居H1・8号は10世紀前半～中葉、H2･7号は10世紀後半、H3号は９世紀中葉～後半、H4号は９世紀末～10世紀前半、H5号は10世紀初頭～前半、H6号は10世紀前半、H9号は９世紀後半。土坑は平安時代。

８．出土遺物　土師器（相模型坏・甕,武蔵型甕,甲斐型坏・蓋・甕,ロクロ坏）　須恵器（坏・碗・皿・

蓋・甕・壺・長頸壺）　灰釉陶器（碗・壺）　鉄製品（刀子・鏃・鉈）　土製品（土錘）　石製品（砥石・支脚）

9．文 献 名　かながわ考古学財団1996.3「宮ヶ瀬遺跡群Ⅷ」『かながわ考古学財団調査報告』10

☆上村（No.1）遺跡

1．調査期間　1986.5.12～6.20（試掘）　1986.10.1～1987.1.30

2．調査面積　約6,900㎡

3．遺跡立地　宮ヶ瀬地区。中津川と川弟川との合流点付近において中津川南岸に形成された段丘上に展開。標高232～239ｍに立地し、現地表面での地形はほぼ平坦。

4．位置関係　中津川を隔てて北西側の久保ノ坂（No.4）遺跡と対峙。

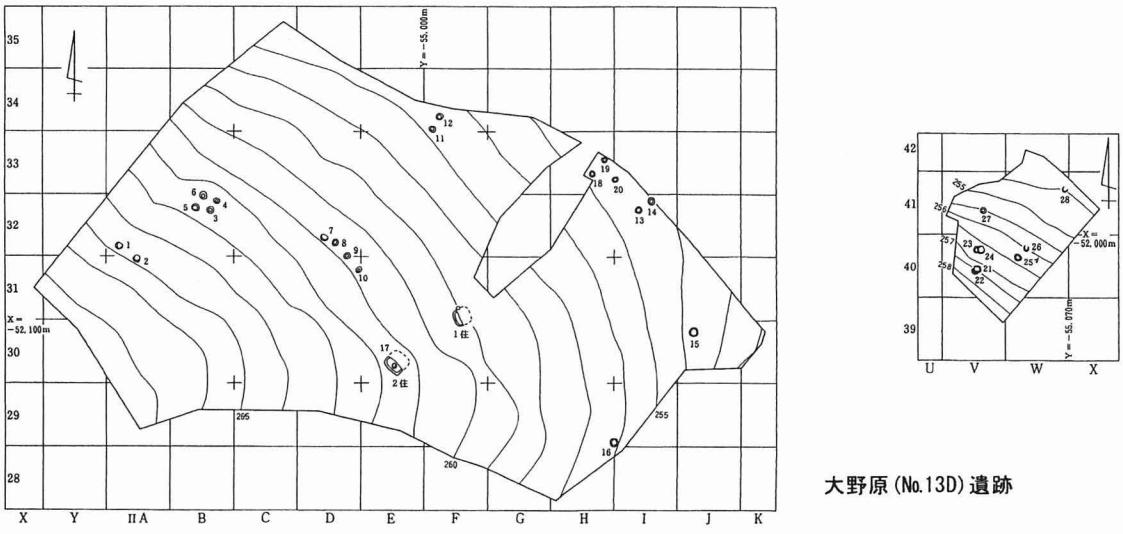
5．遺 構 数　竪穴住居（3）　土坑（69）

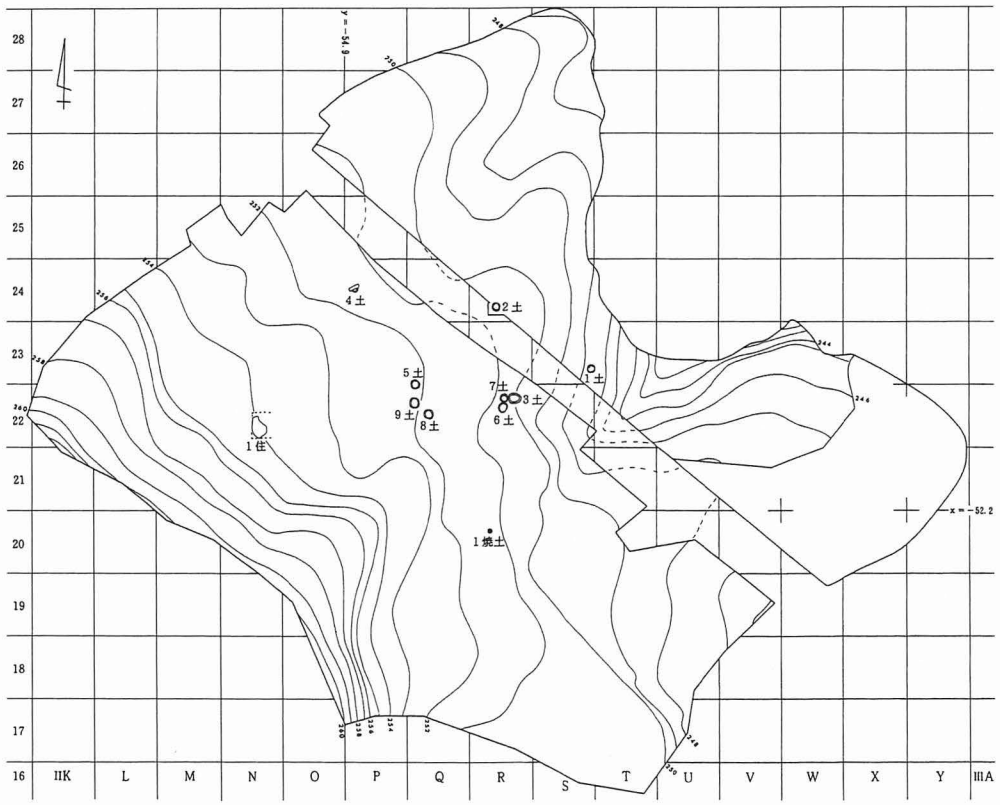
6．遺構分布　竪穴住居、土坑とも段丘中央部の微高地上とその周辺に集中。但し土坑は段丘の北東寄りにも５基ほど検出。

7．遺構時期　竪穴住居、土坑とも平安時代。但し青磁小片が出土したH56号土坑は中世まで下る可能性も。

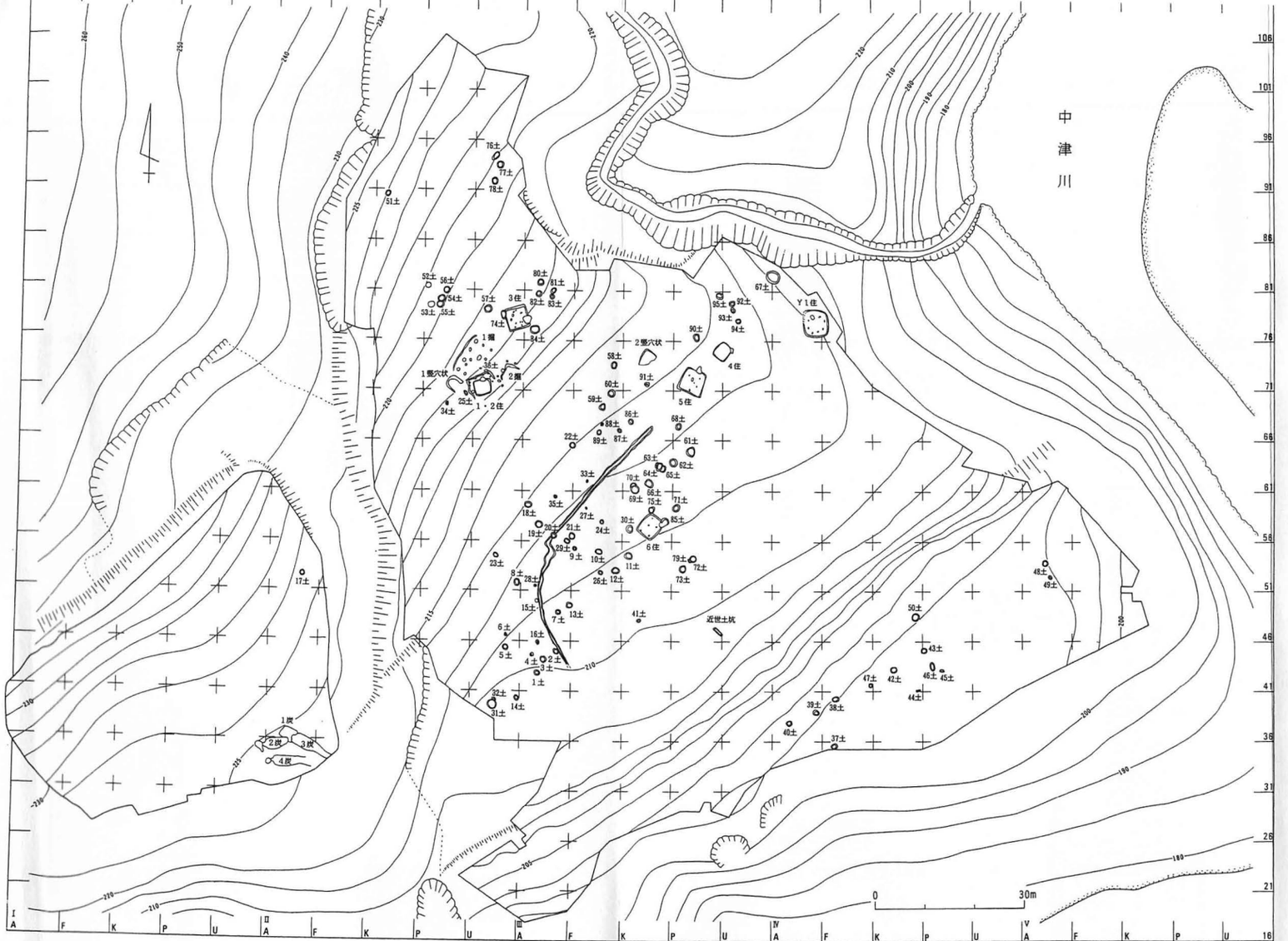
8．出土遺物　土師器（武蔵型甕，相模型甕）　青磁（龍泉窯系折縁鉢）

9．文 献 名　神奈川県立埋蔵文化財センター1990.9「宮ヶ瀬遺跡群Ⅰ」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』21



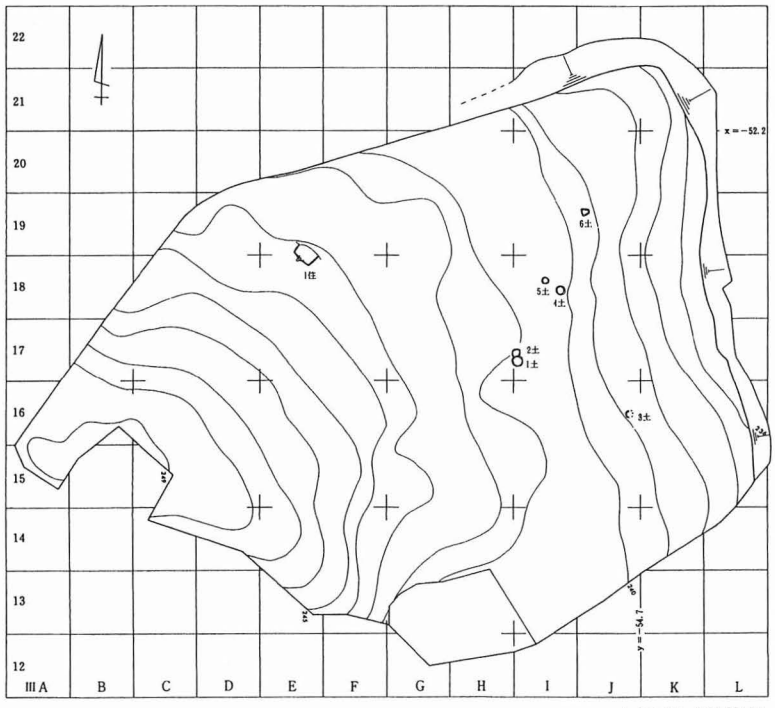


第３図　各遺跡の遺構全体図（２）

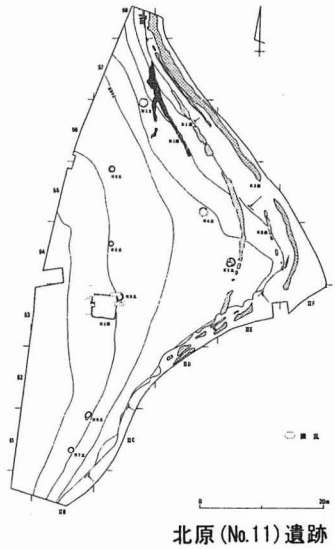


ナラサス(No.15)遺跡

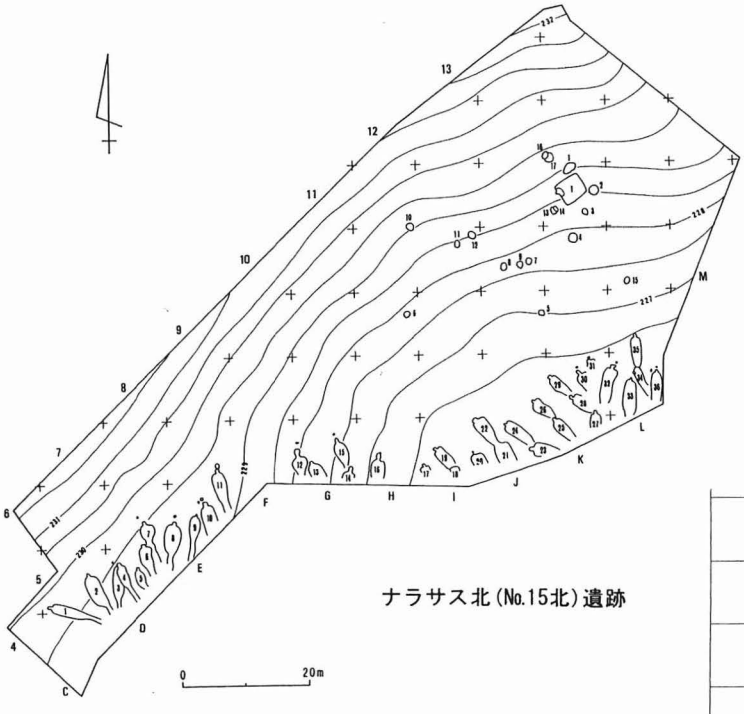
第4図　各遺跡の遺構全体図（1）



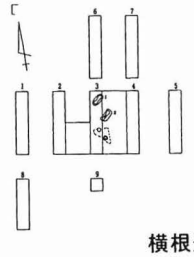
上原(No.13)遺跡



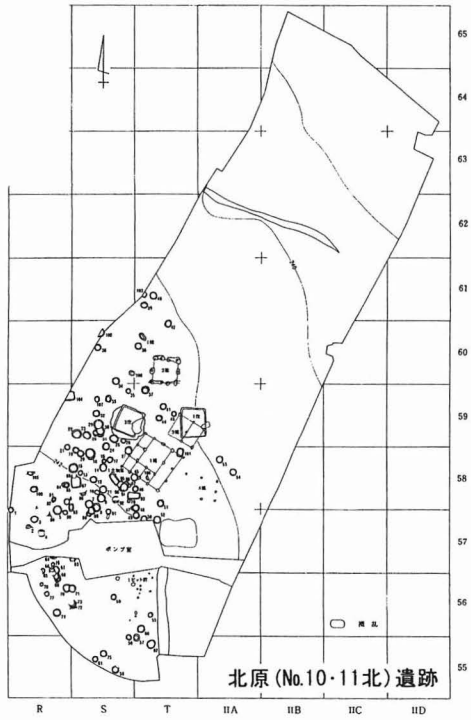
北原(No.11)遺跡



ナラサス北(No.15北)遺跡

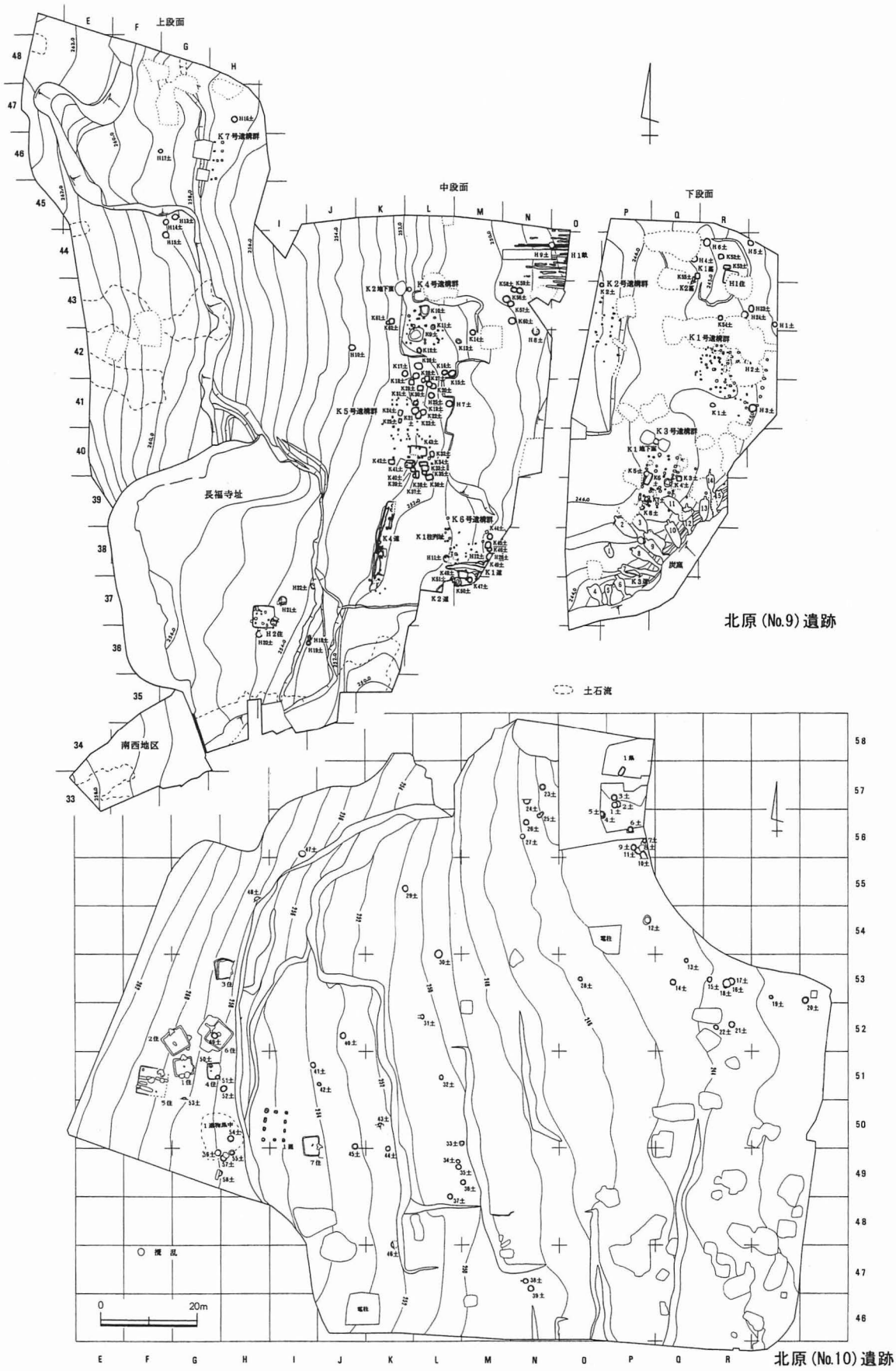


横根遺跡

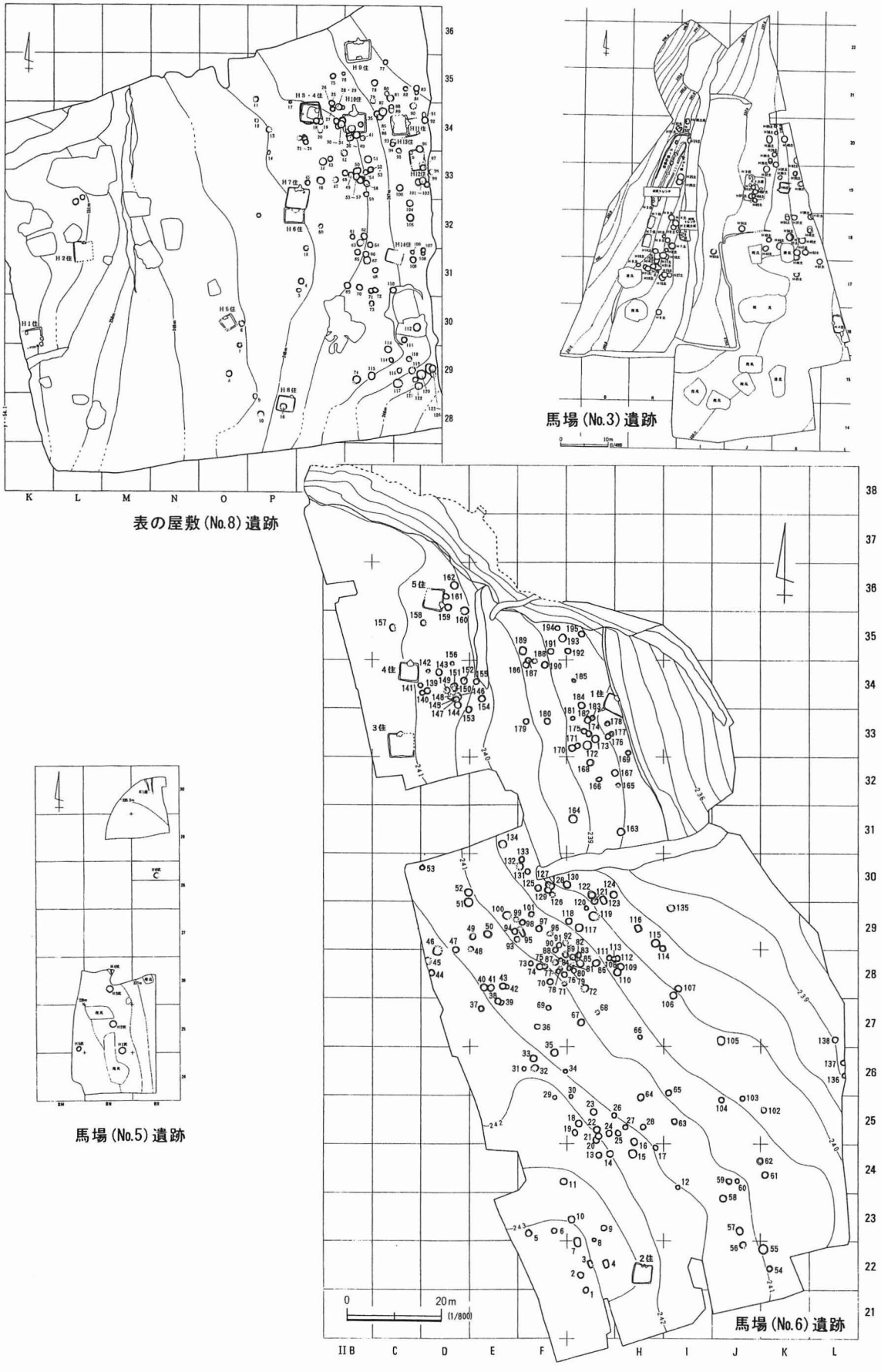


北原(No.10・11北)遺跡

第5図　各遺跡の遺構全体図（3）

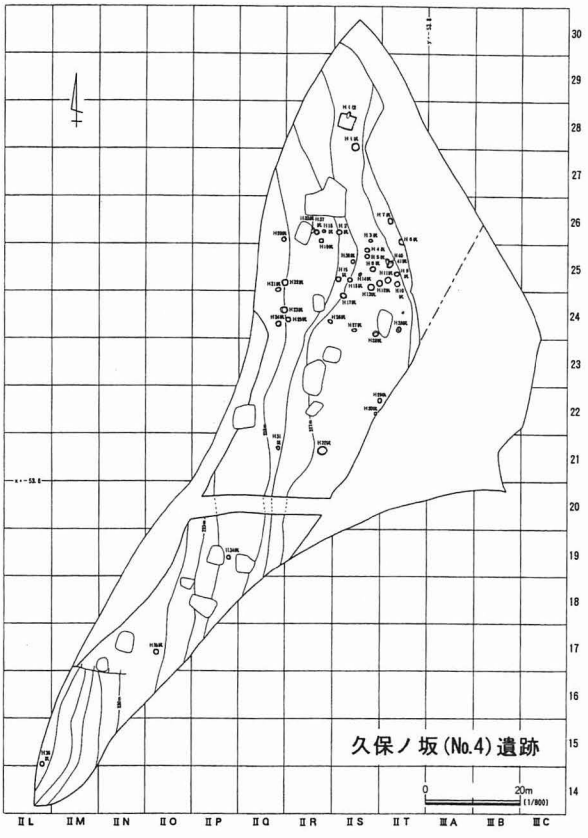


第6図　各遺跡の遺構全体図（4）

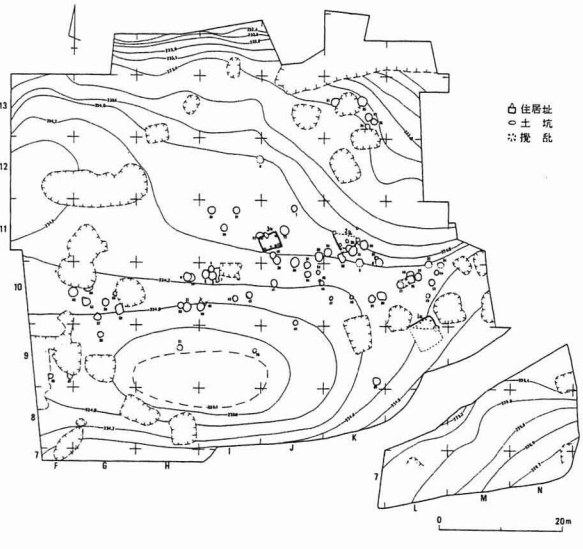


第7図　各遺跡の遺構全体図（5）

馬場(No.7)遺跡



久保ノ坂(No.4)遺跡



上村(No.1)遺跡

第8図　各遺跡の遺構全体図（7）

第9図　各遺跡の遺構全体図（6）

神奈川県内の「やぐら」集成（1）

中世研究プロジェクトチーム

はじめに

「やぐら」は、鎌倉およびその周辺を中心に分布する、中世の神奈川を特色づける遺構である。その地域的・時期的な特質は、中世考古学研究の先駆者である赤星直忠氏によって既に大正時代から認識され、その後多くの調査の成果が論考としてまとめられた。それが現在の「やぐら」研究の基礎となっている。これに加えて1980年代以降、主に急傾斜地崩壊対策工事に先立つ「やぐら」の発掘調査が各地で行われるようになり、近年ではそれらの成果も踏まえた研究が深化されている。

今回は、昭和50年代以降に発掘調査された「やぐら」の集成を行うこととした。それは、これまでに数多くの「やぐら」が様々な形で紹介され、分布図も作成されてきたが、実際に発掘調査が行われ、記録された資料の集成は行われて来なかったからである。もとより、集成は常に暫定的なものでしかあり得ないし、これらの調査は工事に先立って行われているため個々の「やぐら」群のごく一部を調査しているに過ぎない。しかし、「やぐら」の形態や年代的な検討には、出土遺物などが正確に記録されたこれらの資料の検討が不可欠である。「やぐら」の全容を明らかにするために、なすべきことは今なお山積しているが、その基礎となる資料として現状での調査成果をまとめ、今後個々の問題を検討していく足がかりとしたい。

例　言

1．本集成は2002年3月現在公刊されている発掘調査報告書に基づき、神奈川県内の「やぐら」を集成したものである

2．集成の対象としたのは、発掘調査が行われ、遺構の実測図が公にされているものである

3．上記以外の、分布調査、資料紹介、スケッチ等で知られているのみのものは除外した

4．集成表の項目は以下の通りである

（1）番号：県内の調査地点について番号を振った。おおむね北→南、東→西に振っている。この番号は第1図～第6図の番号に対応する

（2）遺跡名：原則的に引用文献記載の遺跡名を示した。一部、現行の神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳に基づき、文献とは異なる遺跡名を示しているものもある

（3）所在地：引用文献記載の住所・地番を示した

（4）基数：引用文献に記載されたやぐらの基数を示した。報文中「やぐら」と記載されていなくても、「やぐら」と判断されるものについても含めてカウントしている。また、「やぐら」として報告されていても、井戸など明らかに異なる遺構と判断される場合は除外した。

（5）立地：原則として、以下の3種に分類している

崖裾－丘陵斜面下部、低地に面するもの

中腹－丘陵斜面に位置するもの。前面に平場を切り出している場合がある

丘陵上－丘陵頂部、もしくは頂部近くに位置するもの

（6）調査年月日：引用文献に記載されている調査期間。一部不明なものもある

（7）備考：やぐら以外に発見された遺構、その他の関連事項など

（8）文献番号：末尾の文献一覧に対応する

第１表　神奈川県内「やぐら」集成一覧

番号	遺跡名	所在地	基数	立地	調査年月日	備考	文献番号
1	王禅寺通やぐら遺跡	川崎市麻生区王禅寺377	1	崖裾	2001年8月1日～8月8日		1
2	荒井やぐら	横浜市中区本牧荒井61	1	中腹	1980年3月10日		2
3	長昌寺前横穴群	横浜市金沢区富岡町1970付近	1	中腹	1971年12月6日～末	横穴墓転用	3
4	釜利谷東６丁目西地区やぐら群	横浜市金沢区釜利谷東6-4-10	10	崖裾	1998年7月1日～7月30日		4
		横浜市金沢区釜利谷東6-40	22	崖裾	2000年4月10日 ～6月23日		5
5	釜利谷やぐら群	横浜市金沢区釜利谷南2-44-8	10	崖裾	1996年7月19日 ～9月20日		6
6	釜利谷やぐら遺跡	横浜市金沢区釜利谷1574-1他	9	崖裾	1986年6月2日～7月5日, 12月1日～12月26日, 1987年6月22日～7月3日		7
7	瀬戸町やぐら群 （金龍院やぐら群）	横浜市金沢区瀬戸10	9	崖裾	1999年8月19日 ～9月17日 1999年12月1日 ～12月28日	一部横穴墓転用	8
8	泥牛庵脇やぐら群	横浜市金沢区六浦1	3	中腹	1986年11月25日 ～11月26日		9
		横浜市金沢区六浦1	2	崖裾	1987年7月22日 ～7月23日		10
9	上行寺裏遺跡 （瀬戸21番地やぐら群）	横浜市金沢区瀬戸21-3	6	崖裾	2001年5月24日 ～6月7日	掘削は4基、2基は測量のみ	11
10	上行寺東やぐら群	横浜市金沢区六浦２丁目2-18	2	崖裾	1996年7月19日 ～9月20日	玉砂利敷きを伴う	12
		横浜市金沢区六浦２丁目4195他	44	中腹 丘陵上	1984年8月～12月, 1986年7月23日 ～12月27日		13
11	六浦大道やぐら群	横浜市金沢区大道１丁目3312他	15	崖裾	1994年7月1日～9月30日, 1995年7月3日～8月23日		14
12	六浦北部遺跡	横浜市金沢区六浦1771他	9	中腹	1981年7月12日 ～8月24日		15
13	六浦三艘地区やぐら群	横浜市金沢区六浦1186	2	崖裾	2000年2月1日～2月9日		16
14	番場ヶ谷やぐら群	鎌倉市十二所字馬場236-2	20	中腹	1985年10月1日 ～11月16日		17
15	十二所稲荷小路遺跡内やぐら	鎌倉市十二所209	3	崖裾	1990年9月5日～9月20日		18
16	霧ヶ沢やぐら群	鎌倉市十二所馬場185	2	崖裾	1989年2月7日～2月11日		19
		鎌倉市十二所185	2	崖裾	1989年9月1日 ～10月15日		20
17	能満寺跡内やぐら群	鎌倉市十二所稲荷小路114	1	崖裾	2000年6月26日 ～6月29日		21
18	光触寺旧境内遺跡内やぐら	鎌倉市十二所字佐小路761北側	4	崖裾	1994年2月1日 ～3月30日		22
19	光触寺橋やぐら	鎌倉市十二所稲荷小路83-1	1	中腹	2000年7月12日 ～7月25日・7月28日 ～8月4日		21
20	明石谷やぐら群	鎌倉市十二所明石谷888	6	崖裾	2000年6月13日 ～6月23日・6月30日 ～7月19日・10月26日 ～10月27日		23
		鎌倉市十二所字明石谷922	1	崖裾	1996年2月23日 ～3月27日		24

番号	遺跡名	所在地	基数	立地	調査年月日	備考	文献番号
21	公方屋敷跡内やぐら	鎌倉市浄明寺御所之内272-1	3	崖裾	1988年11月25日 ～1989年1月10日		25
		鎌倉市浄明寺御所之内272-1	2	崖裾	1989年9月18日 ～10月17日		26
		鎌倉市浄明寺4丁目273-1	3	崖裾	1991年10月10日～12月10日		27
22	宅間ヶ谷やぐら群	鎌倉市浄明寺520	2	崖裾	1989年10月9日 ～11月16日		28
23	報国寺遺跡内やぐら	鎌倉市浄明寺520-1	1	崖裾	1991年7月19日～8月7日		29
24	宅間谷西第2やぐら群	鎌倉市浄明寺宅間2丁目519-4	2	崖裾	2000年8月4日 ～8月18日		30
		鎌倉市浄明寺2丁目520-1	1	崖裾	1997年10月30日 ～11月12日		31
25	瑞泉寺周辺遺跡内やぐら	鎌倉市二階堂644-2	2	崖裾	1989年11月26日 ～12月7日		32
		鎌倉市二階堂680-1	1	崖裾	1990年8月20日 ～9月10日	東側に平場遺構・壇状遺構	33
26	紅葉ヶ谷南やぐら群	鎌倉市二階堂紅葉ヶ谷734	2	崖裾	1999年6月1日～6月8日		34
27	覚園寺総門跡東やぐら群	鎌倉市二階堂会下428-イ	1	崖裾	2000年10月10日 ～11月7日		35
		鎌倉市二階堂字会下地内	1	崖裾	1994年2月1日～3月30日		36
28	会下山西やぐら群	鎌倉市二階堂会下312	2	崖裾	1986年11月1日 ～11月15日		37
29	天王寺跡やぐら	鎌倉市二階堂字中村地内	2	崖裾	1994年12月13日 ～1995年1月31日	檀状遺構	38
30	天王寺跡やぐら	鎌倉市二階堂字中村384-1	1	崖裾	1994年1月10日 ～3月30日		39
31	大倉幕府北遺跡	鎌倉市西御門2丁目816	2	崖裾	1999年9月8日～16日・12月13日～20日	玄室床面に摺鉢状土壙	40
32	杉本城跡内やぐら	鎌倉市二階堂851	2	崖裾	1989年9月25日 ～10月9日		41
33	杉本寺南やぐら	鎌倉市二階堂杉本	1	崖裾	1987年10月6日 ～10月14日		42
		鎌倉市二階堂地内	1	崖裾	1997年11月13日 ～11月19日		43
34	杉本寺周辺遺跡内やぐら	鎌倉市二階堂地内	3	崖裾	1995年1月13日 ～3月15日	うち2基は副室を伴う	44
35	宝戒寺裏やぐら	鎌倉市小町533-1	1	崖裾	1999年9月1日 ～9月7日	玄室床面に摺鉢状土壙	45
36	名越山王堂跡	鎌倉市大町3丁目1340	1	崖裾	1986年12月12日 ～1987年3月31日		46
37	山王堂東谷やぐら群	鎌倉市大町3丁目1375	1	崖裾	1999年6月9日～6月23日		47
		鎌倉市大町3丁目1354	5	崖裾	2001年1月5日 ～1月31日	玄室内に切石による基壇	48
38	八雲神社境内	鎌倉市大町1丁目	2	中腹	1993年10月		49
39	長勝寺やぐら	鎌倉市材木座2丁目2148	1	崖裾	1984年7月10日 ～7月17日		50
40	弁ヶ谷東やぐら群	鎌倉市材木座4丁目542	7	崖裾	1999年7月27日 ～8月18日		51
41	新善光寺跡内やぐら	鎌倉市材木座4丁目542-16	2	崖裾	1987年7月23日 ～8月31日		52
		鎌倉市材木座4丁目12	2	崖裾	1998年11月11日 ～1999年1月22日		53
42	弁ヶ谷遺跡やぐら群	鎌倉市材木座4丁目594	1	崖裾	1989年9月14日 ～10月17日		54

番号	遺跡名	所在地	基数	立地	調査年月日	備考	文献番号
43	弁ヶ谷やぐら群	鎌倉市材木座4丁目594-14	4	崖裾	1986年8月27日 ～9月6日・11月22日 ～110月28日		55
		鎌倉市材木座4丁目10-14隣接地	1	崖裾	2000年2月14日 ～2月17日		56
44	福泉やぐら群	鎌倉市今泉3丁目296-1	2	崖裾	1990年9月15日 ～10月15日		57
		鎌倉市今泉3丁目	9	崖裾	1991年10月10日 ～11月10日		58
		鎌倉市今泉3丁目	12	崖裾 中腹	1993年8月30日 ～1994年1月20日		59
		鎌倉市3丁目267	1	崖裾	1998年11月6日 ～11月11日		60
		鎌倉市今泉3丁目282	1	崖裾	1999年7月1日 ～7月6日		61
		鎌倉市今泉３丁目296-1	1	崖裾	1998年2月10日 ～2月16日		62
45	長勝寺跡内やぐら群	鎌倉市山ノ内527	3	崖裾	1998年11月9日 ～11月18日	側壁・奥壁に雛壇状施設	63
		鎌倉市山ノ内527	2	崖裾	1999年7月7日 ～7月14日		64
		鎌倉市山ノ内534-ロ	6	崖裾	2000年8月21日 ～9月29日		65
46	帰源院下やぐら群	鎌倉市山ノ内瑞鹿山388	5	崖裾	1982年10月7日 ～10月15日		66
		鎌倉市山ノ内瑞鹿山355他	2	崖裾	1984年7月3日～7月26日		67
		鎌倉市山ノ内392他	7	崖裾	1985年7月1日～7月31日		68
		鎌倉市山ノ内392	1	崖裾	1986年8月25日 ～8月30日		69
47	西管領屋敷南やぐら群	鎌倉市山ノ内西管領屋敷356	5	崖裾	1983年9月5日 ～10月1日		70
		鎌倉市山ノ西管領屋敷315他	4	崖裾	1984年7月3日～7月25日		71
		鎌倉市山ノ西管領屋敷370	1	崖裾	1986年9月4日～9月10日		72
48	正法寺遺跡	鎌倉市山ノ内地内	14	中腹 崖裾	1997年6月24日～11月21日,1998年2月18日～3月31日		73
49	尾藤谷やぐら群	鎌倉市山ノ内1443	8	崖裾	1999年1月6日 ～2月26日		74
50	多宝寺跡やぐら群	鎌倉市扇ヶ谷2丁目268	4	崖裾	1976年3月9日 ～3月24日		75
51	史跡巨福呂坂内やぐら	鎌倉市雪ノ下２丁目地内	1	崖裾	1995年1月18日 ～3月18日		76
		鎌倉市雪ノ下２丁目地内	4	崖裾	1997年1月13日 ～1月31日		77
		鎌倉市雪ノ下２丁目地内	2	崖裾	1995年9月25日 ～10月19日		78
52	無量寺ヶ谷やぐら群	鎌倉市御成町39-6	4	崖裾	1991年1月25日 ～8月27日	玄室床面に摺鉢状ピット	79
53	佐助ヶ谷遺跡内やぐら	鎌倉市佐助2丁目	2	崖裾	1996年2月2日 ～3月9日		80
		鎌倉市佐助2丁目801-1	1	崖裾	1993年1月20日 ～2月28日		81
54	佐助２丁目やぐら群	鎌倉市佐助２丁目地内	1	崖裾	1994年12月15日 ～1995年1月10日		82

番号	遺跡名	所在地	基数	立地	調査年月日	備考	文献番号
55	松谷寺やぐら	鎌倉市佐助1丁目地内	13	崖裾	1993年9月1日 ～1994年2月28日	土丹による閉塞、やぐら群の前面に平場	83
		鎌倉市佐助1丁目19-4	3	崖裾	1997年2月10日 ～3月10日	テラス状平場	84
		鎌倉市佐助1丁目地内	1	崖裾	1997年6月2日 ～6月24日		85
56	佐助ヶ谷遺跡内やぐら	鎌倉市佐助1丁目	3	崖裾	1989年9月11日 ～10月25日		86
57	長谷浅間神社下やぐら	鎌倉市長谷5丁目	1	崖裾	1985年8月8日 ～8月27日		87
58	笹目遺跡内やぐら	鎌倉市笹目町324・311-3	2	崖裾	1988年10月20日 ～1989年1月7日		88
59	長楽寺南やぐら群	鎌倉市長谷1丁目地内	4	崖裾	1993年9月29日 ～12月30日		89
60	極楽寺やぐら群	鎌倉市極楽寺2丁目56	4	崖裾	1998年11月30日 ～12月16日		90
		鎌倉市極楽寺2丁目56	1	崖裾	1999年6月24日 ～6月29日		91
		鎌倉市極楽寺2丁目56	1	崖裾	1999年7月15日 ～7月26日		92
61	極楽寺旧境内遺跡内やぐら	鎌倉市極楽寺1丁目地内	1	崖裾	1997年6月11日 ～6月24日		93
62	極楽寺前やぐら	鎌倉市極楽寺1丁目地内	1	崖裾	1995年3月7日 ～3月20日	横穴墓転用	94
		鎌倉市極楽寺1丁目地内	2	崖裾	1994年2月10日 ～4月20日	1基横穴墓転用	95
63	月影ヶ谷北やぐら群	極楽寺3丁目340	2	崖裾	1990年9月25日 ～10月10日		96
64	極楽寺近世やぐら	極楽寺4丁目986-1先	1	崖裾	1972年2月1日 ～2月3日		97
65	極楽寺西ヶ谷東側やぐら群	極楽寺4丁目855	4	崖裾	1998年12月4日 ～12月22日		98
		極楽寺4丁目855-1	1	崖裾	1999年12月14日 ～12月15日		99
66	極楽寺旧境内遺跡内やぐら	極楽寺4丁目	1	崖裾	1996年1月9日 ～2月9日		100
67	極楽寺旧境内遺跡内やぐら	鎌倉市極楽寺4丁目地内	2	崖裾	1994年12月20日 ～1995年1月17日		101
68	大仏切通内やぐら	鎌倉市笛田字馬場ヶ谷2200-5	1	崖裾	1995年5月15日 ～5月20日		102
69	子守神社砦遺跡	鎌倉市笛田2022	2	崖裾	1999年2月15日 ～3月15日	玄室床面に摺鉢状土壙	103
70	岡本砦跡内やぐら	鎌倉市岡本919	1	崖裾	1992年12月10日 ～12月31日		104
71	神光寺境内やぐら	藤沢市川名字通り町579	2	崖裾	1987年10月29日 ～11月21日		105
72	川名森久地区遺跡群	藤沢市川名264番地外	2	中腹	1988年5月15日～1989年3月31日,1990年9月4日～1993年2月4日	他に崖裾部で1基調査の記載があるが、図等はなし	106
73	天神やぐら群	横須賀市追浜本町1丁目	5	崖裾	1986年1月		107
		横須賀市追浜本町1丁目-93-2・3	4	崖裾	1986年6月		108

番号	遺跡名	所在地	基数	立地	調査年月日	備考	文献番号
74	和田山やぐら群	横須賀市追浜本町1	4	崖裾	1992年		109
		横須賀市追浜本町1	14	崖裾	1993年5月		110
		横須賀市追浜本町1丁目23－1～2号	3	崖裾	1994年9月		111
		横須賀市追浜本町1丁目9－11～11－4	7	崖裾	1995年11月		112
		横須賀市追浜本町1	4	崖裾	1996年9月10日～9月30日		113
		横須賀市追浜本町1－19	4	中腹	1996年5月10日		114
		横須賀市追浜本町1－88	1	崖地	1999年10月1日～10月5日		115
		横須賀市追浜本町1－10	1	崖地	2001年4月3日～4月9日		116
75	陣屋谷戸やぐら群	横須賀市追浜南町1－2－5	8	崖裾	1999年7月6日～8月11日		117
76	榎戸やぐら群	横須賀市浦郷2丁目33	1	中腹	1998年9月22日～9月24日		118
77	長浦地区遺跡第３遺跡	横須賀市長浦町1丁目16－2	2	中腹	1991年4月1日～6月6日		119
78	覚栄寺やぐら群	横須賀市走水2丁目地内	1	崖裾	2001年4月10日～4月23日		120
79	亀ヶ崎やぐら群	横須賀市鴨居3丁目817－ロ3	2	丘陵上	1993年5月29日～6月3日		121
80	長坂やぐら群	横須賀市長坂小字下の山1188～1227	11	中腹	1981年5月30日～7月		122
81	佐島やぐら群	横須賀市佐島583～586、548～562	3	崖裾	1985年・1986年		108
82	沼間やぐら群	逗子市沼間2丁目18－5	2	崖裾	1986年7月		123
		逗子市沼間2－1427－1	2	崖裾	1990年10月	横穴墓転用	124
83	敷沢やぐら群	逗子市池子米軍提供用地内	1	崖裾	1993年5月20日～9月28月	池子遺跡群No13地点	125
		逗子市池子米軍提供用地内	2	崖裾	1994年5月17日～8月29月	池子遺跡群No14地点	125
84	八坂やぐら群	逗子市池子米軍提供用地内	17	崖裾	1991年9月2日～1992年1月30月、5月8日～8月31日	池子遺跡群No15地点	126
		逗子市池子米軍提供用地内	1	崖裾	1992年10月1日～1993年1月13日	池子遺跡群No16地点	126
		逗子市池子米軍提供用地内	3	崖裾	1992年10月1日～1993年1月27日	池子遺跡群No17地点	126
		逗子市池子米軍提供用地内	2	崖裾	1992年6月9日～9月4月	池子遺跡群No18地点	126
85	仲川やぐら群	逗子市池子米軍提供用地内	6	崖裾	1993年2月8日～5月30月、1994年9月1日～10月31日	池子遺跡群No12地点	127
86	笹ヶ谷やぐら群	逗子市池子米軍提供用地内	2	崖裾	1991年3月19日～4月17月	池子遺跡群No11地点	128
87	久木松岡氏裏やぐら群	逗子市久木5丁目4－13号	7	崖裾	1995年10月		129
88	久木５丁目やぐら群	逗子市久木5丁目	1	崖裾	1991年3月		130
89	堂地谷やぐら群	逗子市久木5丁目10－11他	2	崖裾	1998年9月28日・10月13日～10月15日		131
		逗子市久木5丁目221－8他	1	崖裾	1999年10月28日～10月29日		132

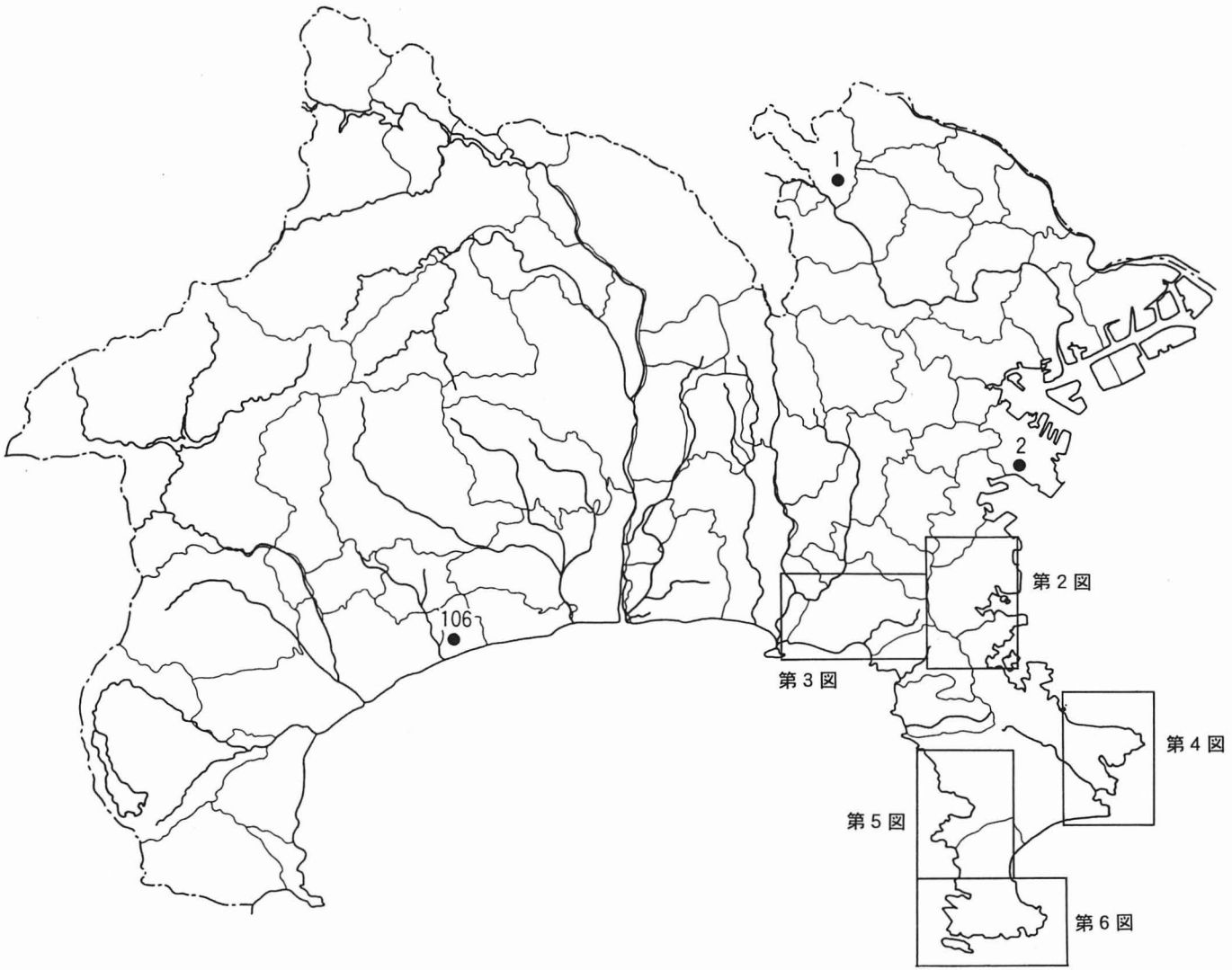
番号	遺跡名	所在地	基数	立地	調査年月日	備考	文献番号
90	名越遺跡内大谷戸やぐら群	逗子市久木9丁目1834－1他	2	崖裾	2000年6月26日 ～7月11日		133
91	久木4丁目やぐら群	逗子市久木4丁目	2	丘陵上	1997年10月9日 ～11月30月		134
92	げんじが谷やぐら群	逗子市小坪6丁目119･120－6 ･120－7	6	崖裾	1998年8月24日 ～9月9日		135
93	正覚寺やぐら群	逗子市小坪5丁目地内	3	崖裾	2001年7月17日 ～10月21日		136
94	逗子市小坪5丁目やぐら群	逗子市小坪5丁目13－17	1	崖裾	1996年1月		129
		逗子市小坪5丁目13－17	1	崖裾	1997年11月1日 ～12月27月		137
95	海前寺やぐら群	逗子市5－10－17	3	崖裾	1989年		138
96	和田やぐら群	三浦市初声町和田2657～2658	3	崖裾	1989年10月		139
		三浦市初声町和田3275	3	崖裾	1993年7月	やぐら状遺構を含む	140
		三浦市初声町和田3278	1	崖裾	1994年7月	やぐら状遺構	141
		三浦市初声町和田3357・3359	2	崖裾	1995年8月	やぐら状遺構	142
97	矢作やぐら群	三浦市初声町和田3296	3	崖裾	1984年7月 ～8月中旬		143
		三浦市初声町和田3307～3311	4	崖裾	1989年8月	やぐら状遺構を含む	144
		三浦市初声町和田3312～3320	9	崖裾	1992年10月	やぐら状遺構を含む	145
		三浦市初声町和田3343～3355	5	崖裾	1996年9月4日 ～10月4日		146
98	小網代やぐら	三浦市三崎町小網代	1	崖裾	1986年6月		147
99	松輪間口やぐら	三浦市南下浦松輪間口	1	崖裾	1994年9月		148
100	松輪大畑やぐら	三浦市南下浦松輪322－7	1	崖裾	1983年8月		149
		三浦市南下浦松輪304・306	3	崖裾	1987年1月		150
		三浦市南下浦松輪300・312	6	崖裾	1987年6月		151
101	海外やぐら群	三浦市海外町11－6～8	5	中腹	1987年5月		152
102	奉行所跡やぐら群	三浦市三崎1丁目	2	崖裾	1985年6月		153
103	西野やぐら群	三浦市三崎5丁目	2	崖裾	1989年度		154
		三浦市三崎5丁目	4	崖裾	1991年度		145
		三浦市三崎5丁目	1	崖裾	1993年11月		155
104	三崎宮城やぐら群	三浦市三崎5丁目	4	崖裾	1987年		156
		三浦市三崎5丁目10・11	4	崖裾	1988年12月		157
105	歌舞島やぐら群	三浦市白石町3805－1･3･5･8･13	4	崖裾	1998年8月17日 ～8月21日		158
106	長峯所在やぐら	中郡二宮町長峯	1	崖裾	1981年2月22日,3月8日		159

参考文献

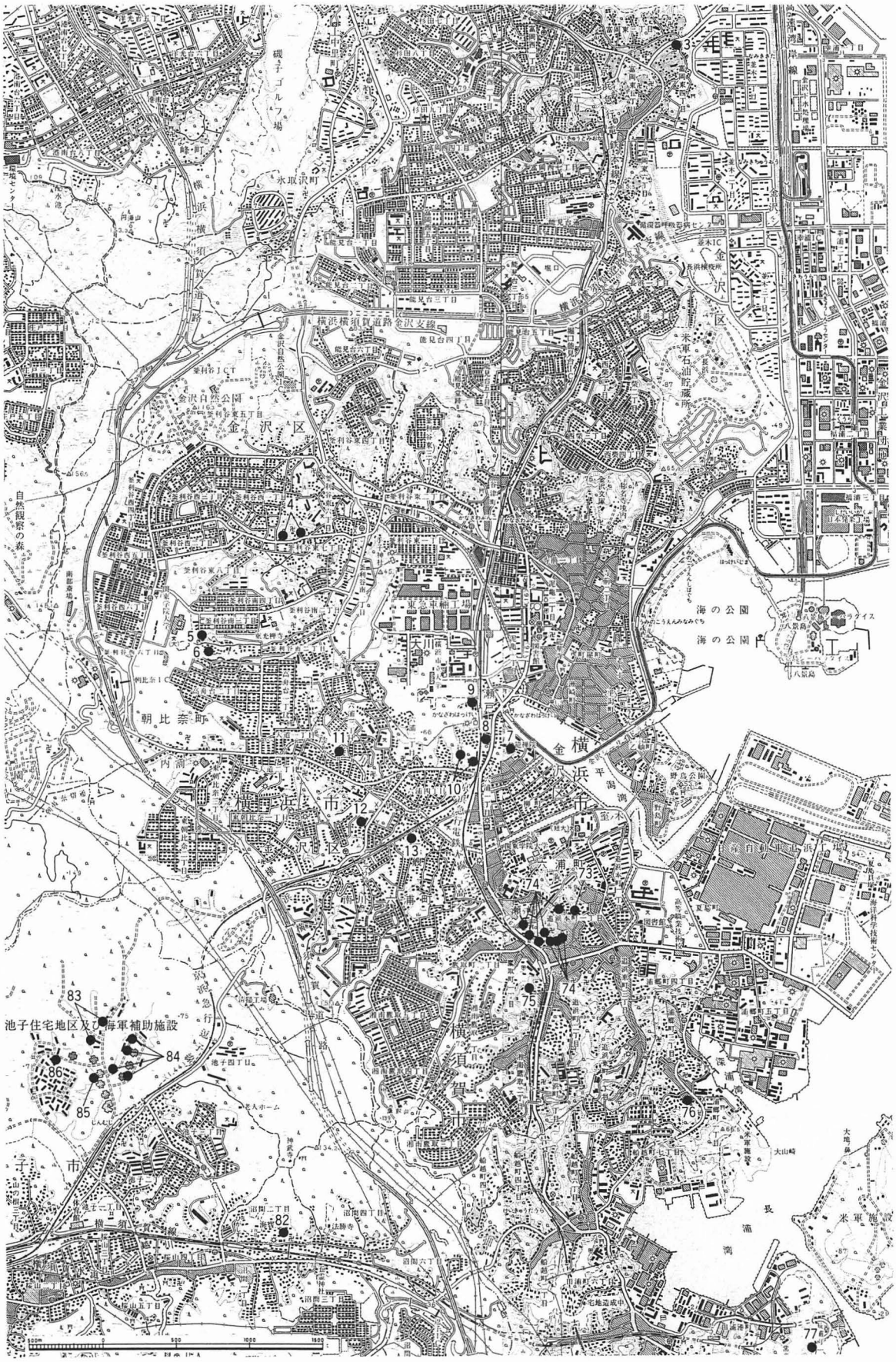
1．かながわ考古学財団　2001「王禅寺　通やぐら遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』125
2．神奈川県教育委員会　1983「横浜市中区本牧荒井地区発見の中世墓地調査報告」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』25
3．横浜市教育委員会　1971「横浜市金沢区富岡町長昌寺前横穴群発掘調査報告書」『昭和46年度横浜市埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』横浜市埋蔵文化財調査会
4．かながわ考古学財団　1999「釜利谷東６丁目西地区やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』63
5．かながわ考古学財団　2001「釜利谷東６丁目西地区やぐら群（２次）」『かながわ考古学財団調査報告』107
6．東国歴史考古学研究所　1998「釜利谷やぐら群」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
7．武部喜充・近江屋成陽　1987『釜利谷やぐら遺跡』
8．かながわ考古学財団　2000『瀬戸町やぐら群・横穴墓』かながわ考古学財団調査報告86
9．神奈川県立埋蔵文化財センター・神奈川県土木部横浜治水事務所　1987『泥牛庵脇やぐら群』
10．神奈川県立埋蔵文化財センター・神奈川県土木部横浜治水事務所　1988『泥牛庵脇やぐら群Ⅱ』
11．かながわ考古学財団　2001「上行寺裏遺跡（瀬戸21番地やぐら群）」『かながわ考古学財団調査報告』124
12．東国歴史考古学研究所　1998「上行寺東やぐら群」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
13．上行寺東やぐら群遺跡調査団　2002『上行寺東やぐら群遺跡発掘調査報告書』
14．財団法人横浜市ふるさと歴史財団　1987『六浦大道やぐら群』
15．岡崎文喜他　1982『六浦北部遺跡』
16．かながわ考古学財団　2000「六浦三艘地区やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』99
17．永井正憲他　1986『馬場ヶ谷やぐら群発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
18．十二所稲荷小路遺跡内やぐら発掘調査団　1992「十二所稲荷小路遺跡内やぐら」『平成２年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
19．十二所稲荷小路遺跡内やぐら発掘調査団　1990「十二所稲荷小路遺跡内やぐら」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
20．十二所稲荷小路遺跡内やぐら発掘調査団　1990『十二所稲荷小路遺跡内やぐら』
21．かながわ考古学財団　2001「光触寺橋やぐら・大江稲荷跡所在やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』113
22．東国歴史考古学研究所　1998「光触寺旧境内遺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
23．かながわ考古学財団　2001「一心院跡所在やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』112
24．東国歴史考古学研究所　1998「明王院門前遺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
25．公方屋敷跡内やぐら発掘調査団　1990「公方屋敷跡内やぐら」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
26．公方屋敷跡内やぐら発掘調査団　1991「公方屋敷跡内やぐら」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
27．公方屋敷跡内やぐら発掘調査団　1993「公方屋敷跡内やぐら」『平成３年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
28．宅間ヶ谷やぐら群発掘調査団　1991「宅間ヶ谷やぐら群」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
29．東国歴史考古学研究所　1994『報国寺遺跡内やぐら発掘調査報告書』東国歴史考古学研究所調査研究報告第１集
30．かながわ考古学財団　2001「宅間谷西第２やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』１１４
31．東国歴史考古学研究所　1999「報国寺遺跡」『中世石窟遺構の調査Ⅲ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第２２集
32．瑞泉寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団　1991「瑞泉寺周辺遺跡内やぐら」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
33．瑞泉寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団　1992「瑞泉寺周辺遺跡内やぐら」『平成２年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
34．かながわ考古学財団　2000「鎌倉城（二階堂紅葉ヶ谷）所在やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』88
35．かながわ考古学財団　2001「覚園寺総門跡東やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』115
36．東国歴史考古学研究所　1998「No331遺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
37．二階堂会下やぐら群発掘調査団　1987『会下山西やぐら発掘調査報告書』
38．東国歴史考古学研究所　1996「天王寺跡やぐら」『中世石窟遺構の調査』東国歴史考古学研究所調査研究報告第７集
39．東国歴史考古学研究所　1998「天王寺跡やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
40．大倉幕府北遺跡発掘調査団　1999『大倉幕府北遺跡発掘調査報告書』
41．杉本城跡内やぐら発掘調査団　1991「杉本城跡内やぐら」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
42．報国寺境内やぐら群発掘調査団・杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団　1988『報国寺境内やぐら・杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査報告書』
43．東国歴史考古学研究所　1999「杉本寺やぐら群」『中世石窟遺構の調査Ⅲ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第22集
44．東国歴史考古学研究所　1996「杉本寺周辺遺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査』東国歴史考古学研究所調査研究報告第７集
45．神奈川県教育委員会　2000「鎌倉市小町所在通称「紅葉山やぐら」の調査」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』42
46．山王堂跡発掘調査団　1990『名越・山王堂跡発掘調査報告書』
47．かながわ考古学財団　2000「鎌倉城（大町３丁目）所在やぐら」『かながわ考古学財団調査報告』89
48．かながわ考古学財団　2001「山王堂東谷やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』117
49．東国歴史考古学研究所　1994『中世山腹墓所遺跡の調査　No302遺跡内やぐら（八雲神社境内）発掘調査報告書』東国歴史考古学研究所調査研究報告第８集

50. 長勝寺遺跡（やぐら）発掘調査団　1985『長勝寺遺跡（やぐら）発掘調査報告書』
51. かながわ考古学財団　2000「弁ヶ谷東やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』94
52. 新善光寺跡やぐら発掘調査団　1988『新善光寺跡やぐら発掘調査報告書』
53. かながわ考古学財団　1999「鎌倉城（№87）所在やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』74
54. 弁ヶ谷遺跡やぐら群発掘調査団　1991「弁ヶ谷遺跡やぐら群」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
55. 相武考古学研究所　1986『弁ヶ谷やぐら群』
56. かながわ考古学財団　2000「弁ヶ谷やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』98
57. №342遺跡内やぐら発掘調査団　1992「№342遺跡内やぐら」『平成２年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
58. №342遺跡内やぐら発掘調査団　1993「№342遺跡内やぐら」『平成３年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
59. 福泉やぐら群発掘調査団　1993「福泉やぐら群」『平成５年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
60. かながわ考古学財団　1999「福泉遺跡（№342）所在やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』70
61. かながわ考古学財団　2000「福泉やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』91
62. 東国歴史考古学研究所　1999「福泉遺跡」『中世石窟遺構の調査Ⅲ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第22集
63. かながわ考古学財団　1999「長勝寺跡（№８８）所在やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』71
64. かながわ考古学財団　2000「長勝寺跡所在やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』92
65. かながわ考古学財団　2001「長勝寺跡内やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』116
66. 円覚寺境内西やぐら群発掘調査団　1983『円覚寺境内西やぐら群発掘調査報告書』
67. 神奈川県立埋蔵文化財センター　1984『西管領屋敷やぐら群』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告６
68. 神奈川県立埋蔵文化財センター　1985『帰源院下やぐら群』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告９
69. 相武考古学研究所　1986『帰源院下第８号やぐら』
70. 西管領屋敷南やぐら群発掘調査団　1984『西管領屋敷南やぐら群発掘調査報告書』
71. 神奈川県立埋蔵文化財センター　1984『西管領屋敷やぐら群』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告６
72. 相武考古学研究所　1986『西管領屋敷南やぐら群』
74. かながわ考古学財団　1999「尾藤谷やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』64
75. 多宝律寺遺跡発掘調査団　1976『多宝律寺遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
76. 東国歴史考古学研究所　1996「史跡巨福呂坂内やぐら」『中世石窟遺構の調査』東国歴史考古学研究所調査研究報告第７集
77. 東国歴史考古学研究所　1998「史跡巨福呂坂内やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
78. 東国歴史考古学研究所　1999「史跡巨福呂坂内やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅲ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第22集
79. 鎌倉市教育委員会　1992「無量寺跡（№196）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』８
80. 佐助ヶ谷遺跡内やぐら発掘調査団　1997『佐助ヶ谷遺跡内やぐら』
81. 佐助ヶ谷遺跡内やぐら発掘調査団　1994「佐助ヶ谷遺跡内やぐら」『平成４年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
82. 東国歴史考古学研究所　1996「佐助２丁目やぐら群」『中世石窟遺構の調査』東国歴史考古学研究所調査研究報告第７集
83. 東国歴史考古学研究所　1998「松谷寺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
84. 東国歴史考古学研究所　1998「松谷寺やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
85. 東国歴史考古学研究所　1998「松谷寺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
86. 佐助ヶ谷遺跡内やぐら発掘調査団　1991「佐助ヶ谷遺跡内やぐら」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
87. 高徳院周辺遺跡（やぐら）発掘調査団　1986『高徳院周辺遺跡（やぐら）発掘調査報告書』
88. 笹目遺跡内やぐら発掘調査団　1990「笹目遺跡内やぐら」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
89. 東国歴史考古学研究所　1998「長楽寺南やぐら群」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
90. かながわ考古学財団　1999「極楽寺やぐら群（№１２８）」『かながわ考古学財団調査報告』72
91. かながわ考古学財団　2000「極楽寺やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』90
92. かながわ考古学財団　2000「極楽寺やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』93
93. 東国歴史考古学研究所　1998「長楽寺南やぐら群」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
94. 東国歴史考古学研究所　1996「極楽寺旧境内遺跡内横穴墓」『中世石窟遺構の調査』東国歴史考古学研究所調査研究報告第７集
95. 東国歴史考古学研究所　1998「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
96. 極楽寺旧境内遺跡内やぐら発掘調査団　1992「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」『平成２年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
97. 鎌倉市教育委員会　1983「４.極楽寺旧境内北やぐら」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ
98. かながわ考古学財団　1999「一升桝遺跡（№293）所在やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』73
99. かながわ考古学財団　2000「一升枡遺跡所在やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』100
100. 極楽寺旧境内遺跡内やぐら発掘調査団　1998『極楽寺旧境内遺跡内やぐら』
101. 東国歴史考古学研究所　1996「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査』東国歴史考古学研究所調査研究報告第７集
102. 東国歴史考古学研究所　1999「大仏切通内やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅲ』東国歴史考古学研究所調査研究報告第22集
103. 子守神社砦遺跡発掘調査団　2000『子守神社砦遺跡発掘調査報告書』
104. 岡本砦跡内やぐら発掘調査団　1994「岡本砦跡内やぐら」『平成４年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
105. 藤沢市教育委員会　1989「神光寺境内やぐらの調査」『藤沢市文化財調査報告』第24集

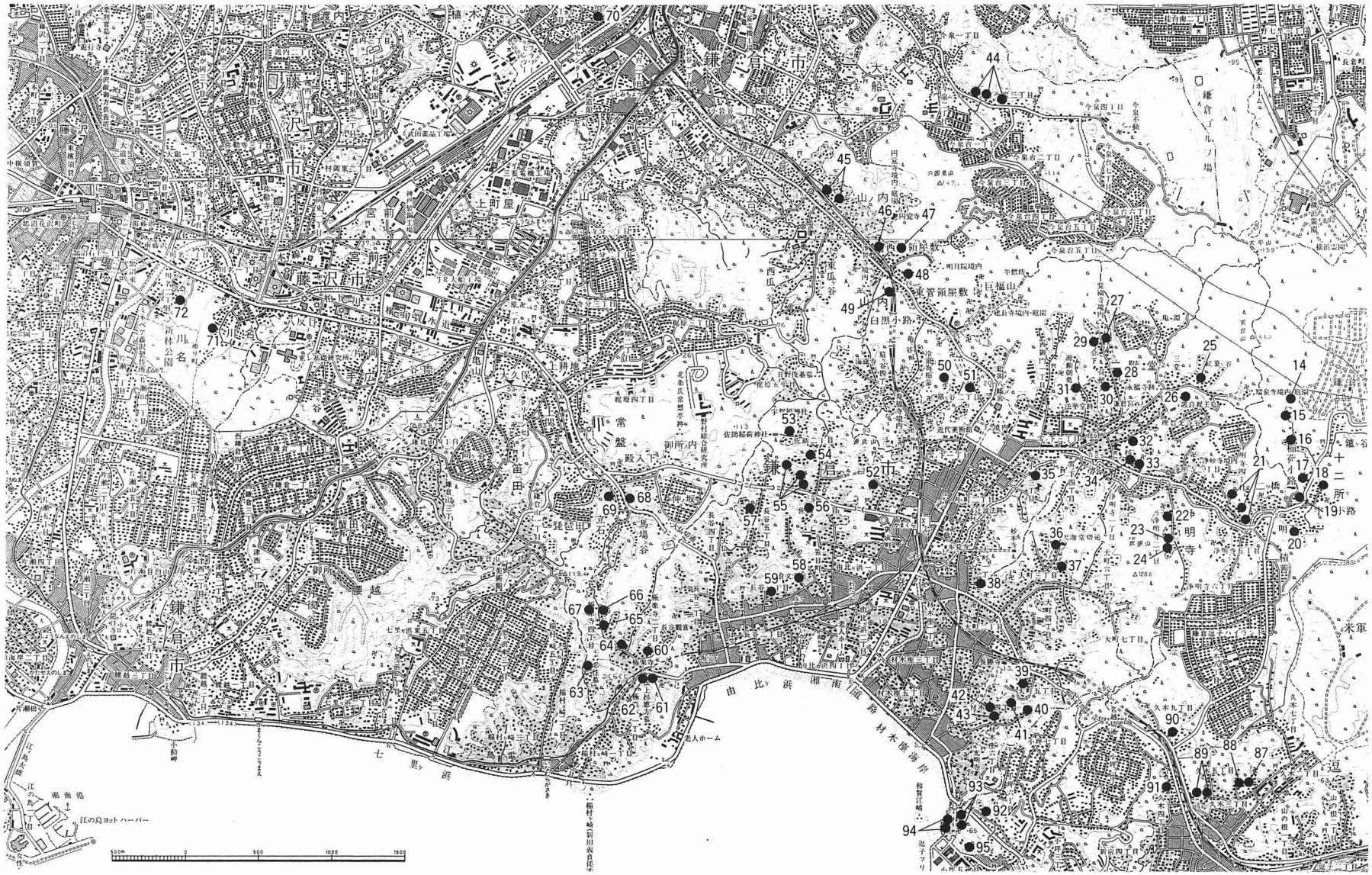
106. 川名森久地区遺跡発掘調査団　1996『藤沢市川名森久地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
107. 横須賀市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1986『横須賀市天神やぐら群の調査』
108. 横須賀市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1986『横須賀市天神やぐら群・佐島やぐら群の２次調査』
109. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1993『横須賀市和田山やぐら群の調査』
110. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1994『和田山やぐら群の第２次調査』
111. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1995『和田山やぐら群の第３次調査』
112. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1996『和田山やぐら群の第４次調査』
113. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1997『和田山やぐら群の第５次調査』
114. 横須賀市教育委委員会　1998「和田山やぐら群（法福寺山門地点）」『横須賀市文化財調査報告書』第32集
115. かながわ考古学財団　2000「和田山やぐら群遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』85
116. かながわ考古学財団　2001「和田山やぐら群遺跡Ⅱ」『かながわ考古学財団調査報告』119
117. かながわ考古学財団　2000「陣屋谷戸やぐら群遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』84
118. 横須賀市教育委委員会　2000「榎戸やぐら群発掘調査報告書」『横須賀市文化財調査報告書』第35集
119. 横須賀市教育委委員会　1993「長浦地区遺跡第３遺跡」『横須賀市文化財調査報告書』第27集
120. かながわ考古学財団　2001「覚栄寺やぐら群遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』120
121. 横須賀市教育委委員会　1992「16. 亀ヶ崎やぐら群」『横須賀市文化財調査報告書』第26集
122. 長坂やぐら群発掘調査団　1981『横須賀市長坂やぐら群の調査』
123. 横須賀市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1986『逗子市沼間やぐら群の調査』
124. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1991『逗子市久木１丁目横穴群　沼間やぐら群の調査』
125. かながわ考古学財団　1997「池子遺跡群Ⅴ」『かながわ考古学財団調査報告』27
126. かながわ考古学財団　1997「池子遺跡群Ⅳ」『かながわ考古学財団調査報告』26
127. かながわ考古学財団　1999「池子遺跡群Ⅶ」『かながわ考古学財団調査報告』43
128. かながわ考古学財団　1999「池子遺跡群Ⅷ」『かながわ考古学財団調査報告』44
129. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1996『逗子市久木松岡氏裏やぐら群・逗子市小坪５丁目やぐら群の調査』
130. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1992『逗子市久木５丁目やぐら群　三浦市和田やぐら群第４次』
131. かながわ考古学財団　1999「逗子市堂地谷やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』62
132. かながわ考古学財団　2000「堂地谷やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』97
133. かながわ考古学財団　2001「名越遺跡内大谷戸やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』106
134. 久木４丁目やぐら群調査団　1998『久木４丁目横穴・やぐら群の調査』
135. かながわ考古学財団　1999「逗子市げんじが谷横穴墓群及びやぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』62
136. かながわ考古学財団　2002「正覚寺やぐら群遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』132
137. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1997『逗子市小坪５丁目やぐら群の第２次調査』
138. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1989『海前寺やぐらの調査』
139. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1989『三浦市和田やぐらの第３次調査』
140. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1989『三浦市和田やぐらの第５次調査』
141. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1995『三浦市和田やぐらの第６次調査』
142. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1996『三浦市和田やぐらの第７次調査』
143. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1984『三浦市矢作やぐら群の調査』
144. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1990『三浦市矢作第２やぐら群の調査』
145. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1991『三浦市矢作第３やぐら群の調査・西野やぐら群第２次調査』
146. 矢作やぐら群遺跡調査団　1997『矢作第４やぐら群の調査』
147. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1986『三浦市小網代やぐらの調査』
148. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1995『松輪間口やぐらの調査』
149. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1984『三浦市松輪大畑やぐらの調査』
150. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1987『三浦市松輪大畑やぐら群の２次調査』
151. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1987『松輪大畑やぐら群の３次調査』
152. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1987『三浦市海外やぐら群の調査』
153. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1985『三浦市奉行所跡やぐら群の調査』
154. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1990『三浦市二町谷横穴墓・西野やぐら群・松輪坪井横穴群の調査』
155. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1994『西野やぐら群の第３次調査』
156. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1987『三浦市三崎宮城やぐら群の調査』
157. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団　1989『三浦市三崎宮城やぐら群の２次調査』
158. かながわ考古学財団　1999「三浦市歌舞島やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』62
159. 鎌倉考古学研究所　1981「中郡二ノ宮町長峯所在「やぐら」調査概報」『鎌倉考古』№７



第1図　神奈川県内のやぐら分布図（1）



第２図　神奈川県内のやぐら分布図（２）



第3図　神奈川県内のやぐら分布図（3）

中世Ｐｊ

第４図　神奈川県内のやぐら分布図（４）

第5図　神奈川県内のやぐら分布図（5）

第6図　神奈川県内のやぐら分布図（6）

神奈川県出土の土製品

近世プロジェクトチーム

1．はじめに

昨年の県内近世遺跡の再集成に基づき、本年は遺跡出土の土製品を取り上げることとした。ここで取り扱う土製品とは、土鍋や焙烙、火鉢といった日常生活用品を除いた、人形・ままごと道具・箱庭道具、そしていわゆる泥面子と称される遊・玩具の類である。これら遊・玩具は、土製のほか、木製・紙製・布製・陶磁製・貝製・石製・骨角製・ガラス製・金属製などさまざまな材質で作られているが、出土資料としては、腐食しにくく、かつ大量に作られたという点で土製品が他を圧倒しているといえよう。土製をはじめとする遊・玩具は江戸はもとより、名古屋・京都・大阪などの近世都市の諸遺跡で多量の出土をみており、種別ごとの編年にとどまらず、生産地や製作技法の検討、さらには出土遺跡・遺構の性格の追究といった試みがなされているところである。一方、近世諸都市の周辺地域については、その出土量も少なく、一部の論考を除いて、あまり注目を受けない存在であったといえよう。

このような状況にあって、神奈川県下出土の近世土製品を集成するのも一考と考え、今回のテーマとすることとした。土製品は表面採集や表土中からの出土が多く、近世以外の時代の遺跡の報告書に報告されている可能性も多く、県下で刊行されている膨大な報告書から一点も漏らさず集成するというのは、きわめて困難な状況であることから、とりあえず、近世遺跡の集成を行った『かながわの考古学』第５集および同書「研究紀要７」の出土遺物欄にある土製品を当たることとしたが、報告書に実測図がなく、写真や記述のみにとどまっていたり、実測図があっても小破片のため、全形がわからないものなど相当数存在することが判明した。このため、集成することは困難と判断し、ここでは県下出土の土製品の主だったものを取り上げて概観することとした。

なお、県内の遺跡報告書の引用文献については、『かながわの考古学』第５集および同書「研究紀要７」の文献欄を参照願いたい。

2．研究史

考古学資料として早くから着目されたのは土製品の中でも、いわゆる泥面子と称されるものである。古くは1928年、首藤岩泉氏による円盤状の泥面子に描かれたモチーフを研究対象としたものがあるが（首藤1928)、本格的な研究は、1970年代前半になってからのことである。金剌伸吾氏は千葉県西部の市川市・船橋市などの一帯に広がる下総台地の畑地で泥面子が多数表面採集されることに着目され、五穀豊穣を願って農民が畑地に播いたという播畑説を紹介するとともに、江戸市中で大量に排泄された下肥が船で運搬され、下総台地に金肥として大量に運び込まれたという歴史的事実から、江戸市中で下肥の中にいわゆる泥面子が混入したとする下肥混入説を唱えられた（金剌1973・市立市川歴史博物館1983)。この説は、江戸のリサイクルといった問題を考古学的に知りうる具体的な事象として興味深い論考と考えるが、一部否定的な見解も示されている。

1970年代、各地において大規模な発掘調査が行われるようになり、いわゆる泥面子の出土例も増え、増子

陽子氏は千葉県内の遺跡から出土した泥面子について集成し、文様や形状に着目して分類を行なっている（増子1978）。

1980年代から東京都内の近世遺跡の調査が盛んに行われるようになり、泥面子をはじめとする土製品の出土例が増加するが、きわめて注目される論考は神奈川県内の遺跡の報告書であった（富永・大村1985）。茅ヶ崎市の新湘南国道建設に伴う７地点の遺跡から出土したいわゆる泥面子について、早崎　薫・宮滝交二の両氏が考察されたもので、泥面子の定義として、「型抜きによる様々な文様・意匠を持つ2～3.5㎝大の素焼きの土製品の総称」とし、それら泥面子の出土層位に着目され、現在のところ宝永スコリア層より下位層からの出土はまったくなかったという点を強調されている。また泥面子を２類に大別され、Ⅰ類は人物、神仏、動物、調度などを型抜きしたもの、Ⅱ類は円盤状を呈し、上底面に文様などを型抜きしたもので、前者が40点中38点、後者は２点のみであった。Ⅰ類はさらに細分され、１は人物、神仏などの顔面を型抜きしたもので、大型（長さ3.5㎝くらい　ａ類）と小型（2～2.5㎝くらい　ｂ類）に細分、２は人物、神仏などの全体像を、３は動物、４は調度などの形態をそれぞれ型抜きしたものとし、個々に詳細な観察を加えられている。さらに両氏は、泥面子の名称や使用目的について文献史料を用いて綿密な考察を加えられ、Ⅰ類は文献にみられる「面摸（めんかた）」という名称、Ⅱ類は「面打（めんちょう）」に該当するとされ、ここに、初めて考古学的に分類された泥面子が、それぞれに文献に基づいた名称を付与されることとなった。また江戸では「面打」が、下総や相模など江戸近郊では「面摸」が優勢であるという地域的分布の違いを指摘され、これをどのように解釈するのか、そして生産地より消費地・消費者への流通過程を解明することの２点を今後の研究課題とされている。

一方、東京都内では発掘資料の急増に伴い、80年代後半から90年代にかけて、いくつかの論考が公にされている。新宿区三栄町遺跡でも（東京都新宿区1988）、加納　梓氏がいわゆる泥面子について、円盤状を呈するものと人面、動物面、道具等を型抜きしたものの２群に分類し、前者を「面打」、後者は「面摸」のほか「芥子面（けしめん）」に相当するとされ、直径値による出現頻度をグラフ化し、前者は直径2.0㎝以下、2.5㎝前後、3.0㎝以上のものの３類に、後者は2.6～3.9㎝と1.9～2.3㎝のものの２類に分けているのが注目される。また扇浦正義氏は同遺跡出土の一連の近世遺物の変遷において、遊・玩具を中心とした土製品についての変遷を提示され、「面打」については、18世紀代に中型が出現し、19世紀代に入ると小型・大型とバリエーションが広がるとされた。このように、土製品についても編年が示されたという点で評価しうるものの、「芥子面」の出現を19世紀前葉に求めている点、文献史料とは多少齟齬がみられるようである。

このように、これまで泥面子として報告されていた土製品は、ここにきて「面打」、「面摸」、「芥子面」という個別の名称が付されるようになったことに対し、石神裕之氏は「「泥面子」は「器種」を表す用語として考える必要がある」とし、上記の３種に大別ができるとした（石神1996・1997）。すなわち、「円盤状を呈するものは「面打」、人物などの「顔」をかたどるのは「芥子面」、そして泥などを詰めて抜く遊びといわれるものは「面摸」とする」とされた。そして、「面打」の直径値による出現頻度を検討し、三栄町遺跡の３分類に蓋然性があるとし、21～23㎜が標準とされた。また関西地域の分析も試みられ、京・大阪では27～29㎜の大型品に集中することが明らかにされた。さらに「面打」のモチーフによる分類、武家地と町人地での出土内容の比較などがなされている。特に、旗本・御家人拝領地であった遺跡からは「面打」の出土量が多く、「芥子面」は町人地からの出土例がなく、関西系の遊びとして、その地域に関係した住民が多く居住していた紀尾井町遺跡・三栄町遺跡などから出土していることなど注目すべき分析がなされている。

このほか、安芸毬子氏は東京大学構内遺跡を中心に、土人形をはじめとする土製品の製作技法や出土遺跡

の性格の検討、さらには共伴陶磁器の年代から土製品の編年も試みられており（安芸1991・2000ほか）、近年はもっぱら、江戸の遺跡中心に土製品の研究が進展しているといったところが現状である。

3．泥面子について

以上の研究史を概観し、問題になるのは、いわゆる泥面子と称されるものが、報告者によってまちまちに解釈されていることである。泥面子の定義としては、新湘南国道で規定されたように「型抜きによる様々な文様・意匠を持つ2～3.5㎝大の素焼きの土製品の総称」としてとらえてよいと考えるが、第１図に示したように、いわゆる泥面子やその他の土製品の個別名称には統一が取れていないのが現状である。

そもそも泥面子という表現が一般的に用いられるようになった背景としては、早崎・宮滝両氏が指摘しているように、近代以降に出現する「鉛面子」、「紙面子」に対する相対的な名称であって、泥面子という呼称は近代以降に求められるのではないかとされている。となると、泥面子という呼称は破棄し、江戸時代の呼称が文献史料などから判るのであれば、それを用いた方がよいといえよう。早崎・宮滝両氏にも取り上げられている『嬉遊笑覧』（喜多村信節　文政13（1830）年）をもう一度見てみることとしたい。同書の巻六下、児戯の部「めんかた」の項には、

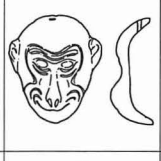
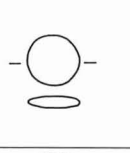
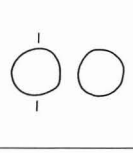
「今小児玩物のめんかたは面摸（めんかた）なり瓦の摸に土を入れてぬくなり、また芥子面とて唾にて指のはらに付る小き瓦の面ありしが、今はかはりて銭のように紋形いろいろ付たる面打（めんちょう）となれり」（下線筆者）

とあり（喜多村1979）、1830年当時、小児の玩具として「面摸」と「面打」があり、「面打」以前には「芥子面」もあったことがうかがえる。これらは、従来いわゆる泥面子と称される範疇に属するものといってよいと考えられ、「銭のように紋形いろいろ付たる面打（めんちょう）」が出土資料にある「円盤状を呈し、上底面に文様などを型抜きしたもの」に相当することはまず異論のないところで、これについては第１図においても汐留遺跡を除いて一致をみているところである。問題になるのは、「面摸」で、これについては、『守貞漫稿』（喜田川守貞　嘉永６（1853）年）引用の享保12（1727）年の目附絵に

「めんがた　大阪下り」

とあり（喜田川1996）、18世紀前半に存在していたことが知れる。さらに『守貞漫稿』において「面形売　今ハ売巡ラズ　番太郎ノ店等ニテ売之土形也　小児此形ニ土ヲ納レアクレハ面トナルモノ也　今制ハ甚タ小也」（下線筆者）

とあり、『嬉遊笑覧』にみられる「面摸」と『守貞漫稿』の「面形」はカタの字が異なるものの、下線部に記されているように、いずれも型を取るための土形、すなわち雌型のことであって、土を入れて抜いてでき

						
茅ヶ崎市新湘南国道1985	面打	面摸	-	-	碁石	-
新宿区三栄町遺跡1988	面打	面摸・芥子面	土製雌型	土製面	碁石	土玉
新宿区内藤町遺跡1992	面打	芥子面	土製型	-	弾碁玉	土玉
文京区諏訪町遺跡1996	面打	芥子面	面摸	-	碁石	-
港区汐留遺跡2000	泥面子	芥子面子	型	面	碁石	-
研究紀要8 かながわの考古学	面打	芥子面	面摸	小面	碁石状土製品	土玉

第１図　泥面子およびその他土製品の呼称例

た完成品、すなわち雄型ではないようである。にもかかわらず、早崎・宮滝両氏は「『嬉遊笑覧』の述べるごとく、このような「めんがた」を用いて製作した土製の面もまた「面摸」と称されるようになっていったようである」としているが、同書の記述から、このように読み取ることは一切できない。

新宿区三栄町遺跡をはじめ、近年、都内の遺跡では型抜き用の型の出土が報じられており、それを「土製雌型」とか「土製型」、「型」としているが、これがまさに「面摸」であるといえよう。それでは早崎・宮滝両氏が「面摸」に相当するとしたⅠ類、すなわち人物、神仏、動物、調度などを型抜きし、さらに焼成したものについては、どのように呼称すればよいであろうか。再度、『嬉遊笑覧』をみてみると、「「芥子面」とて唾にて指のはらに付る小き瓦の面」という記載が注目されよう。両氏は、現存する「芥子面」はいずれも極彩色であること、裏面に指が入るようくぼんでいることをあげられ、出土資料に該当品はないとして、それ以上言及していないが、Ⅰ－１－ｂと分類した小型の人物面はまさに「芥子面」と称してよいものと考えられる。というのも、近年の都内の報告例をみると白色とか赤色の彩色残存といった記載が多くあり、彩色が施されていたこと、裏面のくぼみは京都など関西の製品では顕著であるが、江戸で生産されたとみられる製品はくぼみがあるかないか不明瞭なものが主体であることなどが明らかになっているからである。それでは、Ⅰ－１－ａとした長さ３.５㎝ほどの大型の面やⅠ－２～４の人面でないモチーフのものについてはどのように呼称したらよいのであろうか。「芥子面」の芥子は、「芥子粒のような」といった表現に使われるように、ごく小さなものといった意味合いがあるものと思われ、長さ3.5㎝ともなると唾だけで指に貼りつくかどうか疑わしく、「芥子面」という呼称はふさわしくないように思われるが、製作技法上は「芥子面」となんら変わりはなく、同じ系譜にあることから、ここでは「芥子面」としておきたい。ただし、「芥子面」の用途は指人形から別の用途へと変わっている可能性は否定できないところであろう。

このほか、いわゆる泥面子の範疇には入らないと思われるが、用語が統一されていない土製品についてもここで触れておきたい。一つは径５㎝前後の大きさで、両耳付近などに小穴のあいた面である。都内の報告例では、「土製面」とか「面」とされているもので、小児が顔にかぶるには小さすぎるし、どのように使用されたのか、また文献史料からの呼び名も不明であるが、お面であることに変わりはなく、ここでは「小面」としておきたい。さらに「碁石」や「弾碁玉」として報告されている土製品の中には、黒や白に彩色され、明らかに碁石として使用された可能性のあるものも存するが、石製や貝製のいわゆる碁石でないこと、博打やおはじきの前身としての使用も考えられることから「碁石状土製品」としておきたい。またビー玉の前身ともいわれる「土玉」については、用途・名称が明らかでなく、これまでの報告に倣ってその形状からの呼称で通すこととしたい。

４．県内出土の土製品について

出土状況

神奈川県内における土製品の出土例は横浜市をはじめとする14市１村約60遺跡（地点）を集めることができた。城下町である小田原市での出土事例が多いのは当然のことと思われるが、近世集落が広範囲にわたって調査された逗子市池子遺跡群や清川村宮ヶ瀬遺跡群でも比較的多く出土している。また、藤沢市・茅ヶ崎市・平塚市・伊勢原市等県央地域での出土例も目立つ。出土遺跡は第１表に示したとおりであるが、冒頭にも述べたように、これで県内すべての遺跡を網羅しているわけではない。

第1表　土製品出土遺跡一覧

遺跡名	図No.	遺跡名	図No.
横浜市受地だいやま遺跡	84	小田原市小田原城三の丸 大久保雅楽介邸跡第Ⅵ・Ⅶ地点	5
横浜市オミネ屋敷	33・43・149		
横浜市宿根北遺跡	58	小田原市小田原城三の丸遺跡 （杉浦平太夫邸跡第Ⅱ地点）	2・35・36・75
横浜市宿根南遺跡	82		
川崎市宮添遺跡	21・88・131	小田原市小田原城下中宿町遺跡第Ⅱ地点	74・148
逗子市池子遺跡群No1－C地点	45・66・69・86・102	小田原市小田原城下中宿町遺跡第Ⅲ地点	3・37・38・47・55・56・62・70・71・79・147
逗子市池子遺跡群No1－D地点	16・97		
逗子市池子遺跡群No1－E地点	6・10・11・14・15・23・25・26・83・99・101・126	小田原市小田原城下欄干橋町遺跡第Ⅳ地点	31・32・34・50・53・59・72・78・146
逗子市池子遺跡群No5地点	81・87・134	小田原市小田原城下欄干橋町遺跡第Ⅴ地点	1・42・150～166
逗子市池子遺跡群No7地点（西地区）	8	小田原市感応寺址	48
逗子市池子遺跡群No7地点（東地区）	13・17・22・60・85・113・130	相模原市中村遺跡B地点	18
逗子市池子遺跡群No10地点	44・139	厚木市東町遺跡	12・19・49・52
逗子市池子桟敷戸遺跡	27・29・30	大和市下鶴間甲一号遺跡	46・63・64・76・80・129
鎌倉市円覚寺境内如意庵	土人形	大和市下鶴間長堀遺跡（国道246地域内）	芥子面
藤沢市川名No419遺跡第4・5地点	9	伊勢原市神戸・上宿遺跡（No15）	54・73・140
藤沢市慶應義塾藤沢校地内遺跡	95・96・104・106～108・111・115	伊勢原市坪ノ内・宮ノ前遺跡（No16・17）	135
藤沢市本入こざっ原遺跡	57	伊勢原市坪ノ内・貝ヶ窪遺跡（No18・19・43）	7
藤沢市南葛野遺跡	68	伊勢原市笠窪・谷戸遺跡（No20・42）	65・112・137
藤沢市用田バイパス関連遺跡群鳥居前遺跡	39・100・117	伊勢原市不弓引遺跡（No21・22）	119
茅ヶ崎市上ノ町・広町遺跡	90・93・105・127・136・141・143	伊勢原市上粕屋・〆引東遺跡（No40）	28
茅ヶ崎市西久保・広町遺跡	98・103・114・116・125・142	伊勢原市八幡谷戸遺跡	121
茅ヶ崎市宮ノ腰遺跡	91	伊勢原市石田・羽黒遺跡（Ⅳ）	芥子面
茅ヶ崎市新湘南国道関連六図C・D遺跡、四図A遺跡、二図A・B遺跡、上ノ町遺跡	芥子面・面打	伊勢原市咳止橋遺跡	芥子面
		海老名市大谷真鯨遺跡	128
平塚市真田北金目遺跡	40・41	綾瀬市吉岡遺跡群（A区）	94・109・123
平塚市神明久保遺跡	4・67・92・122・124・132・133	清川村宮ヶ瀬遺跡群南（No2）遺跡	167～172
平塚市根坂間小宮阿弥陀畑遺跡	120	清川村宮ヶ瀬遺跡群馬場（No6）遺跡	24・51・61・144・145
平塚市原口遺跡	110・118・138	清川村宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷（No8）遺跡	77・89
平塚市宮ノ脇遺跡	土人形	清川村宮ヶ瀬遺跡群北原（No10）遺跡	20
		清川村宮ヶ瀬遺跡群北原（No9）遺跡	ままごと道具

※図化し得なかった遺跡の資料については図No欄に製品名を記した。

土製品を出土した遺跡の性格は、武家屋敷（大久保雅楽介邸跡・杉浦平太夫邸跡）、町人地（欄干橋町遺跡・中宿町遺跡）、商人屋敷（東町遺跡）、名主屋敷（オミネ屋敷）、村落（池子遺跡群・宮ヶ瀬遺跡群等）と様々であり、土製品が身分を問わず人々の生活の中に広く浸透していたことがうかがえる。

各遺跡からの出土量は、都内の江戸遺跡のように1遺跡から100点以上が出土している例はなく、中宿町遺跡第Ⅲ地点、欄干橋町遺跡第Ⅳ地点、池子遺跡群No1－E地点等で20～30点出土しているのが最多で、多くは10点にも満たない状況である。そのため、今回得ることの出来た資料をすべて集めても、新宿区三栄町遺跡や同区内藤町遺跡等の1遺跡の総出土数に及ばない。

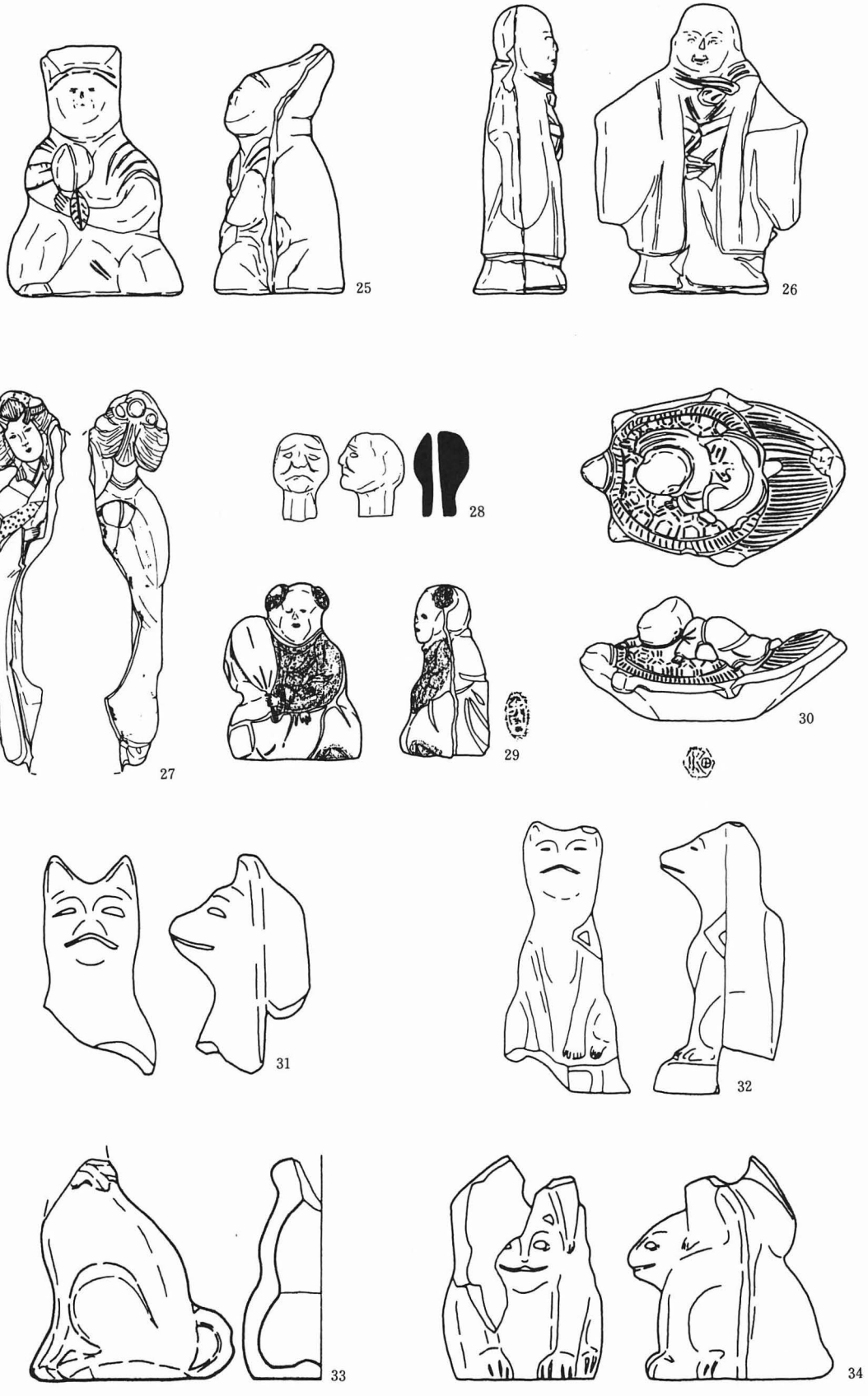
遺構内での出土状況は、溝状遺構・畝状遺構・井戸址・地下室・竪穴状遺構・土坑・ピット群・池跡・土坑墓等の遺構から出土しているものと遺構外出土のものがあり、量的には後者が多く認められる。遺構外資料は、表土や耕作土中から出土することが多く、遺構出土資料は、土坑墓に埋納されたものを除くと陶磁器等の生活用具とともに廃棄された状態で出土することが多い。

種別ごとの出土状況

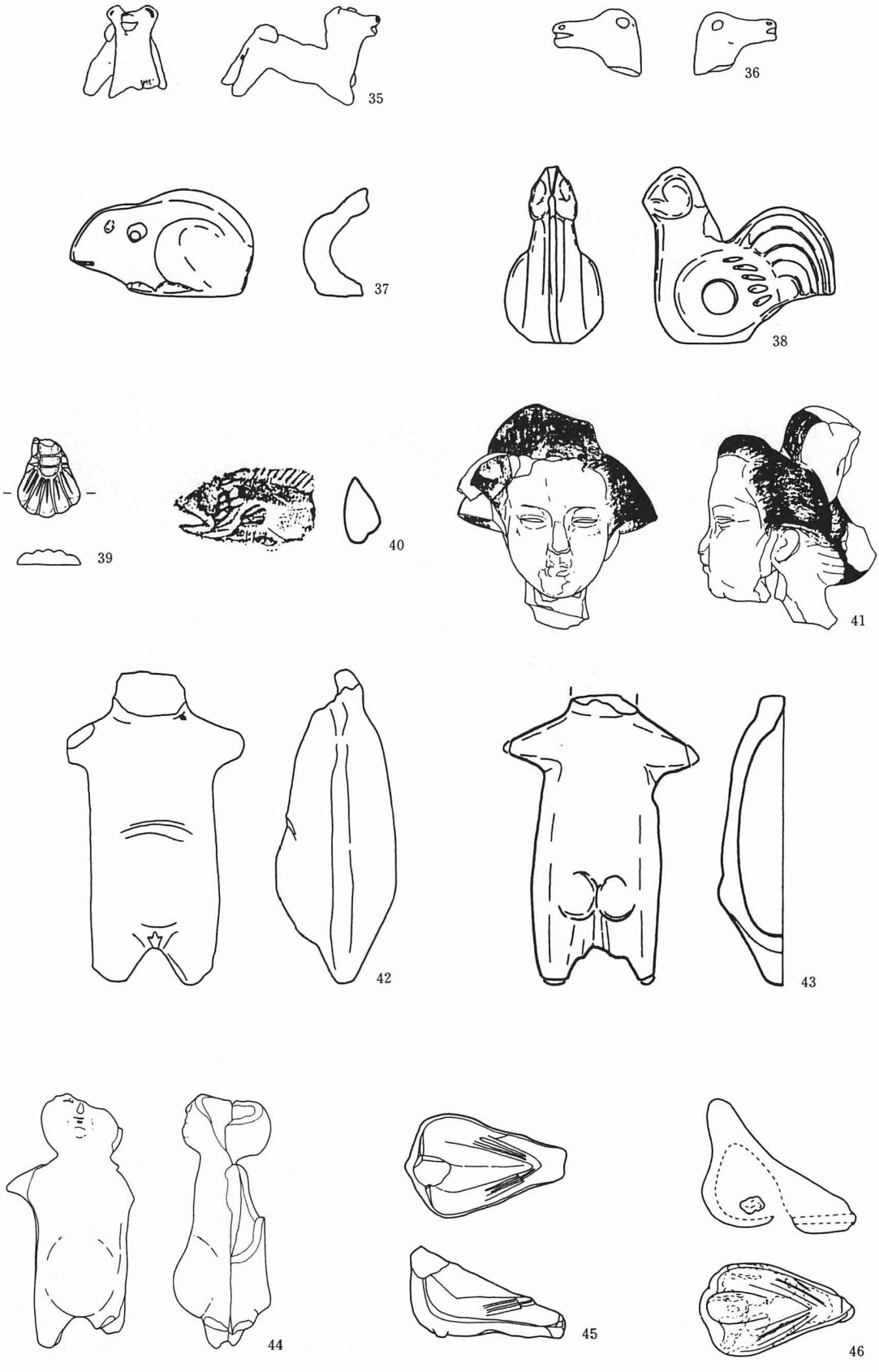
今回得られた資料を、①土人形、②ままごと道具、③箱庭道具、④面打・芥子面・面摸、⑤その他に分類し、比較的遺存状態の良好なものを縮尺1/2に統一して第2～7図に示した。

①土人形（1～46）は、出土例の多い資料のひとつで、地域・遺跡の性格に関係なく出土している。1～41は人物や動物等をモチーフとしたもので、5㎝以下の小型のものと10㎝前後の中型のものが主体を占める。立像・座像が多いが、9・10のようにおむすび型を呈するものや30のように亀に童子が乗ったものも見られる。37・38は中宿町遺跡第Ⅲ地点から出土した資料で、同様のものが三栄町遺跡でも報告されている。28は首から頭部に向かって穴が穿たれている首人形である。県内での出土例は少なく、今回確認できたのは1点のみである。42～44は裸人形もしくは孕み人形と呼ばれているもので、図示した以外にも感応寺址、池

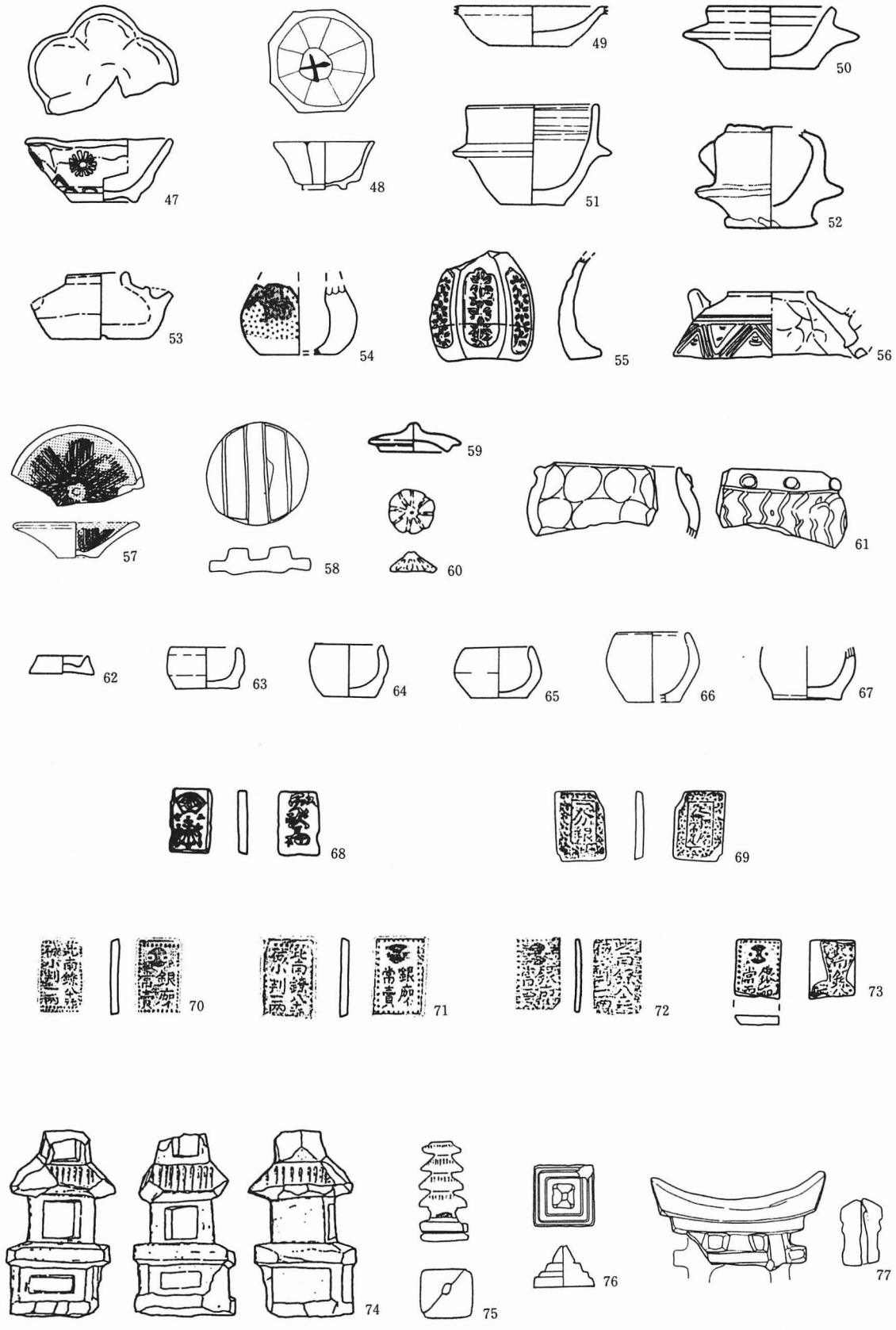
第２図　土人形（１）［Ｓ：1/2］



第3図　土人形（2）［S：1/2］

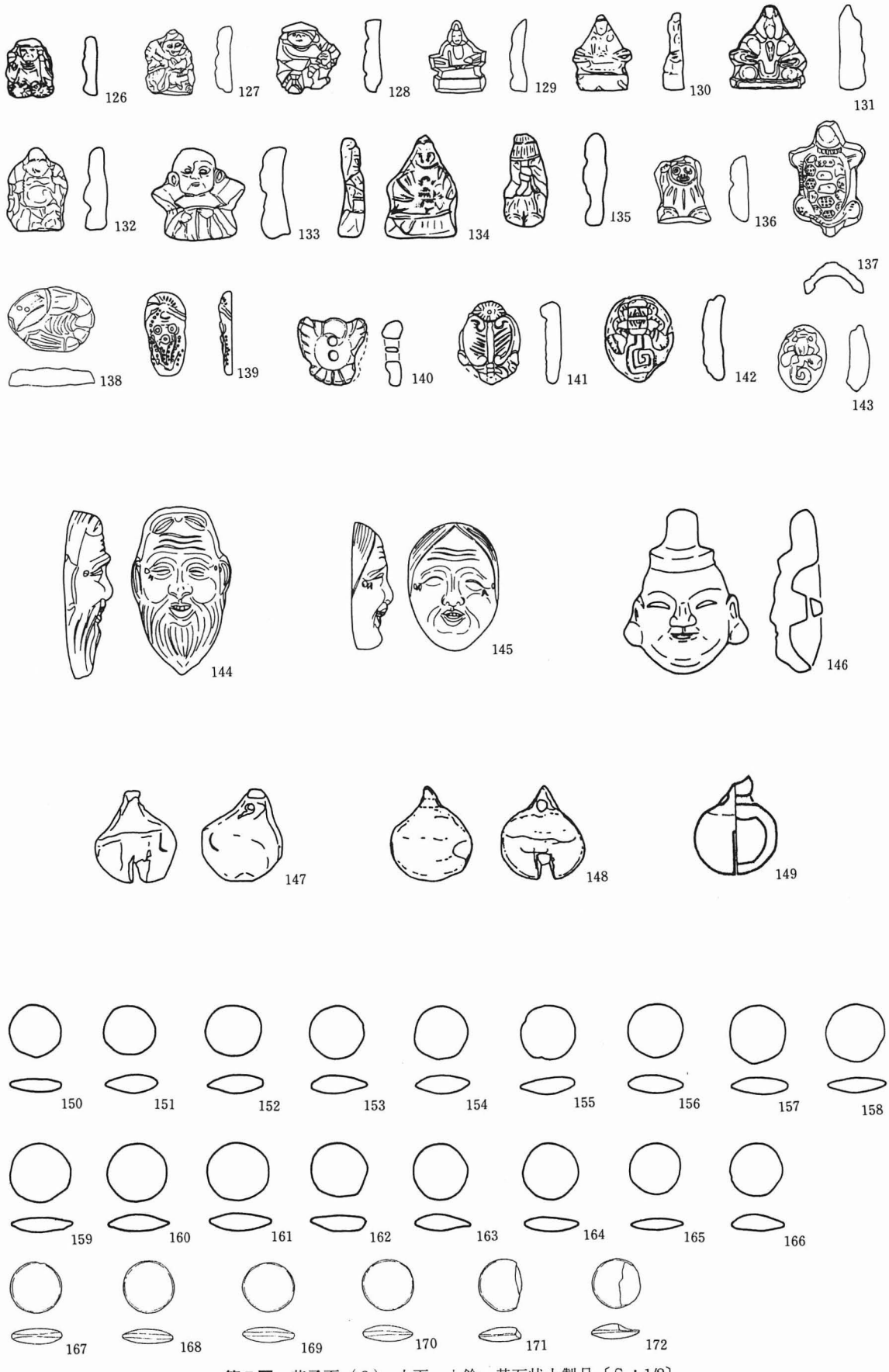


第４図　土人形（３）［Ｓ：1/2］



第5図　ままごと道具・箱庭道具［S：1/2］

第６図　面打・芥子面（１）［Ｓ：1/2］



第7図　芥子面（2）・小面・土鈴・碁石状土製品〔S：1/2〕

子遺跡群№５地点等でも報告されているが、県内での出土例はそれほど多くはない。45・46は鳩笛である。本資料の出土数も少なく、図示した資料以外に大久保雅楽介邸跡で１点出土している程度である。

土人形の中には背面等に刻印が施された資料があることが知られており、都内の遺跡では多数が確認されている。刻印を持つ土製品については、中野高久氏の考察がある（中野1998）。中野氏は都内の遺跡から出土した刻印・篦書きのある土製品を集成し、「刻印・篦書きは江戸在地系製品と京都系製品にのみ認められる。刻印は原型に陽刻されているものと成形後に陰刻されたものがあり、篦書きは成形後に施されている。大半が型作り成形である。江戸在地系製品は幕末、京都系製品は18世紀末頃から見られる」と述べている。刻印が施された資料は、県内では逗子市池子桟敷戸遺跡で２点確認されている（29・30）。それらは、18世紀後半～明治時代の遺物を伴う土坑墓のうちの１基から出土している。１点は施釉された唐子人形で、背面に「弁日」？が陰刻されていると報じられている。この刻印は、嘉永年間の「今戸人形生産者地図」に掲載されている戸沢弁司の「弁司」と思われる。もう１点は無釉の亀抱き童子で、底部に「番」の陽刻があるとされている。こちらは「番」ではなく、京都の欽古堂亀祐（助）の「亀（篆書体）」と推測される。刻印が「弁司」・「亀」だとすると、前者は江戸在地系、後者は京都系の製品で、墓坑の年代は幕末以降の可能性が高い。刻印・篦書きが施された土製品は、製作地・製作者・年代を知ることのできる資料として貴重である。背面・底部等は注意深く観察する必要があろう。

②ままごと道具（47～73）は、量的にはそれほど多くないものの各地で出土しており、身分に関係なく利用されていたことがうかがえる。鉢・徳利・釜・土瓶・擂鉢等飲食に関連するものが主体を占め、図示したものの他に上ノ町・広町遺跡で七厘が出土している。飲食具以外では宮ヶ瀬遺跡群馬場（№６）遺跡で太鼓の一部（61）が出土している。62～67は素焼きの鉢形を呈する製品である。県内での出土例はそれほど多くなく、都内の遺跡でもあまり出土していないようである。68～73は銀貨を模した模造貨幣である。68･69は一分銀、70～73は南鐐二朱銀を模倣しており、文字は実物と変えられている。

③箱庭道具（74～77）は、都内では比較的多くの遺跡で認められるが、県内での出土事例は少なく、４遺跡で確認できたのみである。モチーフは祠・塔・鳥居がある。

④面打（78～87）も、都内の遺跡での出土例は多いが、県内ではそれほど出土していない。図示した10点以外にも坪ノ内・宮ノ前遺跡、新湘南国道関連遺跡等で出土しているが、15点程度しか確認することができなかった。大きさは直径3.2cm以上を超えるものが３点見られるが、それら以外はいずれも2.2cm前後で、大部分が都内の遺跡における標準的なサイズ（2.1～2.3cm）に収まるものである。モチーフは文字が多いが、力士・火消し纏・植物等も見られる。なお、図示しなかったが、瓦片を面打と同程度の大きさに円盤状に加工したものが、大久保雅楽介邸跡で出土している。

芥子面（88～143）は、土人形と並んで数多く出土している資料である。都内の遺跡では芥子面よりも面打が多く認められるが、県内では逆に芥子面が圧倒的に多く見られる。大きさは径1.4～4.0cmがあるが、2.0cm代が中心で、1.5cm以下や３cmを超すものは少ない。モチーフは人物等の顔面を型抜きしたもの（88～125）、全体を型抜きしたもの（126～135）、動物等を型抜きしたものがあり（136～143）、顔面を型抜きしたものが主体を占める。芥子面は地域に関係なく認められるが、特に県央地域の茅ヶ崎市・伊勢原市・藤沢市・平塚市等での検出例が目立つ。これらの地域の出土状況をみると、畑地と推定される場所で表採されたり、耕作土中から出土している例が多い。

面摸は、県内での報告例を確認することはできなかった。都内の遺跡においても面打や芥子面に比べ出土

例は少ない。

小面（144～146）は、径５cm前後で、裏側が窪み、こめかみ等に穴が穿たれた製品で、これまで泥面子の範疇に入れられたり、土製面と分類されているものである。出土事例は少なく、宮ヶ瀬遺跡群馬場（№６）遺跡で２点、欄干橋遺跡第Ⅳ地点で１点確認できたのみである。

⑤その他の資料として、土鈴（147～149）、碁石状土製品（150～172）が出土している。土鈴の報告例は少なく、確認できたのは３点のみである。碁石状土製品は、白色や黒色に塗られていたものがあり、多くは碁石として使用されていたと思われる。大半が径1.5～2.0cmの範囲に収まるものである。各地で認められるものの、１～２点しか出土していない例が多い。図示したのは欄干橋町遺跡第Ⅴ地点（150～166）、及び宮ヶ瀬遺跡群南（№２）遺跡（167～172）の一括資料で、いずれも土坑からの出土である。

土玉は、都内の遺跡で報告されているような球状を呈するものは確認できなかったが、池子遺跡群№１－Ｃ地点において、径約1.5cmで、２mm程度の小孔が穿たれ、側面が平坦に研磨された小玉が出土している。

年　代

遺構から出土した土製品のうち、共伴した陶磁器類から製作年代が推定される事例をみると、18世紀後半～19世紀代（中宿町遺跡第Ⅱ地点１号地下室、欄干橋町第Ⅴ地点13号土坑）、19世紀初頭頃（欄干橋町遺跡第Ⅳ地点108号遺構）、19世紀前半頃（欄干橋町第Ⅴ地点１号土坑）、19世紀第２～３四半期（中宿町遺跡第Ⅲ地点２・３・13号土坑）、19世紀後半（宮ヶ瀬遺跡群南（№２）遺跡）、近世後半～近代（川名№419第４・５地点遺跡１号竪穴状遺構）と、県内の事例はいずれも18世紀後半～19世紀代（明治時代を含む）であることが判る。

近世に属する土製品は、京都では17世紀前葉から認められ、都内の遺跡でも17世紀中葉頃に出現し、後葉には比較的多くの遺跡で出土することが知られている。県内で17世紀代の所産と考えられるものは、これまでのところ、東町遺跡の整地層より猿の土人形（12）が出土しているにすぎず、遺構から出土したものは報告されていない。県内では、土製品は貨幣経済の浸透と民間信仰の普及に伴って18世紀後半以降急激に増加したものと推測される。

５．まとめ

以上のように、神奈川県内から出土した土製品は約60遺跡（地点）、約200点を概観したが、その出土量は先にも触れたように、都内の１遺跡にも満たない量である。今後の調査により、出土資料の増加は期待できるものの、やはり江戸近郊の武蔵南部・相模地域では相対的に少ないということはいえるようである。

種別ごとの土製品の内容に関しては、都内の近世遺跡の出土資料と大きな差異は認められないものの、仔細にみると２・３特筆される点もある。すなわち、土人形においては、刻印から江戸在地系のみならず、京都系の製品が存することも明らかになり、相模地域での流通の一端を知る上で貴重な資料といえよう。

ままごと道具の中では、都内の近世遺跡でもあまり出土例のない鉢形の製品が下鶴間甲１号遺跡などで認められているが、それら資料は在地色の強い製品といえそうである。

箱庭道具については、きわめて出土例が少なく、県内での箱庭遊びは一般的でなく、都市型の遊・玩具といえるようである。

面打と芥子面の出土比率は、前者が少なく、後者が優勢であることが判明したが、それはかつて新湘南国道の報告で指摘されているとおりの結果となった。新湘南国道では、面打はモチーフに漢字や「いろは」が

記されていることから教育玩具の側面もあったとして武士・町人の子を、芥子面は民間信仰や年中行事に関連したモチーフが多いことから、農民の子を対象とした遊・玩具と考えている。一方、都内の遺跡では、石神裕之氏が述べたように、面打は旗本・御家人拝領地であった遺跡から、芥子面は町人地からの出土例がなく、関西系の遊びとして、その地域に関係した住民が多く居住していた遺跡から出土しているとしたものの、翌年の報告では、市川歴史博物館の研究成果を取り入れ（市川市歴史博物館1986)、面打は都市的玩具、芥子面は地方村落の玩具と想定することも可能とされている。今回の土製品の概観を通じて、芥子面の方が面打より相対的に多いという結果が得られ、ここでも面打は都市的玩具、芥子面は地方村落の玩具と認めざるを得ないが、その背景として面打・芥子面がどのような遊びに、そしてどのような階層に使われたのかを明らかにするとともに、すでに新湘南国道で指摘されているように、それら製品の生産地から消費地・消費者への流通過程を解明することが必要となろう。

面摸は１点の出土例もないが、都内の近世遺跡の出土量からみても、今後、県内での出土はあまり期待できるものとはいえないようである。年代的にも18世紀代に遡る遊・玩具であり、当時、それらが地方に流通するものではなかったことを示唆しているようである。

これら土製品の年代が判明したものでは、一部17世紀代に遡るものも認められたが、県内では大半が18世紀後半～19世紀代の所産で、一部は明治時代前半に下るものまで存在することが明らかになった。

参考文献

安芸毬子　1991　「江戸遺跡にみる土人形―遺跡の性格と出土遺物―」『江戸在地系土器の研究』Ⅰ
2000　「掘り出された人形」『江戸文化の考古学』吉川弘文館
2001　「Ⅵ　江戸の生活文化　5　遊び」『図説　江戸考古学研究辞典』柏書房
石神裕之　1996　「出土泥面子の研究と課題」『諏訪町遺跡』文京区埋蔵文化財調査報告書第９集
1997　「泥面子の地域性と編年への試論」『上富士前町遺跡第Ⅱ地点』文京区埋蔵文化財調査報告書第12集
市川歴史博物館　1986「泥面子分布調査」『市川歴史博物館昭和61年度年報』
金剌伸吾　1973　「どろめんこの話」『どるめん』３
新宿区内藤町遺跡調査会　1992　『内藤町遺跡 - 放射５号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 - 』
市立市川歴史博物館　1983　『資料集・どろめんこ』
首藤岩泉　1928　「江戸趣味　泥面譜（一)」『武蔵野』11－５
東京都新宿区教育委員会　1988　『三栄町遺跡』
東京都埋蔵文化財センター　2000　『汐留遺跡Ⅱ』東京都埋蔵文化財センター調査報告　第79集
富永富士雄・大村浩司　1985　『新湘南国道埋蔵文化財報告書』新湘南国道埋蔵文化財調査会
中野高久　1998　「刻印・篦書きからみる「玩具類」」『江戸在地系土器の研究』Ⅲ
増子陽子　1978　「『どろめんこ』についての一考察」『日本考古学研究所集報』Ⅰ

参考史料

喜田川守貞（宇佐美英機校訂）1996『近世風俗志』岩波文庫
喜多村信節　1979　「嬉遊笑覧」『日本随筆大成』別巻８　吉川弘文館

帯状円環型銅釧の形態分類と地域色について

池田　治

1．はじめに

弥生時代には金属器の使用が始まり、特に青銅器は多くの特色ある器種が創られるようになった。弥生時代青銅器の代表は、銅鐸、銅剣、銅鏡が先ず挙げられるであろうが、他にも銅釧、巴形銅器など、極めて特徴的なものも作り出されている。これらの代表的な弥生青銅器だけを見ると、九州から東海地方までの主に西日本にのみ分布しているかのように思われるが、東日本にも独特の青銅器が存在していることが明らかになってきている。中でも「帯状円環型銅釧」などと称される青銅製の腕輪は、静岡県以東の東日本に分布していて、近年発掘資料の増加と共に様々な視点からその特色が論じられるようになってきた（註１）。

本稿では、東日本に特徴的に分布している「帯状円環型銅釧」と呼ばれる青銅製の腕輪について、未だ詳細な比較が行われたことのない断面形状を主とした形態分類を行い、製作工程と形態の対応をもとに型式変化と地域色について論じてみたい。

2．研究略史

「帯状銅釧」、「板状銅釧」、「帯状円環型銅釧」などと呼称されるこの種の銅釧を最初に報告したのは、八幡一郎である（八幡1928）。長野県田口村（現臼田町）離山遺跡出土品を、腕輪のような装身具と想定しつつも、類品が知られていなかったために古墳出土の銅釧とは区別して「銅環」として報告している。

この後、類品は静岡県静岡市登呂遺跡の発掘調査で円環の一端が切れた銅釧が出土（日本考古学協会1949・1954）し、静岡県韮山町山木遺跡では閉じた円環形を呈する銅釧が出土（山木遺跡発掘調査団1969）しているが、登呂遺跡が呈示した弥生遺跡像の印象の大きさゆえか、その後しばらくの間は、登呂遺跡から出土したタイプの銅釧が東日本の弥生時代銅釧の典型例として考えられ、「薄板を環状に曲げたかんたんなつくりのもの」（坪井清足1960）などと説明されることになった。また小田富士雄は、登呂遺跡出土の銅釧を「幅広い薄板を曲げた鍛造品である」として「登呂型銅釧」と呼び、系譜をイモガイ横切貝輪系と想定している（小田1974）。この時点で小田は、銅製の類品が見あたらないとしていて、登呂遺跡出土品だけを対象としている。

こののち1986年には埋蔵文化財研究会の研究集会に伴って弥生時代青銅器の集成が行われ（埋蔵文化財研究会1986）、東日本の青銅器についても特色が知られるようになり、1989年には井上洋一が弥生時代の銅釧についてまとめている。井上は、弥生時代の銅釧は「Ａ鋳造品」と「Ｂ曲げ輪造りの製品」とに大きく二分できるとし、Ｂ類を「銅板を単にまるめ円環をつくったもの」であるとして「帯状円環型銅釧」とした。分布図を示しており、この図に示された遺跡の銅釧をみると、Ｂ類に含まれる銅釧は円環の一箇所が切れているものと閉じた円環のものとの両者を含んでいる。また系譜について小田の言うイモガイ横型貝輪の系譜の他に、分布が東日本に偏ってみられることから縄文系の二枚貝貝輪から変化した可能性もあると述べている（井上1989）。

ここまでの研究は、弥生時代の銅釧全体の中での東日本に特有の銅釧を述べているに過ぎなかったのであ

るが、出土事例の増加とともに報告書において細かい特徴が観察されるようになり、最近では東日本の銅釧を対象とした研究が行われるようになってきた。

小高幸男は千葉県君津市マミヤク遺跡出土青銅製品をもとに形態的特徴を細かく観察し、銅釧の外面角に面取りがあることを指摘している（小高1989）。

黒沢浩は東京都狛江市弁財天池遺跡出土銅釧の報告において、銅釧の側縁角に（鋳バリ状の）弱い突出がみられることを指摘し、これらの銅釧は「扁平な銅板を曲げてその両端を「鋳掛け」状に貼りあわせたもの」で、側縁の端部にみられる突出が内面側にも見られるのは、円形に曲げる前に研磨した際に生じたものと推測している（黒沢1992）（註２）。

中村勉は、東日本に特徴的な銅環と呼ばれる青銅器全般について、分類、分布、性格、系譜を考察している（中村2001）。中村は、「銅環」の大型品（腕輪）と小型品（指輪）に共通する特徴として「分布が東日本に限られていること、またその造りが一部に鋳造でなく鍛造のものもありまた青銅製板を曲げて環状にし、製品化している」点を挙げており、「鍛造」の製品もあると考えている。銅環の分類は数少ない完形品を参考に、銅環を環の直径の大きさによってＡ類（５～７㎝）、Ｂ類（1.5～３㎝）に二分している。一般的に腕輪とされる銅環Ａ類は三分類しているが、造りの上で鋳造品と鍛造品との二種類に分けられるとしている。また、指輪ともいわれる銅環Ｂ類は、形態的に三分類しているが「つくりは「曲げ輪造り」によるもので、使用される板状帯の形態は、銅環Ａ類のものとほぼ変わらない」という。

野澤誠一は、佐久市上直路遺跡出土銅釧の復元複製製作の報告を兼ねて、弥生時代後期の東日本に分布する銅釧・鉄釧の製作技法が独特のものである可能性を示し、金属製釧の役割と東日本の弥生社会の独自性を論じている（野澤2002）（註３）。野澤の形態分類は、東日本の銅釧の特徴として断面が扁平な長方形であることから、有鉤銅釧や楽浪系銅釧と区別して「帯状銅釧」とした上で、完形品で閉じた円環状のものを「円環型」、完形品を切断して開いた円環状になったものを「断環型」として区分した。また断環型を曲げ直して小さくなったものを「小銅環」としている。

これまでの帯状円環型銅釧の研究は、巻き貝貝輪系銅釧や楽浪系円環型銅釧の研究の中で対比され言及された研究から、東日本に分布する帯状円環型銅釧を直接研究するという段階へ移ってきているが、なお細かい形態分類には十分に踏み込んでいないと言って過言ではないであろう。

３．帯状円環型銅釧の分類

本稿で対象とする銅釧は、弥生時代銅釧の分類としては井上の「Ｂ類（曲げ輪造り）－帯状円環型銅釧」に該当するのであるが、筆者はＢ類銅釧も基本的には円環形に鋳造されたものであり、曲げ輪造りの銅釧は例外的に存在するが、それは再加工品として位置付けるほうが妥当ではないかと思っている（註４）。

ここでは断面形が扁平な長方形または薄板状で全体形が円環形を呈する銅釧を「帯状円環型銅釧」とし、円環の一箇所が途切れた状態で使用されているものを野澤に準拠して「断環型」と呼ぶことにする。両者を包括した呼称として「帯状銅釧」を使用する。

その上で、本稿では帯状銅釧を観察した結果に基づいて、断面形状をつぎのように分類する。分類基準は断面の形状に沿って示しているが、分類の意図は、銅釧として仕上げるための加工がどれだけ加えられているか（手抜きされているか）によって、型式変化の方向を見いだそうとするものである。

以下に分類基準と模式図を示す。

分類基準

Ⅰ類＝断面形が長方形を呈し、上下両端に平坦面があるもの。断面形の角の微細形状（仕上げ具合）によって４細分する。

Ⅰａ類：銅釧内面の上下端に内側へ捲れたりはみ出すような弱い突出が存在し、且つ外面の上下端にも外側へ捲れたりはみ出すような弱い突出が見られるもの。

Ⅰｂ類：Ⅰａ類と同様に銅釧内面の上下端に内側へ弱い突出が見られるが、外面側には見られないもの。

Ⅰｃ類：断面の四隅とも角が明瞭であるが、捲れるような弱い突出は見られないもの。

Ⅰｄ類：断面の四隅もしくは外面側の角が丸味を持って滑らかに仕上げられているもの。

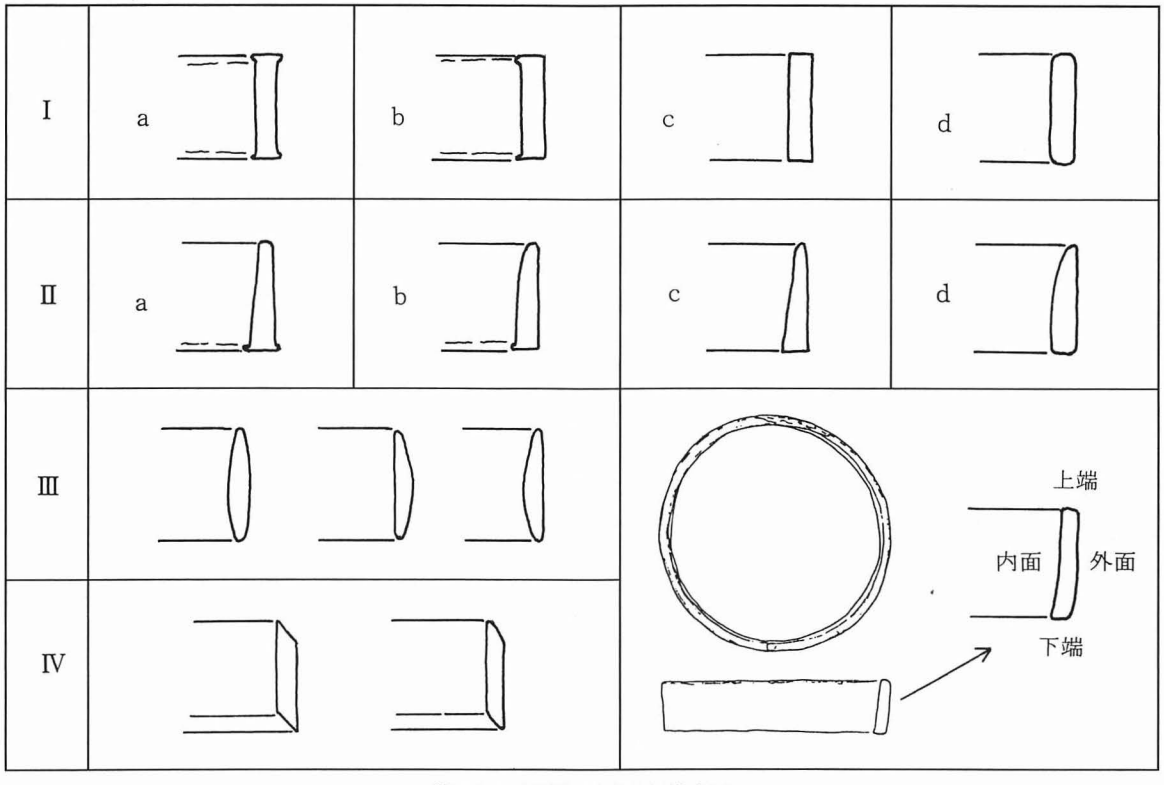
Ⅱ類＝断面形が台形もしくは楔形を呈するもの。上下いずれかの端部に平坦面を有し、もう一方の端部は磨き込まれて薄く仕上げられる。薄い端部の平坦面の有無と磨きが内外両面か一方だけかという違いが存在するが、ここでは区分しない。幅広い平坦面の角に突出があるかないかによって２分する。

Ⅱａ類：幅広い平坦面の角に捲れるような弱い突出があるもの。

Ⅱｂ類：幅広い平坦面の角に捲れるような弱い突出が見られないもの。

Ⅲ類＝断面の上下両端が磨き込まれて薄く仕上げられ、断面形が薄い板状もしくは薄い蒲鉾状になるもの。内外両面が磨き込まれるものと内外面のいずれかが磨き込まれもう一方は直線的なものがあるが、今回は区分しない。

Ⅳ類＝断面の上下端面が内削ぎ状もしくは外削ぎ状に面取りされているもの。面取りされた傾斜面がやや丸味を持つものもあるが一括する。面取りが両端にあるものと一方だけにあるものがあるが、ここでは区分しない。両端に面取りがされるものはほとんどが、一方が内傾面、もう一方が外傾面となる。面取りが内傾面か外傾面かの違いは、両者が互いに組み合うのものなので区分しない。



第１図　銅釧断面形分類模式図

4．各遺跡出土銅釧の特徴

上記の分類に基づき、腕輪としての組み合わせが分かる事例を中心に、個別の特徴を確認しておこう。完形もしくは準完形の帯状円環型銅釧が出土している遺跡は33遺跡が知られているが（第２図）、未報告の資料もあるため、報告書から特徴が判断できるものと筆者が観察し得たものを取り上げることとする。

なお、文中および集成図の遺跡番号は分布図の遺跡番号および文末の遺跡文献一覧と対応し、遺物番号は各遺跡の報告の番号を踏襲している。報告時に番号が付されていないものには、適宜番号を付けた。

（２）如仲庵遺跡

遺構は発見されていないが、帯状円環型銅釧６点がまとまって出土している。継ぎ目が見られないと言うことから全て鋳造品と考えられる。３～５は内外面とも磨かれ、６～８は鋳造時の凹凸が残っているという。いずれも断面の一端が尖るように作られており、Ⅱｄ類（３～５）とⅡｃ類（６～８）で構成される。

（４）賤機山古墳下層遺跡

弥生時代後期の墓坑と考えられる土坑から帯状円環型銅釧６点が出土している。６点ともやや歪んでいるが正円に直すと直径6.2～6.3cmになる。幅は12.5㎜前後で揃っているが、厚さは上端が1.7㎜前後、下端が2.4㎜前後を測り、断面形は長方形か台形を呈している。いずれも内外面および端面は研磨されていて、１～４は一方の端部がやや薄くなっているが断面形はほぼ長方形であって断面分類はⅠｃ類、釧５・６は明らかに一端が薄くなっていて断面形は台形に近く、断面分類はⅡｃ類である。厚みある端部の方が直径が小さく、薄い端部の方が直径が若干大きい。帯状円環型銅釧の中では大型の部類に属する。いずれの銅釧も合わせ目は認められず鋳造品である（註５）。６連一組と考えられ、Ⅰｃ類とⅡｃ類で構成されている。

（５）登呂遺跡

1947年と1948年の調査で断環型の帯状銅釧２点、破片８点、小銅環４点が出土し、1999年から2001年の再整備に伴う調査では断環型の帯状銅釧１点、破片１点、小銅環１点、有鉤銅釧片１点が出土している。墓坑から出土したものはない。

1947年調査の１（『登呂　前編』図版63－４）は、破断部分両端の形状がほぼ同じであり、一周した円環型であったものを断ち切った状態と思われる。断面形は長方形で上下両端に平坦面があり、角はやや丸味がある。Ⅰｄ類である。２の破断部分両端は鋭利な面となっていて、外面側から鏨等の刃物で切断されたものと思われる（註６）。断面形は一端が厚い台形を呈し、上下両端には平坦面がある。断面分類はⅡｃ類である。再整備に伴う調査で出土した断環型の帯状銅釧は大きく歪んでいて一端が開いているが、破断部分両端は形状が似ていて接合するのではないかと思われる。断面形は角に丸味のある長方形を呈する。断面分類はⅠｄ類である。登呂遺跡出土の青銅製品は地下水位が高い状態にあるためか腐蝕があまり進行しておらず、いずれも保存状態が良い。破片資料も含めて銅釧表面は内外面とも丁寧に磨かれている。

（11）原口遺跡

第１号方形周溝墓の主体部からほぼ完形に復元される帯状円環型銅釧が２点、ＹH34号竪穴住居址の覆土から帯状円環型銅釧の完形品が１点、ＹH60号竪穴住居址の覆土から帯状銅釧の約1/2破片が１点出土している。またＹH38号竪穴住居址の覆土から帯状銅釧の破片が出土している。

ＹH34号竪穴住居址の銅釧は、直径5.9cm～6.2cmでほぼ正円に近く、幅は1.36cm～1.38cm、内面が研磨されていて、一端はやや薄くなっている。上端の厚さは2.2㎜～2.5㎜、下端の厚さは1.5㎜～1.8㎜で、断面は楔形を呈し、外面側はほぼ垂直なのに対して内面側はわずかにカーブを描きながら下方が細くなっている。

1　静岡県森町　文殊堂古墳群下層
2　静岡県森町　如仲庵遺跡
3　静岡県掛川市　梅橋北遺跡
4　静岡県静岡市　賤機山古墳下層
5　静岡県静岡市　登呂遺跡
6　静岡県静岡市　川合遺跡
7　静岡県静岡市　瀬名遺跡
8　静岡県三島市　中島西原田遺跡
9　静岡県三島市　鶴喰前田遺跡
10　静岡県韮山町　山木遺跡
11　神奈川県平塚市　原口遺跡
12　神奈川県平塚市　真田・北金目遺跡群
13　神奈川県横浜市　関耕地遺跡
14　千葉県君津市　大井戸八木遺跡
15　千葉県木更津市　高砂遺跡
16　千葉県袖ヶ浦市　文脇遺跡
17　千葉県袖ヶ浦市　荒久遺跡
18　千葉県市原市　根田遺跡
19　千葉県市原市　長平台遺跡
20　千葉県市原市　草刈遺跡H区
21　東京都狛江市　弁財天池遺跡
22　埼玉県朝霞市　向山遺跡
23　埼玉県川越市　霞ヶ関遺跡
24　埼玉県東松山市　観音寺遺跡
25　群馬県渋川市　有馬遺跡
26　長野県南箕輪村　北高根A遺跡
27　長野県茅野市　家下遺跡
28　長野県臼田町　離山遺跡
29　長野県佐久市　五里田遺跡
30　長野県佐久市　上直路遺跡
31　長野県長野市　篠ノ井遺跡群
32　長野県長野市　本村東沖遺跡
33　長野県長野市　檀田遺跡

第2図　帯状円環型銅釧（完形品）出土遺跡分布図

上端には明瞭な面があって、内面上端は尖り気味の強い角がある。下端は狭い面を有している。断面形による分類はⅡｃ類である。表面の状態は、内外面ともに滑らかである。継ぎ目のない鋳造品であり、X線透過写真撮影を行った結果も接合部と見られる部分は認められなかった。完形品であり、保存処理後の現重量は32.4ｇを測る。帯状円環型銅釧としては大型の部類である。

第１号方形周溝墓の主体部からは２点出土していて、３は下端に丸味のあるわずかな面があり、上方に向かって次第に細くなり、上端は尖っている。もう１点の４は、下端に明瞭な平坦面があってその外面端部は角があり、内面端部は内側へ向かって弱い突出が見られる。断面の外側は直線的であるが、内面の上半は研磨され上端は尖っている。断面分類は３がⅢ類、４がⅡｂ類である。

(12) 真田・北金目遺跡群

銅釧、小銅環、再加工品等の青銅製品は、破片を含めると多数出土している（註７）。３連の帯状円環型銅釧が、方形周溝墓の周溝内土坑から出土している。錆が著しいが欠損は少なく原形を良好に保っている。３連のうち中央に挟まれる銅釧は、断面形が長方形を呈し、角の一部に弱い突出があるⅠａ類である。３連の両端の銅釧は、断面形が楔形を呈し、他の釧と接する側の端部に平坦面を有し、もう一端は内面が徐々に薄くなって先端が丸くなる形状を呈する。このうちの１点には、平坦面の内面側角に、部分的ではあるが捲れるような弱い突出が観察される。Ⅱｂ類とⅡｃ類である。

(14) 大井戸八木遺跡

古墳墳丘下から発見された２基の土壙のうち、001号土壙から小銅鐸、玉類と共に４連の帯状銅釧が出土している。４連の銅釧のうち３点は継ぎ目のない円環型であるが、１点は断環型であり、切れ目の両端部に孔が穿たれ紐で結んだ痕跡が残っている。円環型の３点はⅡｃ類２点、Ⅲ類１点である（註８）。

千葉県木更津市　高砂遺跡〔15〕

SZ022から帯状円環型銅釧６点、SZ039から銅釧破片１点、SZ043から銅釧破片１点が出土している。SZ022では周溝内埋葬施設から帯状円環型銅釧６点が連なって出土した。１は一部を欠損するが２～６は完形品である。継ぎ目が認められないことから鋳造品と考えられている。４はⅠｄ類、１と６はⅡｃ類、その他の３点はⅡｄ類である。

(17) 荒久遺跡

008方形周溝墓の埋葬施設主体部から、ガラス小玉と共に銅釧が出土している。銅釧は破損した状態で出土したが、５個の釧であったと考えられている。復元できた２個体は、端部が斜めに削がれたように面取り整形されている。接合部が見られないので鋳造されたものと考えられている。報告の１は２個体が連結したままであり、Ⅳ類である。この他にはⅠｄ類、Ⅱｂ類がある。周溝から久ヶ原式土器の壺、鉢、甕が出土していて、後期初頭に位置付けられている。

(18) 根田遺跡

２基の方形周溝墓の主体部から、それぞれ５連の帯状円環型銅釧が、腕に装着した状態で骨と共に出土している。年報に記載された報告（米田1986）に拠ると、それぞれ組み合わさる５点は似た大きさを示している。これらの銅釧には、つなぎ目等が一切見られず、大きさも均一なことから鋳造された可能性が高い。

観察の結果、銅釧Ａの５点はいずれも断面の一端が内削ぎ状に面取りされた内傾面をもち、他の一端が外削ぎ状に面取りされた外傾面をもつⅣ類であり、隣り合う銅釧の内傾面と外傾面が嵌り合うように作られている。銅釧Ｂの５点は全て断面の一端に平坦面を有し、他の一端が先細りになる楔形を呈するⅡｃ類で揃え

られている（註９）。

（21）弁財天池遺跡

１号方形周溝墓の第２主体部とされる土坑（註10）から、腕に装着された状態で人骨とともに帯状円環型銅釧が６点出土している。６点のうち３点は完形であり、１点は一部欠損、２点は1/2～1/3が欠損している。９がほぼ正円に近いが、他はやや歪んでいる。断面形は長方形を呈するものと、一端が薄くなって台形状を呈するものとがある。８～12の断面形は基本的には長方形を呈するが、詳細に観察すると側縁の上下両端（断面の四隅）が内側および外側に向かって捲れるようにわずかに突出していて（註11）、断面形がローマ数字の「Ｉ」字状になっていることが判る。断面形の分類は７がⅡｃ類で８がⅡａ類、その他の４点はＩａ類である。使用の組合せとしては、Ⅱ類の２点が６連の両端、Ｉａ類の４点がⅡ類に挟まれて使われていたであろうと推測される。これらは鋳造品で、製作時の貼りあわせ痕は認められない。

（29）五里田遺跡

第２号円形周溝墓の主体部墓壙から帯状円環型銅釧５個体が出土している。いずれも鋳造品である。９～12は断面形が長方形の板状を呈し、上下両端に平坦面がある。内面側の上下両端は内側へ向かって弱い突出があり、外面側には突出はない。外面は滑らかに仕上げられているが、内面は荒れた感じがあり、鋳放しであると思われる。13は現状では断面形が楔形の図であるが、腐蝕によって一端が薄くなっているものであり、本来は９～12と同様であったと考えられる。断面分類はいずれもＩｂ類である。

（30）上直路遺跡

弥生時代後期後半の第１号住居址内に掘られた墓壙から、人骨とともに腕に装着された状態で帯状円環型銅釧が出土している。欠損品もあり正確な個体数は分からないが、14～15個体があったと考えられている。出土位置から１～５は右腕、６～13が左腕に装着されたものとされる。４・５と６～11は連なって出土し、その状態のまま保存処理されている。完形の銅釧はいずれも繋ぎ目のない鋳造品である。個々の状態が良好なのは１～５であるが、観察に耐えられる状態にある９点を観察した。

観察した９点のうち、１、２、５、12、15は、内面側の上下両端に弱い突出が認められるが、外面側は角が明瞭であるが突出は認められない。Ｉｂ類である。内面は鋳造時のままと思われる凹凸があるが、外面は凹凸がなく磨いてあるようである。３、13は内面も外面も研磨されず無調整のようである。上下両端ともに内面側と外面側に弱い突出が認められるＩａ類である。４と14は一端の内外面が研磨されて先細りになり、もう一端は平坦面を有し内面側に弱い突出が認められるⅡｂ類である。

１～５で一組、６～13で一組となるのであるが、両組ともＩ類を主とする中にⅡ類が１点ばかり組み込まれるという構成である。

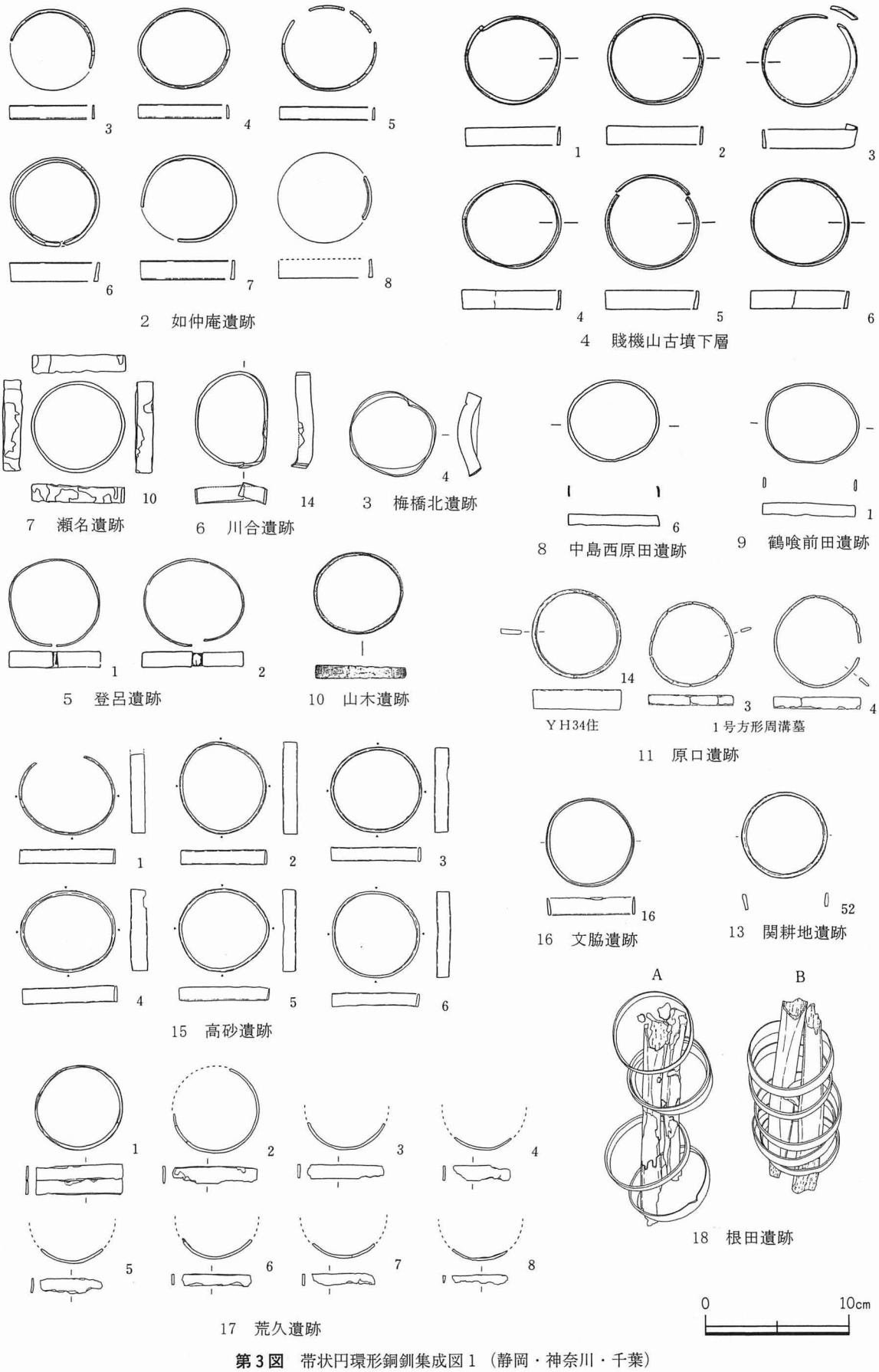
（31）篠ノ井遺跡群

土坑墓と思われるSB217（箱清水期）から２点、竪穴住居址SB374の覆土中から１点、円形周溝墓SM213の主体部から１点が出土している。いずれも断環型銅釧である。

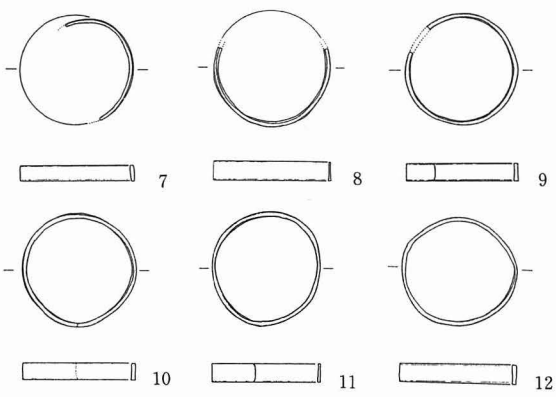
SB217の１は上下の端部が大部分欠損していて、断面形の詳細は不明である。２は一端が内面研磨により先細りになるⅡ類で、もう一方の端部は全周欠損しているため不明である。円環が切れている部分は内側へ折れ曲がっていて、外側から鏨で叩いて断ち切ったように観察される。

SB374出土の３は全体的に薄く仕上げられていて、断面形は両端が細く尖るⅢ類である。

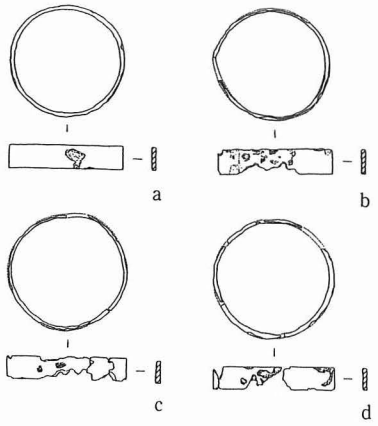
円形周溝墓SM213の主体部出土の銅釧は、円環の一箇所が離れている断環型で、切断部の形状は一致して



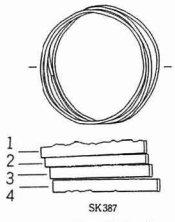
第3図 帯状円環形銅釧集成図1（静岡・神奈川・千葉）



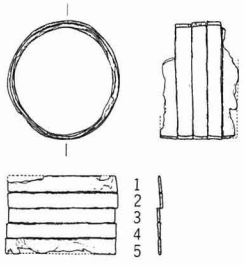
21　弁財天池遺跡



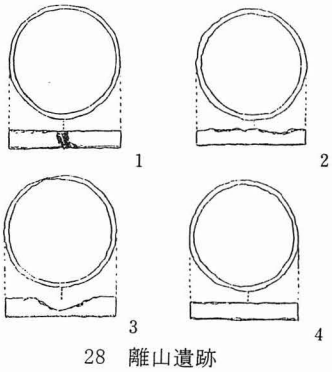
24　観音寺遺跡



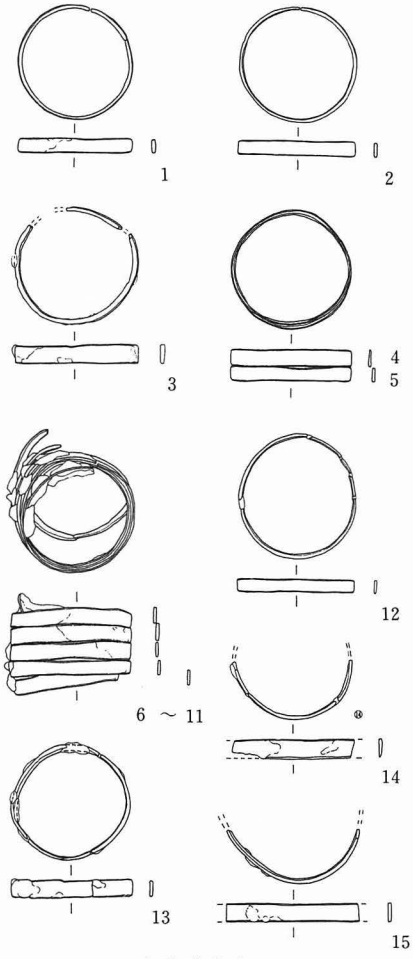
25　有馬遺跡



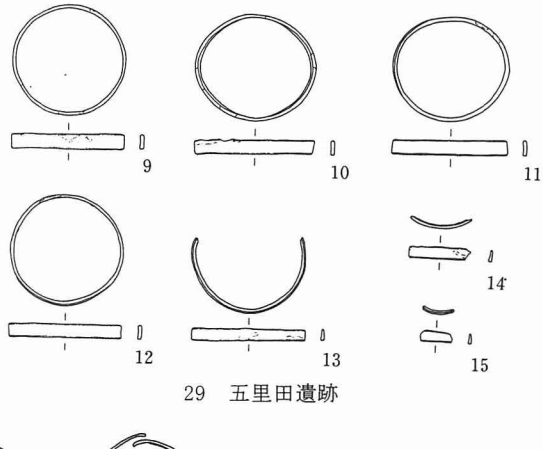
32　本村東沖遺跡



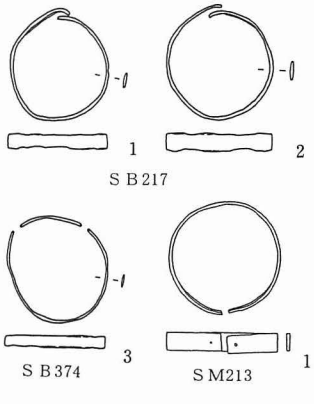
28　離山遺跡



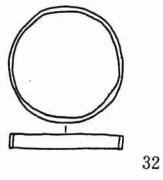
30　上直路遺跡



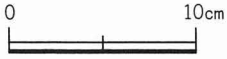
29　五里田遺跡



31　篠ノ井遺跡群



26　北高根Ａ遺跡



第４図　帯状円環形銅釧集成図２（静岡・神奈川・千葉）

第1表　銅釧分類一覧表

所在地	遺跡番号	遺跡名	遺構名	遺構番号	Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅰd	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱd	Ⅲ	Ⅳ	断環	備考
静：森町	1	文殊堂古墳群下層														未報告
静：森町	2	如仲庵遺跡	土壙？	3								○				
		〃	〃	4								○				
		〃	〃	5								○				
		〃	〃	6							○					
		〃	〃	7							○					
		〃	〃	8							○					先端欠
静：掛川市	3	梅橋北遺跡	自然流路	4									○			
静：静岡市	4	賤機山古墳下層	土壙	1			○									
		〃	〃	2			○									
		〃	〃	3			○									
		〃	〃	4			○									
		〃	〃	5							○					
		〃	〃	6							○					
静：静岡市	5	登呂遺跡	包含層	1				○							○	
		〃	〃	2							○				○	
		〃	（再整備調査）					○							○	未報告
静：静岡市	6	川合遺跡	包含層	14				○							○	
静：静岡市	7	瀬名遺跡	包含層	10										？		
静：三島市	8	中島西原田遺跡	旧河川	6									○			
静：三島市	9	鶴喰前田遺跡	包含層	1								○				
静：韮山町	10	山木遺跡	包含層	1												断面不詳
神：平塚市	11	原口遺跡	YH34号住居址	14							○					
		〃	1号方形周溝墓	3									○			
		〃	〃	4						○						
神：平塚市	12	真田･北金目遺跡群	方形周溝墓	1						○						未報告
		〃	〃	2	○											
		〃	〃	3							○					
神：横浜市	13	関耕地遺跡	6号住居址	52				○								
千：君津市	14	大井戸八木遺跡	001号土壙	1							○					未報告
		〃	〃	2									○			
		〃	〃	3									○		○	
		〃	〃	4							○					
千：木更津市	15	高砂遺跡	SZ022	1							○					
		〃	〃	2								○				
		〃	〃	3								○				
		〃	〃	4				○								
		〃	〃	5								○				
		〃	〃	6							○					
千：袖ヶ浦市	16	文脇遺跡	215号住居址	16								○				
千：袖ヶ浦市	17	荒久遺跡	008方形周溝墓	1										○		
		〃	〃	1										○		
		〃	〃	2							○					
		〃	〃	3				○								
千：市原市	18	根田遺跡	A（方形周溝墓）	1										○		
		〃	〃	2										○		
		〃	〃	3										○		
		〃	〃	4										○		
		〃	〃	5										○		
		〃	B（方形周溝墓）	1							○					
		〃	〃	2							○					
		〃	〃	3							○					
		〃	〃	4							○					
		〃	〃	5							○					
千：市原市	19	長平台遺跡														未報告
千：市原市	20	草刈遺跡H区												○		未報告
東：狛江市	21	弁財天池遺跡	1号方形周溝墓	7							○					
		〃	〃	8					○							
		〃	〃	9	○											
		〃	〃	10	○											
		〃	〃	11	○											
		〃	〃	12	○											
埼：朝霞市	22	向山遺跡														未報告

銅釧分類一覧表（2）

所在地	遺跡番号	遺跡名	遺構名	遺構番号	Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅰd	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱd	Ⅲ	Ⅳ	断環	備考
埼：川越市	23	霞ヶ関遺跡														未報告
埼：東松山市	24	観音寺遺跡	4号方形周溝墓	a			○									
		〃	〃	b			○									
		〃	〃	c			○									
		〃	〃	d			○									
群：渋川市	25	有馬遺跡	7号墓SK387	1				○								
		〃	〃	2				○								
		〃	〃	3				○								
		〃	〃	4				○								
長：南箕輪村	26	北高根Ａ遺跡	包含層	32			○									
長：茅野市	27	家下遺跡														未報告
長：臼田町	28	離山遺跡	土壙？	1												断面不詳
		〃	〃	2												
		〃	〃	3												
		〃	〃	4												
長：佐久市	29	五里田遺跡	2号円形周溝墓	9		○										
		〃	〃	10		○										
		〃	〃	11		○										
		〃	〃	12		○										
		〃	〃	13		○										
長：佐久市	30	上直路遺跡	1号住居址内土壙	1		○										
		〃	〃	2		○										
		〃	〃	3	○											
		〃	〃	4					○							
		〃	〃	5		○										
		〃	〃	6~11												Ⅰ類
		〃	〃	12		○										
		〃	〃	13	○											
		〃	〃	14					○							
		〃	〃	15		○										
長：長野市	31	篠ノ井遺跡群	土坑SB217	1											○	Ⅰ類？
		〃	〃	1											○	Ⅱ類？
		〃	住居址SB374	2									○		？	
		〃	円形周溝墓SM213	1	○										○	
長：長野市	32	本村東沖遺跡	SK3	1					○							
		〃	〃	2	○											
		〃	〃	3	○											
		〃	〃	4	○											
		〃	〃	5	○											
長：長野市	33	檀田遺跡														未報告

※出典は本文末の遺跡文献一覧を参照のこと。遺跡番号は分布図・遺跡文献一覧と対応。

いない。内面側の切断部脇には、切断部に並行して鏨痕が残っている。切断された両端部には内側から円孔が穿たれていて、孔の外側の縁には捲れるような弱い突出が認められる。断面形は長方形を呈し、内外面ともに上下端には弱い突出が認められるⅠａ類である。なお、本例に見られる円孔周辺の捲れるような弱い突出は、環体上下端に観察される「捲れるような弱い突出」と同様のものであり、形成の原因を推測できる資料である。

（32）本村東沖遺跡

隅丸長方形の土坑ＳＫ３から、管玉、ガラス玉、鉄鏃とともに帯状円環型銅釧５個が重なった状態で出土している。５連の銅釧のうち、内側に位置する２～４の銅釧はいずれも両側に他の銅釧が接する関係にあるのであるが、全て断面形が長方形を呈し、四隅の角には内面側および外面側へ捲れるような弱い突出が見られる。５連の銅釧の両端にあたる１と５は断面形が先細りの楔形を呈し、それぞれ他の銅釧と接する方の端部には平坦面があって、２～４と同様に内外両方の角には捲れるような弱い突出が見られる。断面形の分類

は、１と５がⅡａ類、２～４がⅠａ類である。４の外面には、鋳バリを切り落とした際の失敗傷かと思われる鑢痕のような鋭い抉れが１箇所認められる。５連で出土した状態のままで保存処理されている。１と５は腐蝕による欠損が著しい。

この５連の銅釧に顕著に認められる特徴は、一組になる組合せの両端にある釧は端部側が先細りに磨き上げられ、互いに接する銅釧の端部は内外面の角に見られる「弱い突出」を残したままで、研磨仕上げを行っていないという点にある。

５．型式分布と地域的特色

帯状円環型銅釧の分布は、現在知られているところでは天竜川流域より東で、利根川（江戸川）を越えてはいない（第２図）。現在の行政区分では、静岡県、神奈川県、千葉県、東京都、埼玉県、群馬県、長野県の１都６県に及んでいて、分布に粗密があることは既に指摘されているところである（臼居2000、野澤2002）。

ここまで各遺跡出土銅釧の特徴を見てきたが、銅釧が腕輪として着装されている事例は、基本的に複数の銅釧を連結して一組の腕輪としていることが墓坑出土例から分かる。そこでまず、型式の組合せを確認しておこう（第１表）。

太平洋沿岸の遺跡では、如仲庵遺跡、賤機山古墳下層、高砂遺跡などのようにⅠｃ・Ⅰｄ類とⅡｃ・Ⅱｄ類が組合うものが多く、大井戸八木遺跡のようにⅡｃ類とⅢ類が組合わさっているものもある。中には真田・北金目遺跡群のようにⅠａ類とⅡｂ・Ⅱｃ類が組み合う中部高地的な特徴（後述）を持つ例もごくわずかではあるが存在する。真田・北金目遺跡群の例を除いて、この地域は全般的に丁寧に磨くという特徴がある。

千葉県の東京湾沿岸地域では、端部を斜め面取りするⅣ類を中心に構成される銅釧が３遺跡で見られ、この地域の強い特色となっている。Ⅳ類以外では、Ⅱｃ類のみで構成される根田遺跡Ｂなど、やはり良く磨かれたものが見られる。

中部高地では、長野県の千曲川流域に強い特色が見られる。五里田遺跡や本村東沖遺跡に代表されるように、Ⅰａ類もしくはⅠｂ類で構成され、Ⅱａ類が加わる場合があるというものである。Ⅲ類やⅡｄ類のような磨き込んだものはほとんど見られない。

静岡県の太平洋沿岸、千葉県の東京湾沿岸、長野県の千曲川流域の３地域が帯状銅釧の分布の中心とされてきたのであるが、上述のように形態的にもそれぞれ特色のある３地域であることが明らかになった。

それではこれらの中間に位置する地域ではどうであろうか。

多摩川流域の弁財天池遺跡では、Ⅰａ類が主体でⅡａ・Ⅱｃ類が加わる中部高地的な構成を示しているが、出土土器も中部高地系の朝光寺原式土器が主体であるので、特に齟齬はない。

荒川流域の観音寺遺跡はⅠｃ類、利根川上流域の有馬遺跡はⅠｄ類でそれぞれ構成される組合せであり、隣接地域である中部高地とはやや異なった様相を持つと言えよう。この地域は、もう少し類例が増えることを待つ必要があろう。

型式の組合せとしては、Ⅰ類のみ、Ⅱ類のみ、Ⅳ類のみ、といったような構成もあるが、またⅠ類とⅡ類が組み合わさるようなことは、ごく普通のことであることも分かった。連結したまま出土した本村東沖遺跡などの例から判断すると、連結した釧の両端に一端を薄く磨いたⅡ類を配置し、これらに挟まれた間にⅠ類を置くという並びで着装されるようである。そうすると、Ⅰ類とⅡ類の関係としては、細分項目のａ、ｂ、

ｃ、ｄによる分類が関わるようである。Ⅰ類がａ・ｂならば、同時に組合わさるⅡ類もａ・ｂであることが多く、Ⅰ類がｃ・ｄならば組合わさるⅡ類もｃ・ｄということである。

６．仕上げ加工の省略と型式変化

帯状円環型銅釧のⅠａ類とⅠｂ類およびⅡａ類とⅡｂ類に見られる「捲れるような弱い突出」は、どのようにして生じるのであろうか。弁財天池遺跡の報告で黒沢浩が述べているように（黒沢1992）、この突出は装飾のように意図して残されたものではないようである。黒沢は、銅釧を研磨する際に生じたものと想定した。これとは違って、このような突出が鋳型の合わせ目に生じる「鋳バリ」の痕跡と考えて、野澤誠一は鋳型の形態を復元し鋳造実験を行った（野澤2002）。実験の結果は概ね良好で、仕上げに研磨すると金属光沢が生じるという。しかしながら鋳バリ痕が残っているということは、研磨していないということである。

銅釧および小銅環などの加工痕跡を観察すると、この「捲れるような弱い突出」と同様の痕跡が、断環型銅釧や小銅環、垂飾品に穿たれた円孔の周辺にしばしば見られる。前記した篠ノ井遺跡群ＳＭ213出土の断環型銅釧に穿たれた円孔の周辺も、同様の痕跡である。これらから「捲れるような弱い突出」は銅釧の上下端面を研磨し整形する過程で生じたものと考えられる。そして内外面にはみ出したこの突出は、削るとか研磨するといった仕上げを省略しているがゆえに残っていると考えられるのである。

ここでは、この痕跡が残っていることを仕上げ加工の省略、すなわち形態の退化の痕跡と解釈したい。

五里田遺跡や上直路遺跡のⅠｂ類銅釧にみられるように、「弱い突出」が残されていない外面は磨かれて平滑に仕上げられているのに対して、「弱い突出」が残っている内面は鋳放しと思われる凹凸が観察される。この状況は外面仕上げ研磨を行ったが、内面は仕上げを省略していると言えるであろう。外面も仕上げを省略したものが、Ⅰａ類主体の本村東沖遺跡銅釧と言えるのではないだろうか。反対に手を加えて仕上げ加工を入念に行えば、Ⅰｃ類、Ⅰｄ類へと変化し仕上ってゆくことになる。

Ⅱ類はⅠ類と同様の仕上げ加工の変遷が想定される。

これに対して、Ⅲ類とⅣ類はⅠ類で示したような変遷とは異なる位置にあると考えられる。Ⅳ類はⅣ類同士で腕輪を構成し、相互の傾斜面が嵌り合って重なるようになるもので、単に複数の釧を連接して着装するというだけではない意図が込められていると考えるべきであろう。帯状円環型銅釧も他の銅釧と同様に貝輪の系譜を引いていると仮想すれば、二枚貝貝輪が重なる姿に結びつけることも可能であろうが、系譜の間を埋める資料がない。ただ、型式学的には最も古相を示すと考えて良いのではないか。

Ⅲ類については最も良く磨き込まれた製品とすることもできるが、元々厚いものを磨き込んだとは考えられないので、形態変遷や製作技法については別の視点が必要であるかも知れない。

７．まとめ

再生・再加工による形状変化の可能性を排除するために完形・準完形の帯状円環型銅釧を取り上げ、断面形状が仕上げ加工の過程や器種としての祖形を反映している可能性を考慮し、断面形による分類を行って地域色と型式変遷を想定した。

型式変遷について整理すると、最も古い（最も加工の丁寧な）形態から最も新しい（最も省略されている）ものへ、（Ⅰｄ・Ⅱｄ）－（Ⅰｃ・Ⅱｃ）－（Ⅰｂ・Ⅱｂ）－（Ⅰａ・Ⅱａ）という順が想定される。また最も加工されている形態であるⅣ類は、（Ⅰｄ・Ⅱｄ）類以前に位置付けるのが妥当と考えられる。

これらの銅釧は、伴出土器から知られる時期はいずれも弥生時代後期であり、多くが後期後半に置かれる。最も古く位置付けられているのはⅣ類の荒久遺跡であり、後期初頭と報告されている。このことは、推定した変遷の一端を支持するものと思われる。

以上、時期的位置付けなど十分に検討できなかった点も多いが、今後更に検討を重ねて行きたいと思う。

なお、各資料の観察において誤解・誤認があれば全て筆者の責任である。ご指摘、ご批判をいただければ幸いである。

本稿は、平成13年度かながわ考古学財団研究助成制度による研究成果である。

資料の観察・借用・分析にあたって多くの方々のお世話になった。文末ではあるが記して感謝いたします（順不同、敬称略）。

静岡市教育委員会、静岡市登呂遺跡博物館、三浦市教育委員会、秦野市教育委員会、秦野市桜土手古墳保存館、平塚市真田・北金目遺跡調査会、神奈川県教育委員会、横浜市歴史博物館、（財）君津郡市文化財センター、君津市教育委員会、市原市教育委員会、狛江市教育委員会、佐久市教育委員会、長野県埋蔵文化財センター、長野県立歴史館、長野市教育委員会、（独）奈良文化財研究所、パリノ・サーヴェイ㈱、臼居直之、野澤誠一、中村　勉、伊丹　徹、小倉淳一、木對和紀、富沢一明、萱野章宏、中嶋由紀子、大倉　潤、鈴木敏則。

脱稿後、10山木遺跡の第10次・第14次調査で出土した銅釧４点を観察する機会を得た（未報告）。いずれもＩｃ類で外面角はやや丸味がある。観察の機会を下さいました韮山町教育委員会山田康雄氏に感謝いたします。

註

1．銅釧、小銅環（指輪）、小銅鐸、銅鏃、その他単品など、偏った分布傾向を示す種類や独特の形態を持つものが知られている（合田芳正1980、鈴木敏則1986、安藤広道2001など）。

2．この突出が研磨の際に生じたものという考えは首肯できるが、円環形の状態で研磨しても生じるであろう。なお、黒沢が指摘した「「鋳掛け」状に貼りあわせた」とされ図示している箇所は、筆者の再観察の結果では、保存処理時の修復痕跡と同一箇所であり、貼りあわせた痕跡はＸ線透過写真撮影による観察でも存在せず、鋳造品であると考えられる。Ｘ線透過写真撮影および修復痕跡の観察にあたって、（独）奈良文化財研究所の高妻洋成氏にご指導いただいた。

3．野澤論文の最大の特徴は、帯状円環型銅釧の鋳造方法の検討と鋳造実験を行っている点にあり、説得力がある。筆者も帯状円環型銅釧の観察を通して、野澤と同じように、鋳造方法の一つとして組合せ鋳型である可能性が高いと考えているが、鋳バリの痕跡とされる突出をそのまま鋳バリと決定する根拠はないのではないかと思う。なお、野澤は東日本の銅釧・小銅環等と鉄釧の集成を丹念に行っており、今回の検討にあたっても集成の参考とした。また銅釧鋳造方法について色々ご教示いただいた。

4．「曲げ輪造り」の銅釧とは、青銅製の薄板を鋳造するか他の製品から板状に切り取るかして得た素材を曲げて輪にしたものを言うべきであろう。素材を得るときに元の青銅製品を叩き延ばすことは考えられるが、この作業は「鍛造」と呼ぶべきではなく、再加工である。また、円環型銅釧の一箇所を一度断ち切ったものは、厳密には再利用または再加工であり、曲げ輪造りではない。

5．鉛同位体比分析が行われていて、分析結果によると古墳時代の鉛同位体比のグループに属すると報告されている（平尾編1999）。

6．この他にも破片資料に、鏨痕と思われる鋭利な条痕が破断面脇に見られるものがある。

7．発掘調査および整理作業が進められている最中であり、報告書は一部が刊行されている。帯状銅釧、小銅環、帯状銅釧再加工品のほか、有鉤銅釧と思われる破片も出土している。未報告資料であるが、平塚市真田・北金目遺跡調査会のご厚意により観察させていただいた。

8．未報告であるが、君津市教育委員会のご厚意により観察させていただいた。4連の銅釧であるが、作りや大きさが異なる釧を寄せ集めている珍しい例である。

9．市原市教育委員会のご厚意により観察させていただいた。また整理を担当されている木對和紀氏には、観察所見についてご教示いただいた。木對氏によると、銅釧Aの形態が重なり合うようになっているのは、貝輪（貝釧）の形態を写していると考えられるということである。魅力的な見解であり、筆者もその可能性は十分に考えられると思う。

10．第2主体部とされるこの土坑は1号方形周溝墓の周溝外にあり、主軸方向は1号方形周溝墓と揃っているが、1号方形周溝墓とは別の墓である可能性がある。

11．このことは報告書でも指摘されている。また報告書では、これらの銅釧を「扁平な銅板を曲げてその両端を「鋳掛け」状に貼りあわせたもの」で、側縁の端部にみられる突出が内面側にも見られるのは、円形に曲げる前に研磨した際に生じたものと推測している（黒沢1992）。

参考文献

安藤広道2001「関東地方における鉄器・青銅器の流れ」『シンポジウム弥生後期のヒトの移動　資料集』西相模考古学研究会

井上洋一1989「銅釧」『季刊考古学』27　雄山閣

臼居直之2000「再生される銅釧－帯状円環型銅釧に関する一視点－」『長野県埋蔵文化財センター紀要』8

大阪府立弥生文化博物館1994「おくれてきた青銅器」『富士山を望む弥生の国々』大阪府立弥生文化博物館図録8

大阪府立弥生文化博物館2001『弥生クロスロード－再考・信濃の農耕社会－』大阪府立弥生文化博物館図録23

小田富士雄1974「日本で生まれた青銅器」『古代史発掘』5　講談社

木下尚子1983「貝輪と銅釧の系譜」『季刊考古学』5　雄山閣

黒沢　浩1992「1号方形周溝墓出土銅・鉄釧について」『弁財天池遺跡』狛江市教育委員会

合田芳正1980「関東地方の青銅製品について」『考古学雑誌』65－4　日本考古学会

小高幸男1989「銅製指輪・腕輪について」『小浜遺跡群Ⅱマミヤク遺跡』（財）君津郡市文化財センター発掘調査報告書第44集

宍戸信悟1986「神奈川県」『弥生時代の青銅器とその共伴関係　第Ⅲ分冊』埋蔵文化財研究会

鈴木敏則1986「静岡県」『弥生時代の青銅器とその共伴関係　第Ⅲ分冊』埋蔵文化財研究会

鈴木敏則1987「東海地方の青銅器」『弥生時代の青銅器とその共伴関係－埋蔵文化財研究会第20回研究集会の記録－』埋蔵文化財研究会

坪井清足1960「装身具の変遷」『世界考古学大系』2

中村　勉2001「銅環と呼ばれる青銅器について－東日本出土の青銅器に関する一つの考察－」『貝塚』56　物質文化研究会

野澤誠一2002「銅釧・鉄剣からみた東日本の弥生社会」『長野県立歴史館研究紀要』第8号　長野県立歴史館

林原利明2001「神奈川県の青銅製品（1）」『西相模考古』第10号　西相模考古学研究会

平尾良光編1999『古代青銅の流通と鋳造』

埋蔵文化財研究会1986『弥生時代の青銅器とその共伴関係』

八幡一郎1928『南佐久郡の考古學的調査』

吉田　広2000「朝日遺跡の青銅器生産－青銅器生産の東方展開に占める位置－」『朝日遺跡Ⅳ－新資料館地点の調査－』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集

遺跡文献一覧（番号は遺跡分布図等の遺跡番号に対応）

1．（野澤2002）

2．森町1998『森町史』

3．財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1988『梅橋北遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第14集

4．静岡市教育委員会1992『国指定史跡　賤機山古墳』静岡市埋蔵文化財発掘調査報告29
5．静岡市立登呂博物館1989『登呂遺跡出土資料目録　写真編』
日本考古学協会1949『登呂　前編』
日本考古学協会1954『登呂　本編』
静岡市教育委員会2001『特別史跡　登呂遺跡　発掘調査概要報告書Ⅱ』
6．財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1991『川合遺跡遺物編2(石製品・金属製品図版編)』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第32集
7．財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）本文編』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第47集
8．財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『御殿川流域遺跡群Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第50集
9．財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1995『御殿川流域遺跡群Ⅲ　鶴喰前田遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第67集
10．韮山町山木遺跡発掘調査団1969『山木遺跡　第二次調査概報』ニューサイエンス社
11．財団法人かながわ考古学財団2001『原口遺跡Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告104
12．(平塚市真田・北金目遺跡調査会のご厚意により実見)
13．観福寺北遺跡群発掘調査団1997『観福寺北遺跡群関耕地遺跡発掘調査報告書』
14．財団法人君津郡市文化財センター1991「大井戸八木遺跡」『君津郡市文化財センター年報９－平成２年度－』
15．財団法人君津郡市文化財センター1999『高砂遺跡Ⅱ』(財）君津郡市文化財センター発掘調査報告書第154集
16．財団法人君津郡市文化財センター『文脇遺跡』(財）君津郡市文化財センター発掘調査報告書第69集
17．財団法人千葉県文化財センター1999『一般国道410号埋蔵文化財調査報告書－袖ヶ浦市荒久（１）遺跡・三箇遺跡－』千葉県文化財センター調査報告書第349集
18．米田耕之助1986「根田遺跡」『市原市文化財センター年報（昭和60年度)』(財）市原市文化財センター
19．(野澤2002)
20．(野澤2002)
21．狛江市教育委員会1992『弁財天池遺跡』
22．朝霞市教育委員会1997『朝霞市史普及版　あさかの歴史』
23．(野澤2002)
24．宮島秀夫1995「銅釧・鉄剣出土の方形周溝墓　観音寺遺跡４号方形周溝墓」『比企丘陵』創刊号　比企丘陵文化研究会
25．財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『有馬遺跡Ⅱ』(財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第102集
26．長野県教育委員会1973『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－南箕輪村その１・その２－』
27．茅野市教育委員会1995『家下遺跡』
28．八幡一郎1928『南佐久郡の考古學的調査』
29．佐久市教育委員会1999『鳴沢遺跡群　五里田遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書第74集
30．佐久市教育委員会1998「上直路遺跡調査報告書」『佐久市埋蔵文化財　年報６』
31．財団法人長野県埋蔵文化財センター1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書４－長野市内その１－』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書33
32．長野市教育委員会1995『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第67集
田中正治郎1999「篠ノ井遺跡群出土の銅釧」『長野県埋蔵文化財センター紀要』７　長野県埋蔵文化財センター
33．(臼居2000)

普及啓発事業における遺跡復原図活用の一例

－古代相模国府景観想像図の制作方法を中心に－

市毛秀人・依田亮一

はじめに

今日、神奈川県下で行われている埋蔵文化財発掘調査の多くは、街中での再開発事業等に伴う調査が中心で、日々の調査の運営・進行にとっては、原因者（事業者）はもとより、とりわけ近隣住民の理解と協力を得る必要性が以前にも増して大きくなったと言えるだろう。そこで、時折、趣向を凝らした現地説明会や展示会といった普及啓発事業が各地で開催されているなかで、見学者に理解を促す補助資料として、賛否両論はあるとしても、各種さまざまな遺跡の復原図や模型などが活用されることがある。

私たちは、平成13年度に平塚市真土・四之宮地区に所在する湘南新道関連遺跡の発掘調査に携わり、平成14年２月９日に実施した現地説明会において、第１図に掲げたようなカラーリーフレットを制作する機会に恵まれた。調査地点の周辺地域はここ20数年来、開発に伴う事前の発掘調査が頻繁に行われ、それによって長年所在が掴めなかった古代相模国の行政的拠点、すなわち相模国府跡の有力な推定地として今日注目されるようになった【注】。そのため、説明会では当日参加された見学者が、限られた時間で国府とは一般的にどのような場所であって、また相模国府に関するこれまでの調査・研究動向から調査地点周辺が地理的・空間的にど

第１図　湘南新道関連遺跡 現地説明会資料（上段：表面、下段：裏面）※縮尺　原版の1/4

のように位置付けられるのか、という２点について具体的に示すために、古代相模国府の景観想像図を制作することにした（第２図）。さらにリーフレットでは、遺跡上空から撮影した現代の真土・四之宮地区の航空写真と、ほぼ同様な視点から眺望して描いた景観想像図とを対称的に配置することによって、当該地域の景観の変貌も併せて理解出来るような工夫も図ってみることにした。

見学者自身の想像力を掻き立てる目的もあって、景観想像図には敢えて詳細な説明文やキャプションを付さないことにしていたが、今後、説明会や展示会等において同様な絵図面を作成し、活用する機会の参考になればと思い、小稿では絵図面の作成経過や方法、その内容（解題）について、記憶を辿りながら書き留めてみることにした。なお、この景観図は、後に示すようにかなりの部分を仮説に仮説を重ねた、いわばフィクション性の高いもので、「復原図」と呼ぶにはほど遠く「想像図」と付した所以である。また、絵図面の作成に際しては、長年平塚市内の考古学的調査に関わられ、相模国府研究にも造詣の深い平塚市博物館学芸員の明石 新氏の全面的なご指導・ご助言を頂いていることも併記しておく。

１．絵図面作成の前段階

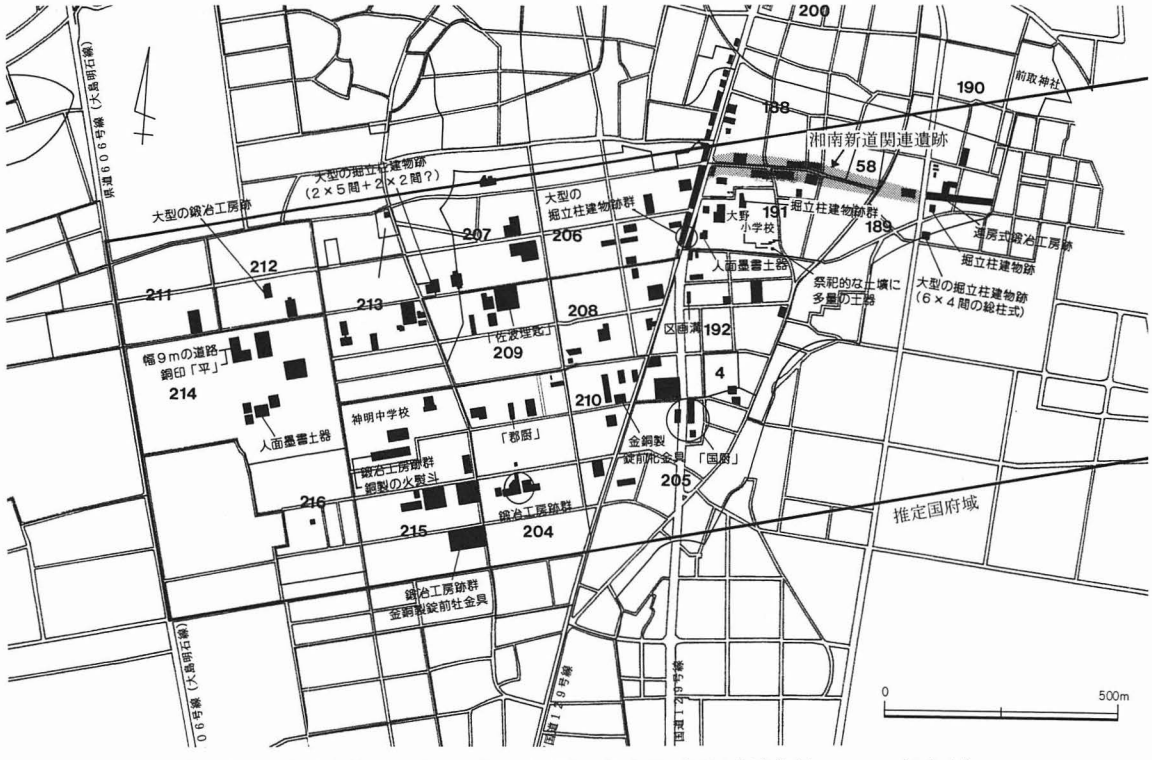
図案の構想者と作画者が異なる場合、作業上の留意点として、構想を正確に伝達し、描画のディテールについて互いの意志疎通をはかることが、何よりも重要であることは言うまでもない。構想者が事前に作画者に対して呈示したものとしては、①図案の構図と視点および視野、②復原図を作成するうえで参考となる先行研究（各種復元模型やイラストなど）、③当該地域の地理的・考古学的情報、の３点である。

①については、湘南新道関連遺跡のこれまでの調査所見として、官衙的な大型の建物は未発見であり、竪穴住居を主体とした遺構が中心に検出されているので、国庁や曹司群が立ち並ぶ、いわば国府の中心街だけを描くのではなく、生産・居住域や交通路を含む諸々の要素全般を示したいという意図から、広い範囲を上空から眺望して描く鳥瞰図的な描画方法が適切と考えた。アングルは当初調査地点を中心に据えることを考慮したが、後に触れるように遺跡の立地と環境、殊に（すべて推定ではあるが）当時の相模川流路、古東海道、四之宮（現前鳥神社）、曹司群といった描画上目にとまる要素との位置関係から、やむを得ず画面の中央よりやや上方にずらす配置をとることにした。

次に②については、これまでに刊行された都城・地方官衙に関連する研究書・普及啓蒙書や各地の博物館の展示図録に描かれたイラスト、復原建築物や模型等の写真を集成し、とりわけ発掘調査によって幾らかでも様相が判明している伯耆・近江・三河・下野・武蔵の諸国府や多賀城の復原図を、相模国府をイメージする上での参考にした。しかし、官衙域付近だけを描いた復原図は各地で色々と試行されているものの、その周辺に展開していたであろう生産・居住域までをも含めた復原図となると以外にも少ないことに気付く。前例が少ないことも手伝って全体的な構想がまとまらず、ラフスケッチ段階では試行錯誤を重ね、闇雲に時間だけが費やされてしまった。当初よりイメージがある程度固まってさえいれば、約１ヶ月かかった制作上での時間的ロスはかなりの割合で削減出来たように、今にして思う。ちなみに、地方官衙の景観復原図としては、山中敏史・佐藤興二著『古代の役所』（岩波書店、1985年）の下野国府（同書80頁）・白河郡衙（106頁）・志太郡衙（139頁）・伊場遺跡（164頁）の各復原図、また鳥瞰図としての景観描写の方法では、直接国府を対象としたものではないが、小山靖憲編『週刊朝日百科日本の歴史60－家と垣根－』（朝日新聞社、1987年）での摂津国嶋上郡村落景観図（144頁）、さらに都の中での細かい生活描写としては、坪井清足監修『平城京再現』（新潮社、1985年）の市場（20頁）や宅地（24頁）の復原図などが参考になった。

最後に、相模国府をめぐる近年の調査・研究状況は、基本的に明石氏の研究成果を参考とした。氏の研究のよれば、①国庁は未発見、②古代の遺構が密集し、かつ特殊な遺物を出土する市内四之宮地区を中心とした東西２㎞、南北１㎞の範囲が推定国府域として設定可能（第３図の太線内）、③国府域の面積が1,122,000㎡に対して1998年度現在までの発掘調査実施面積は27,661㎡で、全体の約2.5％程度、④国府域内で発見された竪穴住居は898軒を数え、半世紀単位で時期的な動向を見ると９世紀後半段階の175軒が最も多い、⑤竪穴住居の耐久年数を15～25年を想定した場合、９世紀後半に国府域全域で存在していた住居数は2,100～3,500軒、⑥一つの竪穴住居の居住人数を３人と仮定した場合、国府域内の総人口は約6,300～10,500人程度、などのデータが得られている。さらに、⑦調査地点周辺での特記すべき調査所見として、６×４間の総柱建物跡（坪ノ内遺跡第５地点）、連房式鍛冶工房跡（同第６地点）、多数の掘立柱建物（六ノ域遺跡第３地点）、大型掘立柱建物（四之宮下郷３区）、「厨」銘の墨書土器（稲荷前Ａ遺跡）、礎石建物（高林寺遺跡第５地点）、幅９ｍの道路状遺構（構之内遺跡）などが挙げられる。

このうち、高林寺遺跡第５地点の礎石建物は従来寺院跡として評価されてきたが、近年の研究では遺物の様相や建物構造の検討から国司館の可能性が指摘されている。また、構之内遺跡の道路状遺構は規模的にみて古代の幹道（古東海道）に比定されていて、その延長をたどると湘南新道関連遺跡の南方を東西に走行するようである。これらの点から、未発見の国庁が高林寺遺跡付近に近接し、その周囲にはそう距離を隔てることなく竪穴住居を主体とする居住域が密集して広がっていた景観を想定してみた。さらに、四之宮（現前鳥神社）、相模国分寺、一之宮（現寒川神社）など、平安時代の文献史料に現れる社寺を景観要素に加えた他は、東海道からは北へ分岐する伝路や方画地割、主要幹線道路沿いには馬家や市場・曹司群を建ち並べ、土器・木工・鍛冶・布等の各種手工業生産にかかる施設、寺院跡、墓地、さらには宅地間の小路など根拠の乏しい憶測を重ねていった。また、相模川左岸の自然堤防上を走る通称八王子往環（旧国道129号線）なども、かなり



第３図　推定国府域における既往の調査地点と成果（平塚市博物館1998に一部改変）

古くに遡ると仮定して描き、その上、生活感を示すためにカマドの煙を立たせたり、あるいは全ての建物が整然と建ち並んでいる景観は不自然と考え、建築中の建物、廃絶して屋根が朽ち果てた建物や、竪穴が窪地化した様子なども表現してみた。水陸交通の要に位置することの多い国府にあっては、相模川の渡河点付近に舟着場や資材を積卸する場も広がっていたであろう。

以上のように、考古学的研究成果に想像を加えた情報を提示し、作画者に作画を依頼した。

2．景観想像図の制作過程

景観想像図の制作過程

今回景観想像図を描くにあたっては、透視画法と呼ばれる画法を採用した。よく新聞の折り込み広告などに入ってくる、いわゆる建築パースといわれるものである。透視画法は、今では普通ＣＡＤ等のコンピューターで制作されることが多いのだが、企画の話が持ち上がってから入稿まで約１月間という時間的、また費用的な余裕が無かった関係で、今回はベースになるグリッドラインと、大まかな建物の外形のみを透視画法を使って簡易的に描くことにした。「簡易的」とした理由には、実際は正確に計測すべき部分を、定規などは使用せずにフリーハンドで、殆ど目測によって必要最低限を描いたからである。したがって、かなり正確さを欠いている部分があり、透視画法を採用したというよりも、参考にしたという程度の精度になっている。ただ、地形をほぼフラットであると仮定したのと、個々の建物が結果的に小さくなってしまった点などが、絵の歪みを若干軽減させることになった。ごく限られた時間の中では透視画の正確さよりも、むしろ国府にどのような施設や建物が立ち並んでいたかを示す事の方が重要と考えた次第である。また、北西（画面左上）に描いた真土大塚山古墳や、さらに遠方にある大山、北東方向（画面右上）に描いた国分寺などは、実際画面の中には入ってこない景観要素であって、道を歩いている人々の姿なども、実際のスケールはもう少し小さく描くべきものである。しかし、遺跡が立地する地理的な環境を示すうえでは格好のメルクマールになる要素は敢えて視角に含めることとしたり、さらには生活の雰囲気をより豊かに表現するなど、大幅にデフォルメを加えて描いた部分もある。

製作過程は、大きく３段階に分けられる。１つ目は約100m四方のグリッドラインの透視図を描く作業。これはベースとなる部分で、どこからどのように見るかによって絵の内容も大きく変わってしまう。２つ目はグリッド内の個別の建物を描く作業である。これは数は膨大だが、１つ目ほど精密な透視画法は必要なく、比較的単純な作業であった。しかし、個々の建物と、その周辺を含めた配置については、多少手間がかかった。３つ目は彩色である。

約100m四方のグリッドの透視図を描く

まず、古東海道の想定ラインを東西軸に据え、100mグリッドと推定国府域を落とす（第４図）。次に、ポイントを決める（第５図①）

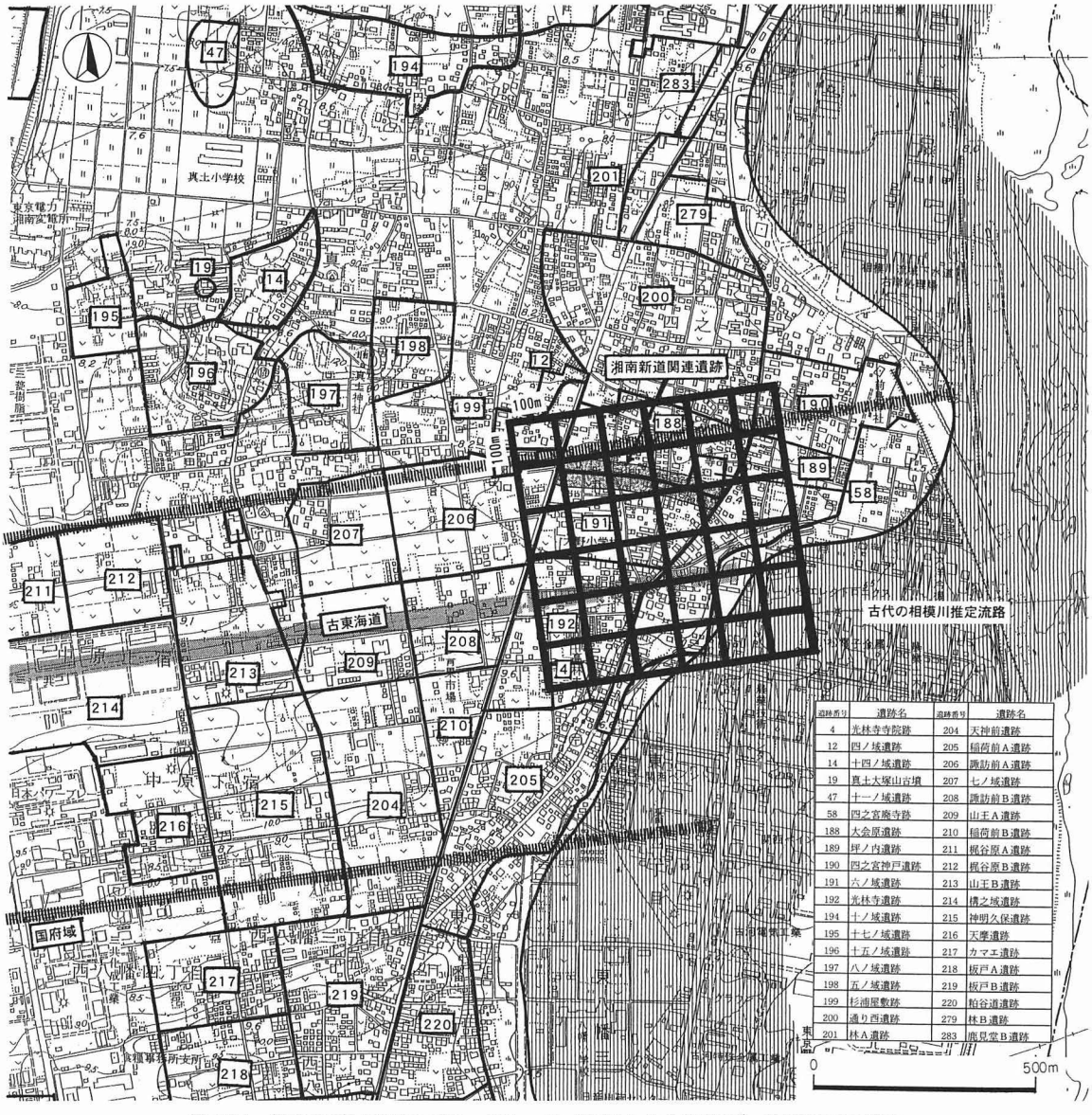
これは、最終的に透視図のほぼ中央にくる場所になる。一番の見せ場にポイントを置くのが理想的であり、今回も調査地点を中央に配したかったのだが、画面に入れたい他の要素が周辺に散在していたために、構図、画角、視点の距離、実画面（Ａ３版サイズ）との関係上理想は叶わなかった。

視点の水平位置を決める（第５図②）

今回はポイントからグリッドの軸線上約400m南方に設定した。どの方向からどのくらい離れて①のポイントを見るかということである。特にどの方向からというのは重要である。当初は東方から相模川や前鳥神社を手前にして富士山、大山をバックに構図を考えていたのだが、北東方向にある海老名の国分寺を画面に入れようとしたため、南からのアングルで描くことにした。後で水彩で色をのせるときに思ったのだが、影の落ち方等を考えると南からのアングルで正解だったように思う。

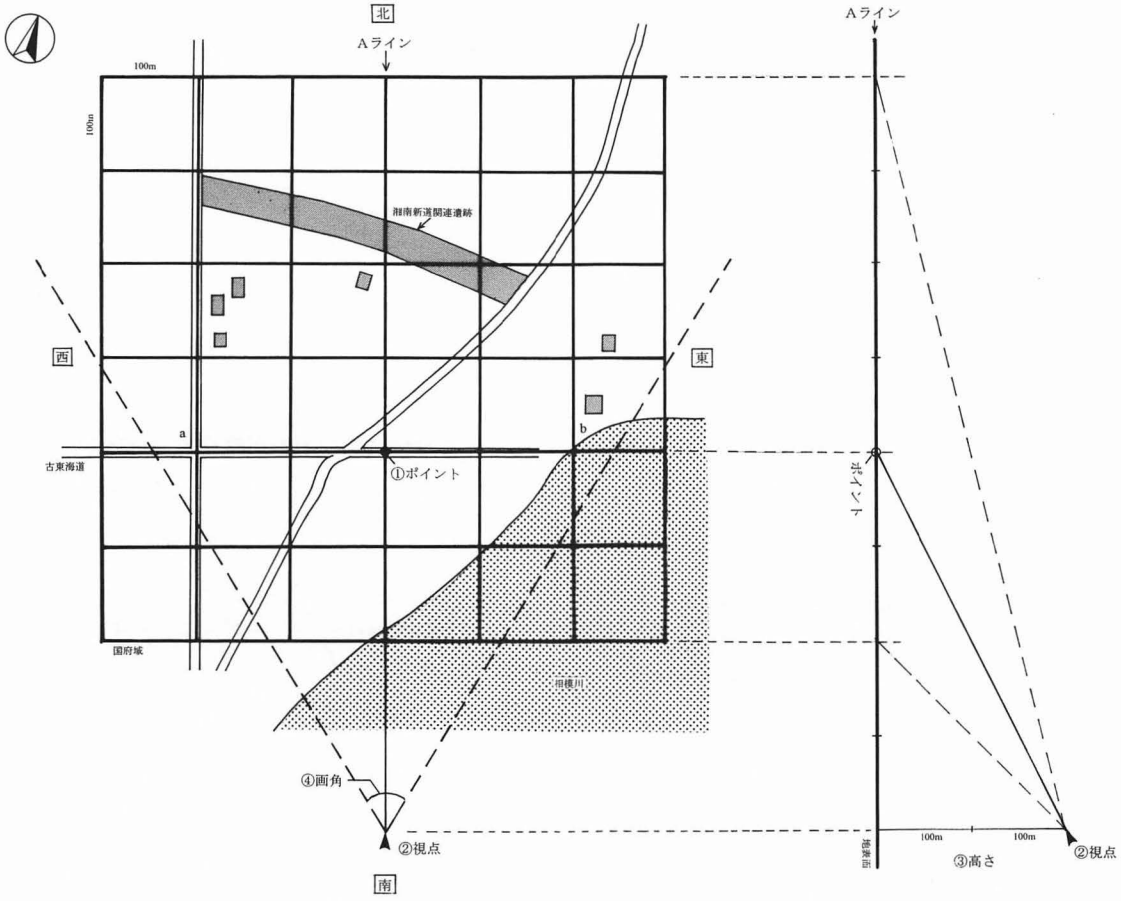
視点の地上からの高さを決める（第５図③）

これは頭の中でなかなか想像しにくいので、決定は難しい。あまり高い位置から下を見下ろすと、特に現代のように高い建物や構造物がない（と仮定した）場合、高さの関係が表現しにくく立体感がわきにくい。したがって、出来れば目線の高さがベストであるが、低すぎると今度は前にある建物や木で背後が隠れてしまい全体を見渡すという目的を果たさなくなってしまうので、少なくとも屋根勾配よりは角度が急な方が良いと思われる。そこで、今回は地上から約200mの位置に設定することにした。ポイントまでの距離が約40



遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名
4	光林寺寺院跡	204	天神前遺跡
12	四ノ域遺跡	205	稲荷前A遺跡
14	十四ノ域遺跡	206	諏訪前A遺跡
19	真土大塚山古墳	207	七ノ域遺跡
47	十一ノ域遺跡	208	諏訪前B遺跡
58	四之宮廃寺跡	209	山王A遺跡
188	大会原遺跡	210	稲荷前B遺跡
189	坪ノ内遺跡	211	梶谷原A遺跡
190	四之宮神戸遺跡	212	梶谷原B遺跡
191	六ノ域遺跡	213	山王B遺跡
192	光林寺遺跡	214	清之域遺跡
194	十ノ域遺跡	215	神明久保遺跡
195	十七ノ域遺跡	216	天摩遺跡
196	十五ノ域遺跡	217	カマエ遺跡
197	八ノ域遺跡	218	坂戸A遺跡
198	五ノ域遺跡	219	坂戸B遺跡
199	杉浦屋敷跡	220	舶谷遺遺跡
200	遠り西遺跡	279	林B遺跡
201	林A遺跡	283	鹿見堂B遺跡

第４図　推定相模国府域と100mグリッド（作図の中心的範囲）及び周辺の遺跡



第5図　視点の位置と100mグリッドとの関係（概念図）

0mなので、およそ3階建てのマンションの屋上から30m先を見下ろすような角度である。そして視点とポイントが乗る線をAラインとする。

画角を決める（第5図④）

35㎜判カメラでレンズを約35㎜の画角に設定した。手前のものと後ろのものの大きさの差をあまり付けたくはないので、出来れば標準から望遠系レンズが良いのだが，これだけの広範囲をカバーするとなると、相当視点を引かなくてはならない。そうすると今度は1つ1つの要素が小さくなってしまい、実際描くのは困難である。35㎜位のレンズであれば、ある程度の範囲はカバーできるし、平面的な広がりも表現できる。個人差はあるだろうが、わりと人間の目に近いのではないだろうか。東の前鳥神社と国分寺、西の古東海道と南北に直交する伝路との交差点はぎりぎりカバーできた。因みに、aからbまでの長さ：ポイントから視点までの距離＝1：1のとき、ほぼ標準レンズ（43㎜位）となる。

以上、①～④と番号をつけて説明したが、順番はない。優先するところから決めていけば良いのだが、どれかを決めるとどれかに無理が生じてくる。うまく調整しながら相互的に決めていくしかなく、個別の建物を書き始めてからでは修正できないので慎重に決めなければいけない。今回は画角から始めたのだが、なかなかうまくいかず、よって何枚もラフスケッチを描き、時間も随分とかかってしまった。

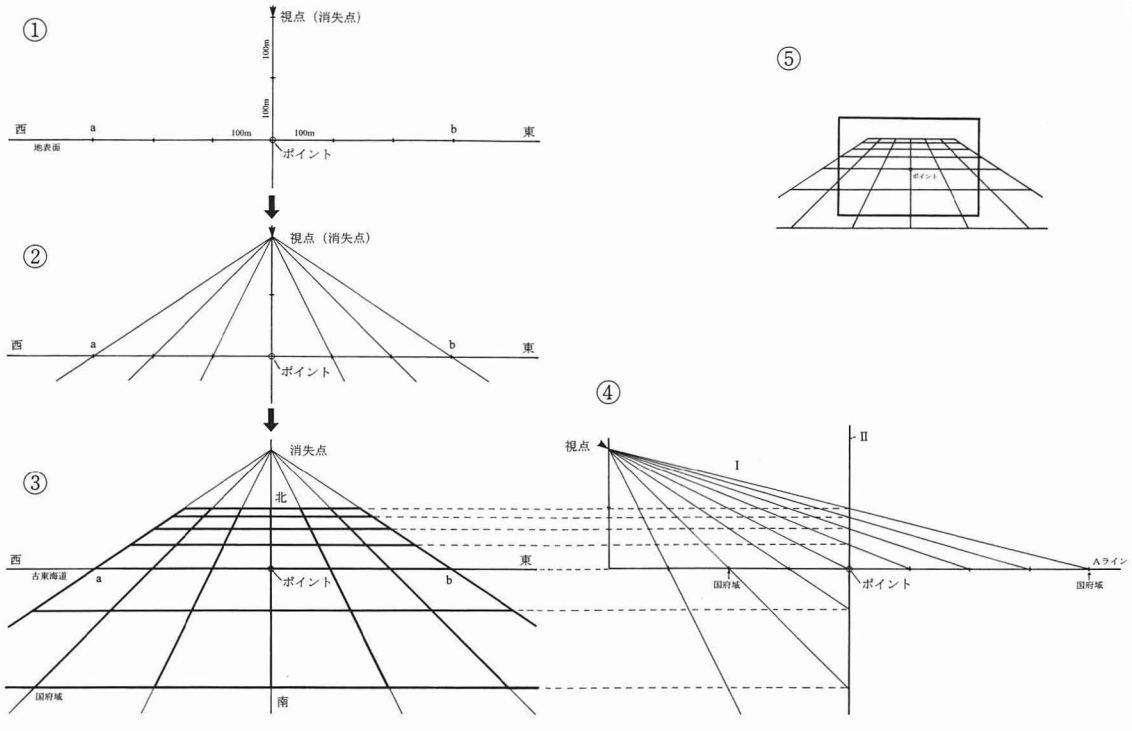
第5図を南から見たのが第6図①で、横線は古東海道ラインである。そして、ポイントの真上200mに視

点をおく。この点が消失点となる。次に、旧東海道ライン上のグリッド各交点と消失点を結ぶ（第６図②）。これは、南北方向の各グリッドラインになる。そのとなりに先ほどの第５図③を描く（第６図④）。そして、視点とＡライン上のグリッド各交点を結ぶ（Ⅰ）。次に、ポイントから上下に線を延ばす（Ⅱ）。ⅠとⅡの各交点の地表面からの高さで平行にのばせば、東西方向の各グリッドラインがひける（第６図③）。これでグリッドの透視図は完成した。あとはポイントを中心に、任意にトリミングをして、拡大して下図とした（第６図⑤）。

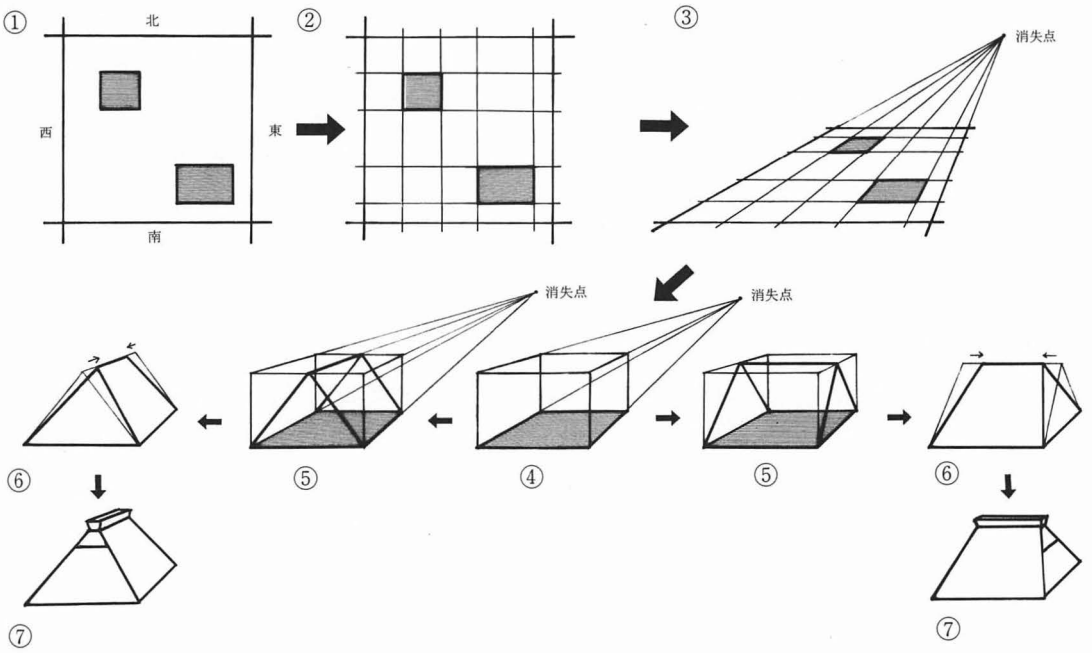
個別の建物を描く

基本的に、建物構成を竪穴住居と掘立柱建物の２種類を中心に据えたが、明石氏の研究で竪穴住居：掘立柱建物＝５：１という所見から、必然的に竪穴住居を数多く描くことにした。また、一個一個の建物が小さいのとかなりの数のため、簡略化して描かざるを得ず、さらに実際は様々な形の建物があったであろうが、個々の違いを表現することはしなかった。それよりも出来る限りたくさん描いて、国府に住居が密集する様子を表現する方を優先した。ここでは、最も量を多く描いた竪穴住居について説明する。

第７図①のような住居の配置があったとして、住居に触る線をグリッドラインと平行に引く（第７図②）。次に、その線を目見当で透視図内に入れて、大まかな場所を設定する。このとき東西方向の線は必ずグリッドの東西ラインと平行になるように、また南北方向の線は必ず消失点を通るようにする（第７図③）。これが、住居の平面図の透視図となる。今度は高さを立ち上げる。目見当で棟の高さで平面を立ち上げて直方体を作るのだが、このときも第７図③と同じように、東西方向の線はグリッドの東西ラインと平行に、南北方向の線は消失点を通るようにする（第７図④）。次は直方体の上面を２分する線を引き、棟のラインとする。その線の両端から下面の隅に線を下ろす（第７図⑤）。次に棟の両端を少し中央に寄せて、そこからまた下



第６図　100ｍグリッド透視図作成のための手順



第７図　竪穴住居下図作成のための手順

面の隅に線を下ろす（第７図⑥）。そしてあとは少し細工をすればおおよその外形が出来る（第７図⑦）。

着色方法

最後に色についてであるが、まず鉛筆でＡ３サイズの画用紙に下書きをした上で、水彩絵の具を用いて着色を施している。地面や建物を表現するうえでは、人工的色彩を極力排除しようと茶色をベースに据えることにしたのだが、図面中には同色系の要素が多いために、微妙な違いを表現した点については苦労した。また、全体的には統一した色調になるよう努力したつもりである。季節は５月頃を想定して、植物には新緑の緑、水には澄んだ水色をのせた。

おわりに

実証性を欠いた作業故、学術的価値は推して知るべしであり、さらにこの絵図面によって誤解を与えかねないことも充分予測される。とはいえ、見学者にとってイメージしづらいものを分かり易く示すという意味においては、このような想像図の制作も全く無意味ではないだろう。考古学的調査･研究にどれだけ寄与出来るかは計り知れないが、この想像図を叩き台として、今後相模国府のイメージが細部あるいは大枠で書き換えられていくことを切に願うばかりである。最後になりましたが、執筆を薦めて下さり種々ご教示を得ました上田　薫 資料活用課長、湘南新道関連遺跡の調査でご指導を頂いている市川正史 調査第三課長、柏木善治さん、加藤久美さんには感謝申し上げます。なお、小稿は二人の協議によるものだが、２.及び景観想像図の執筆･作成を市毛が、その他を依田が担当している。

【注】詳細は、平塚市博物館1998『夏期特別展　相模国府とその世界』を参照。その他関連する文献は、紙幅の関係で割愛させて頂いた。

研究紀要8

かながわの考古学

発　行　日　平成15年(2003) 3 月20日
発　　行　かながわ考古資料刊行会
〒232－0033 横浜市南区中村町 3 －191－ 1
財団法人かながわ考古学財団内
tel (045)－252－8661　fax (045)－261－8162
印　　刷　株式会社ナデック

本書は、平成15(2003)年3月17日に財団法人かながわ考古学財団が編集・刊行したものを、かながわ考古資料刊行会が同財団の許可を得て、増刷したものである。

KANAGAWA NO KÔKOGAKU

Vol.8

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Palaeolithic Remains in Kanagawa Prefecture (2): Upper Part of Layer B1. 1
Project Team for Palaeolithic Studies

Change of the Jômon Culture in Kanagawa Prefecture (Ⅵ)
:An Example in the Late-Middle Period -An Aspect of the Kasori-E-Type Pottery Period, Part 3 :Cultural Aspect. 17
Project Team for Jômon Period Studies

A Study of the Miyanodai-Type Pottery (2) 33
Project Team for Yayoi Period Studies

A List of Literature on "Ôketsu-bo" (tunnel tomb) in Kanagawa Prefecture. 45
Project Team for Kofun Period Studies

An Archaeological Study of the Miyagase Sites of the Nara-Heian Period. 61
Project Team for Nara-Heian Period Studies

The Corpus of "Yagura" (horizontal loam-cut cave burial chamber of the Kamakura period) in Kanagawa Prefecture(1). 81
Project Team for Medieval Age Studies

Clay Objects Unearthed in Kanagawa Prefecture. 97
Project Team for Early Modern Age Studies

Form-Based Classification and Regional Characteristics of the Circular Band Type "Dokushiro" (bronze bracelet) 111
IKEDA, Osamu

An Example of Utilization of Site-Restoration Figures for the Propagation Edification Activities: With Special Reference to a Way of Composing of the Imagination Figure of Sagami "Kokufu" (provincial headquarters) View in the Nara-Heian Period.
ICHIGE, Hideto and YODA,Ryôichi 127

March, 2003

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan